松山市文化財調査報告書 81

小野地区の遺跡

北梅本悪社谷遺跡２次調査地
北梅本北池遺跡
北梅本太尺寺遺跡

2001

松山市教育委員会

財団法人松山市生涯学習振興財団

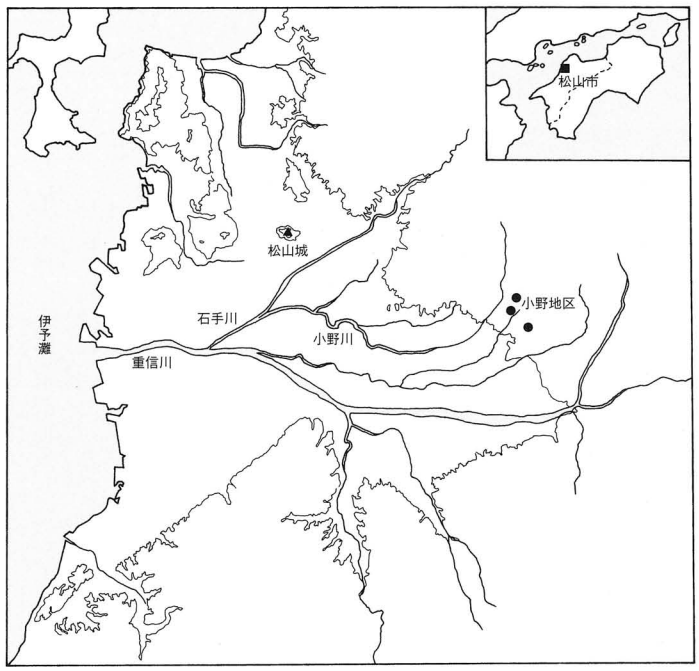
埋蔵文化財センター

小野（おの）地区の遺跡

北梅本悪社谷遺跡２次調査地

北梅本北池遺跡

北梅本太尺寺遺跡



2001

松山市教育委員会

財団法人松山市生涯学習振興財団

埋蔵文化財センター

巻頭図版　北梅本悪社谷遺跡２次調査地遠景（南より）

序

松山平野の南東部に位置する小野地区には、横穴式石室内で木棺が発見されたことで全国的に知られる葉佐池古墳をはじめとする数多くの古墳と、駄馬姥ケ懐窯址や悪社谷窯址等の古墳時代から古代にかけての須恵器生産の窯址群が発見されています。

今回報告致します北梅本悪社谷遺跡２次調査地・北梅本北池遺跡・北梅本太尺寺遺跡は、松山市北梅本町に所在し、近年の発掘調査によって古墳や窯跡だけではなく、弥生時代や古墳時代の集落の存在が明らかになりつつあります。

北梅本悪社谷遺跡２次調査地では、近接している悪社谷１号窯の灰原と推定される遺構が検出されています。北梅本北池遺跡では、弥生時代や古墳時代の土坑や溝を検出し、また北梅本太尺寺遺跡においては遺物包含層を検出したことから、周辺地域に集落が存在したことが明らかとなりました。

そのほか、小野地区に所在する窯址等で採集した須恵器についても、須恵器編年の基礎資料となる貴重な遺物を確認することができました。

こうした成果をあげることができましたのも、市民の皆さまの埋蔵文化財に対するご協力とご理解のたまものであり、心から感謝申し上げます。

今後とも埋蔵文化財の発掘調査事業に関して、より一層のご協力をお願い申し上げます。

平成13年３月31日

財団法人松山市生涯学習振興財団

理事長　中村時広

例　言

1．本書は、松山市教育委員会と財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センターが平成９～11年度に松山市北梅本町で実施した３遺跡の埋蔵文化財の発掘調査及びＡ～Ｈ区の試掘調査報告書である。

2．遺構は呼称を略号で記述した。自然流路：SR、土坑：SK、溝：SD、柱穴：SP、性格不明遺構：SX、試掘トレンチ：Ｔである。遺構番号は遺跡ごとに通し番号とした。また、試掘トレンチ番号も区ごとに通し番号とした。

3．遺物の実測・製図、遺構の作図・製図は、高尾和長・相原浩二・山之内志郎・加島次郎の指示のもと、仙波千秋・仙波ミリ子・東山里美・金子育代・高尾久子・田﨑真理・中村紫・宮内真弓が行った。

4．写真図版は山之内と大西朋子が協議し、遺物の撮影及び図版作成は大西が行った。

5．遺構の写真撮影は山之内・大西が行った。

6．遺構図と遺物図の縮尺は、縮分値をスケール下に記した。

7．本書に使用した方位は、すべて真北である。

8．本書に関わる遺物や記録類は、松山市立埋蔵文化財センターで保管している。

9．本書の執筆は山之内が行った。浄書は中村が担当した。

10．本書の編集は高尾の指示のもと山之内が行った。

11．製版　写真図版　175線
印刷　オフセット印刷
用紙　カラー写真　本文　マットコート　110kg
　　写真図版　　マットコート　135kg
製本　アジロ綴り

本　文　目　次

第１章　はじめに …… 1
１．調査に至る経過
２．刊行組織
３．環　　境
第２章　北梅本悪社谷遺跡２次調査地 …… 7
１．調査の経過
２．層　　位
３．遺構と遺物
４．小　　結
第３章　北梅本北池遺跡 ……37
１．調査の経過
２．層　　位
３．遺構と遺物
４．小　　結
第４章　北梅本太尺寺遺跡……67
１．調査の経過
２．１区の調査
３．２区の調査
４．小　　結
第５章　Ａ～Ｈ区の試掘調査 ……83
１．試掘調査の経過
２．層位・遺構と遺物
３．小　　結
第６章　自然科学分析 ……〔株式会社　古環境研究所〕……127
第７章　調査の成果と課題 ……130
附　　章　松山平野東部古窯址群・伊予市三秋窯址の採集資料 ……131
写真図版 ……155

挿 図 目 次

第１章　はじめに

第１図　調査地周辺の主要遺跡分布図（縮尺1/50,000）……3

第２図　調査地位置図（縮尺1/10,000）……6

第２章　北梅本悪社谷遺跡２次調査地

第３図　調査地位置図（縮尺1/2,000）……10

第４図　基本土層図（縮尺1/20）……11

第５図　遺構配置図（縮尺1/800）……12

第６図　SR１測量図（縮尺1/60、1/100）……13

第７図　SR１出土遺物実測図(1)（縮尺1/3）……14

第８図　SR１出土遺物実測図(2)（縮尺1/1、1/3、1/4）……15

第９図　SR２測量図（縮尺1/100、1/250）……17

第10図　SR２出土遺物実測図(1)（縮尺1/1、1/3）……18

第11図　SR２出土遺物実測図(2)（縮尺2/3）……19

第12図　SK４測量図・出土遺物実測図（縮尺1/3、1/30）……20

第13図　SD２測量図（縮尺1/20）……20

第14図　SX１測量図（縮尺1/40）……21

第15図　SX１出土遺物実測図（縮尺1/3）……22

第16図　SX２測量図・出土遺物実測図(1)（縮尺1/3、1/20）……24

第17図　SX２出土遺物実測図(2)（縮尺1/1、2/3、1/3）……25

第18図　SX３測量図・出土遺物実測図（縮尺1/3、1/100）……26

第19図　SK２測量図（縮尺1/30）……27

第20図　SD１測量図（縮尺1/100）……27

第21図　地点不明出土遺物実測図(1)（縮尺1/1、2/3、1/3）……28

第22図　地点不明出土遺物実測図(2)（縮尺1/1、2/3）……29

第３章　北梅本北池遺跡

第23図　調査地位置図（縮尺1/2,000）……40

第24図　基本土層図（縮尺1/20）……40

第25図　遺構配置図（縮尺1/400）……41

第26図　SK10測量図・出土遺物実測図（縮尺1/1、1/3、1/30）……44

第27図　SK２測量図（縮尺1/30）……45

第28図　SD１測量図（縮尺1/20、1/40）……46

第29図　SX１測量図・出土遺物実測図（縮尺2/3、1/3、1/200）……47

第30図　SX２測量図・出土遺物実測図（縮尺1/1、1/100）……49

第31図　SR１測量図（縮尺1/150、1/250）……50

第32図　SR１出土遺物実測図（縮尺1/1、2/3、1/3）……51

第33図　SD４測量図（縮尺1/60、1/100）……52
第34図　SD４出土遺物実測図（縮尺1/1、2/3、1/3）……53
第35図　SD２測量図・出土遺物実測図（縮尺1/1、1/40、1/100）……54
第36図　SK１・３・４・５測量図（縮尺1/30）……55
第37図　SK11・12・13測量図（縮尺1/30、1/60）……57
第38図　地点不明出土遺物実測図(1)（縮尺1/1、2/3、1/3）……59
第39図　地点不明出土遺物実測図(2)（縮尺1/1）……60
第４章　北梅本太尺寺遺跡
第40図　調査地位置図（縮尺1/1,000）……70
第41図　基本土層図（縮尺1/20）……71
第42図　１区遺構配置図（縮尺1/200）……72
第43図　２区遺構配置図（縮尺1/500）……73
第44図　２区Ｄ遺構配置図（縮尺1/60）……75
第45図　２区第Ⅵ層出土遺物実測図（縮尺1/1、2/3）……76
第46図　地点不明出土遺物実測図(1)（縮尺1/1、2/3）……77
第47図　地点不明出土遺物実測図(2)（縮尺1/1、2/3）……78
第５章　Ａ～Ｈ区の試掘調査
第48図　Ａ区トレンチ配置図（縮尺1/1,500）……88
第49図　Ａ区柱状土層図(1)（縮尺1/40）……89
第50図　Ａ区柱状土層図(2)（縮尺1/40）……90
第51図　Ａ区柱状土層図(3)（縮尺1/40）……91
第52図　Ｂ区トレンチ配置図（縮尺1/1,500）……92
第53図　Ｂ区柱状土層図(1)（縮尺1/40）……93
第54図　Ｂ区柱状土層図(2)（縮尺1/40）……94
第55図　Ｃ区トレンチ配置図（縮尺1/2,000）……95
第56図　Ｃ区柱状土層図(1)（縮尺1/40）……96
第57図　Ｃ区柱状土層図(2)（縮尺1/40）……97
第58図　Ｃ区柱状土層図(3)（縮尺1/40）……98
第59図　Ｃ区柱状土層図(4)（縮尺1/40）……99
第60図　Ｃ区柱状土層図(5)、トレンチ測量図・土層図(1)（縮尺1/40、1/80）……100
第61図　Ｃ区トレンチ測量図・土層図(2)（縮尺1/80）……101
第62図　Ｃ区トレンチ測量図・土層図(3)（縮尺1/80）……102
第63図　Ｄ区トレンチ配置図（縮尺1/2,000）……103
第64図　Ｄ区柱状土層図(1)（縮尺1/40）……104
第65図　Ｄ区柱状土層図(2)（縮尺1/40）……105
第66図　Ｄ区柱状土層図(3)（縮尺1/40）……106
第67図　Ｄ区柱状土層図(4)（縮尺1/40）……107
第68図　Ｄ区柱状土層図(5)、トレンチ測量図・土層図(1)（縮尺1/40、1/80）……108

第69図　D区トレンチ測量図・土層図(2)（縮尺1/80）……109
第70図　D区トレンチ測量図・土層図(3)（縮尺1/80）……110
第71図　E区トレンチ配置図（縮尺1/1,000）……111
第72図　E区柱状土層図(1)（縮尺1/40）……112
第73図　E区柱状土層図(2)・トレンチ測量図・土層図（縮尺1/40、1/200）……113
第74図　F区トレンチ配置図（縮尺1/1,500）……115
第75図　F区柱状土層図(1)（縮尺1/40）……116
第76図　F区柱状土層図(2)（縮尺1/40）……117
第77図　F区柱状土層図(3)、トレンチ測量図・土層図(1)（縮尺1/40、1/100、1/120）……118
第78図　F区トレンチ測量図・土層図(2)（縮尺1/100）……119
第79図　F区トレンチ測量図・土層図(3)（縮尺1/40、1/100）……120
第80図　F区トレンチ測量図・土層図(4)（縮尺1/100）……121
第81図　G区トレンチ配置図（縮尺1/1,000）……122
第82図　G区柱状土層図（縮尺1/40）……123
第83図　H区トレンチ配置図（縮尺1/500）……124
第84図　H区柱状土層図、トレンチ測量図・土層図（縮尺1/40、1/100）……125

第6章　自然科学分析

第85図　2区SR2出土木材の顕微鏡写真……129

附　章　松山平野東部古窯址群・伊予市三秋窯址の採集資料

第86図　伊予市三秋窯址位置図（縮尺1/20,000）……132
第87図　伊予市三秋窯址採集資料実測図(1)（縮尺1/3）……133
第88図　伊予市三秋窯址採集資料実測図(2)（縮尺1/3）……134
第89図　松山平野東部古窯址群位置図(1)（縮尺1/2,000）……135
第90図　松山平野東部古窯址群位置図(2)（縮尺1/2,000）……136
第91図　潮見山南窯址採集資料実測図(1)（縮尺1/3）……137
第92図　潮見山南窯址採集資料実測図(2)（縮尺1/3）……138
第93図　潮見山南窯址採集資料実測図(3)（縮尺1/3）……139
第94図　駄馬姥ケ懐2号窯址採集資料実測図（縮尺1/3）……140
第95図　枝朶下池3号窯址採集資料実測図（縮尺1/3）……141
第96図　悪社谷2号窯址採集資料実測図(1)（縮尺1/3）……142
第97図　悪社谷2号窯址採集資料実測図(2)（縮尺1/3）……143
第98図　悪社谷2号窯址採集資料実測図(3)（縮尺1/3）……144
第99図　悪社谷1号窯址採集資料実測図（縮尺1/3）……145

表 目 次

第１章　はじめに
表１　調査地一覧……１
第２章　北梅本悪社谷遺跡２次調査地
表２　自然流路一覧……31
表３　土坑一覧……31
表４　溝　一　覧……31
表５　性格不明遺構一覧……31
表６　SR１出土遺物観察表　土製品……31
表７　SR１出土遺物観察表　石製品……32
表８　SR２出土遺物観察表　土製品……32
表９　SR２出土遺物観察表　石製品……33
表10　SK４出土遺物観察表　土製品……33
表11　SX１出土遺物観察表　土製品……33
表12　SX２出土遺物観察表　土製品……34
表13　SX２出土遺物観察表　石製品……34
表14　SX３出土遺物観察表　土製品……35
表15　地点不明出土遺物観察表　土製品……35
表16　地点不明出土遺物観察表　石製品……35
第３章　北梅本北池遺跡
表17　自然流路一覧……62
表18　土坑一覧……62
表19　溝　一　覧……62
表20　性格不明遺構一覧……63
表21　SK10出土遺物観察表　土製品……63
表22　SK10出土遺物観察表　石製品……64
表23　SX１出土遺物観察表　土製品……64
表24　SX１出土遺物観察表　石製品……64
表25　SX２出土遺物観察表　石製品……64
表26　SR１出土遺物観察表　土製品……64
表27　SR１出土遺物観察表　石製品……65
表28　SD４出土遺物観察表　土製品……65
表29　SD４出土遺物観察表　石製品……65
表30　SD２出土遺物観察表　石製品……65
表31　地点不明出土遺物観察表　土製品……66
表32　地点不明出土遺物観察表　石製品……66
第４章　北梅本太尺寺遺跡
表33　土坑一覧……80

表34　溝 一 覧……80
表35　性格不明遺構一覧……81
表36　２区第Ⅵ層出土遺物観察表　石製品……82
表37　地点不明出土遺物観察表　石製品……82
第５章　Ａ～Ｈ区の試掘調査
表38　試掘調査一覧……85
第６章　自然科学分析
表39　北梅本悪社谷遺跡２次調査地における樹種同定結果……127
附　章　松山平野東部古窯址群・伊予市三秋窯址の採集資料
表40　伊予市三秋窯址採集遺物観察表　土製品……147
表41　伊予市三秋窯址採集遺物観察表　瓦製品……148
表42　伊予市三秋窯址採集遺物観察表　石製品……148
表43　潮見山南窯址採集遺物観察表　土製品……148
表44　駄馬姥ケ懐２号窯址採集遺物観察表　土製品……150
表45　枝朶下池３号窯址採集遺物観察表　土製品……151
表46　悪社谷２号窯址採集遺物観察表　土製品……151
表47　悪社谷１号窯址採集遺物観察表　土製品……154

図　版　目　次

巻頭図版　北梅本悪社谷遺跡２次調査地遠景（南より）
図版１　１．調査前風景（北より）
２．SK４遺物出土状況（東より）
図版２　１．SR１遺物出土状況（北より）
２．悪社谷１号窯（奥）とSX２遺物出土状況（東より）
図版３　１．SR２土層（南より）
２．SR２遺物出土状況（北西より）
図版４　１．SR１出土遺物
２．SK４出土遺物
３．SX２出土遺物
図版５　１．調査前風景（北より）
２．SR１完掘状況（北より）
図版６　１．１区Ａ・１区Ｂ完掘状況（北より）
２．SK10出土遺物
図版７　１．調査前風景（南より）
２．１区完掘状況（南より）
図版８　１．２区完掘状況（北より）
２．出土遺物（１～３：２区第Ⅵ層、８～12：地点不明）

第1章　はじめに

1．調査に至る経過

1996（平成８）年10月に松山市長田中誠一氏（以下、申請者）より松山市北梅本町甲3,427外における土地改良総合整備事業に伴う埋蔵文化財の確認願いが、松山市教育委員会文化教育課（以下、文化教育課）に提出された。

申請地は松山市の指定する埋蔵文化財包蔵地の「№166北梅本遺物包含地（弥生）」及び「№105潮見山古墳群・愛宕山古墳・山越古墳」があり、周知の遺跡として知られている。

申請地周辺には、これまでに小野谷や枝朶下池周辺において６～８世紀代の窯跡が10数基確認されている。また南に位置する陸上自衛隊松山駐屯地がある丘陵部には播磨塚古墳群があり、そのうち未発見であった播磨塚天神山古墳が調査され、６世紀前半の前方後円墳であることが明らかとなった。

よって文化教育課では、確認願いが提出された地点についての埋蔵文化財の有無と遺跡の範囲や性格を確認するため、平成９年から11年の間、約168,000㎡の面積において８区（Ａ～Ｈ区）に区分し試掘調査を実施した。その結果、申請地内の約40,000㎡で土坑・溝・柱穴・須恵器窯の一部と思われる遺構と弥生土器・須恵器・土師器・陶磁器などの土器やサヌカイトの石器が出土したことから、申請地には古墳時代や古代における須恵器の生産と集落に関連する遺跡があることを確認した。

試掘調査の結果を受け、文化教育課と申請者及び関係者は遺跡の取扱いについての協議を行った。その結果、切除により遺跡が消滅する約20,000㎡に対し、当該地域における古墳時代や古代の須恵器生産関連遺構や集落関連遺構の広がりの解明を主目的に３地区において本格調査を実施するものとした。なお残りの約20,000㎡では盛土を施して保護措置がとられることとなった。

本格調査は文化教育課及び財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター（以下、埋文センター）が主体となり、申請者及び関係者各位の協力のもと、平成10年から12年の間に行われた。野外調査終了後は埋文センターが主体となり、屋内調査及び報告書刊行事業を実施した。

なお、３遺跡の名称・所在地・面積・期間・調査担当者を表１に記し、３遺跡及び試掘調査Ａ～Ｈ区の位置については第２図に記した。

表１　調査地一覧

遺跡名	所在地	面積(㎡)	期間	調査担当
北梅本悪社谷遺跡 ２次調査地	松山市北梅本町乙697-１外	6,265	1999（平成11）年４月８日 ～同年９月22日	高尾　和長 山之内志郎
北梅本北池遺跡	松山市北梅本町甲1,732外	9,561	1999（平成11）年10月７日 ～2000（平成12）年３月31日	高尾　和長 山之内志郎
北梅本太尺寺遺跡	松山市北梅本町甲3,489-１外	4,575	1998（平成10）年４月７日 ～同年９月30日	相原　浩二 山之内志郎

2．刊行組織（平成13年３月31日現在）

松山市教育委員会	教育長	中矢　陽三
事務局	局長	圍上　和敬
	局長付参事	森脇　　将
	次長	赤星　忠男
文化教育課	課長	馬場　　洋
財団法人松山市生涯学習振興財団	理事長	中村　時広
	事務局長	二宮　正昌
	事務局次長	江戸　　孝
	事務局次長	森　　和朋
埋蔵文化財センター	所長	中川　　隆
	専門監	野本　　力
	調査係長	田城　武志
	調査主任	栗田　正芳（文化教育課職員）
	調査担当	髙尾　和長・相原　浩二
		山之内志郎・大西　朋子

3．環　　境

(1) 遺跡の立地

松山平野は、愛媛県のほぼ中央に位置する県下最大の平野であり、高縄山に源を発した石手川と重信川という二大河川により形成された沖積平野である。本書で取り上げる小野地区は、平野の南東部に位置し、石手川の支流である小野川や悪社川によって形成された小規模な扇状地となっている。

(2) 歴史的環境（第１図）

ここでは小野地区を中心に、遺構の密度が濃い西方の来住・久米地区を含めた遺跡について時代順に概観する。

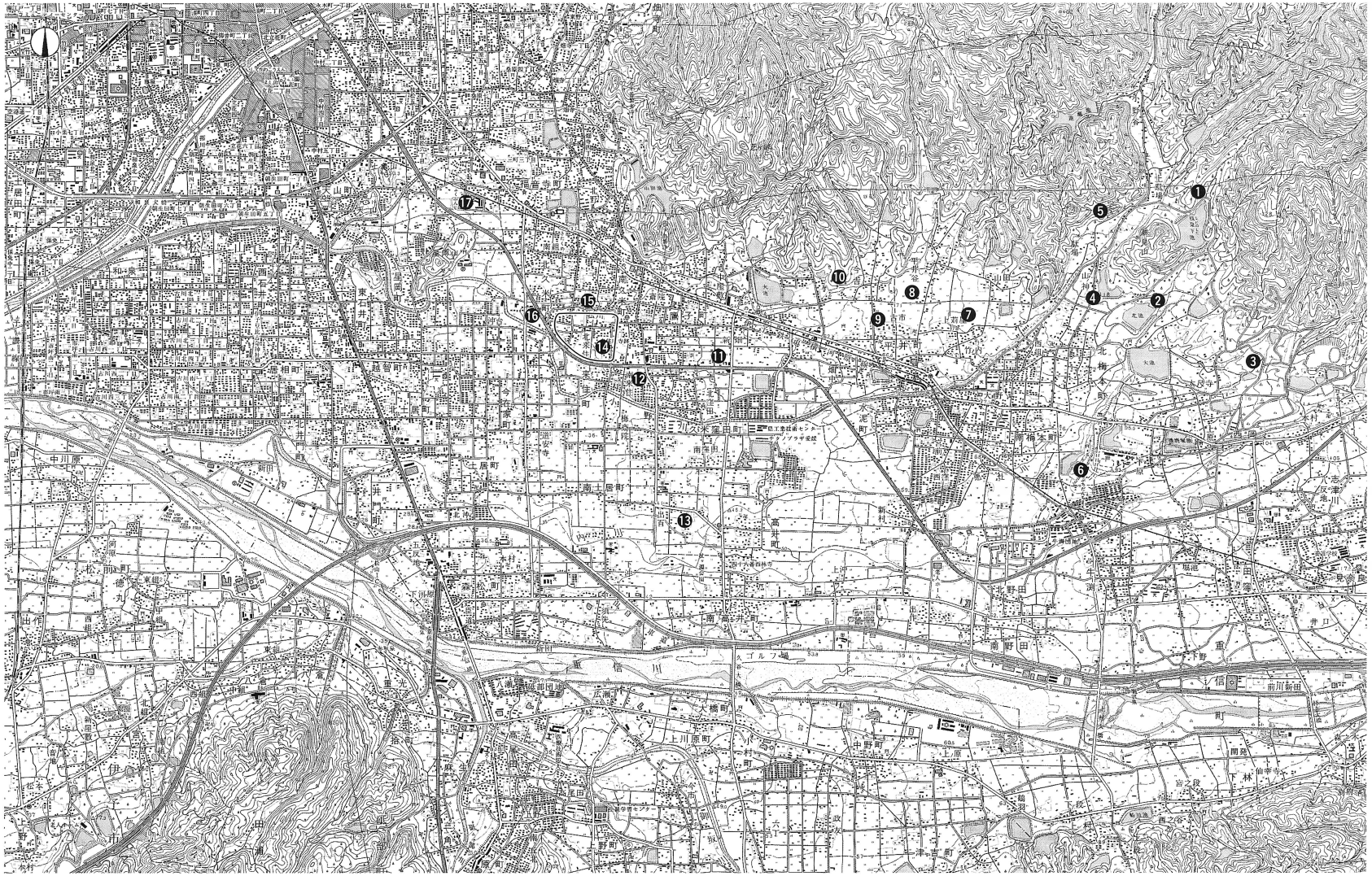
旧石器時代

旧石器時代の遺構は確認されていない。遺物は表採資料や単独出土であるが、五郎兵衛谷古墳出土のナイフ形石器や久米山田池遺跡のナイフ形石器などがある。今後は遺構の検出とともに共伴遺物の出土が期待される。

縄文時代

小野地区では古市遺跡２次調査地で円形土坑から晩期の土器が出土している。近接する下苅屋遺跡２次調査地においても晩期の浅鉢と深鉢が各１点出土していることから、当該期の集落の存在がより明確になった。なお古市遺跡２区においてアカホヤ火山灰土の可能性がある土層を確認している。

来住・久米地区では近年検出例が増加している。時期はいずれも後期～晩期である。後期の遺構として最も注目されるのは久米窪田森元遺跡の土坑出土の一括資料である。時期は後期前半である。晩期では中葉の円形竪穴式住居址が久米高畑遺跡36次調査地で確認され、同遺跡26・35次調査地でも土坑から同時期の遺物が出土している。同遺跡33次調査地では落し穴と考えられる長方形の土坑が１基確認されている。時期は晩期後半と推定されている。



❶北梅本悪社谷遺跡２次調査地　❷北梅本北池遺跡　❸北梅本太尺寺遺跡　❹葉佐池古墳　❺駄場姥ヶ懐窯址　❻播磨塚天神山古墳　❼上苅屋遺跡１・２次
❽五楽遺跡・古市遺跡２次　❾古市遺跡・下苅屋遺跡１～３次　❿観音山古墳　⓫久米窪田森元遺跡　⓬来住町遺跡７・８次　⓭波賀部神社古墳　⓮来住廃寺
⓯久米高畑遺跡・久米官衙遺跡群　⓰南久米片廻り遺跡２次　⓱福音小学校構内遺跡

第１図　調査地周辺の主要遺跡分布図（Ｓ＝１：50,000）

弥生時代

来住・久米地区では前期末から後期の遺構と遺物を検出しているが、その中核をなすのは前期末～中期初頭の土坑群と環濠である。土坑群は久米高畑遺跡24・27次調査地などで検出しており、同様の土坑群は小野地区の古市遺跡２次調査地と五楽遺跡でも確認されている。古市遺跡１区などで検出の自然流路SR１出土の遺物とあわせて考えると周辺地域での集落の存在が想定される。また環濠と推定される複数の大溝は久米高畑遺跡23・25次調査地で検出し、同時期に併存すると考えられている。

中期は検出例が少なく、来住廃寺15次調査地出土の中期後半の資料が注目される。今後は同時期の集落の展開を他地域を含めて考えていく必要がある。

後期もまた検出例は少なく、その中でも注目される遺跡として南久米片廻り遺跡の円形竪穴式住居があげられる。時期は終末期のものである。また国道11号松山東道路関係の発掘調査や来住廃寺寺域内でもこの時期の遺構が確認されている。

古墳時代

近年小野地区における古墳時代集落の調査例が増加し、その構造や変遷を知る上で貴重な遺跡が多く発見されるようになった。下苅屋遺跡１～３次調査地においては古墳時代後期集落の一角が調査され、竪穴式住居・掘立柱建物・須恵器の廃棄土坑などが検出された。これらの遺構から焼け歪みや焼成不良の須恵器が出土することから、北や北東方向の丘陵上に存在する松山平野東部古窯址群（生産地）から来住・久米地区など（消費地）への中継地点、集積地の役割を担っていたことが指摘されている。また上苅屋遺跡１・２次調査地においては後期の掘立柱建物・土坑・柱穴を検出していることから、今後の近隣地域の調査により集落の変遷がより明確になると思われる。

来住・久米地区では来住町遺跡７・８次調査地で６世紀末から７世紀中葉段階の集落の変遷が明らかとなった。また開遺跡１・２次調査地では６世紀代の竪穴式住居形態の変遷や、掘立柱建物の建物方位の変化、竪穴式住居から掘立柱建物への移行が確認されている。

小野地区における古墳は中・後期に限定される。中期の古墳には桧山峠７号墳・観音山古墳・曽鵜神社古墳などがあり、５世紀末の前方後円墳である桧山峠７号墳は松山平野における横穴式石室の導入時期を考える上で興味深い古墳である。後期の古墳には北部や北東部の丘陵上に分布する芝ケ峠古墳群・かいなご古墳群・久米大池古墳群・播磨塚古墳群などがある。このほか波賀部神社古墳・二ツ塚古墳・タンチ山古墳・葉佐池古墳といった大規模な前方後円墳が平野部に出現する。これらのうち古墳の保存とともに本格調査が実施された葉佐池古墳は、横穴式石室内に木棺や有機物が残存していたことから、石室構造のみならず当時の葬送儀礼に関わるあらゆる情報を得ることができた。

古　代

小野地区の北部丘陵上には前述した松山平野東部古窯址群が存在する。主要なものとしては駄馬姥ケ懐・悪社谷・枝朶下池・潮見山南・茨谷窯址など10数基があるが、本格調査が実施されたのは駄馬姥ケ懐１号窯のみである。これらの表採資料などから推定される操業時期は６世紀後半から８世紀後半の年代をあてている。

古市遺跡２区では興味深い遺構を検出している。それは瓦器碗と土師器碗を掘立柱建物の柱穴内に埋納しており、建物の廃絶に伴う祭祀遺物と推定されている。

来住・久米地区には、近年全国的に注目されている久米官衙遺跡群があり、７世紀における重要施設が集中する政治の中心地であった可能性が考えられる。同時に白鳳期の寺院である来住廃寺につい

てもその全容解明に向けて調査が行われている。

中・近世

小野地区における中世の遺構としては下苅屋遺跡２次調査地で生産関連遺構や遺物包含層を確認している。近世は下苅屋遺跡３次調査地で江戸時代前期の墓２基を調査している。礫石積みの外部構造や下部構造、出土した石碑や古銭から確認できた年代や被葬者像など、近世墓から多くの情報を得ることができた。

来住・久米地区における中世の遺構としては来住廃寺21次調査地において検出した大規模な総柱建物群があげられる。近世では来住廃寺15次調査地において土坑墓群が検出されている。

〔参考文献〕

森　光晴　1978『五郎兵衛谷古墳』松山市教育委員会

1986『愛媛県史　資料編考古』愛媛県史編纂委員会

西尾　幸則ほか　1993『来住廃寺遺跡－第15次調査報告書－』松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

西尾　幸則・水本　完児・小笠原善治　1993「来住廃寺21次調査地」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅴ』松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

重松　佳久　1996「下苅屋遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅷ』松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

相原　浩二・小玉亜紀子　1997「久米高畑遺跡26次調査地」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅸ』松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

梅木　謙一ほか　1996『小野川流域の遺跡』松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

1998『小野川流域の遺跡Ⅱ』松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

栗田　茂敏　1987「南久米片廻り遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅰ』松山市教育委員会

1989「久米窪田森元遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅱ』松山市教育委員会

栗田　茂敏・加島　次郎・大森　一成　1995「葉佐池古墳」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅶ』松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

栗田　茂敏・大森　一成　1997『桧山峠７号墳』松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

栗田　茂敏・相原　浩二・河野　史知　2000『古市遺跡・下苅屋遺跡２・３次調査地』松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

栗田　茂敏・吉岡　和哉　2000「播磨塚天神山古墳」『松山市埋蔵文化財調査年報12』松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

河野　史知　1998「久米高畑遺跡35次調査地」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅹ』松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

高尾　和長・宮内　慎一　1996「久米高畑遺跡25次調査地」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅷ』松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

橋本　雄一・小笠原善治　1996「久米高畑遺跡24次調査地」「来住町遺跡７次調査地」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅷ』松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

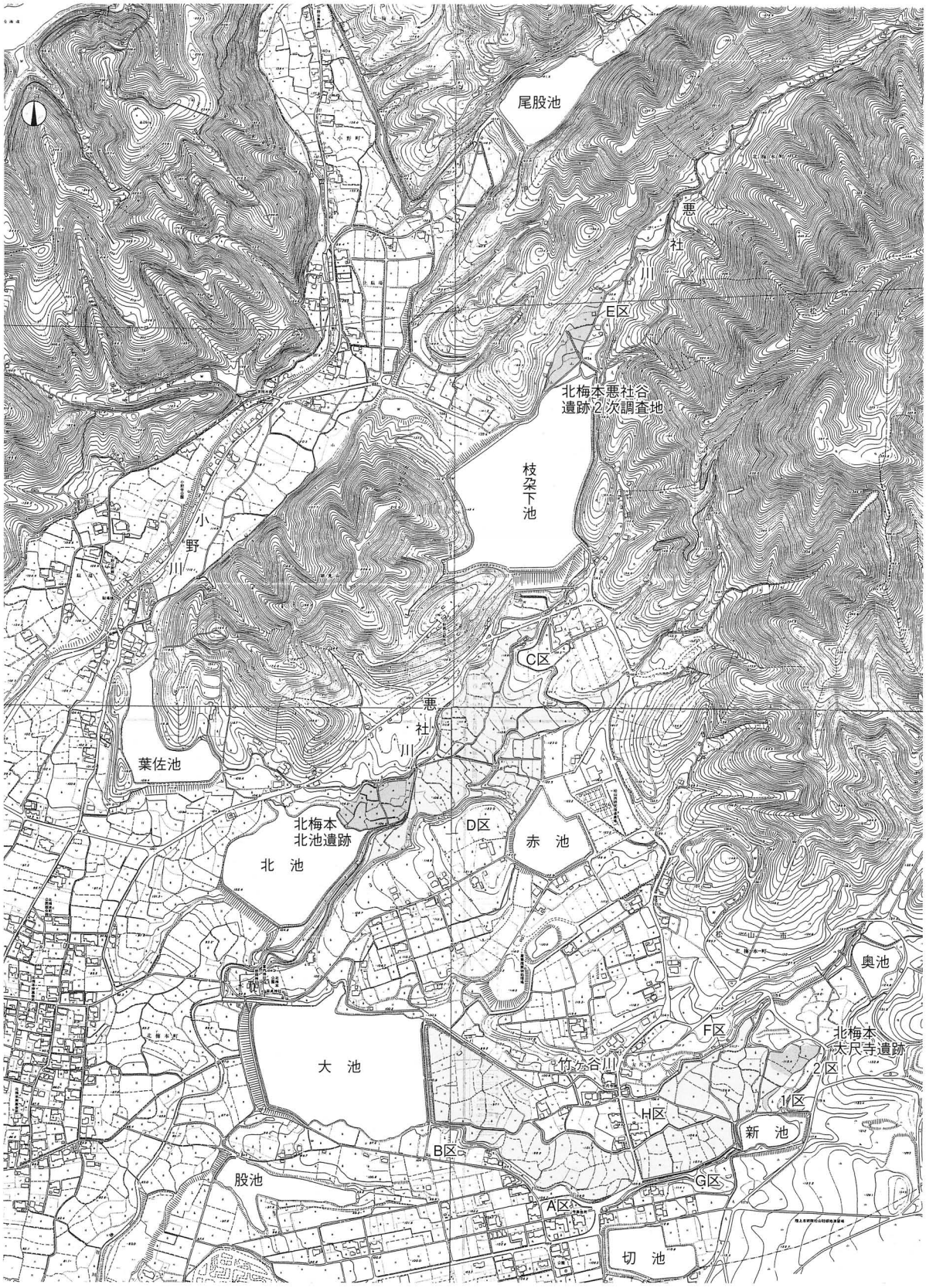
1998「久米高畑遺跡33次調査地」「久米高畑遺跡36次調査地」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅹ』松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

橋本　雄一・相原　秀仁　1995「久米高畑遺跡23次調査地」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅶ』松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

宮内　慎一・相原　秀仁　1997「久米高畑遺跡27次調査地」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅸ』松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

1999「来住町遺跡８次調査地」『松山市埋蔵文化財調査年報11』松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

山本　健一・山之内志郎　1997「古市遺跡２次調査地」「五楽遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅸ』松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター



第2図　調査地位置図（S＝1：10,000）

第２章

北梅本悪社谷遺跡２次調査地
（きたうめもとあくしゃだに）

第２章　北梅本悪社谷遺跡２次調査地

１．調査の経過

(1) 調査に至る経過

本調査は、1998（平成10）年11月～1999（平成11）年２月の間に行われたＥ区6,265㎡内における、試掘調査の結果を受けて実施したものである。試掘調査では、土坑・溝・須恵器窯の灰原と思われる遺構と須恵器・土師器・陶磁器などの土器や石器・窯壁片が出土した。また本調査地の北西約20ｍには周知の窯跡である「悪社谷１号窯」がある。そのため埋文センター及び文化教育課・申請者の三者は遺跡の取り扱いについての協議を行い、土地改良総合整備事業に伴う工事により破壊される遺跡の記録保存を行うため、事前の発掘調査が必要と判断された。

調査は、古墳時代や古代の須恵器生産関連遺構や集落関連遺構の広がりの確認を主目的とし、1999（平成11）年４月８日より埋文センターが本格調査を開始した。

なお試掘調査の結果については第５章で詳述しているので参考にされたい。

(2) 調査の経緯（第３・５図）

1999（平成11）年４月５日に調査事務所を設置する。４月８日より調査区を設定し重機により表土はぎを行う。調査対象地を３区に区分けし、北より１区・２区・３区とした。その後１区から遺構検出作業を行い、４月16日に１区遺構検出状況の写真撮影を行う。６月16日に１区完掘状況及び２区遺構検出状況の写真撮影を行う。８月12日に２区完掘状況及び３区遺構検出状況の写真撮影を行う。９月13日に３区完掘状況の写真撮影を行う。９月22日に全ての測量が完了し屋外調査を完了する。

なお、調査にあたり調査区内を４ｍ四方のグリッドに分けた。グリッドは北から南へＡ・Ｂ…Ｙ・Ｚ・ａ・ｂ…ｍ・ｎとし、東から西へ１・２…25・26と設定した。

(3) 調査組織

調　査　地　松山市北梅本町乙697－１外

遺　跡　名　北梅本悪社谷遺跡２次調査地

調査期間　1999（平成11）年４月８日～同年９月22日

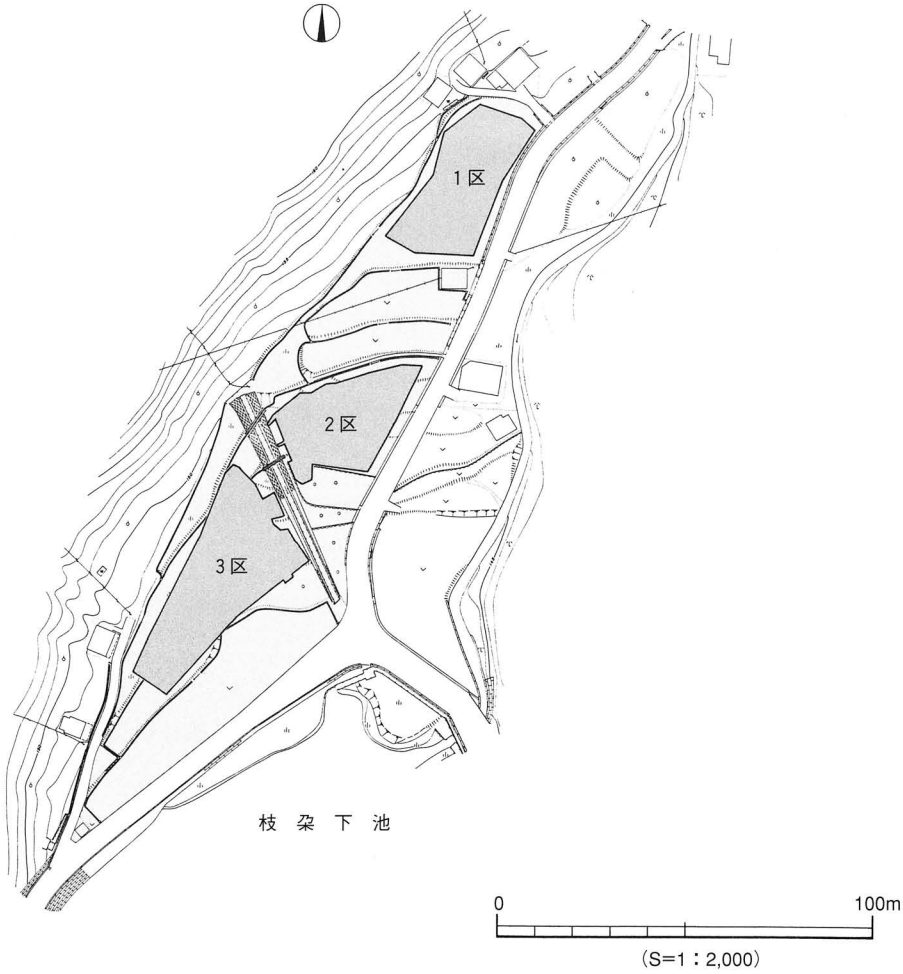
対象面積　6,265㎡

調査担当　髙尾　和長・山之内志郎

調査作業員　上河淳浩・後藤公克・重松吉雄・高松健太郎・松本正義・松田常義・横森淳一・池田昌登史・田丸真裕・高原雄貴・平岡祐二朗・藤方史朗・守谷　亮・池田一紀・武智弘文・野首克幸・山本啓太・古川義章・阿部達也・仲神利卓・弓矢英明・政田尚久・石田丈史・大北隼人・山下　徹・日吉直哉・藤方雄一・吉田良平・原田尚彦・藤本清志・松川栄治・金子育代・仙波千秋・仙波ミリ子・東山里美

２．層　　位（第４図）

本遺跡は、悪社谷に水源を発する悪社川によって開析された標高146～154ｍの谷間に立地する。基本層位は５層に分層でき、第Ⅰ層灰色粘質土、第Ⅱ層橙色微砂質土、第Ⅲ層灰白色微砂質土、第Ⅳ層



第３図　調査地位置図

橙灰色微砂質土、第Ⅴ層粗砂を含む褐色粘質土である。旧地形は北東から南西へ傾斜しているが、現代の農耕に伴う削平により旧地形が段カットされている。

第Ⅰ層：現代の農耕による耕作土である。調査区全域に厚さ６～80cmで堆積する。１区南半部は削平または流出により第Ⅱ層が露呈している。

第Ⅱ層：耕作土に伴う床土である。調査区全域に厚さ３～20cmで堆積する。

第Ⅲ層：旧耕作土である。３区南東部を除く調査区全域に厚さ３～33cmで堆積する。

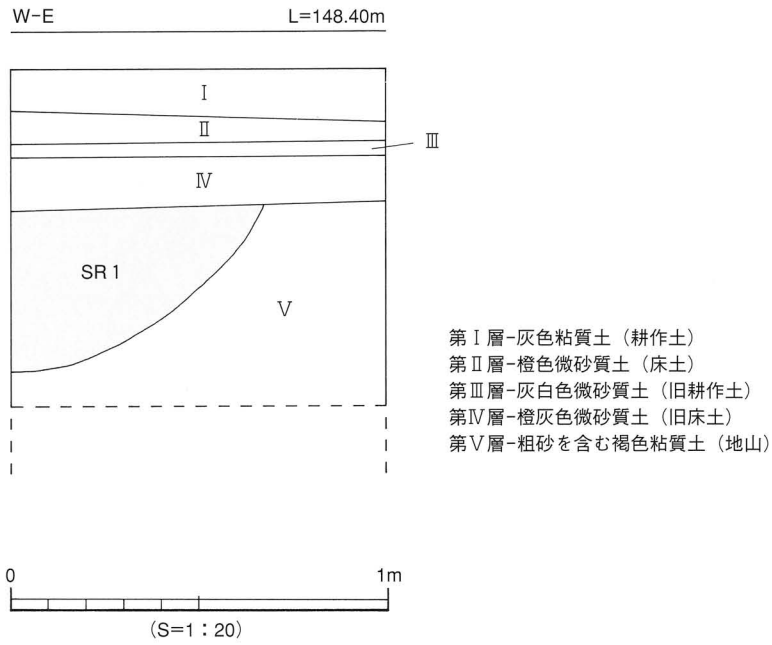
第Ⅳ層：旧耕作土に伴う旧床土である。１・２区東端部を除く調査区全域に厚さ４～40cmで堆積する。１・２区東端部は10～20cmの風化砂岩礫を含む黄色砂礫で造成している。

第Ⅴ層：地山である。後述するすべての遺構はこの層を切り込んでいる。

３．遺構と遺物（第５図）

本調査では、古代・古代以降・近現代の遺構と遺物を検出した。遺構は流路２条・土坑４基・溝３条・性格不明遺構３基である。遺物は須恵器・土師器・陶磁器・石鏃・砥石・敲石・磨石・石核・剥片・砕片である。

ここでは主な遺構と遺物について時代別に概説する。



第４図　基本土層図

［1］古　　代

遺構は流路２条・土坑１基・溝１条・性格不明遺構２基である。

(1) 流　　路

SR１（第６図、図版２）

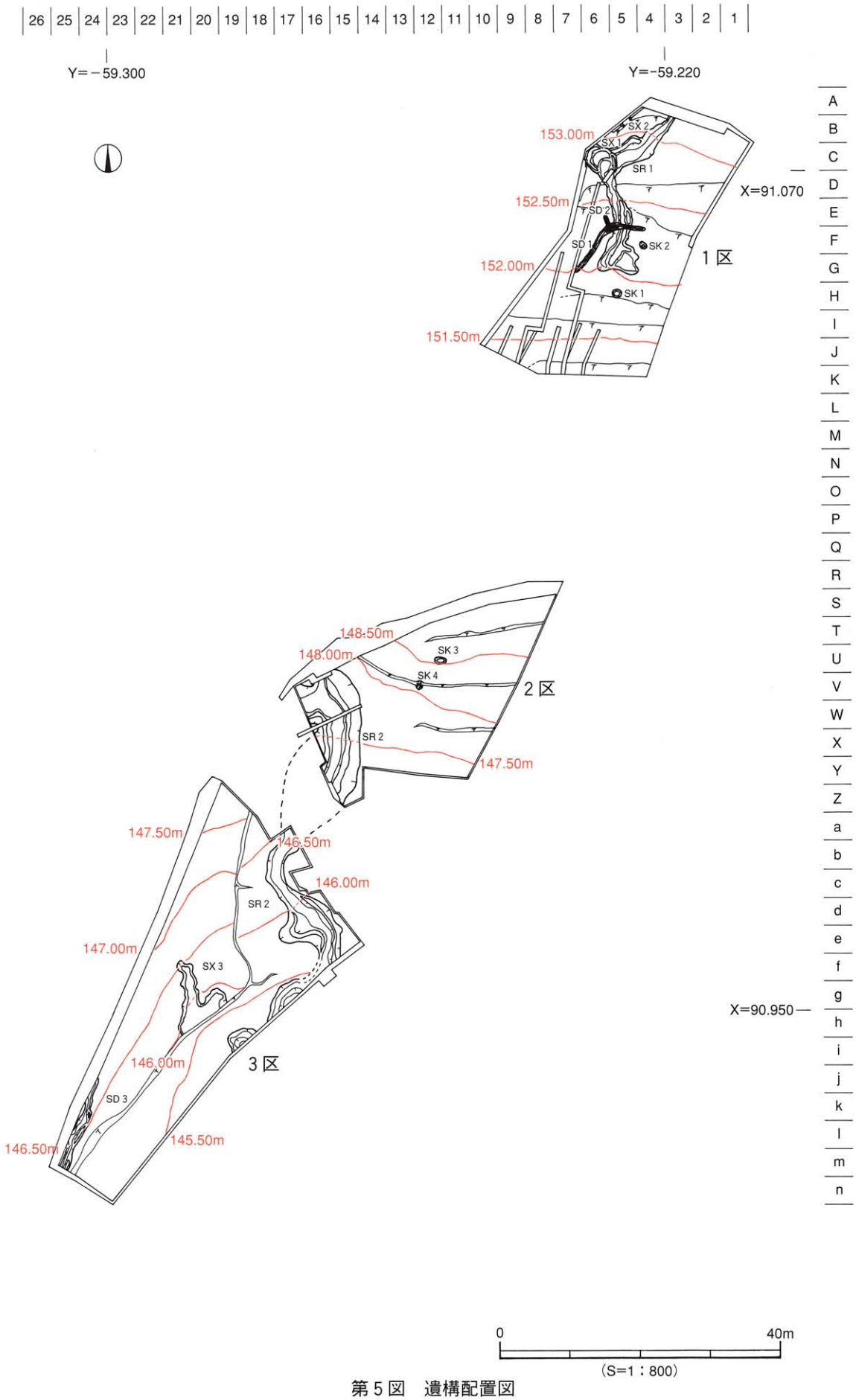
１区中央のＢ３～Ｇ６区に位置する。SD１とSX１に切られ、北側は調査区外に続く。規模は残存検出長26.4m、幅0.7～5.7m、深さ25cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、部分的に二段掘りを呈する。方向は北東から南西方向へ流れた後、屈折して北西から南東方向へ蛇行する。埋土は５層に分層でき、１層褐色粘質土(橙白色含む)、２層灰色粘質土(橙色含む、やや砂質)、３層暗灰色粘質土、４層灰白色微砂質土、５層明灰色微砂質土である。遺物は須恵器と石器がある。

出土遺物（第７・８図、図版４）

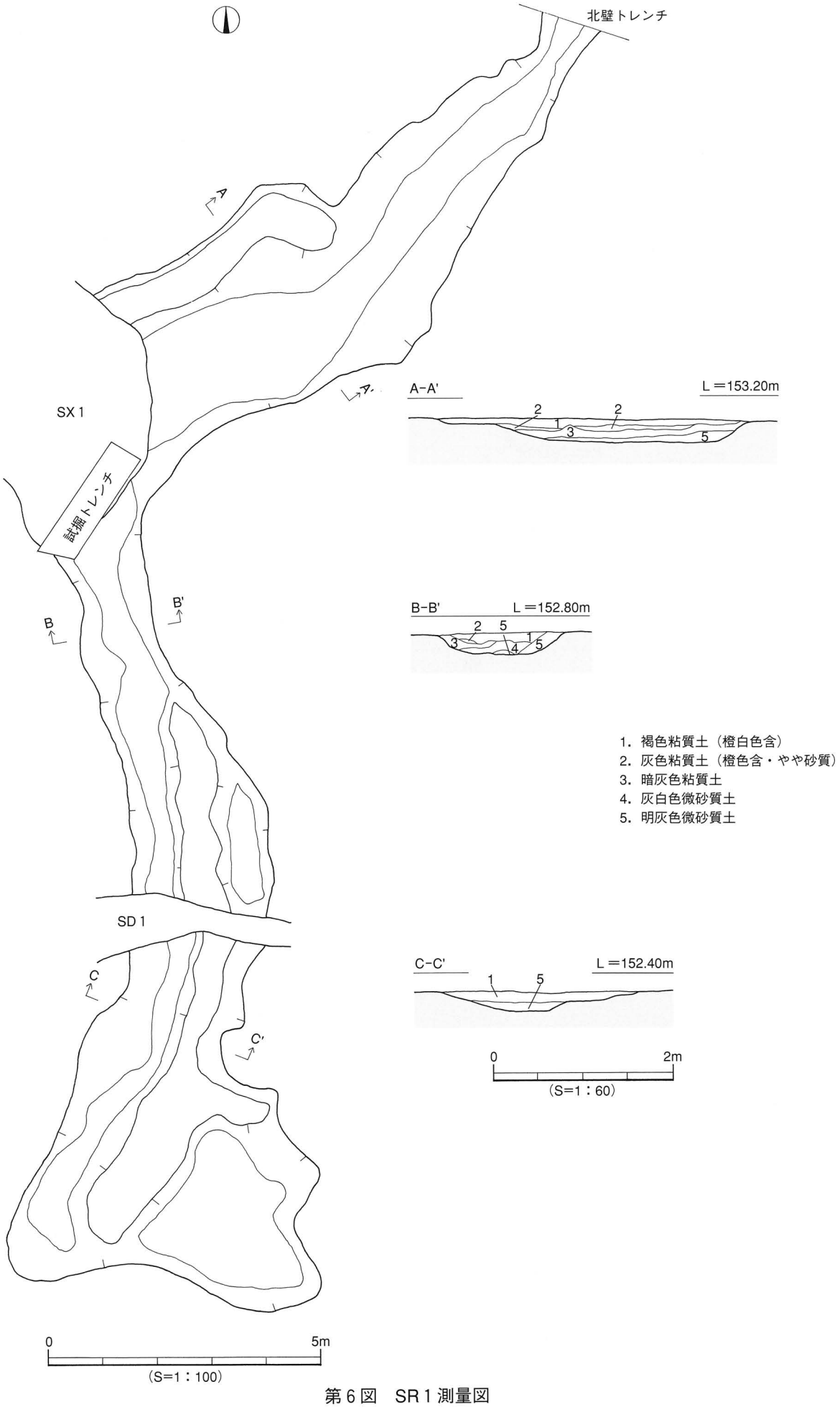
須恵器（１～16）１～６は坏である。１は口縁端部内外面に沈線をもつ坏である。２・３・５・６は「ハ」の字状の高台をもつ坏である。４は口縁部片である。７は長頸壺の肩部～胴部片である。肩部と胴部の境に１条の沈線を施す。８～16は甕である。８は口縁部～肩部片である。端部は「コ」の字状を呈し、端面は平らにおさめる。頸部に三本平行線のヘラ記号が施される。頸部と肩部の境に段をなし、肩部には平行タタキ痕が顕著に残る。９～15は口縁部片である。９は８と同様に外反し、端部は「コ」の字状を呈し、端面はナデ凹む。10の端面は平らにおさめる。11の端面は平らでわずかに上下に拡張する。12～14は大型品で、器壁は厚く、端部外面に下垂する突帯が巡る。12・14は端面がややナデ凹む。15は口縁部片である。やや直立する口縁部の端面に凹みをもつ。16は頸部～肩部片である。頸部と肩部の境は凹みをもち、外面に平行タタキ痕が顕著に残る。

石器（17）剝片である。わずかに自然面が残る。サヌカイト製。

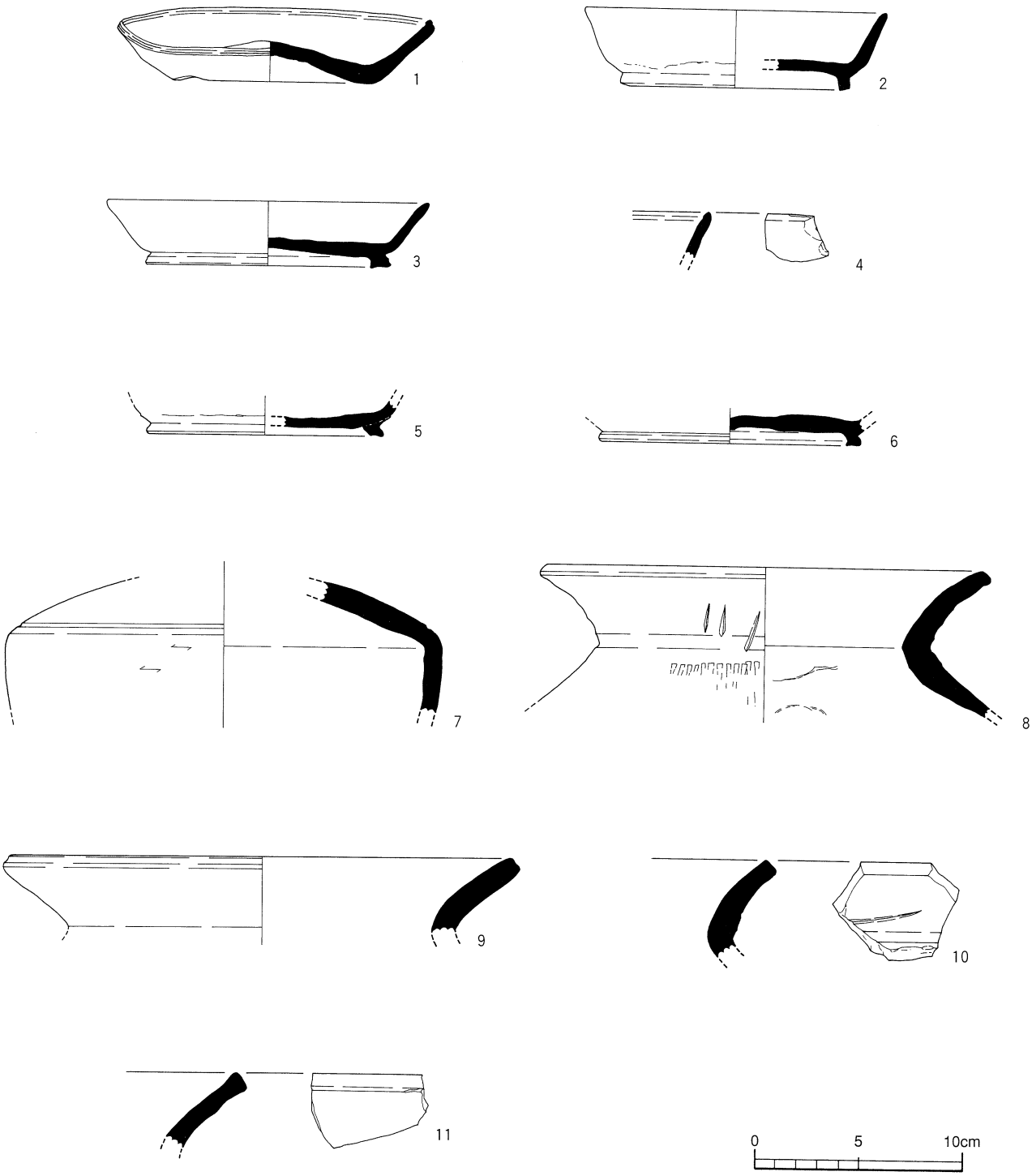
時期：出土した須恵器の年代より、８世紀前半とする。


26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1
Y=−59.300
Y=−59.220
A B C D E F G H I J K L M N O P Q R S T U V W X Y Z a b c d e f g h i j k l m n
X=91.070
X=90.950
153.00m
152.50m
152.00m
151.50m
SX 2
SX 1
SR 1
SD 2
SD 1
SK 2
SK 1
1 区
148.50m
148.00m
SK 3
SK 4
SR 2
147.50m
2 区
147.50m
146.50m
146.00m
SR 2
147.00m
SX 3
146.00m
SD 3
146.50m
145.50m
3 区
0
40m
(S=1：800)

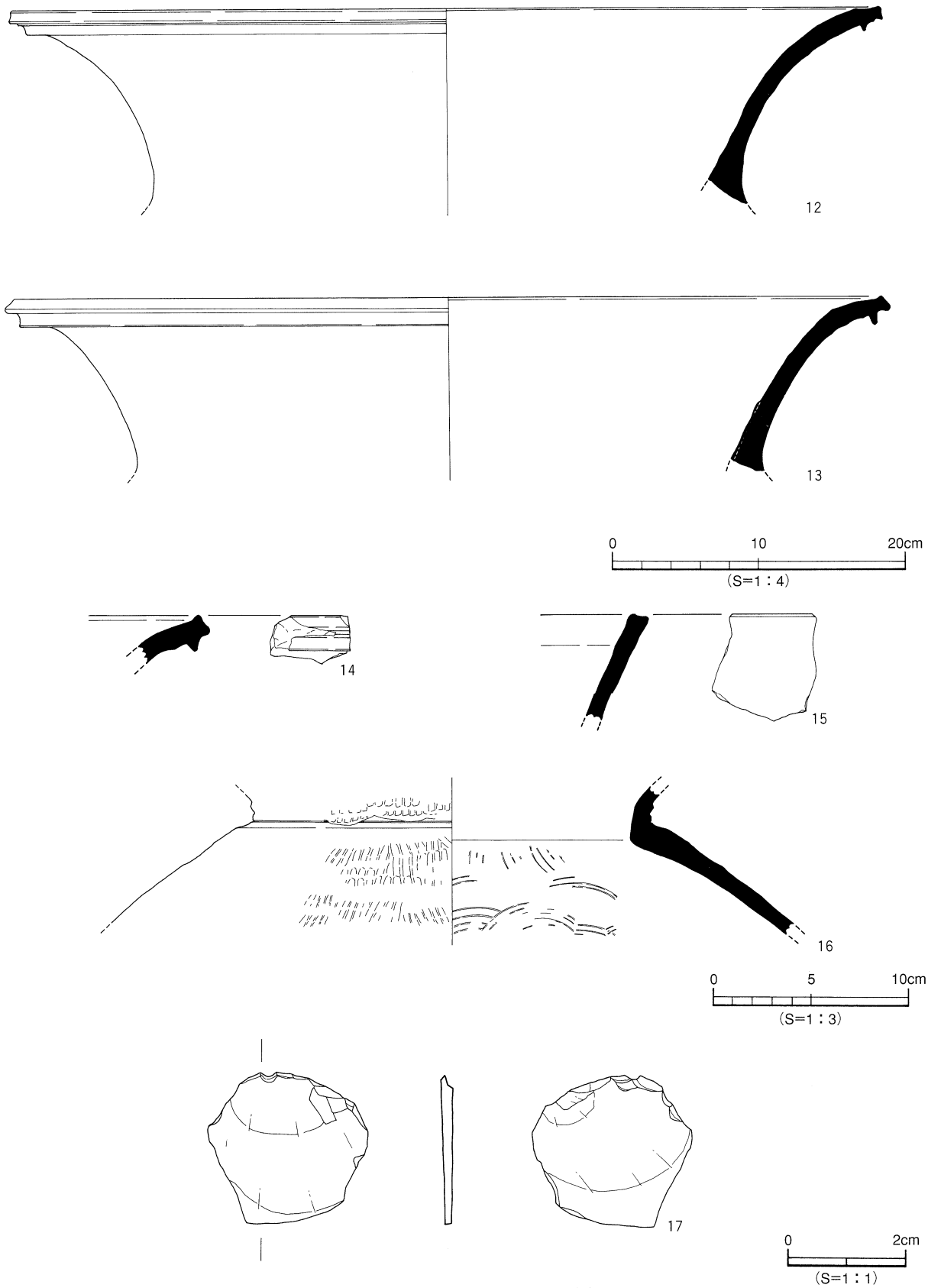
第５図　遺構配置図


北壁トレンチ
A
A'
SX 1
試掘トレンチ
B
B'
SD 1
C
C'
A-A'
L＝153.20m
B-B'
L＝152.80m
C-C'
L＝152.40m
1. 褐色粘質土（橙白色含）
2. 灰色粘質土（橙色含・やや砂質）
3. 暗灰色粘質土
4. 灰白色微砂質土
5. 明灰色微砂質土
0
5m
(S=1：100)
0
2m
(S=1：60)

第6図　SR 1 測量図



第７図　SR１出土遺物実測図(1)



第 8 図　SR 1 出土遺物実測図(2)

SR２（第９図、図版３）

２区東及び３区西のU15～ｉ19区に位置する。両端と中央部は調査区外に続く。規模は残存検出長65.0m、幅2.31～8.18m、深さ0.92mを測る。断面形態は逆台形状を呈し、部分的に二段掘りを呈する。北東から南西方向へ大きく蛇行しながら流れている。埋土は８層に分層でき、１層灰色微砂質土（やや橙色混じり）、２層暗灰色シルト、３層黒色粘質土、３－②層灰褐色粘質土（黄色混じり）、４層暗灰色微砂質土（混じり気なし）、５層灰色微砂質土、６層暗灰色微砂質土（５層混じり）、７層褐色粗砂質土（有機物や流木含む）、８層灰色粗砂質土である。遺物は須恵器、石器、多量の流木や有機物がある。有機物や流木のうち、人工的に加工されたものはなかった。

出土遺物（第10・11図）

須恵器(18～27)18～20は坏蓋である。18は天井部と口縁部の境に断面三角形の稜をもつ。20は中央部がやや突出する坏蓋のつまみである。21～23は蓋である。扁平な蓋で、中形品(21)と大形品(22･23)がある。22と23は天井部にわずかな段を有し、口縁部が鍵状を呈する。24～26は壺である。24は口縁部が大きく外反し、端部は上方へ突出する。双耳瓶の可能性もある。25･26は長頸壺である。25は胴部片、26は「ハ」の字状に開くやや長い高台である。27は甕の頸部片である。頸部と肩部の間に１条の沈線を施す。

石器（28～33）28は平基無茎石鏃である。平面形態は二等辺三角形を呈する。赤色珪質岩製。29は石核である。自然面が残る。姫島産黒曜石製。30・31は剥片である。30は刃部に刃こぼれの痕跡を残す。赤色珪質岩製。31は一部に自然面を残す。サヌカイト製。32は砥石である。三面を使用面とし、片方の端部のみ残存する。石英粗面岩製。33は不明石器である。石器素材の可能性もある。結晶片岩製。

時期：流路の性格を考え、上記遺物のうち最も新しい須恵器の年代より、８世紀中葉とする。

(2) 土　　坑

SK４（第12図、図版１）

２区中央のV12・13区に位置する。平面形態は円形である。現代の耕作により遺構の大半を削平されている。規模は残存長径1.14m、短径1.02m、深さ12～49cmを測る。断面形態はレンズ状を呈する。埋土は褐色シルト（最下層は炭混じり）である。遺物は土師器と須恵器があるが、須恵器の甕は胴部片のため図化するに至らなかった。

出土遺物（第12図、図版４）

土師器（34・35）34は皿である。口縁部は直線的に立ち上がり、端部は尖り気味におさめる。器壁の摩滅が著しく調整は不明である。35は土鍋である。口縁部は内湾気味に立ち上がり、端部は「コ」の字状を呈し、端面は平坦におさめる。

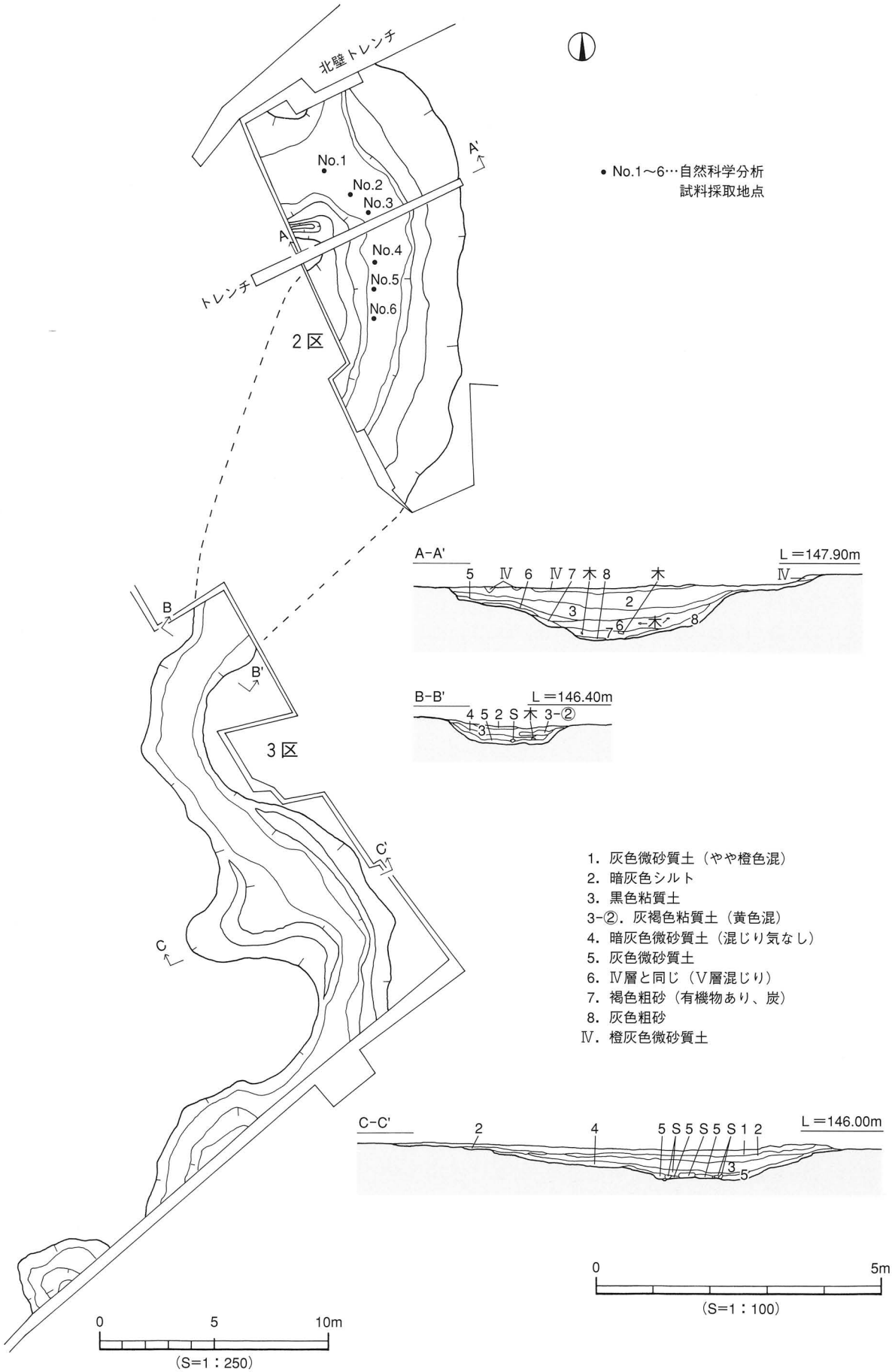
時期：出土した土師器の年代より、８世紀初頭とする。

(3) 溝

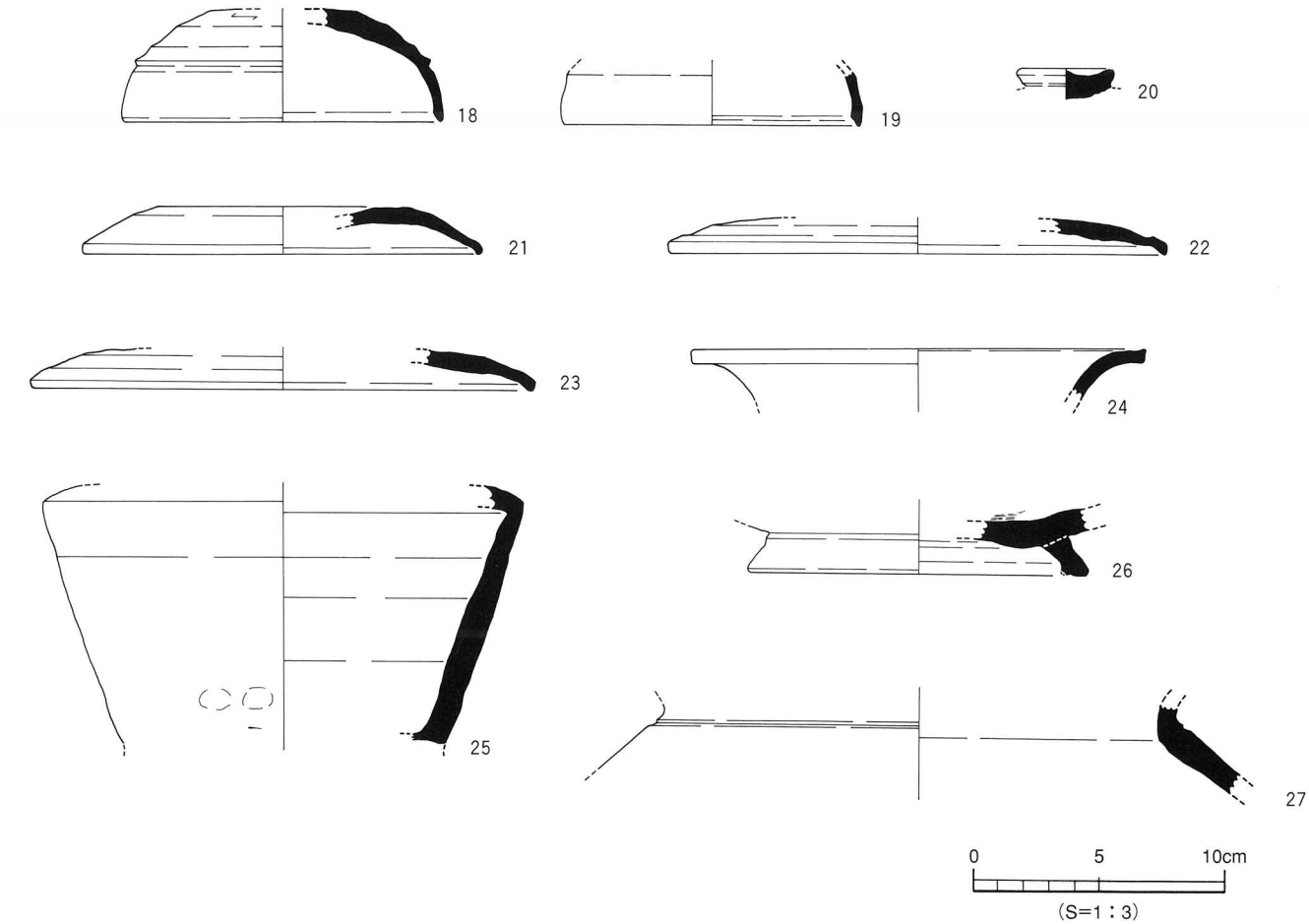
SD２（第13図）

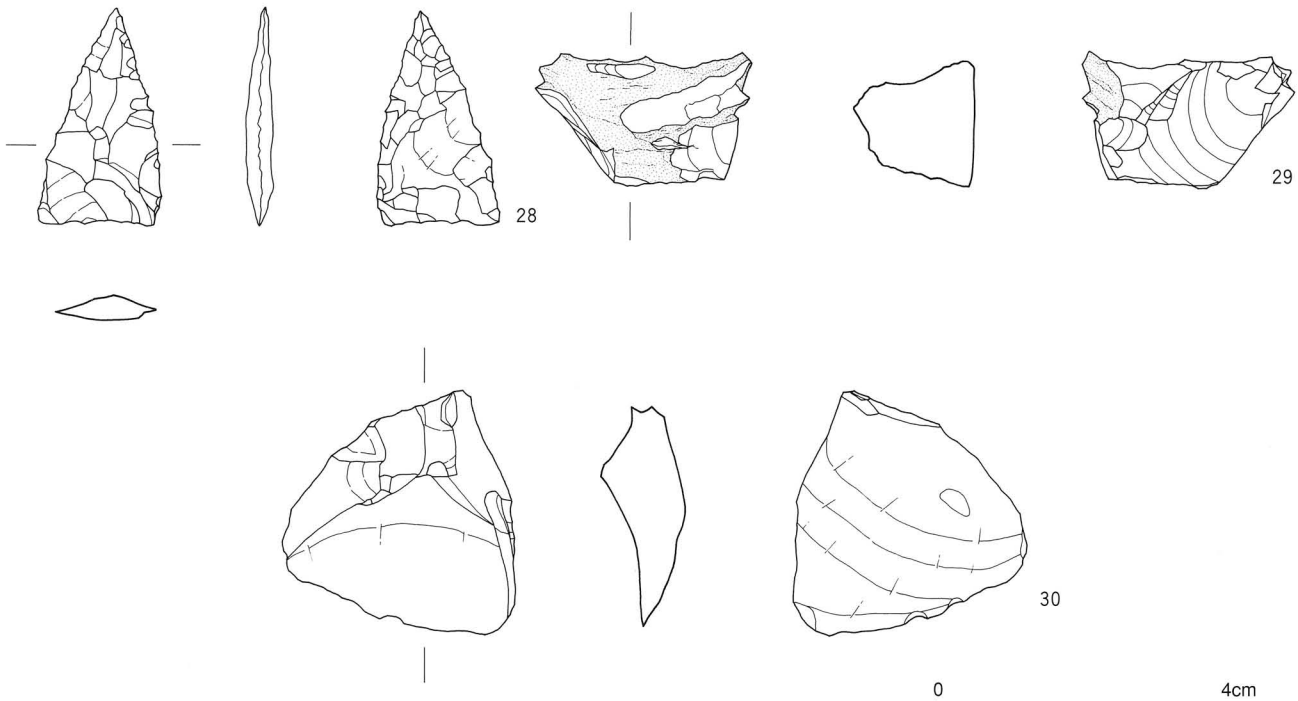
１区中央のＥ６区に位置し、SD１に切られる。規模は残存検出長1.37m、幅23～34cm、深さ４cmを測る。断面形態はレンズ状を呈する。埋土は褐色粘質土である。遺物は須恵器があるが図化するに至らなかった。

時期：遺構埋土がSR１－１層と同じであるため、８世紀前半とする。

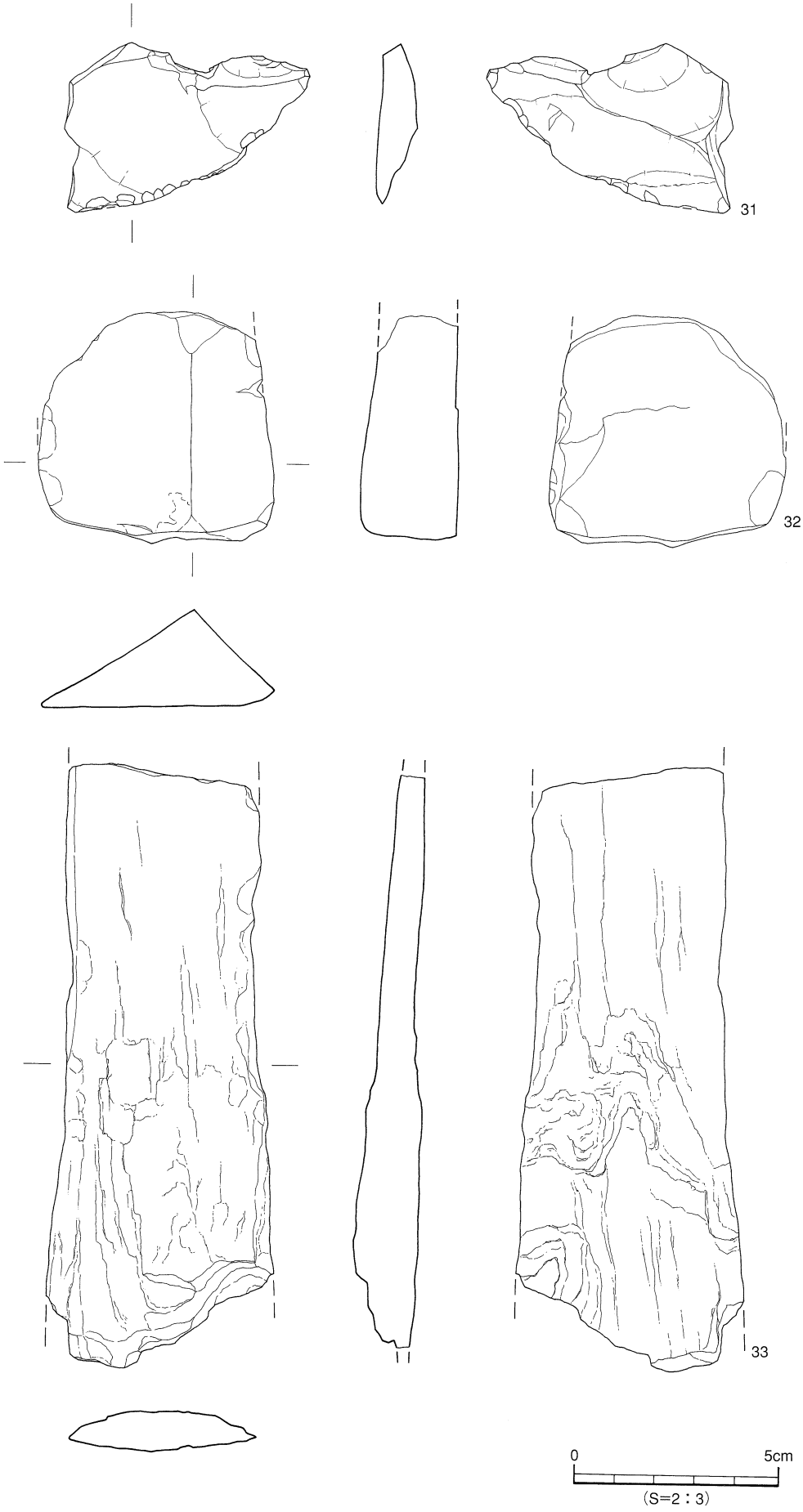

北壁トレンチ
No.1
No.2
No.3
No.4
No.5
No.6
A
A'
トレンチ
2区
B
B'
3区
C
C'
• No.1～6…自然科学分析
試料採取地点
A-A'
L＝147.90m
5 Ⅳ 6 Ⅳ 7 木 8 木 Ⅳ
2
3
7 6 木 8
B-B'
L＝146.40m
4 5 2 S 木 3-②
3
1. 灰色微砂質土（やや橙色混）
2. 暗灰色シルト
3. 黒色粘質土
3-②. 灰褐色粘質土（黄色混）
4. 暗灰色微砂質土（混じり気なし）
5. 灰色微砂質土
6. Ⅳ層と同じ（Ⅴ層混じり）
7. 褐色粗砂（有機物あり、炭）
8. 灰色粗砂
Ⅳ. 橙灰色微砂質土
C-C'
L＝146.00m
2 4 5 S 5 S 5 S 1 2
3
5
0 5 10m
(S=1：250)
0 5m
(S=1：100)

第9図　SR2測量図





第10図　SR２出土遺物実測図(1)

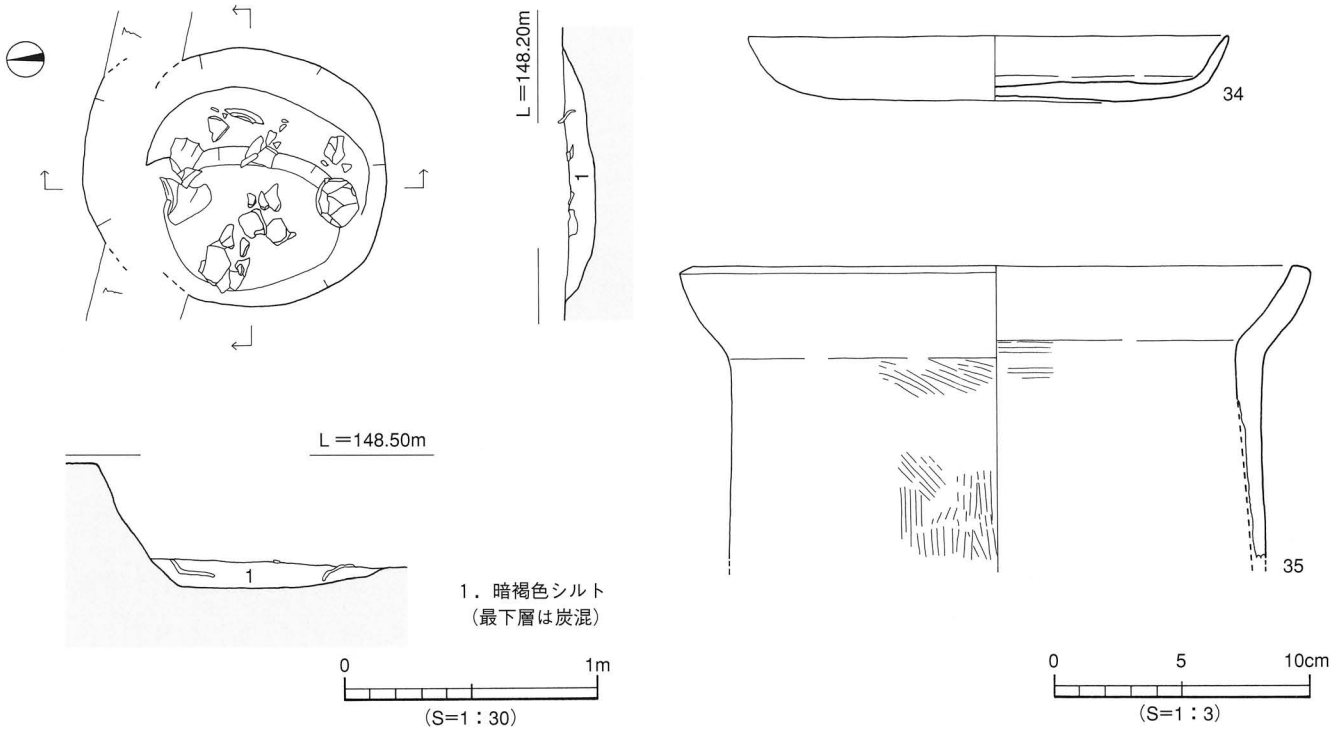


第11図　SR 2 出土遺物実測図(2)

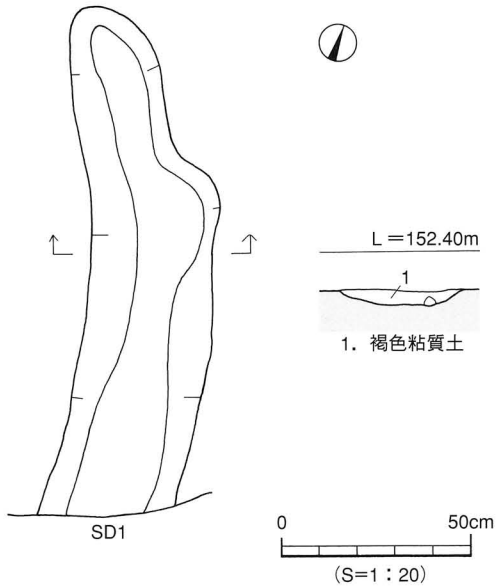
(4) 性格不明遺構

SX１（第14図）

１区北西のＣ５～Ｄ６区に位置し、SR１を切り、調査区外に続く。平面形態は不整形である。規模は残存長径4.88m、短径3.85m、深さ18cmを測る。断面形態は皿状を呈する。埋土は５層に分かれ、１層橙灰色微砂質土（橙色少、灰色多、炭含む）、２層灰色微砂質土（やや粘質）、３層橙灰色微砂質土、４層灰色微砂質土（２層より粗、橙色混じり）、５層暗灰色微砂質土（やや粗い）である。遺物は須恵器がある。



第12図　SK４測量図・出土遺物実測図

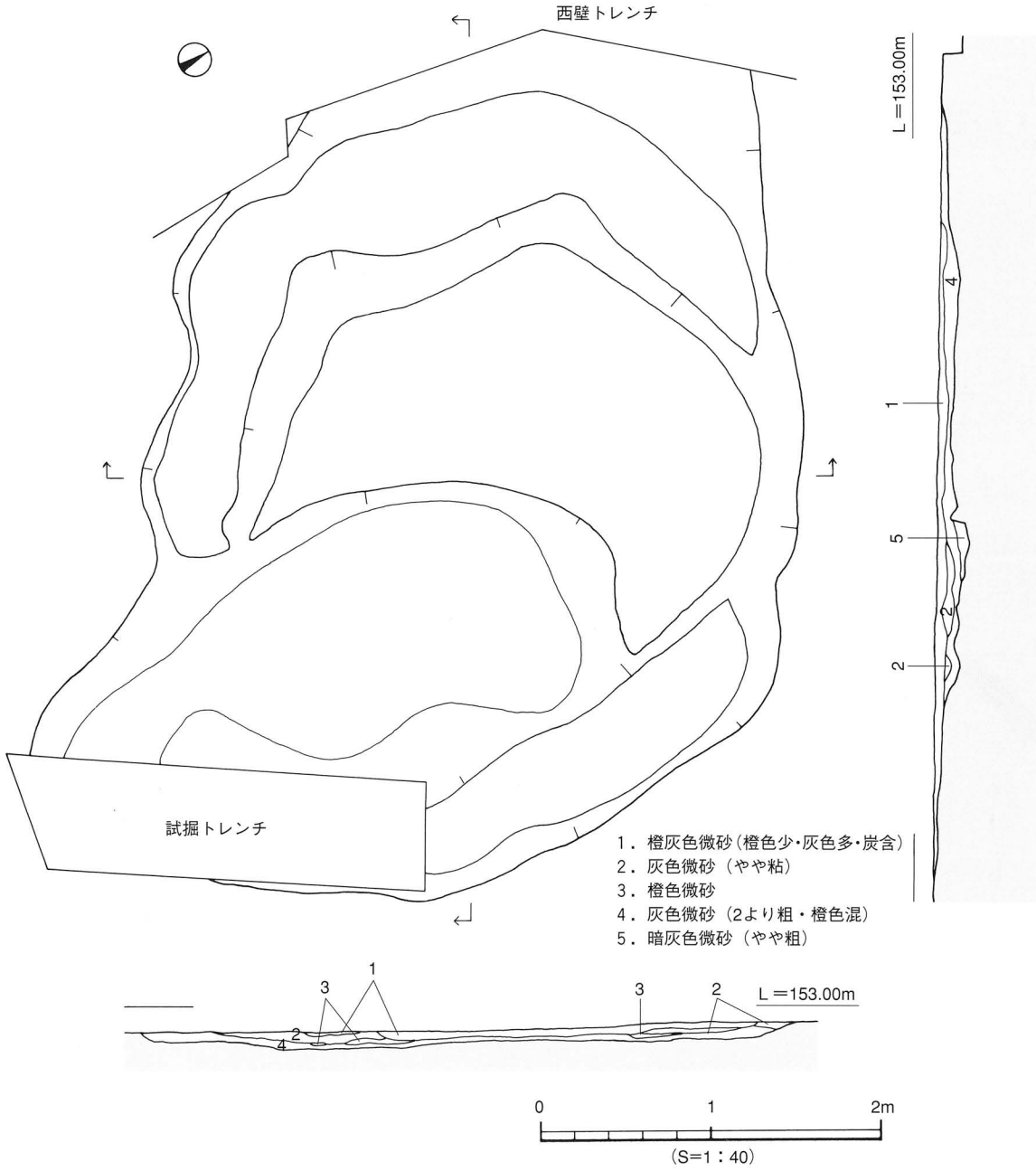


第13図　SD２測量図

出土遺物（第15図）

須恵器（36～44）36は蓋である。口縁部は短く屈曲し、端部はやや尖る。焼けひずんでいるが、中形品と思われる。37～40は坏である。37は口縁端部内面に１条の沈線を巡らす。38は径が小さく短い高台がつく。39は「ハ」の字状の短い高台がつく。40は口縁部～体部片である。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部は外反気味に伸びる。41は短頸壺の底部である。42～44は甕である。42は口縁部片である。口縁端部は「コ」の字状を呈し、平坦におさめる。43は頸部～体部片である。頸部と肩部の境に段をなし、体部外面に平行タタキ痕がわずかに残る。44は頸部～肩部片である。口縁部は直立気味に立ち上がる。頸部と肩部の境に１条の凸線をもつ。

時期：出土した須恵器の年代より、８世紀中葉とする。



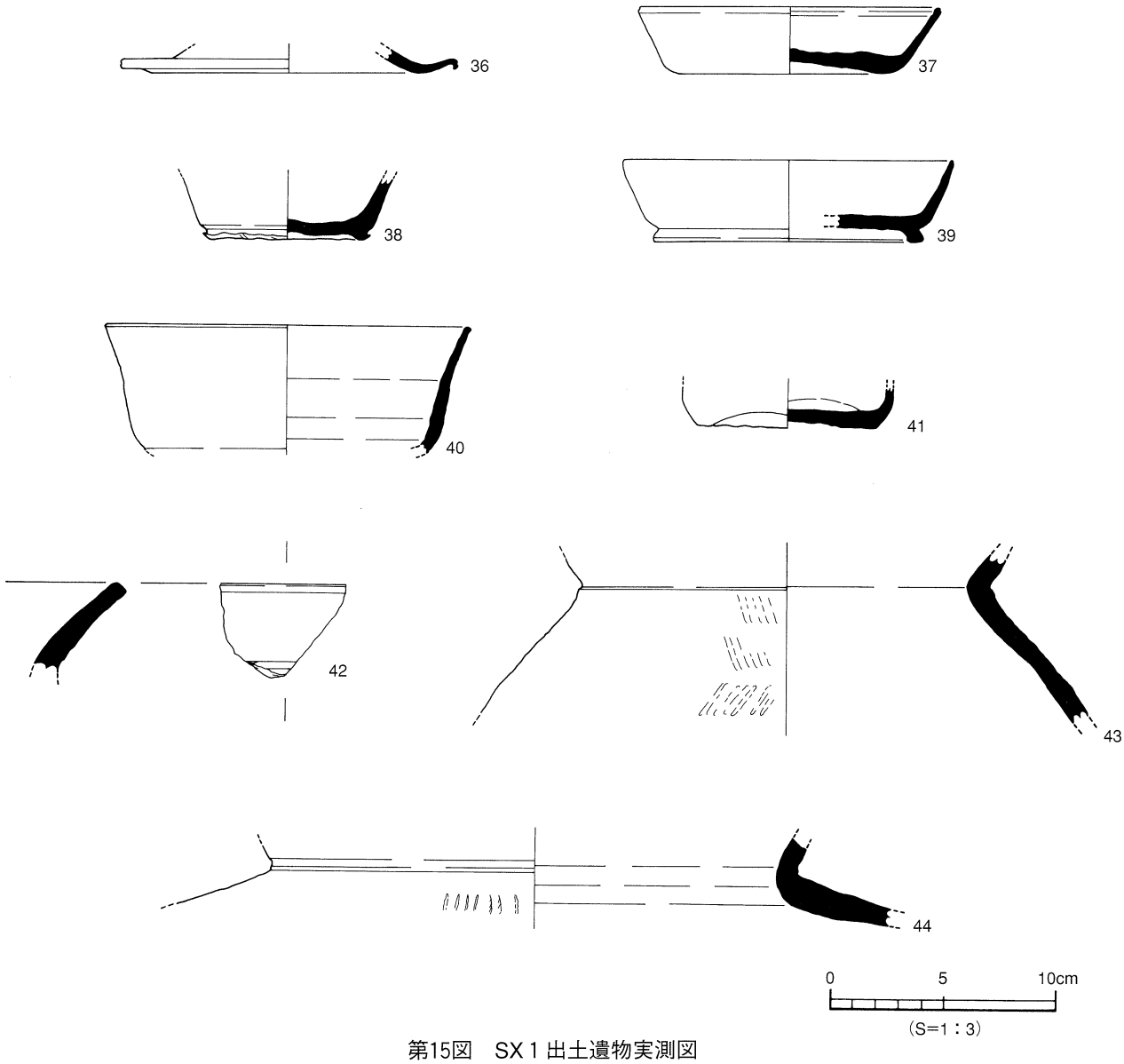
第14図　SX１測量図

SX２（第16図、図版２）

１区北西のＢ５区に位置し、北西部が調査区外、南東部を現代の耕作により削平されている。平面形態は不整形である。規模は長径1.68m、残存短径0.94m、深さ７cmを測る。断面形態は皿状を呈する。埋土は褐色粘質土である。遺物は須恵器・石器・窯壁片がある。

出土遺物（第16・17図、図版４）

須恵器（45～50）45～48は甕である。45・46は口縁部～体部片である。45は端部は「コ」の字状を呈し、端面は平らでわずかに下方に拡張する。肩部には平行タタキ痕が顕著に残る。46は45と同様に口縁部が大きく外反し、端部は「コ」の字状を呈し、端面はわずかにナデ凹む。47・48は口縁部～頸部片である。47は口縁部は大きく外反し、端面はナデ凹み、下方に尖り気味に拡張する。48は大型品で、器壁は厚く、端面は水平で下方に拡張し、端部外面に下垂する突帯が巡る。49は坏である。「ハ」の字状の短い高台がつく。50は皿の底部片である。



第15図　SX１出土遺物実測図

石器（51～55）51～54は石鏃である。51・52は凹基無茎石鏃である。平面形態は二等辺三角形を呈する。サヌカイト製。53は平基無茎石鏃である。平面形態は二等辺三角形を呈する。先端部と基部をわずかに欠損している。サヌカイト製。54は凹基無茎石鏃である。平面形態は二等辺三角形を呈する。基部がわずかに欠損している。緑色珪質岩製。55は敲石である。表面が滑らかで扁平な円礫の上下端に敲打痕を残す。

時期：埋土がSR１－１層と同じであることと、出土した須恵器の年代より、８世紀前半とする。

SX３（第18図）

３区中央のｆ20～ｈ21区に位置する。平面形態は不整形である。南部を現代の耕作により削平されている。規模は残存長軸9.2m、短軸8.1m、幅2.2m、深さ15cmを測る。断面形態はレンズ状を呈する。埋土は２層に分かれ、１層黄色微砂質土、２層褐色シルト（やや粘質）である。遺物は須恵器がある。

出土遺物（第18図）

須恵器(56)56は蓋である。口縁部は短く屈曲し、端部は丸くおさめる。端部外面に1条の沈線を施す。

時期：出土した須恵器の年代より、８世紀前半とする。

［２］古代以降

遺構は、土坑１基、溝１条である。

(1) 土　　坑

SK２（第19図）

１区中央のＦ４区に位置する。平面形態は楕円形である。規模は長径1.36m、短径0.94m、深さ16cmを測る。断面形態はレンズ状を呈する。埋土は２層に分かれ、１層灰色微砂質土（橙色含む）、２層黄灰色微砂質土である。遺物は出土していない。

時期：１層が後述するSD１と同じであることから、８世紀前半以降とする。

(2) 溝

SD１（第20図）

１区中央のＥ４～Ｇ７区に位置し、SR１を切る。規模は検出長13.1m、幅0.34～1.06m、深さ12cmを測る。断面形態はレンズ状を呈する。埋土は灰色微砂質土である。遺物は出土していない。

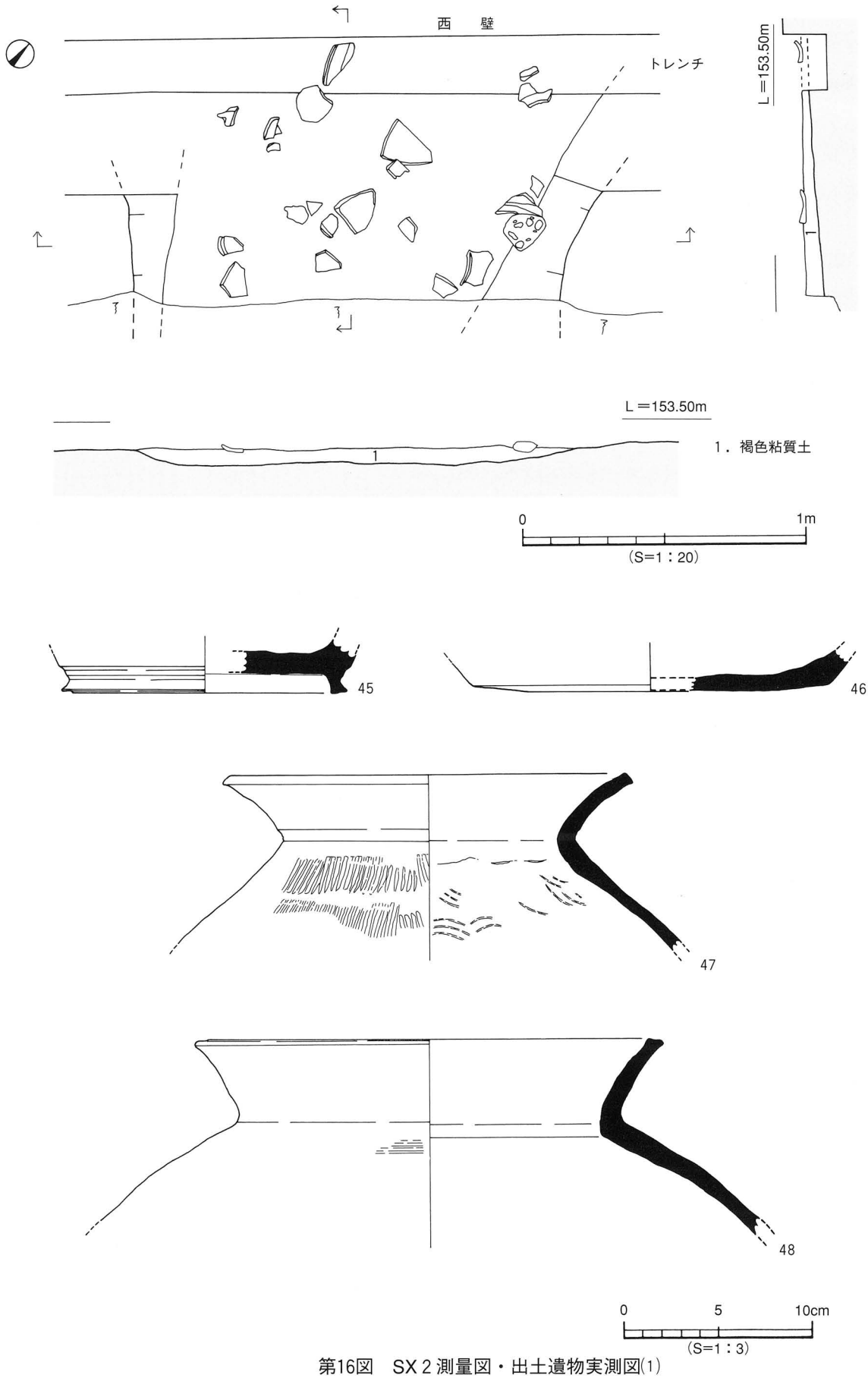
時期：SR１を切っていることから、８世紀前半以降とする。

［３］近 現 代

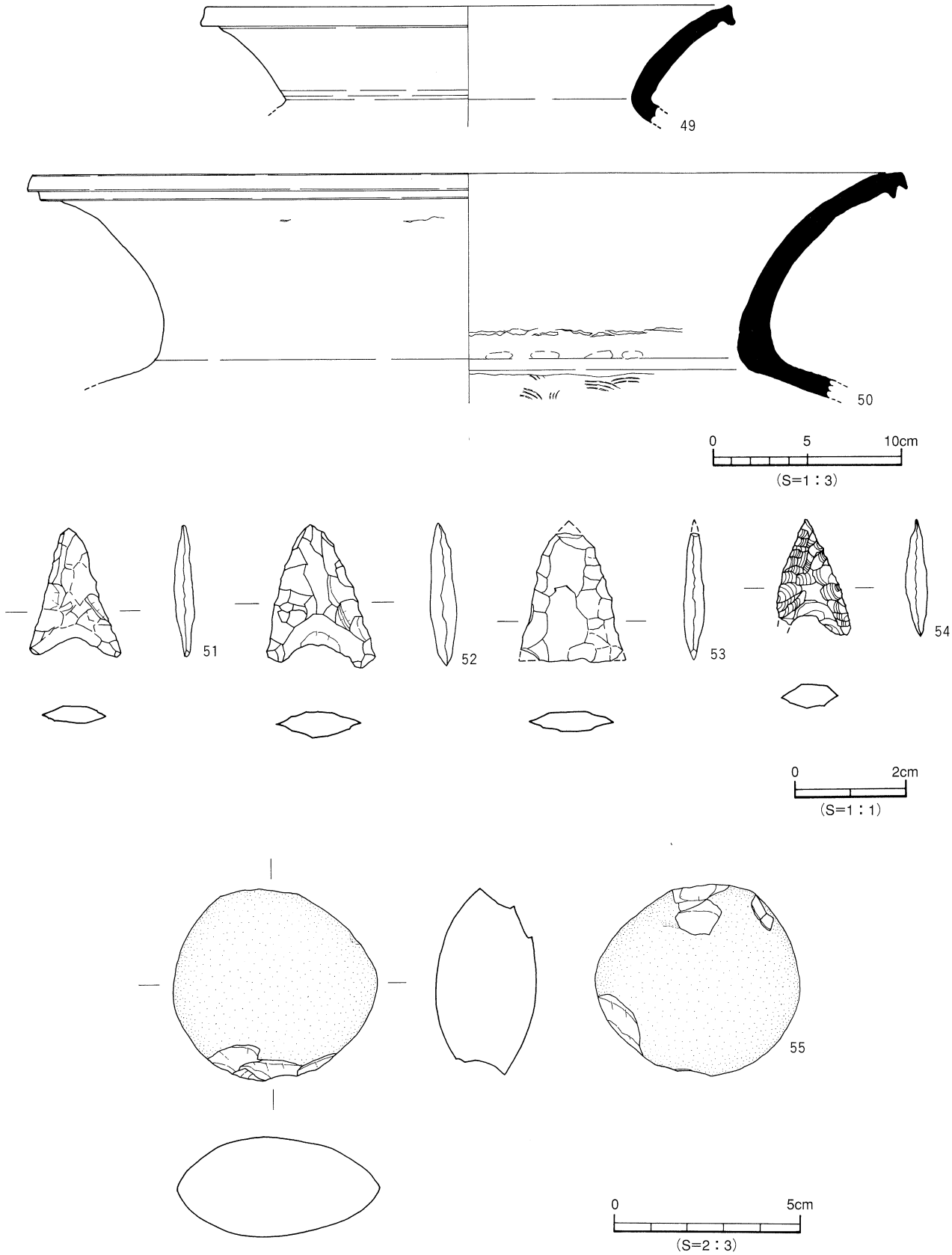
遺構は、土坑２基（SK１・３）と溝１条（SD３）がある。SD３からは近現代の陶磁器が出土したが、SK１・３から出土遺物はなかった。これらの遺構埋土は灰色粗砂（炭混じり）であることから、遺構の時期は近現代と考えられる。詳細は遺構一覧を参考にされたい。

［４］地点不明の遺物

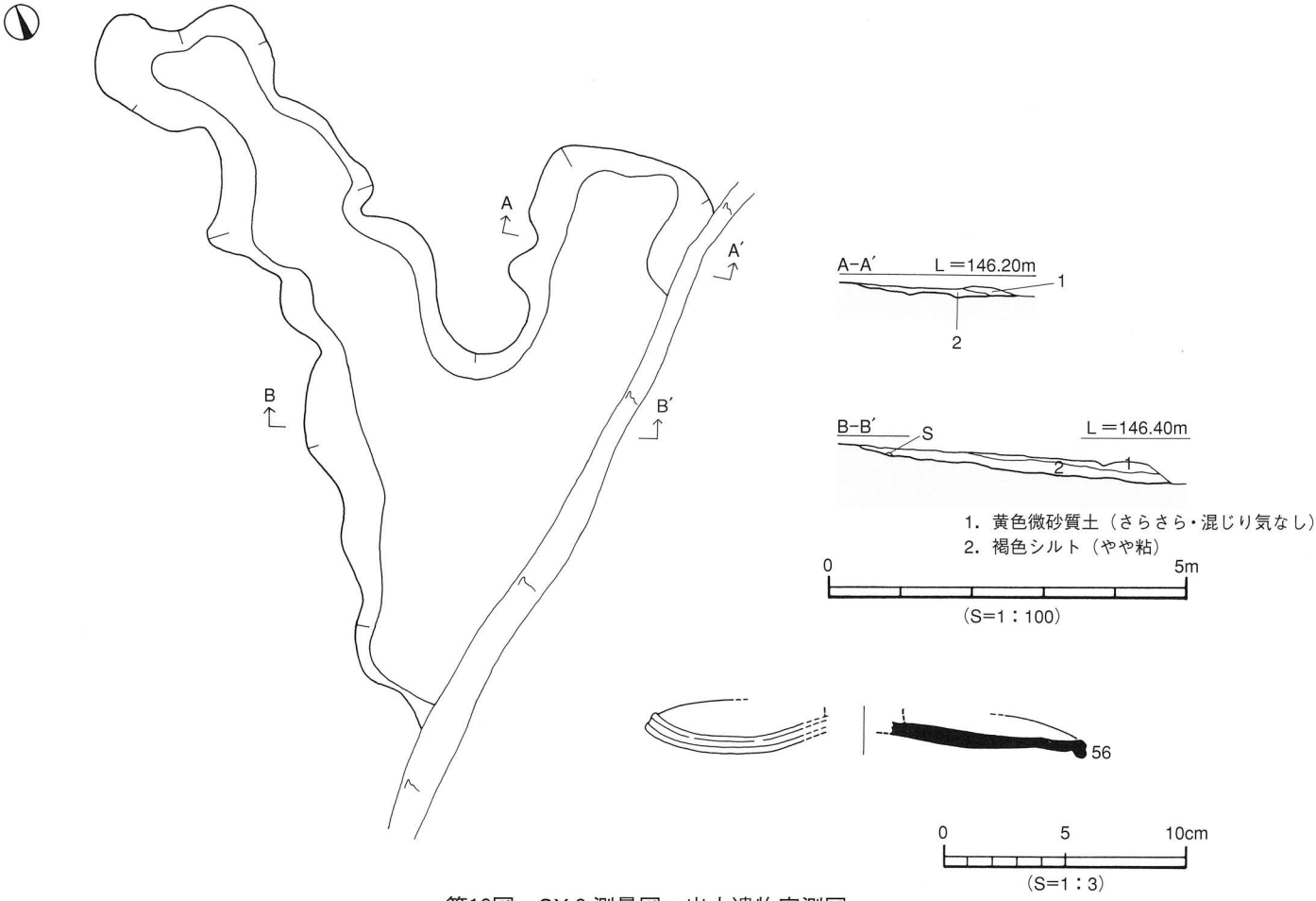
表採した遺物がある。（第21・22図）



第16図　SX２測量図・出土遺物実測図(1)



第17図　SX 2 出土遺物実測図(2)



第18図　SX３測量図・出土遺物実測図

須恵器（57～64）57は蓋である。口縁部は短く屈曲し、端部は丸くおさめる。58は坏である。「ハ」の字状の短い高台がつく。59・60は壺である。59は口縁部片である。口縁端部はナデ凹み、上方へわずかに拡張する。60は短頸壺の底部片である。底部より内湾気味に立ち上がる。61～63は甕である。61・62は口縁部片である。61は口縁部が大きく外反し、端部は「コ」の字状を呈し、端面はナデ凹む。62は器壁は厚く、「コ」の字状の端部に下垂する突帯が巡る。63は頸部片である。頸部にわずかな１条の凸線が巡る。64は壺の口縁部片と大型甕の胴部片が接着している。

石器（65～77）65・66は石鏃である。65は先端部の一部と基部を欠損しているが平基無茎石鏃と思われる。平面形態は二等辺三角形を呈する。サヌカイト製。66は凹基無茎石鏃である。平面形態は二等辺三角形を呈する。先端部と基部を欠損している。サヌカイト製。67は石核である。サヌカイト製。68は磨石である。表面は滑らかで扁平な円礫。約半分を欠失する。69・~~70・76・77~~は剝片である。~~71~~～75は砕片である。

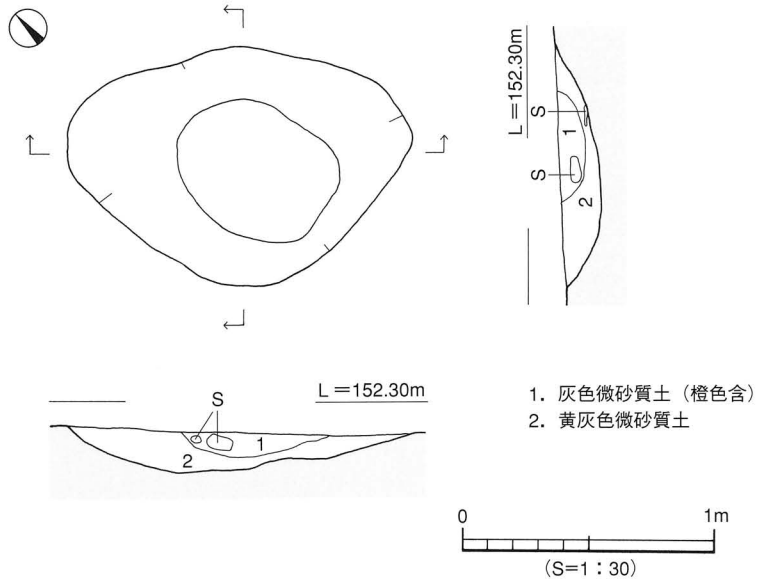
４．小　　結

本調査では、古代・古代以降・近現代の遺構と遺物を検出した。遺構は流路２条・土坑４基・溝３条・性格不明遺構３基を検出した。遺物は須恵器・土師器・陶磁器・石器・窯壁片・流木・有機物が出土した。ここでは時代ごとに遺構と遺物についてまとめを行う。

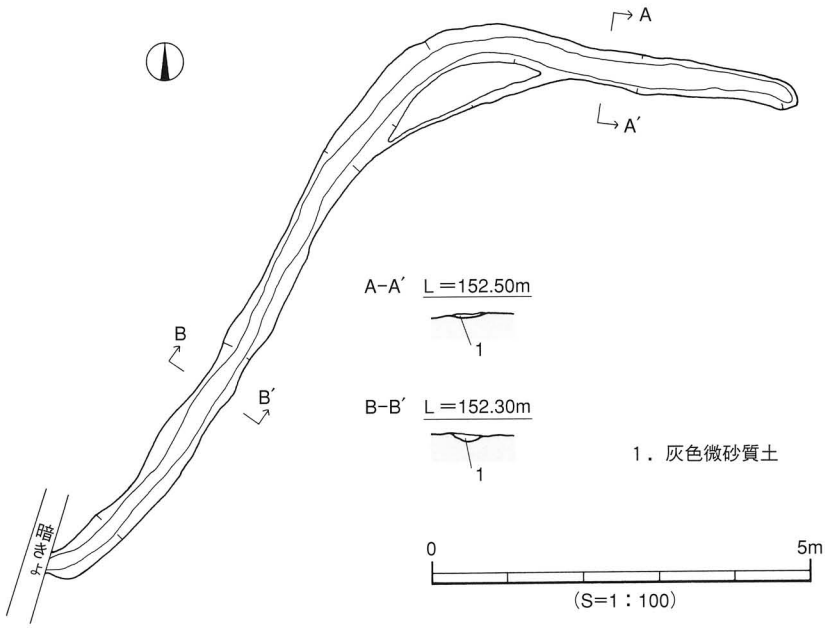
(1) 古　　代

古代の遺構は、流路２条・土坑１基・溝１条・性格不明遺構３基を検出した。すべて８世紀代の遺構である。これらのうち最も古い遺構はSK４である。性格については墓の可能性も考えられるが、現代の削平により埋土のほとんどが残っていなかったため確定することはできなかった。

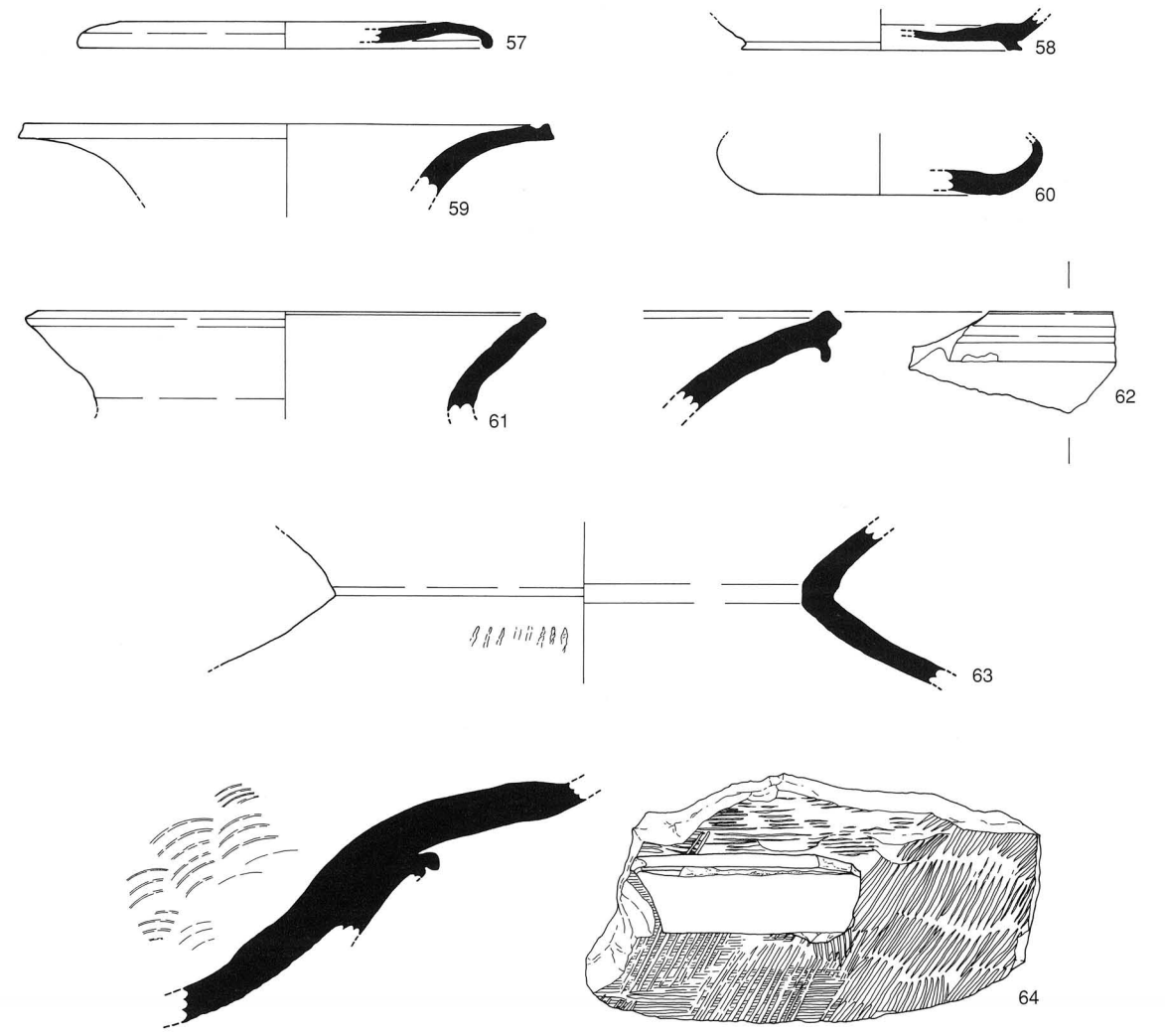
SX１と２は須恵器生産に関連する遺構と考えられる。SX２は北西約20mの位置に悪社谷１号窯が存在していることと須恵器と窯壁片の出土状況から、悪社谷１号窯の灰原である可能性が高い。ＳＸ１は悪社谷１号窯より時期的にやや後出する未確認の窯の関連遺構と推測される。



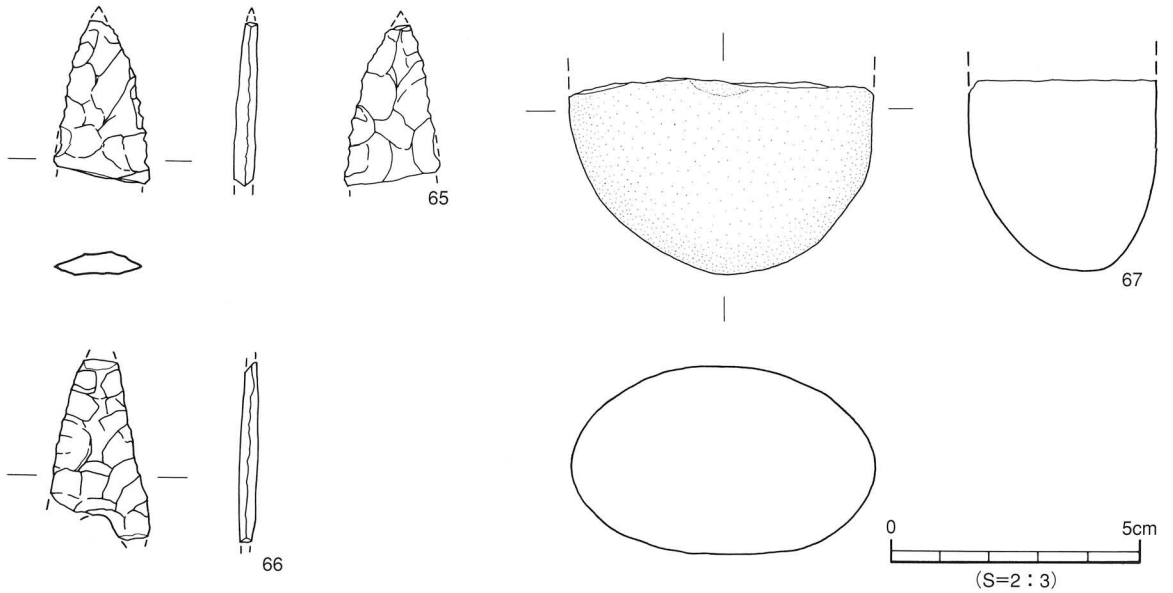
第19図　SK２測量図



第20図　SD１測量図



0　5　10cm
(S=1：3)

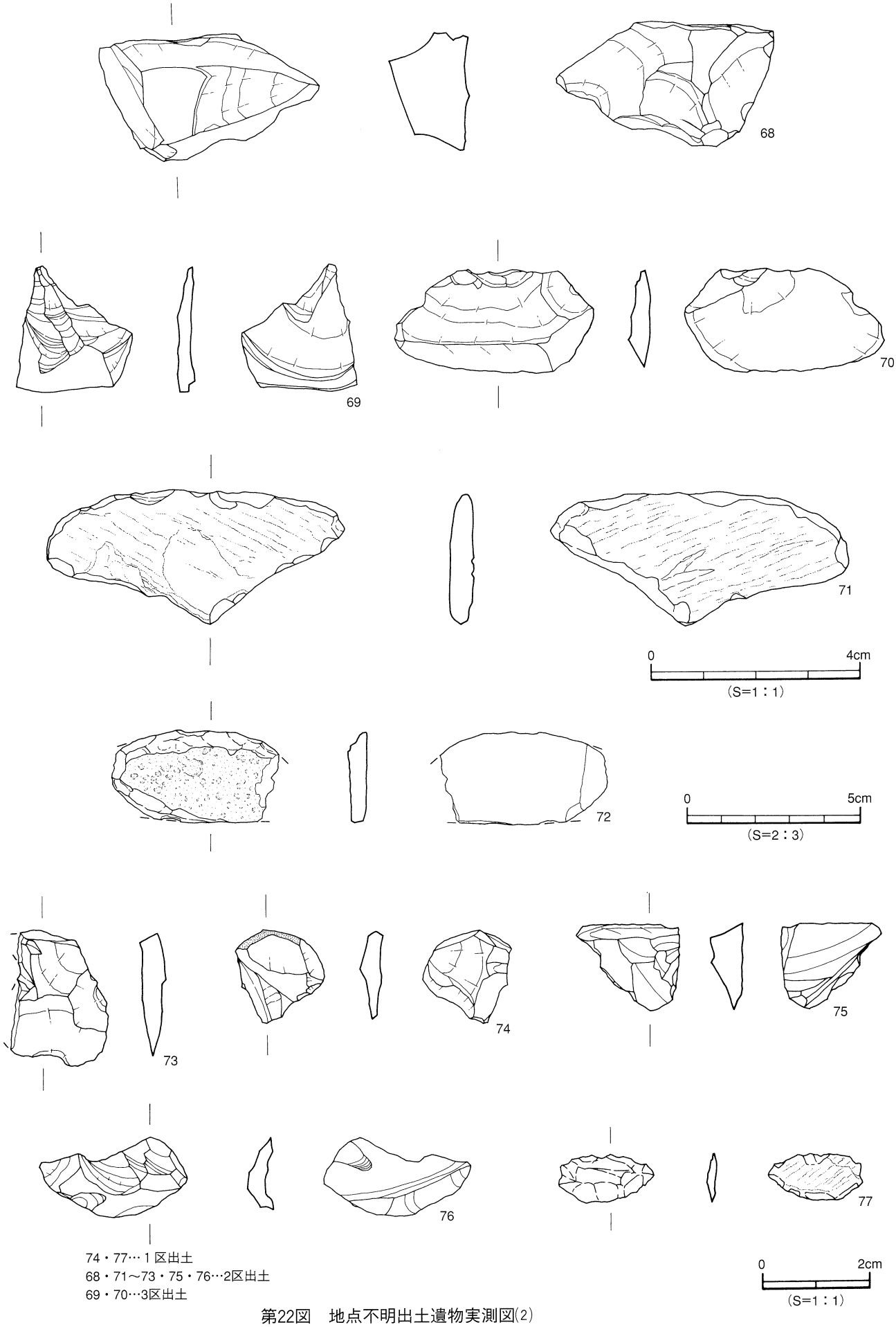


0　5cm
(S=2：3)

0　4cm
(S=1：1)

57～59・61・62・64・65… 1 区出土
60・63・67… 2 区出土
66… 3 区出土

第21図　地点不明出土遺物実測図(1)



74・77…1区出土
68・71～73・75・76…2区出土
69・70…3区出土

第22図　地点不明出土遺物実測図(2)

SR１と２は埋土下層に砂質土が堆積していることから、かつては水が流れていたことがうかがえる。遺構の性格から、出土した須恵器や石器は流入品と考えられる。

遺物は、須恵器・土師器・石器・窯壁片・流木・有機物が出土した。SK４は遺構の残存状況が悪いにもかかわらず図化した２点の土師器（34・35）は比較的残存状況が良く、当該地区における基礎資料のひとつとなるであろう。

SR２は多量の流木や有機物が出土したが、加工痕跡のある木製品などは出土しなかった。流木をランダムに抜粋し樹種同定した結果、マツ科の樹木が確認されている。このことは周辺地域においてマツが自生し、窯の燃料として利用していた可能性が指摘されている。（第６章参照）

(2) 古代以降

古代以降の遺構は溝と土坑を検出し、集落の一角を確認することができた。しかし遺物が出土していないため正確な年代比定ができなかった。

(3) 近 現 代

近現代の遺構は溝と土坑を検出し、集落の一角を確認することができた。遺物は陶磁器がある。

本調査では、当初目的として掲げていた生産関連遺構の解明については、灰原と考えられる遺構の検出によって少なからず目的を果たすことができた。しかし、窯本体の発掘調査はもとより、須恵器工人の居住区としていたであろう集落関連遺構の検出には至らなかった。

今後も周辺地域での窯跡の確認や資料収集の蓄積を行い、古代における生産地と消費地との物流を解明していく必要があろう。

遺構・遺物一覧　－凡　例－

(1) 以下の表は、本調査検出の遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。
遺構一覧は仙波千秋・仙波ミリ子が、遺物観察表は山之内・高尾久子が作成した。

(2) 遺構の一覧表中の出土遺物欄の略号について。
例）弥生→弥生土器、土師→土師器、須恵→須恵器、陶磁→陶器・磁器。

(3) 遺物観察表の各記載について。
法　量　欄　（　）：復元推定値
形態・施文欄　土器の各部位名称を略記。
例）口縁→口縁部、口端→口縁端部、胴中→胴部中位、柱→柱部、胴底→胴部～底部
胎土・焼成欄　胎土欄では混和剤を略記。
例）砂→砂粒、長→長石、石→石英、密→精製土。（　）中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。
例）砂・長（１～４）、多→「１～４㎜大の砂粒・長石を多く含む」である。
焼成欄の略記。◎→良好、○→良、△→不良。

表2　自然流路一覧

流路(SR)	地　区	断面形	規　模(m) 長さ×幅×深さ	方 向	埋　土	出土遺物	時　期	備　考
1	B3～G6	逆台形状	(26.4)×0.7～5.7×0.25	北～南	褐色粘質土	須恵器 石器	古代	SD1・SX1に切られる 調査区外に続く
2	u15～i19	逆台形状	(65.0)×2.31～8.18×0.92	北～南	灰色微砂質土	須恵器・石器 流木・有機物	古代	調査区外に続く

表3　土坑一覧

土坑(SK)	地 区	平面形	断面形	規　模（m） 長さ(長径)×幅(短径)×深さ	埋　土	出土遺物	時　期	備　考
1	H5	円　形	皿状	1.31×1.17×0.11	灰色粗砂質土(炭混)		現代	
2	F4	楕円形	レンズ状	1.36×0.94×0.16	灰色微砂質土(橙色含)		古代以降	
3	u12	楕円形	皿状	1.74×1.14×0.07	灰色粗砂質土 (炭混)		現代	
4	V12·13	円　形	レンズ状	(1.14)×1.02×0.12～0.49	褐色シルト	土師器 須恵器	古代	

表4　溝一覧

溝(SD)	地　区	断面形	規　模(m) 長さ×幅×深さ	方 向	埋　土	出土遺物	時　期	備　考
1	E4～G7	レンズ状	(13.10)×0.34～1.06×0.12	北東～南西	灰色微砂質土		古代以降	SR1を切る
2	E6	レンズ状	(1.37)×0.23～0.34×0.04	北～南	褐色粘質土	須恵器	古代	SD1に切られる
2	j24～m25	U字状	(13.98)×0.22～1.52×0.32	北東～南西	灰色粗砂質土(筋状の橙色混)	陶磁器	現代	調査区外へ続く

表5　性格不明遺構一覧

性格不明遺構(SX)	地 区	平面形	断面形	規　模（m） 長さ(長径)×幅(短径)×深さ	埋　土	出土遺物	時　期	備　考
1	C5～D6	不整形	皿状	(4.88)×3.85×0.18	橙灰色微砂質土	須恵器	古代	SR1を切る 調査区外に続く
2	B5	不整形	皿状	1.68×(0.94)×0.07	褐色粘質土	須恵器 石器・窯壁片	古代	調査区外に続く
3	f20～h21	不整形	レンズ状	(9.2)×8.1×0.15	黄色微砂質土	須恵器	古代	

表6　SR1　出土遺物観察表　土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形　態　・　施　文	調　整		(外面) 色調 (内面)	胎　土 焼　成	備考	図版
				外　面	内　面				
1	坏	口径　15.0 底径　9.4 器高　3.1	口縁部は内湾気味にのびる。口縁端部は丸く、内外面に各1条の沈線を巡らす。	㋐回転ヨコナデ ㋑回転ヘラキリ	回転ヨコナデ	乳青灰色 乳青灰色	密 ○	焼け ひずみ	4
2	高台 付坏	口径（14.4） 底径（11.6） 器高　3.8	口縁部は直線的に立ち上がり、端部は細く、丸みをもつ。短い高台。	㋐回転ヨコナデ ㋒マメツ	回転ヨコナデ	白灰色 白灰色	密 ○		
3	高台 付坏	口径（15.4） 底径（11.6） 器高　3.1	口縁部は直線的に立ち上がり、端部は尖り気味となる。短い高台は水平に接地する。	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	青灰色 (㋓灰色) 灰色	密 ◎		4
4	坏	残高　2.2	口縁端部は尖り気味となる。	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	灰色 灰色	密 ◎		
5	高台 付坏	底径（11.2） 残高　1.7	「ハ」の字状の短い高台。接地部は水平となる。	㋕回転ヨコナデ ㋔回転ヘラケズリ	回転ヨコナデ	灰色 灰色	密 ◎		
6	高台 付坏	底径　12.6 残高　1.5	「ハ」の字状の短い高台。接地部は水平となる。	㋕回転ヨコナデ ㋔回転ヘラケズリ	回転ヨコナデ →ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		

SR1　出土遺物観察表　土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)/(内面)	胎土 焼成	備考	図版
7	壺	残高　6.2	肩のはる体部。外面に1条の沈線を施す。	㋑上不明 ㋑下回転ヘラケズリ→ナデ	回転ヨコナデ	灰色 灰白色	密 ◎		
8	甕	口径 (21.0) 残高　7.0	口縁部は大きく外反し、端部は平ら。	㋺回転ヨコナデ ㋑タタキ タタキ→ナデ	㋺不明 ㋑回転ヨコナデ 円弧タタキ?→回転ヨコナデ	灰色 灰色	密 ◎	自然釉 ヘラ記号	4
9	甕	口径 (24.0) 残高　3.6	口縁部は大きく外反し、端部はややナデ凹む。	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	灰白色 灰白色	密 ◎		
10	甕	残高　4.7	口縁部は大きく外反し、端部は平ら。	不明	回転ヨコナデ	乳灰色 乳灰色	密 ◎		
11	甕	残高　3.6	口縁部は大きく外反し、端部は平ら。	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	灰色 灰色	密 ◎		
12	甕	口径 (58.8) 残高　13.5	大型品。口縁部は大きく外反し、端部は「コ」の字状を呈し、外面に下垂する突帯がつく。	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	青灰色 灰色	密 ◎	自然釉	4
13	甕	口径 (58.8) 残高　12.0	大型品。口縁部は大きく外反し、端部は下方に拡張し、外面に下垂する突帯がつく。	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ ナデ	青灰色 灰色	密 ◎		4
14	甕	残高　2.5	口縁端部は「コ」の字状を呈し、外面に下垂する突帯がつく。	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	灰色 灰色	密 ◎		
15	甕	残高　5.5	口縁部は直線的に立ち上がり、端部はナデ凹む。	ナデ	回転ナデ	青灰色 灰色	密 長(1) ◎		
16	甕	残高　7.6	口縁部は頸部より外反しながら、立ち上がる。	㋭タタキ→回転ヨコナデ ㋑上回転ヨコナデ ㋑中タタキ(5本/cm)→回転ヨコナデ	㋭回転ヨコナデ ㋭円弧タタキ→回転ヨコナデ	灰色 青灰色	密 ◎		

表7　SR1　出土遺物観察表　石製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
17	剥片	完形	サヌカイト	2.6	2.8	0.2	2.05		

表8　SR2　出土遺物観察表　土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)/(内面)	胎土 焼成	備考	図版
18	坏蓋	口径 (12.6) 残高　4.5	天井部は平ら。天井部と口縁部の間に断面三角形の稜をもつ。口縁端部は内傾する。	㋓回転ヘラケズリ ㋺回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	青灰色・灰色 灰色	石・長(1～3) ○		
19	坏蓋	口径 (11.8) 残高　2.2	口縁端部は内傾する。	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	灰色 灰白色	密 ◎		
20	坏蓋	つまみ径 3.8 残高　1.3	中央部がやや突出する扁平なつまみ。	回転ナデ		灰色	密 ◎		
21	蓋	口径 (15.7) 残高　1.9	口縁部は短く屈曲し、端部は丸みをもつ。	㋓回転ヘラケズリ ㋺回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 石(1) ◎	自然釉	
22	蓋	口径 (19.8) 残高　1.4	口縁部は短く屈曲し、端部はやや尖る。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		

SR 2 出土遺物観察表　土製品　(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)/(内面)	胎土 焼成	備考	図版
23	蓋	口径 (20.0) 残高 1.6	口縁部は短く屈曲し、端部は丸みをもつ。	回転ナデ	回転ナデ ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
24	壺	口径 (18.0) 残高 2.0	口縁部は大きく外反し、端部は上方へ突出する。	回転ナデ	回転ナデ	暗青灰色 灰色	密 ◎		
25	壺	残高 10.2	肩のはる体部。	㊤ナデ ㊦回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰色 灰色	密 長(2) ◎		
26	壺	底径 (13.4) 残高 2.7	「ハ」の字状のやや長い高台。接地部は水平となる。	回転ヨコナデ ナデ	円弧タタキ	灰色・青灰色 灰色	密 ◎		
27	甕	残高 3.5	肩部と頸部の間に1条の沈線をもつ。	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	灰色 灰色	密 ◎	自然釉	

表 9　SR 2 出土遺物観察表　石製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
28	石鏃	完形	赤色珪質岩	2.8	1.6	0.3	1.51		
29	石核	完形	黒曜石	2.8	1.8	1.6	7.47	姫島産	
30	剥片	完形	赤色珪質岩	3.2	3.1	1.0	8.91		
31	剥片	完形	サヌカイト	6.0	4.1	0.9	24.39		
32	砥石	片方の端部のみ残る	石英粗面岩	5.6	5.7	2.35	64.04		
33	不明	ほぼ完形	結晶片岩	14.7	5.6	1.6	143.51		

表10　SK 4 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)/(内面)	胎土 焼成	備考	図版
34	皿	口径 18.4 器高 2.6	口縁部は直線的に立ち上がり、端部は尖り気味におさめる。	マメツ	マメツ	乳茶色 乳茶色	長(1) ◎		4
35	土鍋	外径 (24.8) 内径 (23.4) 残高 11.5	口縁部は内湾気味に立ち上がり、端部は水平をなす。	㊐マメツ ㊋ハケ(4本/cm)	㊐ナデ ㊋ハケ(4本/cm) ハクリ	茶橙色 茶橙色	石・長(1~5) 石粒多い ◎		4

表11　SX 1 出土遺物観察表　土製品　(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)/(内面)	胎土 焼成	備考	図版
36	蓋	口径 (14.6) 残高 1.1	口縁部は短く屈曲し、端部はやや尖る。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 長(1) ◎	焼け ひずみ	
37	坏	口径 (13.4) 底径 9.6 器高 3.0	口縁部は外反気味にのび、口縁端部内面に1条の沈線を巡らす。	㊐回転ナデ ㊎ヘラケズリ→ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		

SX１　出土遺物観察表　土製品　(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)/(内面)	胎土 焼成	備考	図版
38	高台付坏	底径 (6.9) 残高 2.7	体部は外傾気味に立ち上がる。径が小さく短い高台。	㊍回転ナデ ㊎ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		
39	高台付坏	口径 (14.7) 底径 (11.9) 器高 3.6	口縁部は直線的に立ち上がり、端部はやや尖る。「ハ」の字状の短い高台。接地部は水平となる。	マメツ	マメツ	灰白色 灰白色	密 ○		
40	坏	口径 (16.0) 残高 5.6	体部は内傾気味に立ち上がり、口縁部は外反気味にのびる。端部はわずかに外傾し屈曲する。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	石・長(1～2) ◎		
41	壺	底径 (8.0) 残高 1.8	体部は内湾気味に立ち上がる。	回転ナデ	回転ナデ	灰色・青灰色 青灰色	密 ◎	自然釉 焼け ひずみ	
42	甕	残高 4.0	口縁部は大きく外反し、端部は平ら。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
43	甕	頸部径 (18.2) 残高 7.5	口縁部は頸部より外反気味に立ち上がる。	マメツ(タタキ)	マメツ	灰白色 灰白色	密 ○		
44	甕	頸部径 (23.4) 残高 3.8	口縁部は肩のはる肩部より直立気味に立ち上がる。	回転ナデ(タタキ)	回転ナデ	灰色 灰褐色	密 長(1) ◎		

表12　SX２　出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)/(内面)	胎土 焼成	備考	図版
45	高台付坏	底径 (15.0) 残高 2.4	「ハ」の字状の短い高台。接地部は水平となる。	㊍回転ナデ ㊐ナデ ㊎回転ナデ ナデ	回転ナデ ナデ	灰色 灰色	密 ◎	自然釉	
46	皿	底径 (18.8) 残高 2.1	平底の底部。	マメツ	マメツ	乳白色 乳白色	密 ◎		
47	甕	口径 (20.6) 残高 9.3	口縁部は大きく外反し、端部は平らでわずかに下方に拡張する。	㊐回転ヨコナデ ㊏平行タタキ→ヨコナデ	㊐回転ヨコナデ ㊏同心円文タタキ→ナデ	灰色 灰色	石・長(1) ◎	自然釉	
48	甕	口径 (23.2) 残高 10.4	口縁部は大きく外反し、端部は平らでわずかに外方に拡張する。	㊐回転ヨコナデ ㊏回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	灰白色 灰白色	石・長(1) ◎	自然釉	
49	甕	口径 (27.9) 残高 6.3	口縁部は大きく外反し、端部はナデ凹み、下方に大きく尖り気味に拡張する。	回転ナデ	㊐回転ナデ ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
50	甕	口径 (46.4) 残高 12.0	大型品。口縁部は大きく外反し、端部は「コ」の字状を呈し、外面に下垂する突帯がつく。	㊐㊐回転ヨコナデ ㊐マメツ	㊐回転ヨコナデ ㊏同心円文タタキ→ナデ	灰色 灰色	石・長(1) ◎		4

表13　SX２　出土遺物観察表　石製品　(1)

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
51	石鏃	完形	サヌカイト	2.3	1.6	0.3	0.90		4
52	石鏃	完形	サヌカイト	2.6	1.9	0.45	1.86		4
53	石鏃	ほぼ完形	サヌカイト	2.3	1.8	0.35	1.63		4

SX 2　出土遺物観察表　石製品

(2)

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
54	石鏃	ほぼ完形	緑色珪質岩	2.1	1.3	0.4	0.92		4
55	敲石	完形	不明	5.2	5.5	2.65	92.17		

表14　SX 3　出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面)(内面)	胎土焼成	備考	図版
				外面	内面				
56	蓋	口径 (18.2) 残高 1.4	天井部は平ら。口縁部は短く屈曲し、外面に1条の沈線を施す。端部は丸くおさめる。つまみの接合痕あり。	㊍回転ヘラケズリ ナデ ㊐端回転ヨコナデ 回転ヘラケズリ→回転ヨコナデ	回転ヨコナデ→ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎	焼け ひずみ	

表15　地点不明出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面)(内面)	胎土焼成	備考	図版
				外面	内面				
57	蓋	口径 (16.2) 残高 1.1	口縁部は短く屈曲し、端部は丸くおさめる。	回転ナデ	回転ナデ ナデ	青灰色 青灰色	密 長(1) ◎		
58	高台付坏	底径 (11.2) 残高 1.4	「ハ」の字状の短い高台。接地部は水平となる。	㊍回転ナデ ㊐ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
59	壺	口径 (20.9) 残高 2.7	口縁部は大きく外反し、端部はナデ凹み、上方へわずかに拡張する。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
60	壺	底径 (9.7) 残高 2.3	体部は内湾気味に立ち上がる。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 長(1) ◎	焼け ひずみ	
61	甕	口径 (19.9) 残高 3.9	口縁部は大きく外反し、端部はややナデ凹む。	㊐端回転ナデ ㊐不明	不明	青灰色 青灰色	密 ◎		
62	甕	残高 4.0	口縁部は大きく外反し、端部は「コ」の字状を呈し、外面に下垂する突帯がつく。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		
63	甕	頸部径(20.0) 残高 6.4	口縁部は大きく外反する。	回転ナデ タタキ	回転ナデ	灰色 灰色	密 長(1) ◎	自然釉 焼け ひずみ	
64	壺・甕	口径 (16.0) 残高 3.2	壺と大型甕が接着している。	(甕) 平行タタキ	(甕) 同心円文タタキ→ナデ	灰白色 灰白色	密 ◎	焼け ひずみ	

表16　地点不明出土遺物観察表　石製品

(1)

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
65	石鏃	ほぼ完形	サヌカイト	2.1	1.3	0.25	0.93		
66	石鏃	ほぼ完形	サヌカイト	2.4	1.3	0.25	0.83		
67	磨石	1/2	不明	3.9	6.0	3.8	124.68		
68	石核	完形	サヌカイト	2.4	4.2	1.4	11.77		

地点不明出土遺物観察表　石製品　(2)

番号	器　種	残　存	材　質	法　量				備　考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
69	剥　片	完形	頁岩	2.4	2.2	0.3	2.06		
70	剥　片	完形	サヌカイト	2.0	3.8	0.45	4.01		
71	剥　片	完形	結晶片岩	2.5	5.6	0.45	9.26		
72	剥　片	ほぼ完形	サヌカイト	2.6	4.8	0.65	11.22		
73	砕　片	ほぼ完形	赤色珪質岩	2.6	1.8	0.45	2.47		
74	砕　片	完形	赤色珪質岩	1.8	1.7	0.4	1.29		
75	砕　片	完形	黒曜石	1.6	1.9	0.6	1.81	姫島産	
76	砕　片	完形	黒曜石	1.5	2.8	0.6	1.86	姫島産	
77	砕　片	完形	結晶片岩	0.9	1.8	0.15	0.39		

第３章

北梅本北池遺跡（きたうめもときたいけ）

第３章　北梅本北池遺跡

１．調査の経過

(1) 調査に至る経過

本調査は、1998（平成10）年10月～1999（平成11）年２月の間に行われたＣ・Ｄ区69,018㎡内における、試掘調査の結果を受けて実施したものである。試掘調査では、溝・柱穴・列石などの遺構と遺物包含層及び弥生土器・須恵器・土師器・陶磁器などの土器や石器が出土した。また、本調査地の北西約300ｍには周知の須恵器窯である潮見山南窯址があり、北部の丘陵部にはかつて古墳が存在していたとの周辺住民からの情報もある。そのため埋文センター及び文化教育課・申請者の三者は、遺跡の取り扱いについての協議を行い、土地改良総合整備事業に伴う工事により破壊される遺跡の記録保存を行うため、事前の発掘調査が必要と判断された。

調査は、古墳時代や古代における集落関連遺構の広がりの確認を主目的とし、1999（平成11）年10月７日より埋文センターが本格調査を開始した。

なお試掘調査の結果については第５章で詳述しているので参考にされたい。

(2) 調査の経緯（第23・25図）

1999（平成11）年10月７日に調査事務所を設置する。10月14日に調査区を設定した。調査区は中央部にある農道により東西２区に区分けし、西側を１区、東側を２区とした。更に水田の区画により１区はＡ～Ｆに、２区はＡ～Ｄに細分し、重機により表土はぎを１区から開始した。その後遺構検出作業を行い、11月11日に１区Ａ～Ｅの遺構検出状況の写真撮影を行う。11月30日に１区Ａ・Ｂ、12月17日に１区Ｃ・Ｄ、12月27日に１区Ｅの完掘状況の写真撮影を行う。

2000(平成12)年１月５日からは２区の調査を開始する。６日より調査区を設定し重機により表土はぎを行う。その後遺構検出作業を行い、2月１日に２区Ａ・Ｃ・Ｄの遺構検出状況の写真撮影を行う。２月18日に２区Ｂの遺構検出状況の写真撮影を行う。３月10日に１区Ｆの遺構検出状況の写真撮影を行う。３月27日に全調査区の完掘状況の写真撮影を行う。３月31日に全ての測量が完了し屋外調査を完了する。

なお、調査にあたり調査区内を４ｍ四方のグリッドに分けた。グリッドは北から南へＡ・Ｂ…Ｘ・Ｙとし、西から東へ１・２…32・33と設定した。

(3) 調査組織

調　査　地　松山市北梅本町甲1,732外

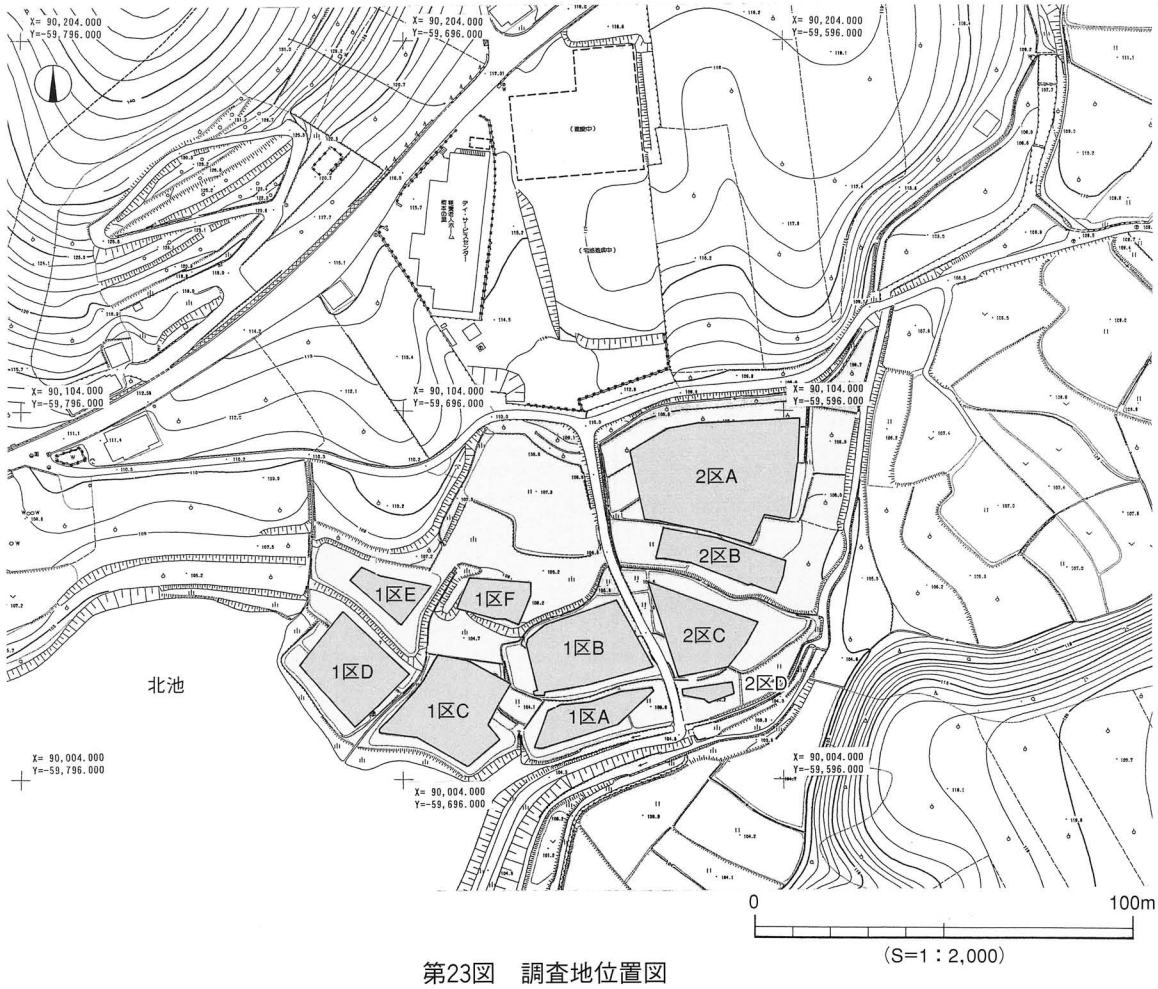
遺　跡　名　北梅本北池遺跡

調査期間　1999（平成11）年10月７日～2000（平成12）年３月31日

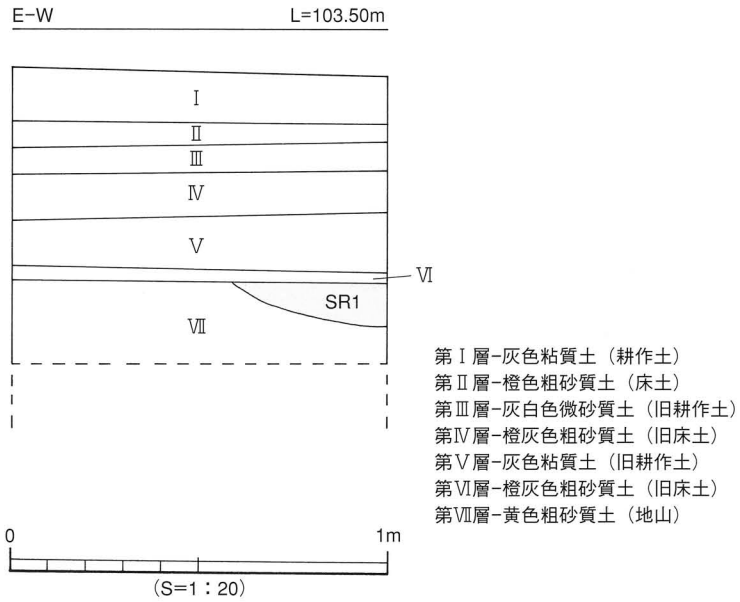
対象面積　9,561㎡

調査担当　高尾　和長・山之内志郎

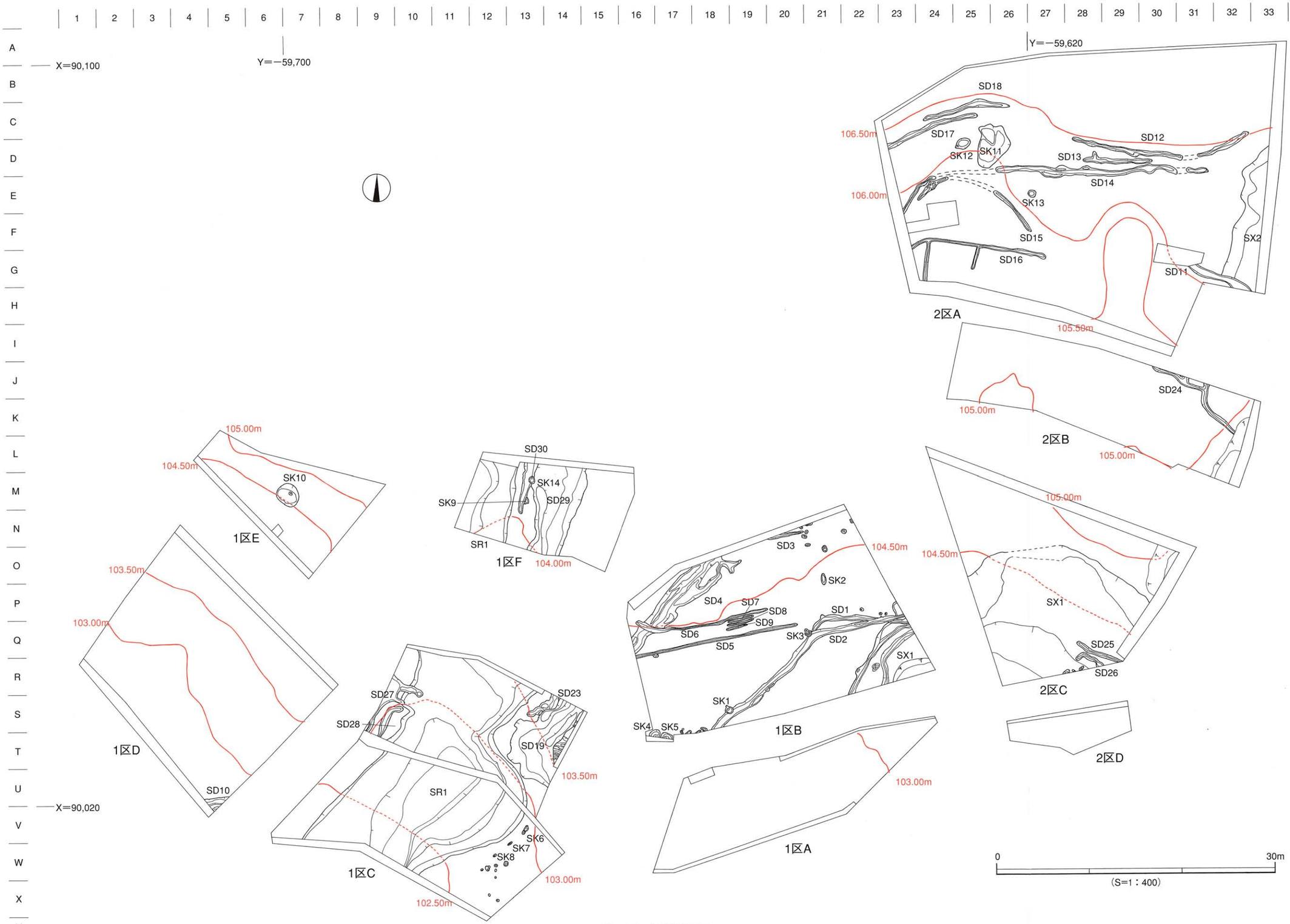
調査作業員　阿部達也・石田丈史・池田一紀・上河淳浩・後藤公克・重松吉雄・田丸真裕・高松健太郎・仲神利卓・原田尚彦・松本正義・松田常義・山下　徹・山本啓太・横森淳一・弓矢英明・大北隼人・藤本清志・松川栄治・金子育代・仙波千秋・仙波ミリ子・東山里美



第23図　調査地位置図



第24図　基本土層図


1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33
A B C D E F G H I J K L M N O P Q R S T U V W X Y
X=90,100
Y=−59,700
Y=−59,620
X=90,020
SD18
106.50m
SD17
SK12
SK11
SD12
SD13
SD14
106.00m
SK13
SD15
SD16
SX2
SD11
2区A
105.50m
SD24
105.00m
2区B
105.00m
105.00m
104.50m
SK10
1区E
SD30
SK14
SD29
SK9
SR1
1区F
104.00m
SD3
104.50m
SK2
SD4
SD7
SD8
SD1
SD9
SD6
SD5
SK3
SD2
SX1
SK1
SK4
SK5
1区B
SX1
104.50m
SD25
SD26
2区C
2区D
103.50m
103.00m
1区D
SD10
SD27
SD23
SD28
SD19
103.50m
SR1
SK6
SK7
SK8
103.00m
102.50m
1区C
103.00m
1区A
0
30m
(S=1：400)

第25図　遺構配置図

2．層　　位（第24図）

基本層位は第Ⅰ層灰色粘質土、第Ⅱ層橙色粗砂質土、第Ⅲ層灰白色微砂質土、第Ⅳ層橙灰色粗砂質土、第Ⅴ層灰色粘質土、第Ⅵ層橙灰色粗砂質土、第Ⅶ層黄色粗砂質土（地山）である。調査区の旧地形は北から南へ傾斜しているが、部分的に近現代の耕作に伴う削平によって旧地形が段カットされている。

第Ⅰ層：耕作土である。調査区全域に厚さ４～30cmで堆積する。

第Ⅱ層：耕作に伴う床土である。調査区全域に厚さ２～26cmで堆積する。

第Ⅲ層：旧耕作土である。２区Ｂ北東部を除く調査区全域に厚さ４～35cmで堆積する。

第Ⅳ層：旧耕作に伴う旧床土である。１区Ｂ東部を除く調査区全域に厚さ４～33cmで堆積する。

第Ⅴ層：旧耕作土である。１区Ａ～Ｄ・２区Ａに厚さ６～55cmで堆積する。

第Ⅵ層：旧耕作に伴う旧床土である。１区Ａ・Ｃ・Ｄ・２区Ａに厚さ３～８cmで堆積する。

第Ⅶ層：基盤面とした黄色粗砂質土である。後述するすべての遺構はこの層を切り込んでいる。

3．遺構と遺物（第25図）

本調査では弥生時代・古墳時代・古代以降・近現代の遺構と遺物を検出した。遺構は流路１条・土坑14基・溝30条・柱穴32基・石列２条・性格不明遺構２基である。遺物は弥生土器・須恵器・土師器・石鏃・石庖丁・敲石・磨石・石核・スクレイパー・剥片・砕片がある。

ここでは主な遺構と遺物について時代別に概説する。

［１］弥生時代

遺構は、土坑２基・溝１条・柱穴５基・性格不明遺構２基である。

(1) 土　　坑

SK10（第26図、図版６）

１区Ｅ中央のＭ６・７区に位置する。平面形態は埋土の上層が削平されていたため明確な掘り方を確認できなかったが、土器の出土範囲から楕円形と推定される。規模は長径2.50m、短径2.25m、深さ29cmを測る。断面形態は皿状を呈し、中央部が摺鉢状に凹む。埋土は茶褐色土(炭混じり)である。出土遺物は弥生土器と石器がある。

出土遺物（第26図）

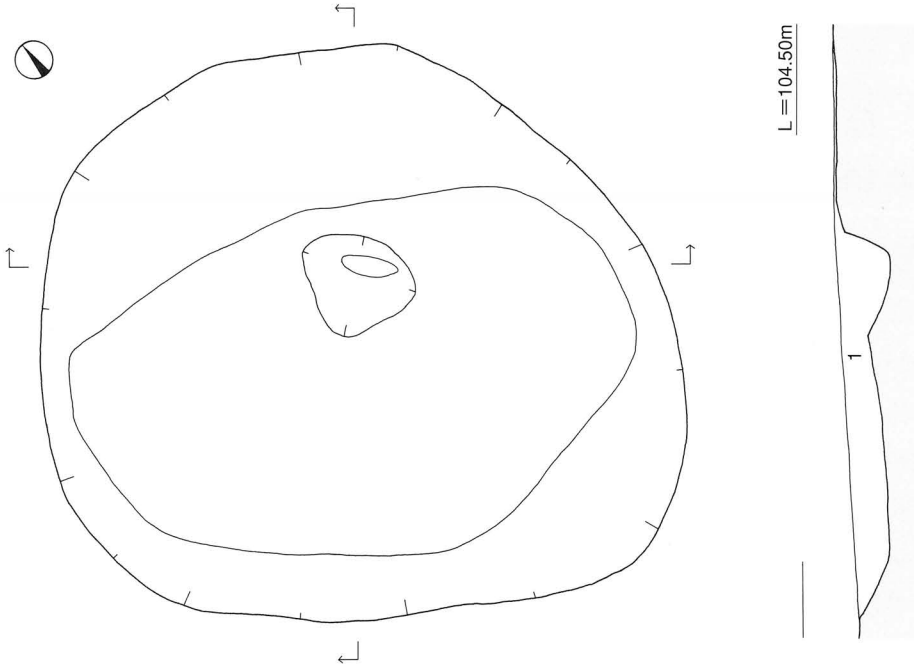
弥生土器（１～８）１～８は甕形土器である。１は貼り付け凸帯の口縁部片で、口唇上端に刻み目を施す。２～４は折り曲げ口縁部片である。５・６は胴部片であり、横方向に１条の刺突文を施す。７・８は底部であり、７は平底、８はやや上げ底の底部である。

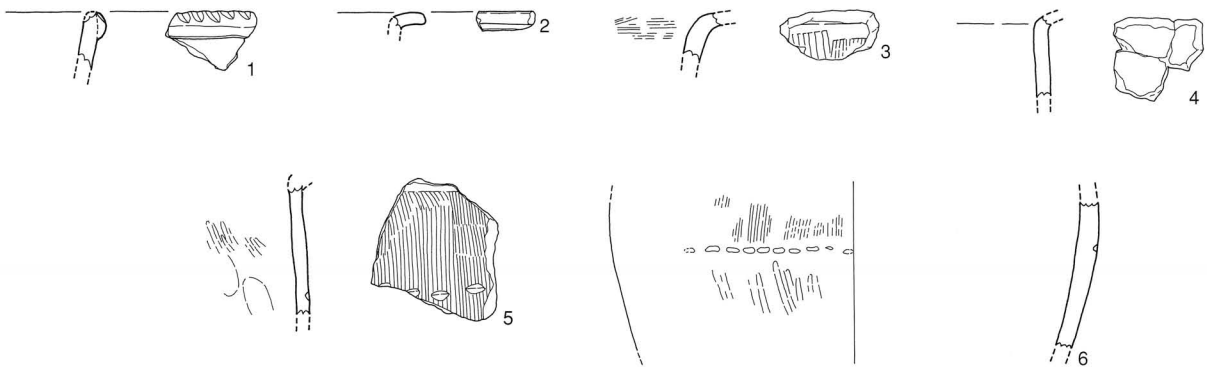
石器（９）スクレイパーである。一部に自然面が残る。サヌカイト製。

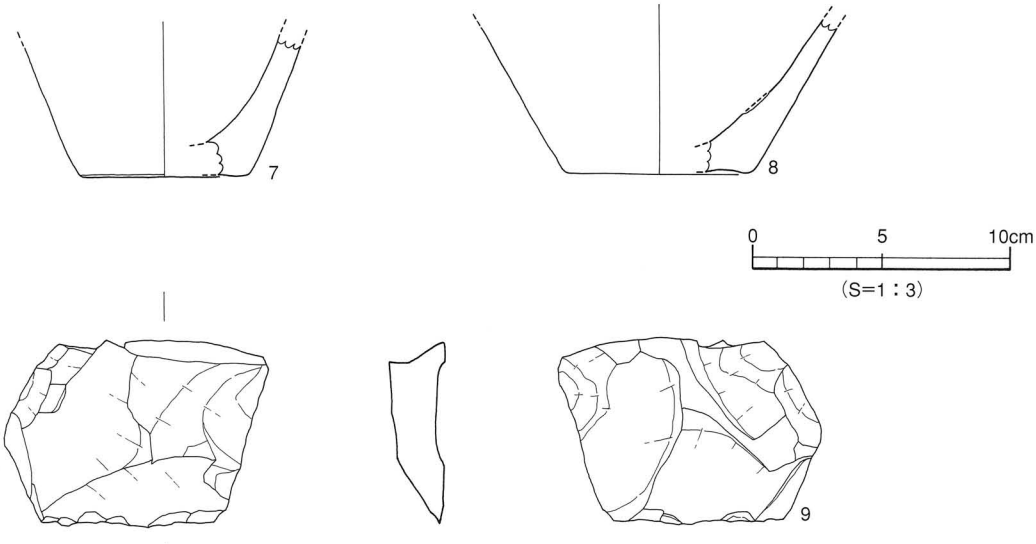
時期：出土した弥生土器の年代より、弥生時代前期と考えられる。

SK２（第27図）

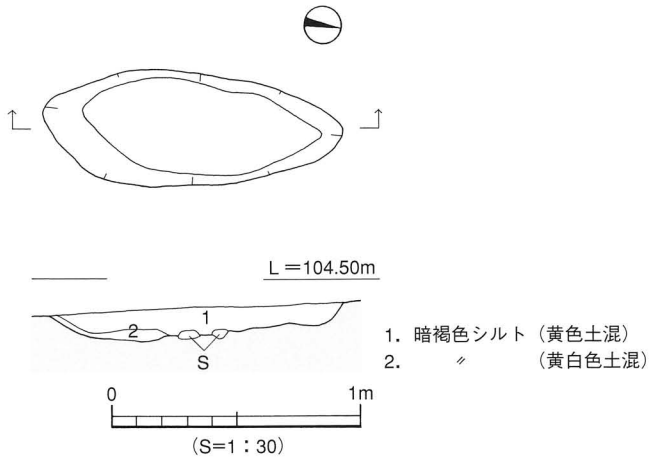
１区Ｂ北東部のＯ21～Ｐ21区に位置する。平面形態は楕円形である。規模は長径1.20m、短径0.46







第26図　SK10測量図・出土遺物実測図



第27図　SK２測量図

m、深さ14cmを測る。断面形態は皿状を呈する。埋土は２層に分かれ、１層暗褐色シルト（黄色土混じり）、２層暗褐色シルト（黄白色土混じり）である。遺物は出土しなかった。

時期：遺物が出土していないため不明であるが、後述するSD１と同様の埋土であるため弥生時代と考えられる。

(2) 溝

SD１（第28図）

１区Ｂ東部のＰ21～Ｑ23区に位置し、SX１を切りSD２に切られる。東側は調査区外に続く。規模は検出長10.60m、上場幅40～60cm、深さ10cmを測る。断面形態はレンズ状を呈する。埋土は暗褐色シルト（灰色混じり）である。出土遺物は弥生土器があるが、図化するに至らなかった。

時期：出土した土器の年代より弥生時代とする。

(3) 性格不明遺構

SX１（第29図）

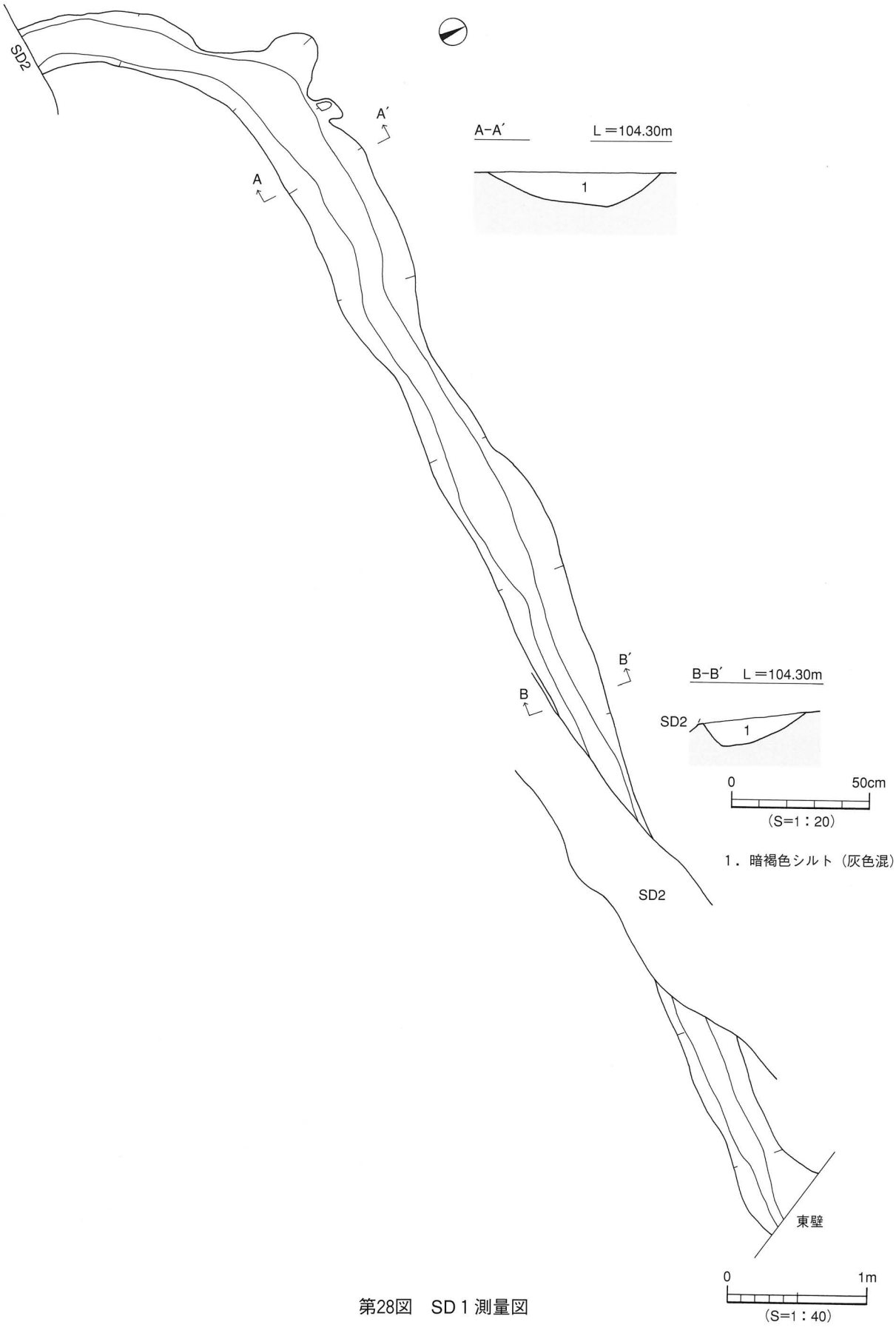
１区Ｂ南東隅及び２区Ｃ南部のＰ25～Ｓ22区に位置し、SD１・２・25・26、SP30・31・32に切られる。平面形態は南側が調査区外に続くため全容が不明であるが、検出した形状から円形と考えられる。東側（２区Ｃ）は南方向へなだらかに傾斜するのに対して、西側（１区Ｂ）は遺構内に２条の小溝が外周に沿った方向で巡っている。規模は長径31.3m、短径11.0m、深さ27cmを測る。断面形態はレンズ状を呈する。埋土は２層に分かれ、１層褐色シルト、２層灰褐色シルトである。出土遺物は弥生土器と石器がある。

出土遺物（第29図）

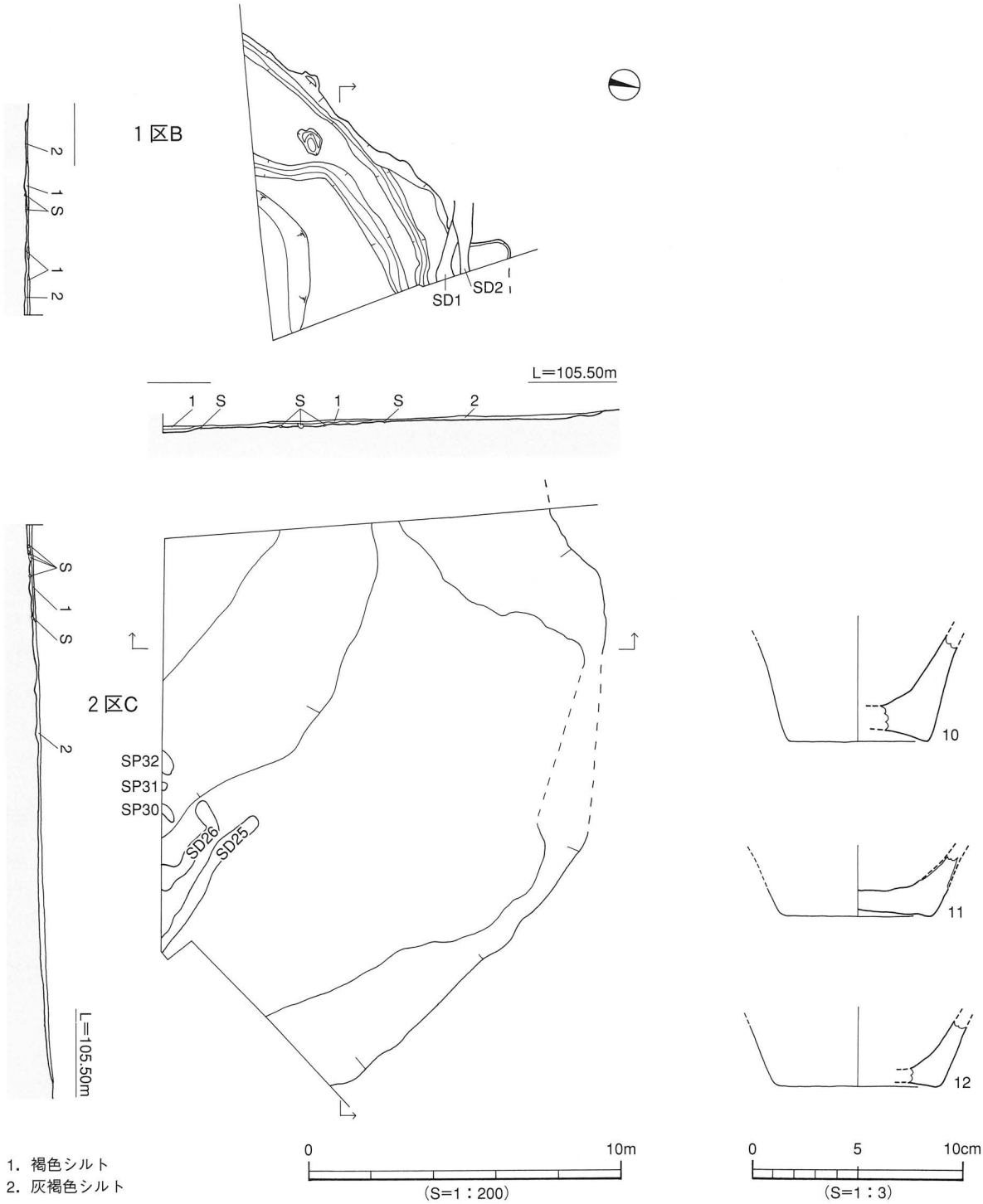
弥生土器（10～12）10～12は甕形土器の底部片である。いずれもやや上げ底を呈する。摩滅のため内外面ともに調整が不明である。

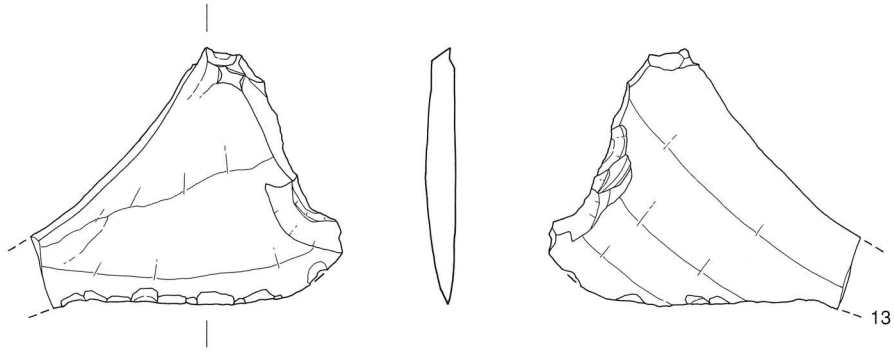
石器（13）スクレイパーである。刃部はやや弧状となる。一部に自然面が残る。サヌカイト製。

時期：出土した弥生土器の年代より、弥生時代中期とする。


SD2
A
A′
A-A′
L＝104.30m
1
B
B′
B-B′ L＝104.30m
SD2
1
0
50cm
(S=1：20)
1．暗褐色シルト（灰色混）
SD2
東壁
0
1m
(S=1：40)

第28図　SD１測量図





第29図　SX1測量図・出土遺物実測図

SX２（第30図）

２区Ａ東部のD32～H33区に位置し、SD11に切られる。東方向へなだらかに傾斜し、調査区外に続く。平面形態は不整形である。規模は長径15.60m、短径3.80m、深さ34cmを測る。断面形態はレンズ状を呈する。埋土は褐色シルトである。出土遺物は弥生土器と石器がある。図化できたのは石器のみである。

出土遺物（第30図）

石器（15）剝片である。一部に自然面が残る。赤色珪質岩製。

時期：埋土がSX１と同様であるため、弥生時代中期とする。

［２］古墳時代

遺構は、流路１条と溝２条である。

(1) 流　　路

SR１（第31図、図版５）

１区Ｆ西部および１区Ｃ中央のL12～W12区に位置し、SD27に切られる。北側と南側は調査区外に続く。規模は検出長45.0m、上場幅10.4～16.2m、深さ80cmを測る。断面形態はレンズ状を呈する。北から南方向へ蛇行している。埋土は６層に分かれ、１層暗灰色シルト（褐色混じり）、２層黄褐色微砂質土、３層灰白色シルト、４層橙色微砂質土、５層灰白色微砂質土、６層黄灰色粗砂質土（黄色礫混じり）である。出土遺物は弥生土器・須恵器・石器がある。

出土遺物（第32図）

須恵器（15～21）15～18は坏蓋である。15は天井部と口縁部との間に断面三角形の稜をもつ。16は天井部がやや丸みをもち、天井部と口縁部との間の稜は不明瞭である。17・18は口縁部片である。19は坏身の受部片である。20は壺の口縁部である。口縁部はやや肥厚させ、端部は丸くおさめる。21は球形の壺の肩部～胴部である。肩部に２条の沈線を施す。

石器（22～24）22は石庖丁である。刃部の鏑は鈍い。結晶片岩製。23はスクレイパーである。刃部はやや弧状となる。赤色珪質岩製。24は剝片である。表面は風化が著しい。サヌカイト製。

時期：流路の性格を考え、上記遺物のうち最も新しい須恵器の年代より、６世紀後半とする。

(2) 溝

SD４（第33図）

１区Ｂ北西隅のO17～Q17区に位置し、SD６に切られる。北側と南側は調査区外に続く。規模は検出長13.5m、上場幅1.26m～2.9m、深さ69cmを測る。断面形態はレンズ状を呈する。埋土は６層に分かれ、１層灰色微砂質土（やや硬い、粒状の褐色土混じり）、２層灰色粘質土、３層黄灰色微砂質土、４層灰色粘質土、５層黄色粗砂質土、６層黄色微砂質土である。出土遺物は須恵器・土師器・石器があるが、土師器は胴部片のため図化するに至らなかった。

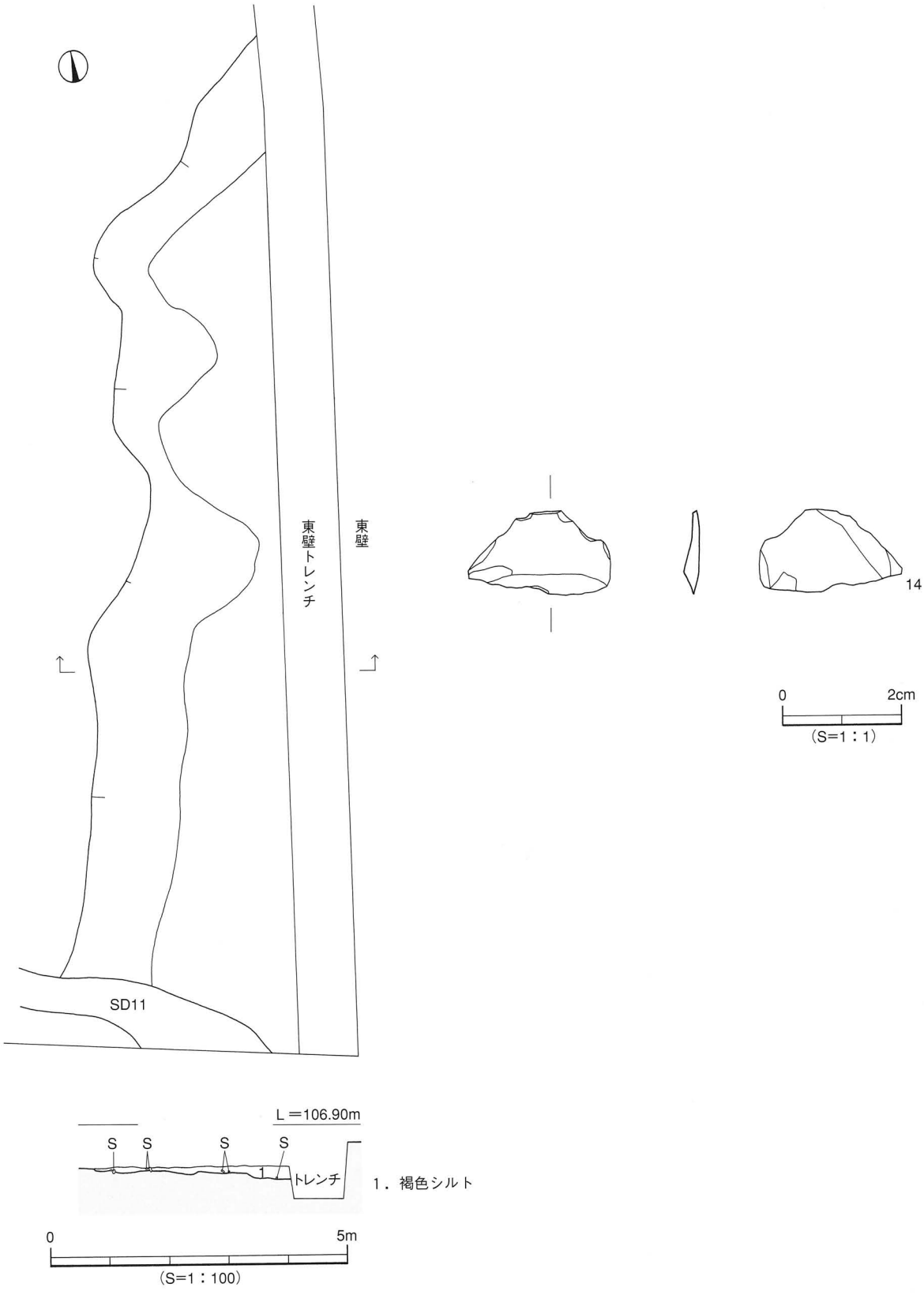
出土遺物（第34図）

須恵器（25）甕である。頸部に段をもつ。外面は平行タタキの後、カキ目を施す。

石器（26～28）26は凹基無茎石鏃である。平面形態は二等辺三角形を呈する。先端部を欠損している。姫島産黒曜石製。27は敲石である。表面は滑らかで楕円形の円礫。完形品。28は剝片である。表

面は風化が著しい。サヌカイト製。

時期：出土した須恵器の年代より、6世紀以降とする。



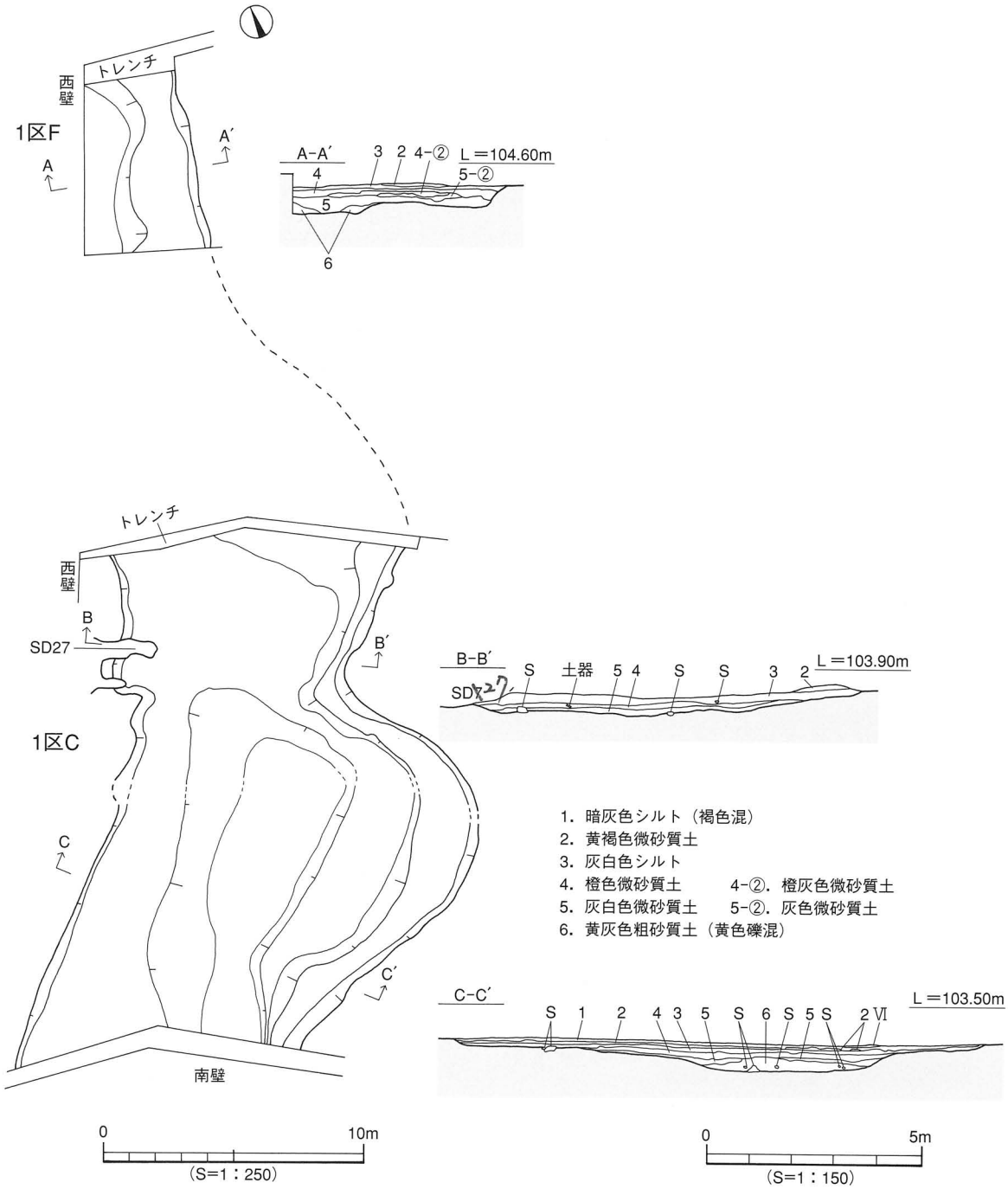
第30図　SX 2 測量図・出土遺物実測図

SD２（第35図、図版６）

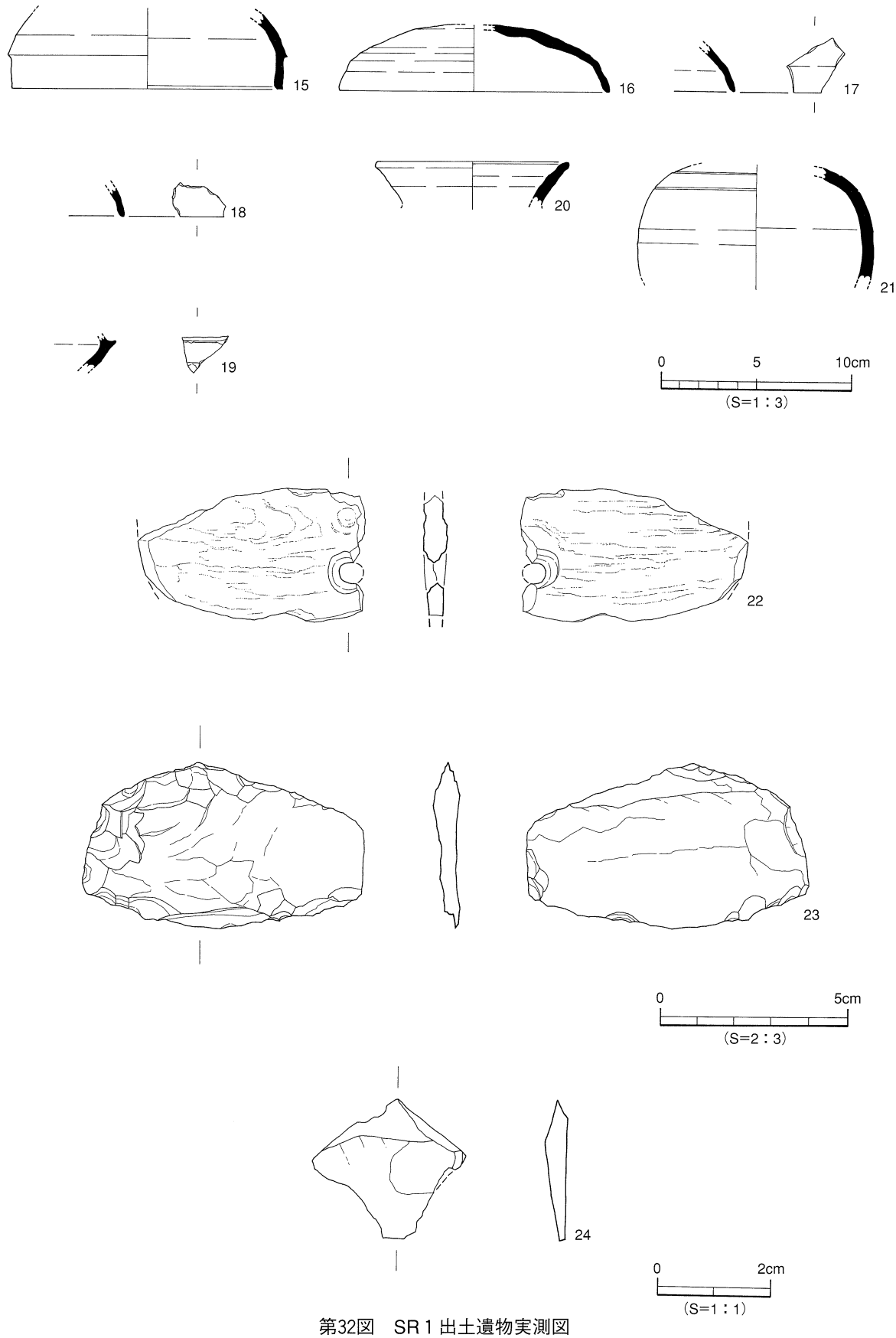
１区Ｂ南東部のＰ21～Ｔ19区に位置し、SD１とSX１を切り、SK１とSK３に切られる。東側と南側は調査区外に続く。規模は検出長24.0m、上場幅0.24m～1.46m、深さ20cmを測る。断面形態は逆台形状を呈する。埋土は４層に分かれ、１層暗灰色粘質土、２層黄灰色微砂質土、３層暗灰色粘質土（黄色混じり）、４層黄色粗砂質土である。出土遺物は土師器と石鏃があるが、土師器は胴部片のため図化するに至らなかった。

出土遺物（第35図）

石器（29）凹基無茎石鏃である。平面形態は二等辺三角形を呈する。先端部を欠損している。姫島



第31図　SR１測量図



第32図　SR１出土遺物実測図

産黒曜石製。

時期：SD４と埋土がほぼ同様で、かつ同一方向であるため、６世紀以降とする。

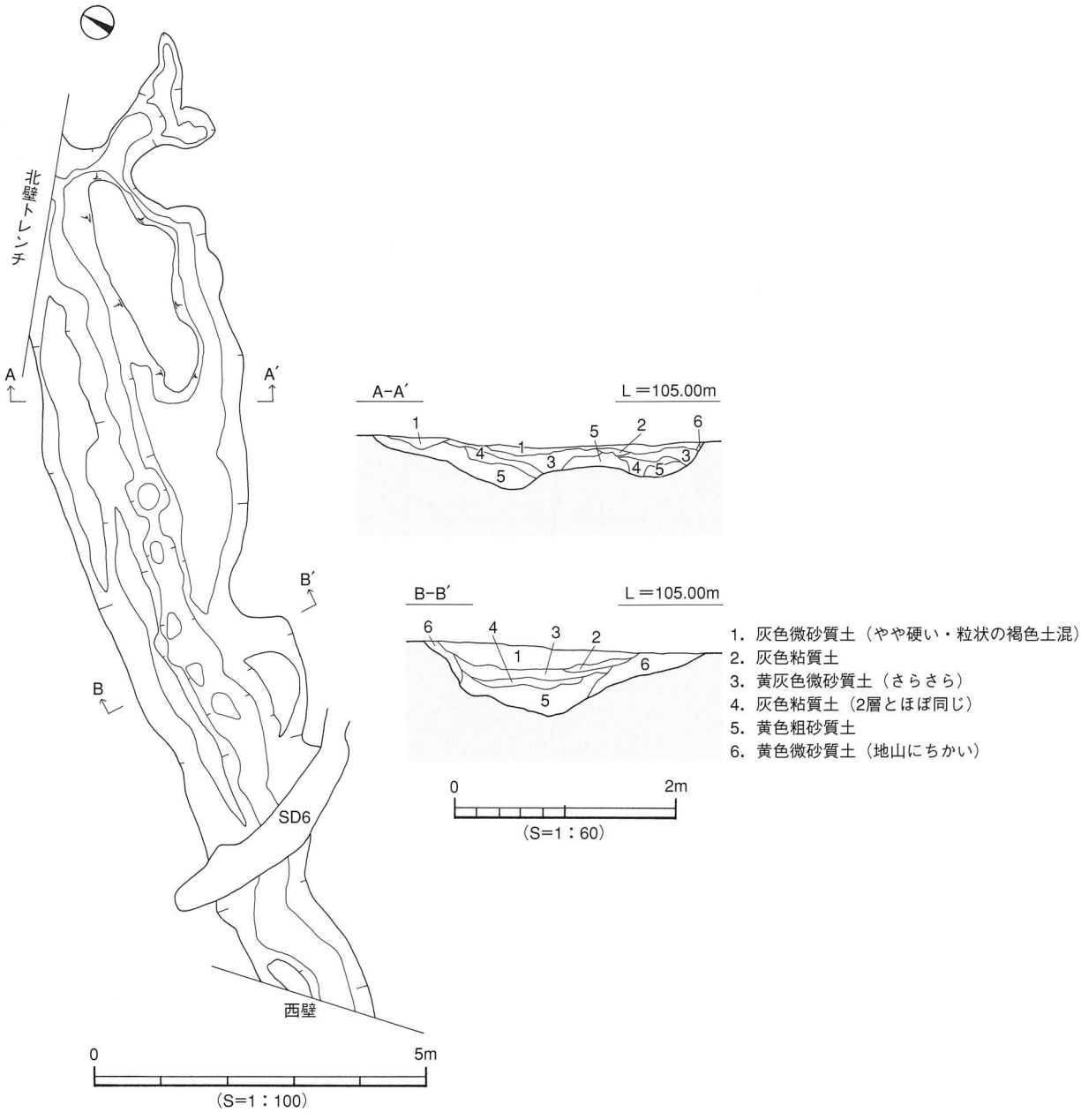
［３］古代以降

遺構は、土坑７基である。

(1) 土　　坑

SK１（第36図）

１区Ｂ中央南部のＳ18区に位置し、SD２を切る。平面形態は突出部をもった円形である。規模は長径0.98m、短径0.81m、深さ13cmを測り、突出部は東西0.18m、南北0.18m、深さ５cmを測る。断



第33図　SD４測量図

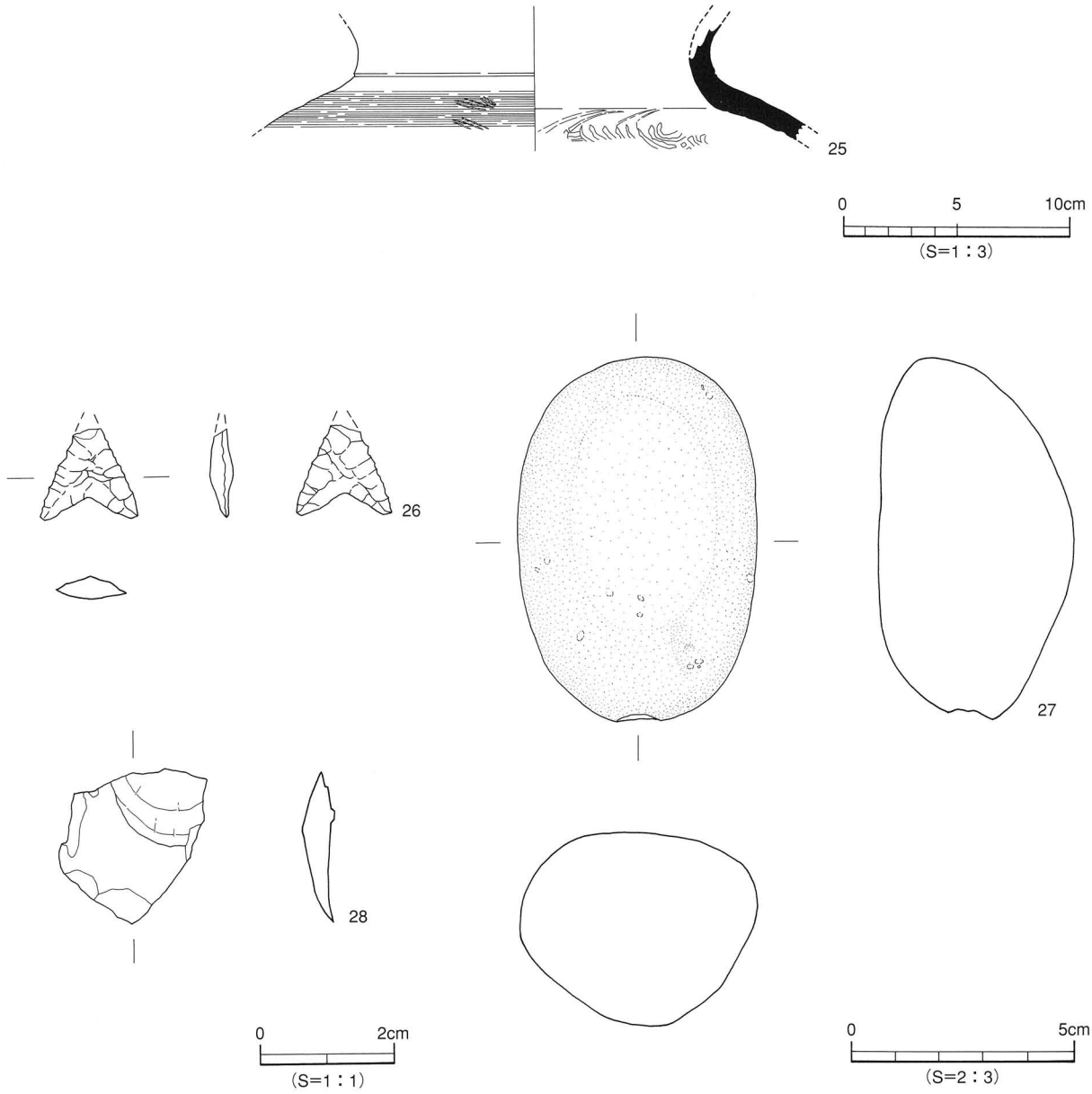
面形態はレンズ状を呈する。埋土は黄色混じりの暗灰褐色土である。出土遺物は人頭大の砂岩礫が中央部で出土した。

時期：SD２を切っていることから、古代以降と考えられる。

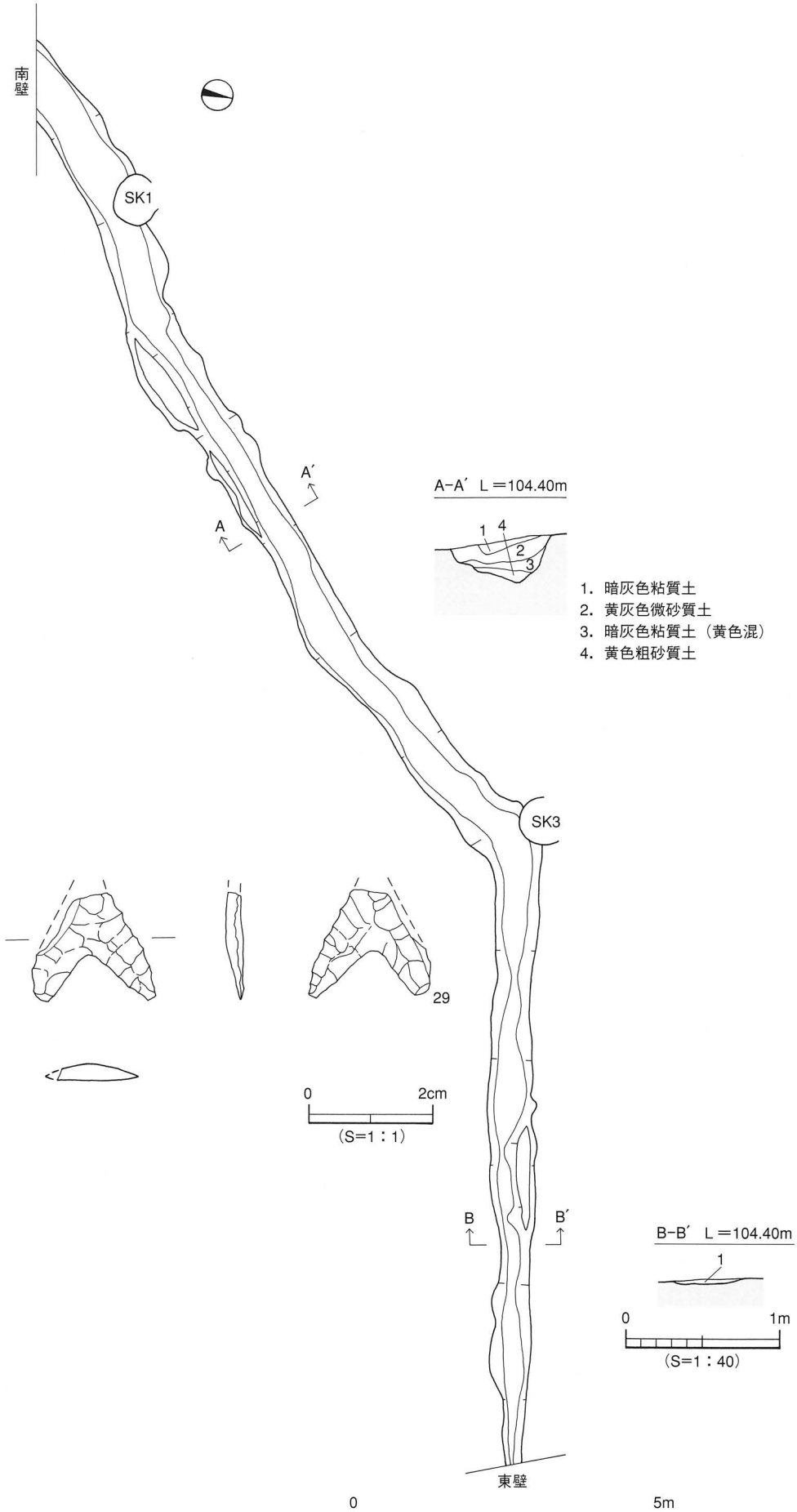
SK３（第36図）

１区Ｂ中央のQ20・21区に位置し、SD２を切る。平面形態は突出部をもった楕円形である。規模は長径0.97m、短径0.78m、深さ18cmを測り、突出部は長径0.40m、短径0.33m、深さ５cmを測る。断面形態はレンズ状を呈する。埋土は黄色混じりの暗灰褐色土である。遺物は出土しなかった。

時期：SD２を切っていることと、SK１と形態・埋土がほぼ同様であるため、古代以降と考えられる。



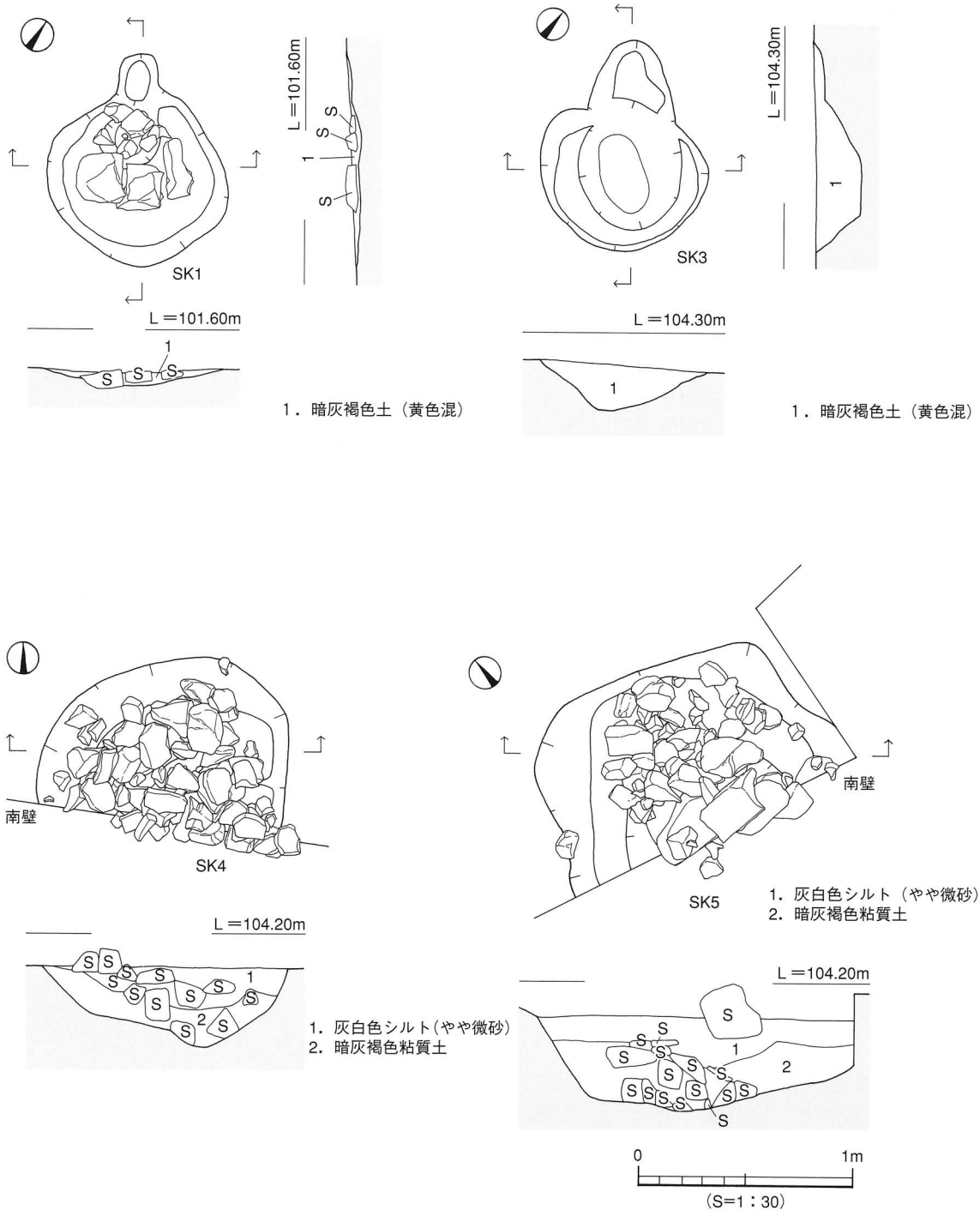
第34図　SD４出土遺物実測図



第35図　SD 2 測量図・出土遺物実測図

SK４（第36図）

１区Ｂ南西隅のＴ16～17区に位置する。ＳＫ５と並列の状態にあり、範囲を確認するため南部に拡張を行ったが、現代の石垣により南半部を削平されていた。平面形態は北半部の形状から円形と推定される。規模は残存長径1.13m、残存短径0.78m、深さ38cmを測る。断面形態はレンズ状を呈する。埋土は２層に分かれ、１層灰白色シルト（やや微砂）、２層暗灰褐色粘質土である。出土遺物は須恵



第36図　ＳＫ１・３・４・５測量図

器と人頭大の礫石がある。須恵器は胴部片のため図化するに至らなかった。礫石はほぼ同程度の大きさで、1・2層から出土した。

時期：2層の埋土がSK1・3に似ていることから、古代以降とする。

SK5（第36図）

1区B南西隅のT17区に位置する。SK4と同様に調査区を拡張して遺構の規模を確認したが、現代の石垣により南半部を削平されていた。平面形態は検出した北半部の形状から隅丸方形と推定される。規模は残存長径1.46m、残存短径0.82m、深さ46cmを測る。断面形態は逆台形状を呈する。埋土は2層に分かれ、1層灰白色シルト（やや微砂）、2層暗灰褐色粘質土である。出土遺物は人頭大の礫石がある。礫石は1層から大型の石が数点、2層からやや小振りの石が集中して出土した。

時期：遺構の形態・規模・埋土がSK4にほぼ同一であるため、古代以降とする。

SK11（第37図）

2区A西部のC25～26区に位置する。平面形態は不整形である。規模は長径4.86m、短径3.30m、深さ24cmを測る。断面形態は皿状を呈する。埋土は2層に分かれ、1層灰色微砂質土、2層暗灰褐色粘質土である。遺物は出土しなかった。

時期：埋土がSK4・5に似ていることから、古代以降と考えられる。

SK12（第37図）

2区A西部のD25区に位置する。平面形態は突出部をもった楕円形である。規模は長径1.74m、短径1.06m、深さ5cmを測り、突出部は長径0.40m、短径0.20m、深さ4cmを測る。断面形態は皿状を呈する。埋土は灰色微砂質土である。遺物は出土しなかった。

時期：遺構の形態がSK1・3に、埋土がSK4・5の埋土1層に似ているため、古代以降と考えられる。

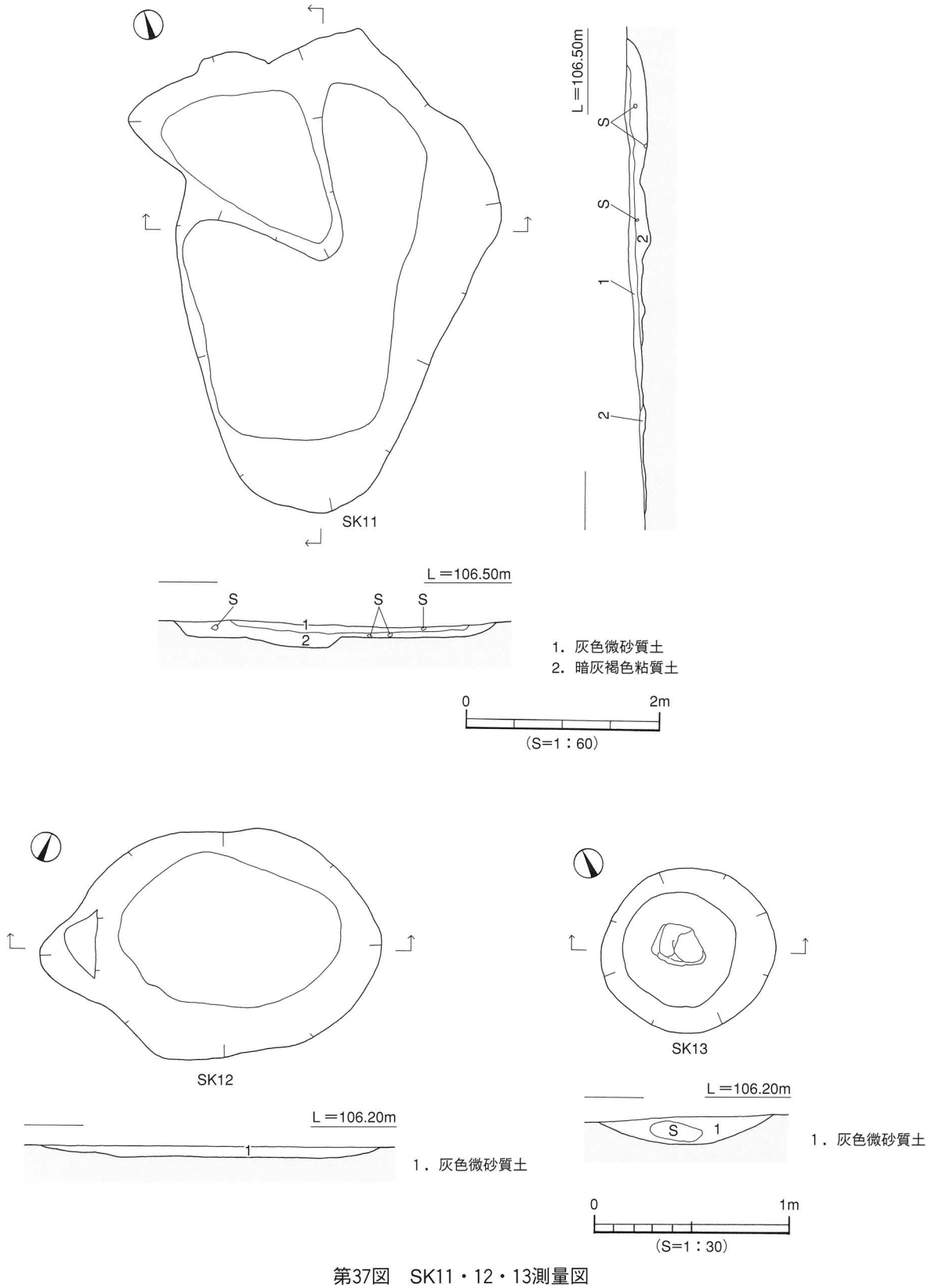
SK13（第37図）

2区A中央部のE26・27区に位置する。平面形態は円形である。規模は長径0.89m、短径0.85m、深さ17cmを測る。断面形態はレンズ状を呈する。埋土は灰色微砂質土である。出土遺物は人頭大の砂岩礫石1点がある。

時期：土坑内から人頭大の礫石が出土する点がSK1・4・5に、埋土がSK12に似ているため、古代以降と考えられる。

［4］近現代

遺構は、土坑5基・溝27条・柱穴27基・石列2条である。そのうち土坑と溝については章末の遺構一覧表を参考にされたい。石列については下記のとおりである。



第37図　SK11・12・13測量図

(1) 石　　列

石列1

2区D中央部のS27～T28区に位置し、石列2を切る。構築方法は、第Ⅲ層上面に約25cm×15cmの円礫を3段に構築している。規模は南北方向への検出長3.60m、幅0.25m、基底石からの高さ35cmを測る。東側は5～10cm大の角礫を含む黒色粘質土で裏込めしている。石列内から遺物は出土しなかった。

時期：第Ⅲ層上面へ構築していることから、現代とする。

石列2

2区D中央部のS29～T27区に位置し、石列1に切られる。構築方法は、第Ⅲ層上面に約15cm×10cmの円礫を4段に構築している。規模は東西検出長8.40m、幅1.50m、基底石からの高さ50cmを測る。北側は5～10cm大の角礫を含む黒色粘質土で裏込めしている。石列内から遺物は出土しなかった。

時期：第Ⅲ層上面へ構築していることから、現代とする。

［5］地点不明の遺物

表採した遺物がある。(第38・39図)

須恵器（30～34）30～33は坏蓋である。30は丸みをもつ天井部である。天井部と口縁部の境に鈍い断面三角形の稜をもつ。31はやや丸みをもつ天井部である。厚手のつくり。32は口縁部片である。33は蓋の口縁部片と器種不明の破片が接着している。34は甕である。口縁端部は上方に肥厚し、尖り気味におさめる。

土師器（35）坏の口縁部片である。端部は尖り気味におさめる。

弥生土器（36）壺形土器の平底の底部である。

石器（37～45）37は石核である。赤色珪質岩製。38～40はスクレイパーである。サヌカイト製。41～43は剥片である。44・45は砕片である。

4．小　　結

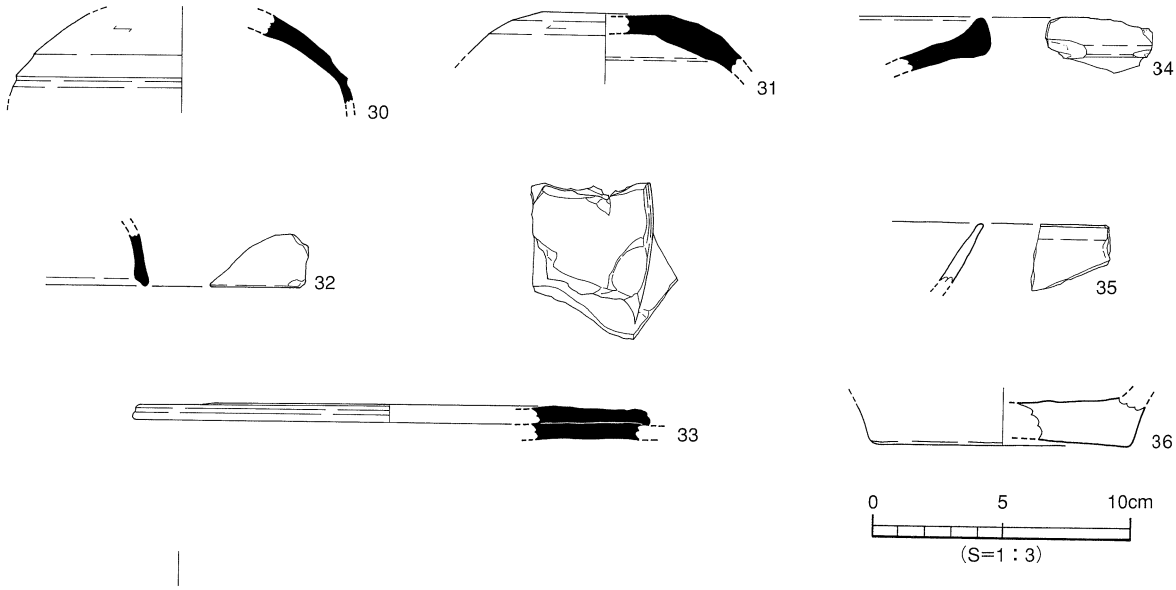
本調査では弥生時代・古墳時代・古代以降・近現代の遺構と遺物を検出した。遺構は流路1条・土坑14基・溝30条・柱穴32基・石列2条・性格不明遺構2基を検出した。遺物は弥生土器・須恵器・土師器・石鏃・石庖丁・敲石・磨石・石核・スクレイパー・剥片・砕片が出土した。ここでは遺構と遺物について時代ごとにまとめを行う。

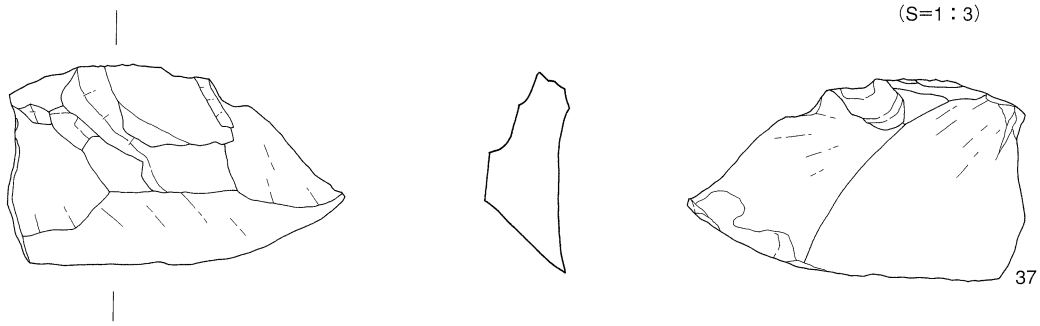
(1) 弥生時代

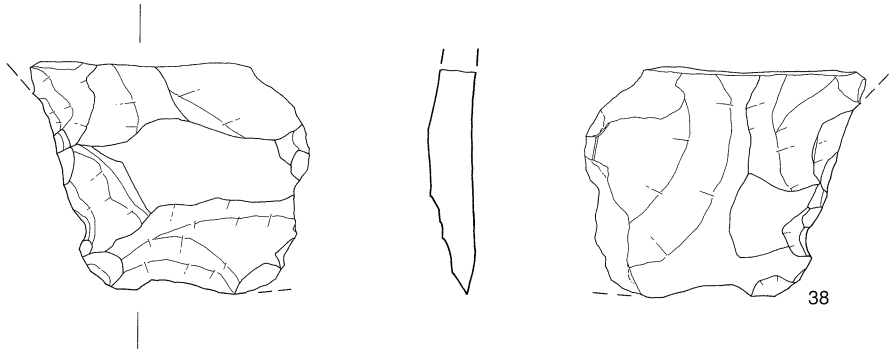
弥生時代の遺構は土坑2基・溝1条・柱穴5基・性格不明遺構2基である。特筆すべきものは、前期のSK10と中期のSX1・2である。SK10は本調査において最も古い遺構である。SX1・2は埋土の状況から判断して人為的な遺構ではなく、遺物包含層と考えられる。SK2とSD1は明確な時期決定はできなかった。

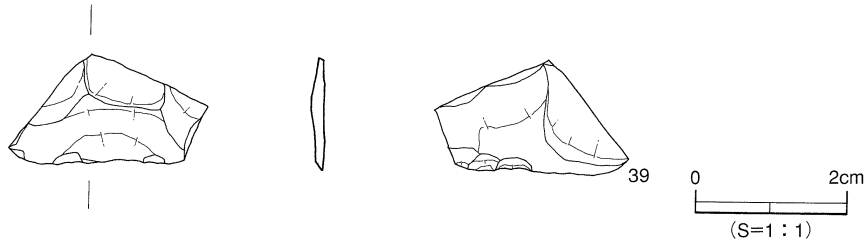
遺物は弥生土器・スクレイパー・剥片がある。このうちSK10出土の弥生時代前期の土器は小片ではあるが、周辺地域において集落の存在を考える上で数少ない貴重な一括資料である。

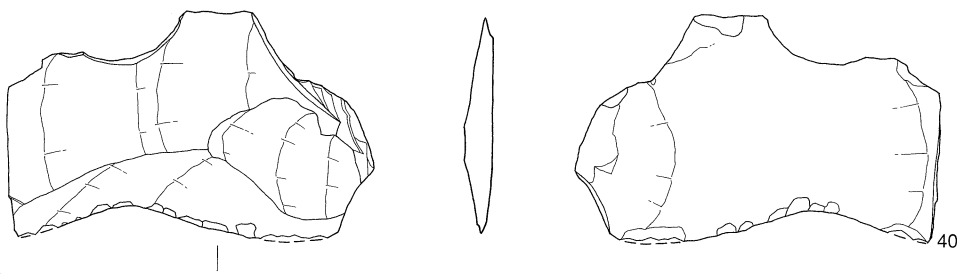
このように本調査地において弥生時代前期から中期の生活関連遺構と遺物が確認できたことは、こ











30…北池周辺出土　31・33…2区D出土
32・34…1区A出土　35・36・38…1区C出土
37…1区E出土　39…1区B出土
40…2区C出土

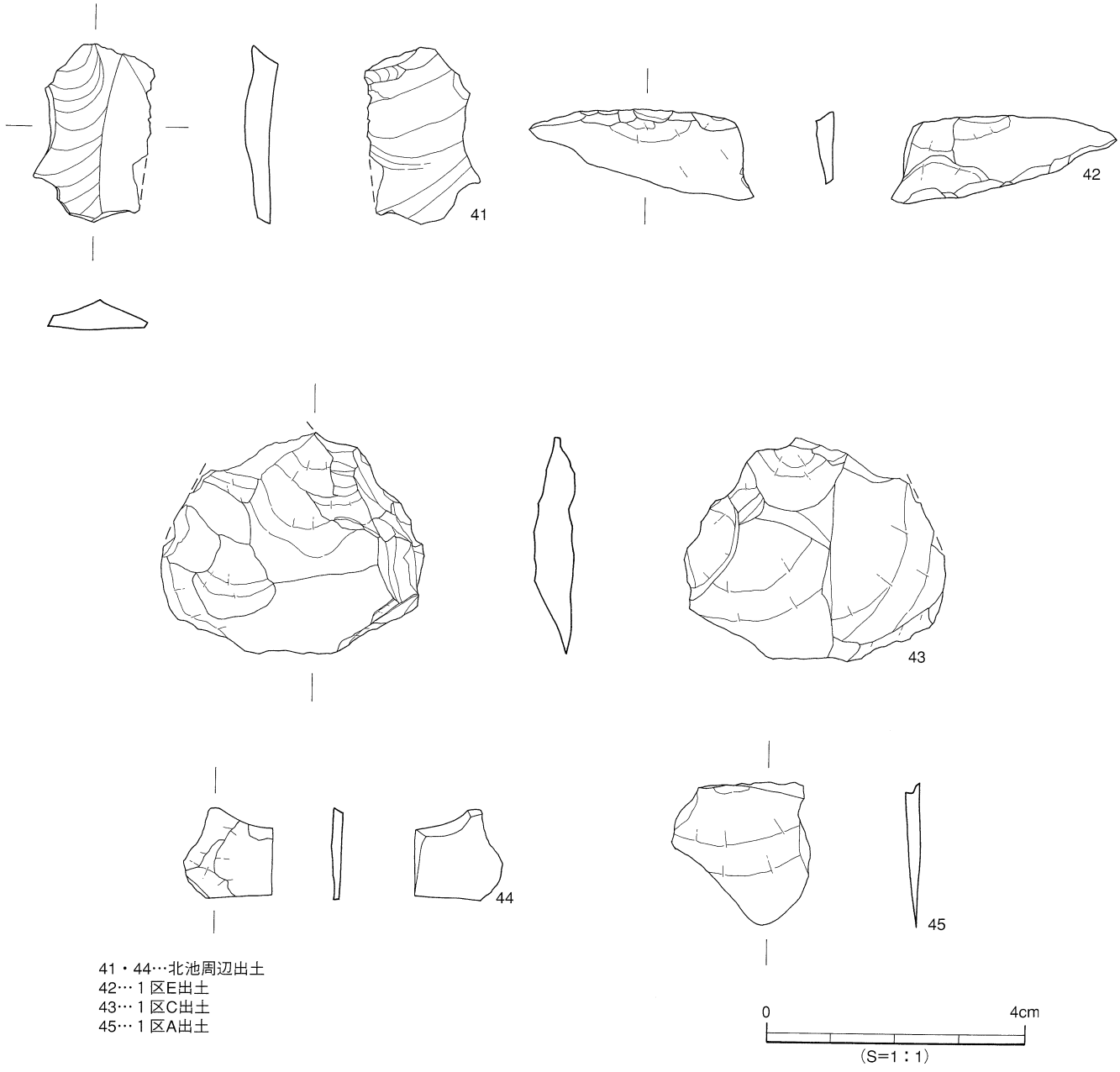
第38図　地点不明出土遺物実測図(1)

れまでに確認されていなかった北梅本町における弥生時代の集落のあり方を考える上で貴重な資料となるものである。

(2) 古墳時代

古墳時代の遺構は流路１条と溝２条がある。SR１は土層の堆積状況から判断して、北から南方向へ徐々に川幅を広げながら絶えず水が流れていたと推定される。SR１が最終的に埋没した時期は６世紀後半と考えられるが、埋土中から弥生土器や石庖丁が出土していることから、上流地域に弥生時代の集落がかつて存在していたことを示すものであり、その遺物が後の時代に流入したものと考えられる。

SD４・２は埋土がほぼ同じで、かつ同一方向を流れているため、同時期に存在し集落を区画する



第39図　地点不明出土遺物実測図(2)

ような目的で使用された可能性が考えられる。

(3) 古代以降

古代以降の遺構は土坑7基がある。平面形態が突出部をもつ円形または楕円形の土坑であるSK1と3は、その性格の解明をすすめるとともに今後留意しておく必要がある。これらの遺構は遺物が少ないために明確な時期決定はできないが、周辺地域での集落が存在していたことを裏付けることができる。

(4) 近 現 代

近現代の遺構のうち石列1及び2は、水田の区画のために礫石を土堤状に積み上げ構築したものと考えられる。これらは切り合い関係があるが同時期に存在していたものと推定される。

本調査では、当初目的として掲げていた古墳時代や古代における須恵器工人の集落関連遺構の検出には至らなかった。しかし弥生時代前期の土坑を検出したことで、当該地域における集落は当時までさかのぼることを確認できたことの意義は大きい。今後はその範囲や規模などのデータの収集と蓄積を行い、未解明部分の解明をすすめていくことが肝要であろう。

遺構・遺物一覧　－凡　例－

(1) 以下の表は、本調査検出の遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。
遺構一覧は仙波千秋・仙波ミリ子が、遺物観察表は山之内・高尾久子が作成した。

(2) 遺構の一覧表中の出土遺物欄の略号について。
例）弥生→弥生土器、土師→土師器、須恵→須恵器、陶磁→陶器・磁器。

(3) 遺物観察表の各記載について。
法　量　欄　（　）：復元推定値
形態・施文欄　土器の各部位名称を略記。
例）口縁→口縁部、口端→口縁端部、胴中→胴部中位、柱→柱部、胴底→胴部～底部
胎土・焼成欄　胎土欄では混和剤を略記。
例）砂→砂粒、長→長石、石→石英、密→精製土。（　）中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。
例）砂・長（1～4）、多→「1～4㎜大の砂粒・長石を多く含む」である。
焼成欄の略記。◎→良好、○→良、△→不良。

表17　自然流路一覧

流路(SR)	地　区	断面形	規　模(m) 長さ×幅×深さ	方　向	埋　土	出土遺物	時　期	備　考
1	L12～W12	レンズ状	45.00×10.40～16.20×0.80	南～北	暗褐色シルト	弥生・須恵器 石器	古墳後期	SD27に切られる

表18　土坑一覧

土坑(SK)	地　区	平面形	断面形	規　模(m) 長さ(長径)×幅(短径)×深さ	埋　土	出土遺物	時　期	備　考
1	S18	突出部をもつ円形	レンズ状	0.98×0.81×0.13	暗灰褐色土 (黄色混)	人頭大の礫石	古代～中世	SD2を切る 突出部(18cm×18cm×5cm)
2	O21～P21	楕円形	皿状	1.20×0.46×0.14	暗褐色シルト		弥生	
3	Q20・21	突出部をもつ楕円形	レンズ状	0.97×0.78×0.18	暗灰褐色土 (黄色混)		古代～中世	SD2を切る 突出部(40cm×33cm×5cm)
4	T16・17	円形	レンズ状	(1.13)×(0.78)×0.38	灰白色シルト (やや微砂)	須恵器 人頭大の礫石	古代～中世	石垣に切られる
5	T17	隅丸方形	逆台形状	(1.46)×(0.82)×0.46	灰白色シルト (やや微砂)	人頭大の礫石	古代～中世	石垣に切られる
6	V13	楕円形	V字状	0.71×0.39×0.24	灰色微砂		現代	SP26を切る
7	W12・13	楕円形	皿状	0.62×0.15×0.04	灰色微砂		現代	
8	W12	楕円形	皿状	0.47×0.26×0.04	灰色微砂 (黄色粗砂含)		現代	
9	M13	不整形	皿状	0.67×0.50×0.09	灰色微砂		現代	SD30を切る
10	M6・7	楕円形	皿状	2.50×2.25×0.29	茶褐色土 (炭まじり)	弥生・石器	弥生前期	
11	C25～D26	不整形	皿状	4.86×3.30×0.24	灰色微砂質土		古代～中世	
12	D25	突出部をもつ楕円形	皿状	1.74×1.06×0.05	灰色微砂質土		古代～中世	突出部(40cm×20cm×4cm)
13	E26・27	円形	レンズ状	0.89×0.85×0.17	灰色微砂質土	人頭大の礫石	古代～中世	
14	M13	楕円形	皿状	0.78×0.63×0.09	灰色微砂質土		現代	SD30を切る

表19　溝一覧　(1)

溝(SD)	地　区	断面形	規　模(m) 長さ×幅×深さ	方　向	埋　土	出土遺物	時　期	備　考
1	P21～Q23	レンズ状	10.60×0.40～0.60×0.10	東～西	暗褐色シルト (灰色混)	弥生 土師器	弥生	調査区外へ続く SX1を切る SD2に切られる
2	P21～T19	逆台形状	24.00×0.24～1.46×0.20	東～西	暗灰色粘質土	土師器 石器	古墳後期以降	調査区外へ続く SD1.SX1を切る SK1.3に切られる
3	N19・20	逆台形状	4.00×0.38×0.11	東～西	黄色粗砂	拳大の礫石	現代	調査区外へ続く
4	O17～Q17	レンズ状	(13.50)×1.26～2.90×0.69	北東～北西	灰色微砂質土	土師器・須恵器 石器	古墳後期以降	調査区外へ続く SD6に切られる
5	Q16～Q20	逆台形状	17.50×0.26×0.20	東～西	黄色粗砂 (造成土)		現代	調査区外へ続く SP9を切る
6	P18～Q19	皿状	14.80×0.36×0.05	東～西	灰色微砂		現代	SD4を切る
7	P19～Q19	皿状	2.88×0.26×0.02	東～西	灰色微砂		現代	
8	Q18・19	皿状	3.00×0.20×0.03	東～西	灰色微砂		現代	
9	Q18・19	皿状	2.30×0.26×0.05	東～西	灰色微砂		現代	
10	U4～V5	皿状	(2.56)×(1.38)×0.24	東～西	黄白色微砂		現代	調査区外へ続く
11	G31～H32	皿状	(5.60)×0.82×0.16	東～西	黄灰色シルト(やや粘) 灰色多		現代	調査区外へ続く
12	D28～D32	皿状	20.00×0.56×0.13	東～西	灰色粘土		現代	一部途切れる

溝一覧

(2)

溝(SR)	地区	断面形	規模(m) 長さ×幅×深さ	方向	埋土	出土遺物	時期	備考
13	D28～D30	皿状	8.50×0.60×0.05	東～西	灰色粘土		現代	
14	D26～F23	U字状	34.80×1.26×0.30	東～西	灰色粘土		現代	
15	E24～F27	皿状	15.0×0.95×0.08	南西～南東	灰色微砂		現代	
16	F23～G24	逆台形状	14.50×0.33×0.22	南～北 東～西	灰色粗砂	礫石	現代	調査区外へ続く暗渠
17	C23～D23	レンズ状	(10.00)×0.85×0.16	東～西	灰色微砂		現代	調査区外へ続く
18	C24～C26	レンズ状	5.50×0.54×0.08	東～西	灰色微砂		現代	
19	S13～U14	レンズ状	(26.80)×4.80×0.80	南～北	灰色微砂		現代	調査区外へ続く SD20～23を切る
20	T14	皿状	(2.00)×1.60×0.10	東～西	黄灰色土		現代	調査区外へ続く SD19に切られる SD21を切る
21	T14	皿状	(0.70)×1.20×0.19	東～西	灰色土 (黄色混)		現代	調査区外へ続く SD19.20に切られる
22	T14	レンズ状	(1.00)×0.82×0.16	東～西	黄色粗砂		現代	調査区外へ続く SD19に切られる
23	S13～S14	レンズ状	(3.90)×(1.12)×0.25	南～北	黄色粗砂		現代	調査区外へ続く SD19に切られる
24	J30～L32	逆台形状	(12.20)×0.70×0.33	東～西	なし (瓦積み)		現代	調査区外へ続く
25	Q28～R29	レンズ状	(5.10)×0.45×0.06	南東～南西	灰色粗砂		現代	調査区外へ続く SX1を切る
26	R28	レンズ状	(3.20)×0.35×0.08	南東～南西	灰色粗砂		現代	調査区外へ続く SX1を切る
27	R9～T9	レンズ状	(6.00)×(1.16)×0.22	南～北	灰色粘土		現代	調査区外へ続く SR1を切る
28	S9～T9	レンズ状	(4.60)×0.74×0.11	南～北	灰色粘土		現代	調査区外へ続く
29	L13～O14	舟底状	(9.96)×5.70×1.90	南～北	灰色微砂		現代	調査区外へ続く SD30を切る
30	L13～N13	皿状	(5.54)×1.00×0.06	南～北	灰色粗砂		現代	調査区外へ続く SD29に切られる

表20　性格不明遺構一覧

性格不明遺構(SX)	地区	平面形	断面形	規模(m) 長さ(長径)×幅(短径)×深さ	埋土	出土遺物	時期	備考
1	P25～S22	円形	レンズ状	(31.30)×(11.00)×0.27	褐色シルト	弥生・石器	弥生中期	調査区外へ続く SD1・2・25・26、SP30・31・32に切られる
2	D32～H33	不整形	レンズ状	(15.60)×(3.80)×0.34	褐色シルト	弥生・石器	弥生中期	調査区外へ続く SD11に切られる

表21　SK10　出土遺物観察表　土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
1	甕	残高　2.3	貼り付け凸帯。口唇上端に刻目を施す。	マメツ	マメツ	暗灰茶色 暗灰茶色	石・長(1～3) ◎		6
2	甕	残高　0.7	折り曲げ口縁。	㊀端マメツ ㊁ヨコナデ	マメツ	乳茶色 乳茶色	石・長(1～2) ◎		6
3	甕	残高　2.0	折り曲げ口縁。	ヨコナデ ハケ(5～7本/cm)	ナデ ハケ(8本/cm)	乳茶色 乳茶色	石・長(1～2) ◎		6
4	甕	残高　3.2	折り曲げ口縁。	マメツ	マメツ	乳橙色 乳橙色	石・長(1～2) ◎		6

SK10　出土遺物観察表　土製品　(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)/(内面)	胎土 焼成	備考	図版
5	甕	残高 5.1	胴部片。横方向に1条の刺突文を施す。	ハケ(6本/cm)	ヨコナデ→ミガキ(マメツ)	暗茶色/暗茶色	石・長(1~2)/◎		6
6	甕	残高 5.7	胴部片。横方向に1条の刺突文を施す。	ハケ(7~8本/cm)ミガキ(マメツ)	マメツ	黒色/乳黄茶色	石・長(1~3)/◎		6
7	甕	底径 (6.6) 残高 5.5	平底の底部。	マメツ	マメツ	暗茶色/暗茶色	石・長(1~7)/◎		6
8	甕	底径 (7.0) 残高 6.0	わずかに上げ底の底部。	マメツ	マメツ	黒色/乳黄茶色	石・長(1~4)/◎		6

表22　SK10　出土遺物観察表　石製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
9	スクレイパー	完形	サヌカイト	3.4	2.4	0.65	7.30		6

表23　SX1　出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)/(内面)	胎土 焼成	備考	図版
10	甕	底径 (6.6) 残高 5.1	上げ底の底部。	マメツ	マメツ	茶色/乳灰黄色	石・長(1~5)/○		
11	甕	底径 (6.8) 残高 2.9	上げ底の底部。	マメツ	マメツ	茶橙色/黄茶色	石・長(1~2)/○		
12	甕	底径 (7.8) 残高 3.2	上げ底の底部。	マメツ	マメツ	乳茶色/乳茶色	石・長(1~3)/○		

表24　SX1　出土遺物観察表　石製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
13	スクレイパー	ほぼ完形	サヌカイト	6.1	5.2	0.6	19.92		

表25　SX2　出土遺物観察表　石製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
14	剥片	完形	赤色珪質岩	1.3	2.4	0.25	0.88		

表26　SR1　出土遺物観察表　土製品　(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)/(内面)	胎土 焼成	備考	図版
15	坏蓋	口径 (14.2) 残高 4.0	天井部と口縁部の間に断面三角形の稜をもつ。口縁端部は内傾する。	自然釉付着の為不明	回転ナデ	灰色/青灰色	密/長(1)石粒/◎	自然釉	
16	坏蓋	口径 (14.1) 残高 3.5	やや丸みをもつ天井部。口縁端部は丸くおさめる。	㋐回転ヘラケズリ ㋑回転ナデ	回転ナデ	灰色・暗灰色/灰色	密/◎		

SR 1　出土遺物観察表　土製品　(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)/(内面)	胎土 焼成	備考	図版
17	坏蓋	残高　2.4	口縁端部は尖り気味におさめる。	ハクリ	㊀回転ナデ ㊁ナデ	乳灰色 青灰色	密 ◎		
18	坏蓋	残高　1.8	口縁端部は丸くおさめる。	ナデ	回転ナデ	青灰色 灰色	密 ◎		
19	坏身	残高　1.7	受部は水平に短く伸び、端部は尖り気味におさめる。 立ち上がりは内傾する。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 灰色	密 ◎		
20	壺	口径 (10.0) 残高　2.2	口縁部は外反し、端部は丸くおさめる。	回転ナデ	回転ナデ	灰褐色 灰褐色	密 長(1) ◎		
21	壺	残高　5.7	球形の肩部～胴部。肩部に2条の沈線を施す。	回転ナデ	回転ナデ	乳灰色 灰色	密長(1) ◎		

表27　SR 1　出土遺物観察表　石製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
22	石庖丁	1/2	結晶片岩	6.0	3.5	0.7	22.74		
23	スクレイパー	完形	赤色珪質岩	7.4	4.4	0.65	21.40		
24	剥片	ほぼ完形	サヌカイト	2.5	2.7	0.4	1.95		

表28　SD 4　出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)/(内面)	胎土 焼成	備考	図版
25	甕	残高　5.2	口縁部は頸部より外反気味に立ち上がる。	㊁回転ヨコナデ ㊂平行タタキ→カキ目(6本/cm)	㊁回転ヨコナデ ㊂同心円文タタキ→回転ヨコナデ	青灰色 青灰色	石・長(1～3) ◎		

表29　SD 4　出土遺物観察表　石製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
26	石鏃	ほぼ完形	黒曜石	1.3	1.5	0.35	0.52	姫島産	
27	敲石	完形	不明	8.1	5.3	4.3	263.45		
28	剥片	完形	サヌカイト	2.3	2.2	0.4	2.10		

表30　SD 2　出土遺物観察表　石製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
29	石鏃	ほぼ完形	黒曜石	1.7	2.0	0.3	0.70	姫島産	

表31　地点不明出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		(外面)色調(内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
30	坏蓋	残高　3.5	丸みをもつ天井部。天井部と口縁部の間に鈍い断面三角形の綾をもつ。	㋐回転ヘラケズリ 回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	暗灰色・灰色 暗灰色	密 ◎		
31	坏蓋	残高　2.3	やや丸みをもつ天井部。	㋐回転ヘラケズリ	回転ヨコナデ	青灰色 灰色	密 ◎		
32	坏蓋	残高　2.1	口縁部片。端部は内傾する。	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	乳灰色 灰色	長(1)・黒色粒 ○		
33	蓋	口径　(20.0) 残高　0.7	蓋の口縁部片と器種不明の破片が接着した状態。	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ→ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		
34	甕	残高　2.2	ゆるやかに外反する口縁部。口縁端部は上方に肥厚される。	㋑端ハクリ ㋺回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	灰色 灰色	密 ◎	自然釉	
35	坏	残高　2.4	口縁部は外反気味に立ち上がり、端部は尖り気味におさめる。	マメツ	マメツ	乳茶色 乳茶色	石・長(1) ○		
36	壺	底径　(9.8) 残高　2.0	平底の底部。	マメツ	マメツ	乳茶色 乳茶白色	石・長(1~4) ○		

表32　地点不明出土遺物観察表　石製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
37	石核	完形	赤色珪質岩	2.7	4.4	1.0	12.75		
38	スクレイパー	周囲の半分以上欠損	サヌカイト	3.6	3.1	0.55	8.08		
39	スクレイパー	完形	サヌカイト	2.6	1.4	0.15	0.89		
40	スクレイパー	ほぼ完形	サヌカイト	7.2	4.5	0.55	21.08		
41	剥片	ほぼ完形	チャート	2.8	1.8	0.5	2.69		
42	剥片	完形	赤色珪質岩	1.4	3.4	0.25	1.56		
43	剥片	完形	安山岩？	3.5	4.0	0.65	9.59		
44	砕片	完形	赤色珪質岩	1.4	1.3	0.2	0.53		
45	砕片	完形	サヌカイト	2.2	2.2	0.2	1.22		

第4章

北梅本太尺寺遺跡（きたうめもとたいしゃくじ）

第４章　北梅本太尺寺遺跡

１．調査の経過

(1) 調査に至る経過

本調査は、1997（平成９）年９～10月の間に行われたＦ区30,077㎡内における、試掘調査の結果を受けて実施したものである。試掘調査では、土坑・溝・柱穴などの遺構と弥生土器・須恵器・土師器などの土器や石器が出土した。また本調査地の南西部の小高い丘陵部には、円墳や方墳を主体とする播磨塚古墳群が存在している。そのため埋文センター及び文化教育課・申請者の三者は遺跡の取り扱いについての協議を行い、土地改良総合整備事業に伴う工事により破壊される遺跡の記録保存を行うため、事前の発掘調査が必要と判断された。

調査は、古墳時代の集落関連遺構の広がりの確認を主目的とし、1998（平成10）年４月７日より埋文センターが本格調査を開始した。

なお試掘調査の結果については第５章で詳述しているので参考にされたい。

(2) 調査の経緯（第40図）

調査対象地は南北２か所に分かれ、南側を１区、北側を２区とし、１区から調査を開始した。

1998（平成10）年４月７日に１区の調査区を設定し、重機により表土はぎを行う。４月21日に遺構検出状況の写真撮影を行い、その後遺構の掘削を開始する。５月15日に完掘状況の写真撮影を行う。５月19日に全ての測量を完了し、１区の屋外調査を完了する。

６月17日に２区の調査区を設定した。２区は水田の区画によりＡ～Ｄに細分し、２区Ａから重機により表土はぎを行う。７月22日に遺構検出状況の写真撮影を行い、その後遺構の掘削を開始する。９月２日に完掘状況の写真撮影をする。９月10日に全ての測量を完了し、２区の屋外調査を完了する。

なお、調査にあたり調査区内を４ｍ四方のグリッドに分けた。グリッドは、北から南へ１・２…34・35とし、東から西へＡ・Ｂ…Ｚ・ａ・ｂと設定した。

(3) 調査組織

調　査　地　松山市北梅本町甲3,489－１外

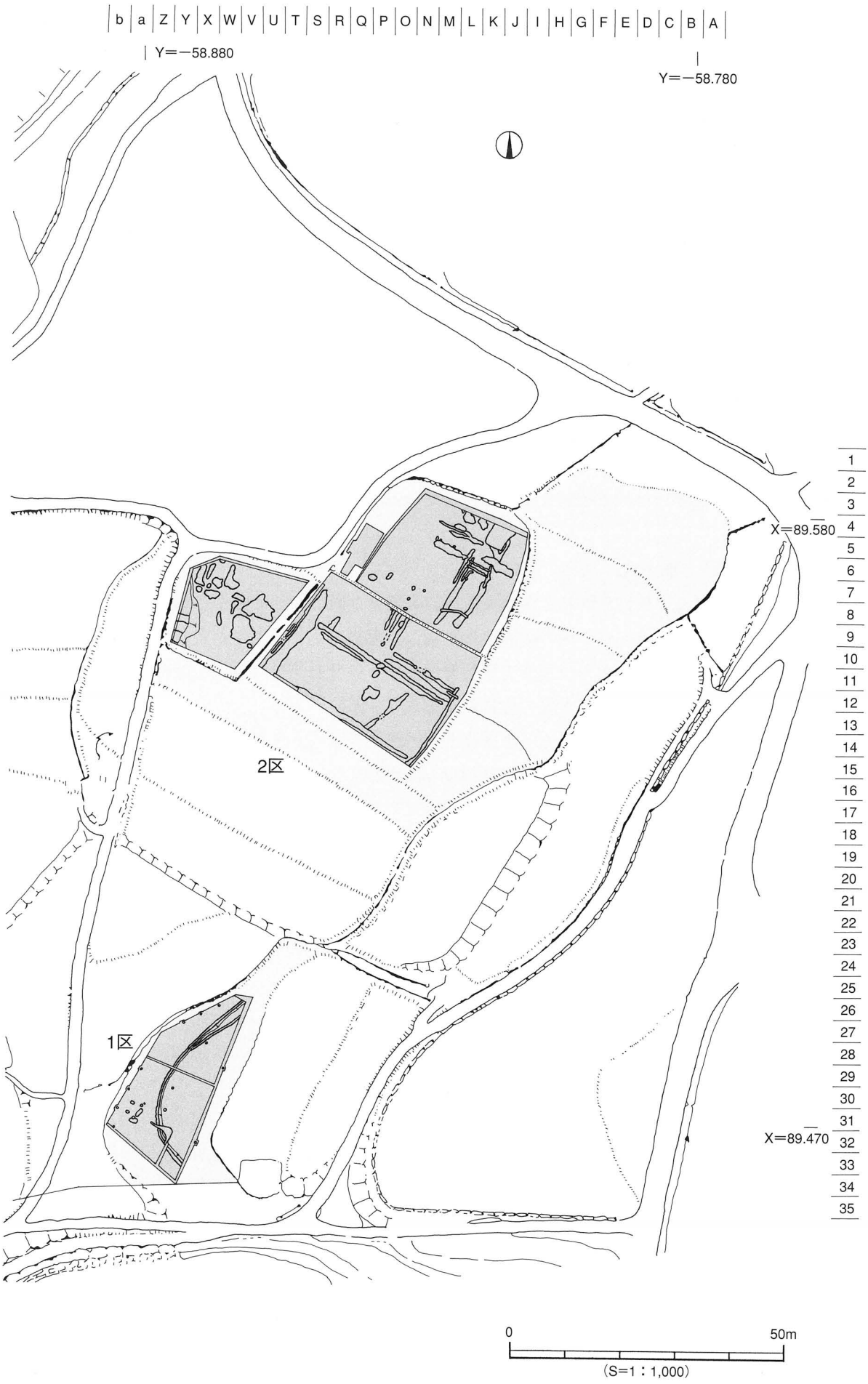
遺　跡　名　北梅本太尺寺遺跡

調査期間　1998（平成10）年４月７日～同年９月30日

対象面積　4,575㎡（１区710㎡, ２区3,865㎡）

調査担当　相原　浩二・山之内志郎

調査作業員　後藤公克・久保浩二・重松吉雄・酒井直哉・坪内寛美・松田常義・山下　徹・好川昇三郎・横森淳一・尾崎　正・藤本数夫・松本幸正・山崎満喜子・藤本清志・白石有子・野間弘子・山崎文子・多知川正人・金子育代・仙波千秋・仙波ミリ子・髙尾久子


b a Z Y X W V U T S R Q P O N M L K J I H G F E D C B A
Y=−58.880
Y=−58.780
X=89.580
X=89.470
1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35
2区
1区
0
50m
(S=1：1,000)

第40図　調査地位置図

2．1区の調査

［1］層　　位（第41図）

基本層位は第Ⅰ層灰色シルト、第Ⅱ層橙色シルト、第Ⅲ層灰褐色シルト、第Ⅳ層灰色砂質土、第Ⅴ層黄灰色砂質土、第Ⅵ層黄色微砂質土（地山）の下記のとおりである。

第Ⅰ層：耕作土である。調査地全域に厚さ８～33cmで堆積する。第Ⅱ層との間に造成土が厚く堆積する部分がある。

第Ⅱ層：床土である。東壁に厚さ８cm前後で堆積する。

第Ⅲ層：粒状の褐色を含む灰褐色シルトである。調査区東半部の高地部分に厚さ８～16cmで広く堆積する。

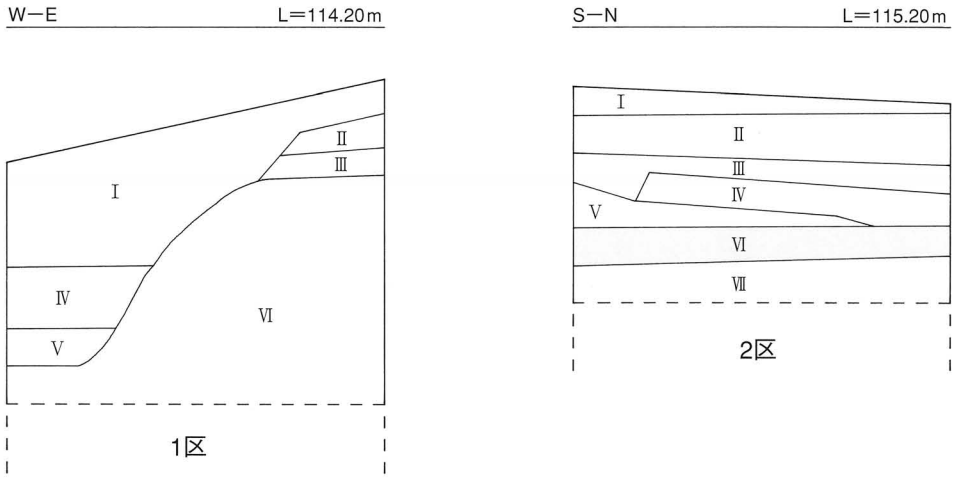
第Ⅳ層：旧耕作土である。水田利用により低くなった部分に厚さ10～20cmで広く堆積する。

第Ⅴ層：旧床土である。黄色と灰色の濃淡により分層できる。厚さ６～16cmで広く堆積する。

第Ⅵ層：基盤面とした黄色微砂質土である。

［2］遺構と遺物（第42図、図版７）

１区は東から西へ傾斜する尾根上に位置し、傾斜地の上段と平坦地の下段に分かれる。本調査では、近現代の遺構と遺物を検出した。遺構は土坑６基・溝３条・柱穴13基・石列１条である。そのうち土



第Ⅰ層－灰色シルト（耕作土）
第Ⅱ層－橙色シルト（床土）
第Ⅲ層－灰褐色シルト（粒状の褐色土を含む）
第Ⅳ層－灰色砂質土（旧耕作土）
第Ⅴ層－黄灰色砂質土（旧床土）
第Ⅵ層－黄色微砂質土（地山）

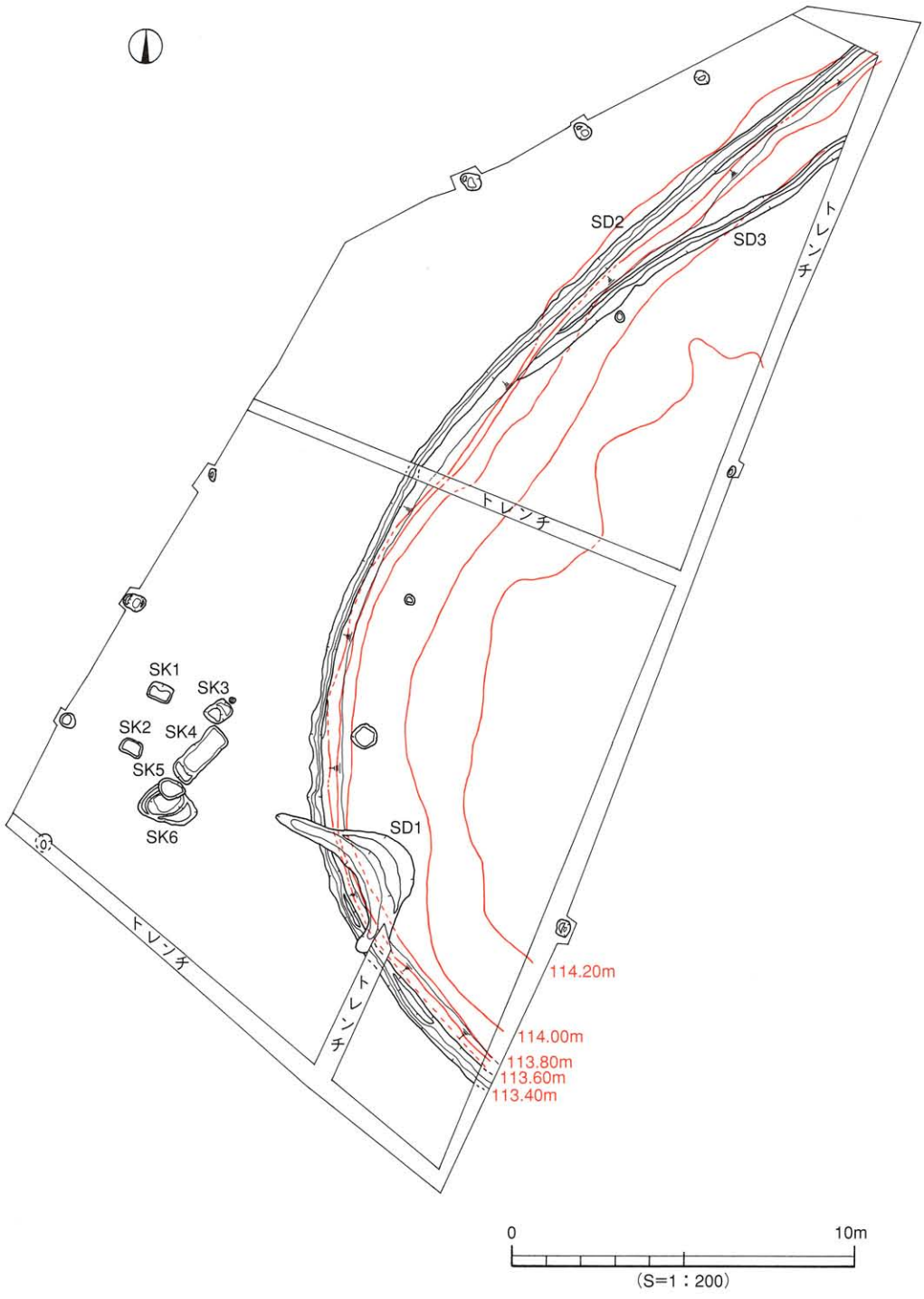
第Ⅰ層－暗灰色シルト（耕作土）
第Ⅱ層－橙灰色微砂質土（床土）
第Ⅲ層－黄灰色粗砂質土（造成土①）
第Ⅳ層－暗灰色砂質土（旧耕作土）
第Ⅴ層－黄白色粗砂質土（造成土②）
第Ⅵ層－暗褐色シルト（遺物包含層）
第Ⅶ層－暗褐色粘質土（地山）

第41図　基本土層図

坑と溝については章末の遺構一覧表を参考にされたい。遺物は陶磁器と瓦がある。

ここでは近現代の遺構と遺物について概説する。

遺構は上段では溝２条(SD１・３)と柱穴５基を、下段では土坑６基(SK１～６)・溝１条(SD２)・柱穴８基を検出した。SD２は弧状に張り出した段落ち部に沿って床面で検出し、全長約36.9m、幅



第42図　１区遺構配置図

約20～54cm、深さ約３～13cmを測る。石列は段落ち部で検出した。石列の規模は、南北約4.5m、東西約20～30cm、高さ約30cmを測り、角礫を多い部分で４段に積み上げている。調査区中央付近に局部的に残存している。

遺物はSK５で陶磁器、SD２で陶磁器と瓦が出土した。

３．２区の調査

［１］層　　位（第41図）

基本層位は第Ⅰ層暗灰色シルト、第Ⅱ層橙灰色微砂質土、第Ⅲ層黄灰色粗砂質土、第Ⅳ層暗灰色砂質土、第Ⅴ層黄白色粗砂質土、第Ⅵ層暗褐色シルト、第Ⅶ層暗褐色粘質土（地山）の下記のとおりである。

第Ⅰ層：耕作土である。調査区全域に厚さ５～36cmで堆積する。

第Ⅱ層：床土である。厚さ５～14cmで部分的に堆積する。

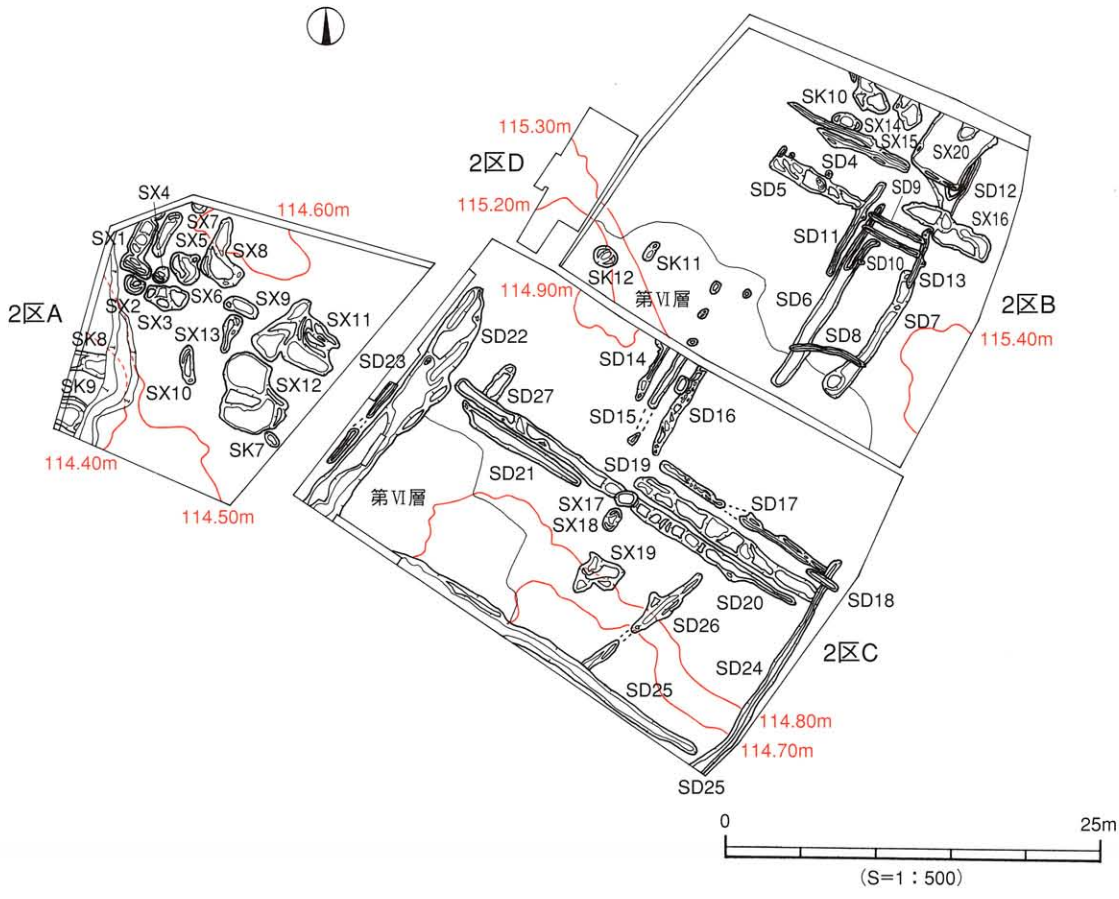
第Ⅲ層：造成土①である。２区Ｂ・Ｃのほぼ全域に厚さ３～14cmで堆積する。

第Ⅳ層：旧耕作土である。２区Ｃのほぼ全域と、２区Ｂの一部に厚さ６～14cmで堆積する。

第Ⅴ層：造成土②である。第Ⅲ層と同様に２区Ｂ・Ｃのほぼ全域に厚さ３～14cmで堆積する。

第Ⅵ層：遺物包含層で２区Ｂ・Ｃに厚さ６～10cmで堆積する。

第Ⅶ層：基盤面とした暗褐色粘質土（部分的に黄色粘質土）である。



第43図　２区遺構配置図

［２］遺構と遺物（第43図、図版８）

２区は北から南へ緩やかに傾斜した谷状地形上に立地している。本調査では、弥生時代の遺物と、近現代の遺構と遺物を検出した。遺構は土坑７基・溝24条・柱穴６基・塚１基・石列１条・性格不明遺構20基である。そのうち土坑・溝・性格不明遺構については章末の遺構一覧表を参考にされたい。遺物は弥生土器・須恵器・陶磁器・瓦・石鏃・砥石・石器素材・石核・スクレイパー・剝片・出刃包丁・硬貨がある。

ここでは主な遺構と遺物について時代別に概説する。

(1) 弥生時代

２区Ｂ南東部と２区Ｃ南東部で遺物包含層を検出した。

遺物包含層（第Ⅵ層）（第43図）

２区Ｂ南東部と２区Ｃ南東部で検出した。２区Ｂでの範囲は東西24ｍ×南北７ｍを測り、SK11・12、SD６・７、柱穴に切られる。２区Ｃでの範囲は東西16.5ｍ×10ｍを測り、SD22・23・25に切られる。遺物は２区Ｂで砥石、２区Ｃで弥生土器と石鏃が出土した。弥生土器は胴部片のため図化できなかった。

出土遺物（第45図、図版８）

石器（１～３）１は凹基無茎石鏃である。平面形態は二等辺三角形を呈する。サヌカイト製。２は有茎石鏃である。表面の風化が著しい。サヌカイト製。３は砥石である。片面に金属製品を研いだような鈍い凹面が認められる。下端は欠損する。結晶片岩製。

時期：時期決定に有効な遺物が少ないため正確には不明であるが、弥生土器が出土していることと石鏃の形態や法量などから弥生時代と推定される。

(2) 近 現 代

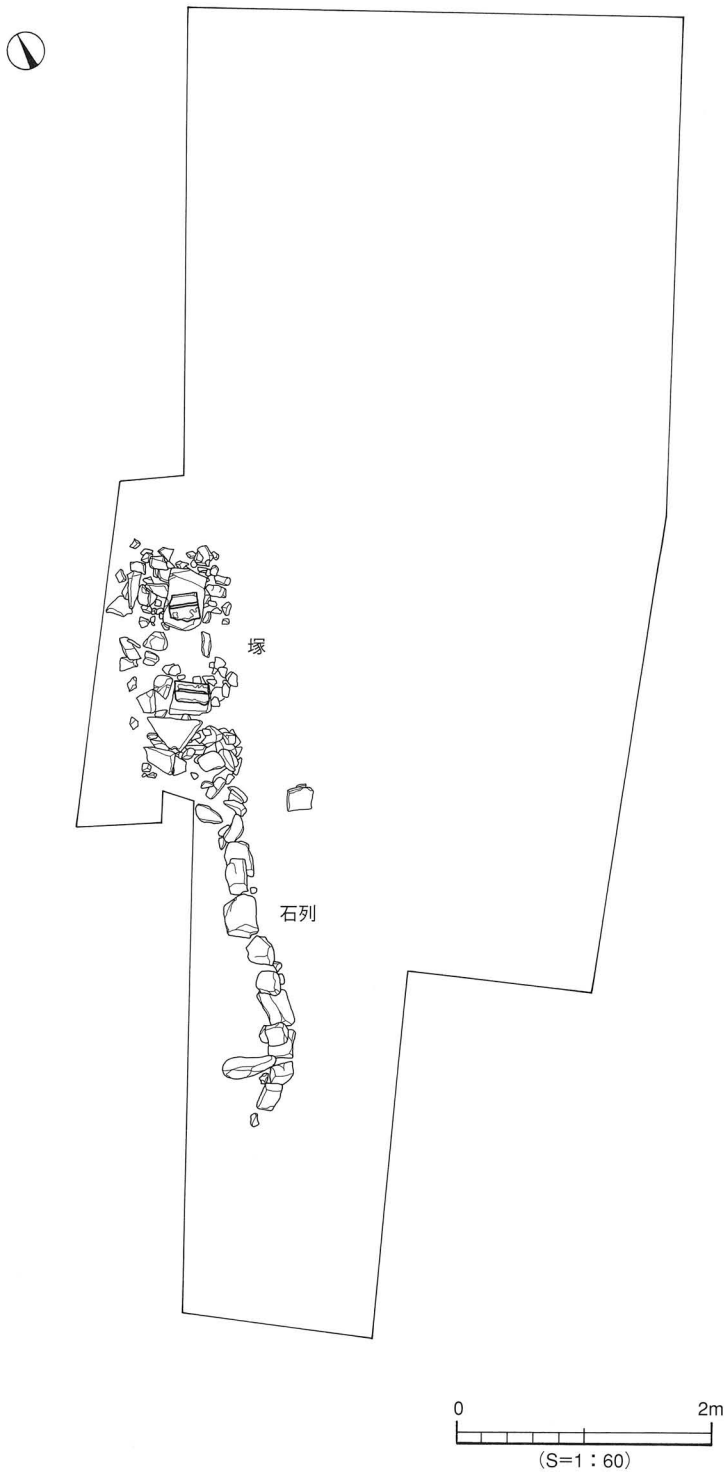
遺構は土坑７基・溝24条・柱穴６基・塚１基・石列１条・性格不明遺構20基である。

２区Ａでは、土坑３基（SK７～９）と性格不明遺構13基（SX１～13）を検出した。本調査区西部では畦畔築造の際の削平と考えられる落ち込みがみられた。遺物はSX１～３・５・６・10・11で陶磁器が、SX８・12で陶磁器と瓦が出土した。

２区Ｂでは、土坑３基（SK10～12）・溝10条（SD４～13）・柱穴８基・性格不明遺構５基（SX14～16・20）を検出した。溝の方向は水田の区画にあわせて掘削されており、SD６・７・11・12・13はほぼ南北方向、SD４・５・８・９・10はほぼ東西方向である。そのうち暗渠と考えられる遺構はSD８・11・13があり、特にSD８は扁平な礫石を組み合わせて構築されていた。SX20は、検出時は規模や形態から住居跡と考えていたが、柱穴などの内部施設が確認されなかったため、性格不明遺構とした。遺物はSK12、SD４～６・13、SX16・20で陶磁器、SK11、SD７で瓦、SK10で出刃包丁１点、SD６で二銭銅貨１点が出土した。

２区Ｃでは、土坑１基（SK13）、溝14条（SD14～27）、性格不明遺構４基（SX17～19）を検出した。溝の方向は水田の区画にあわせて掘削されており、SD14～16・22～24・26・27はほぼ南北方向、17～21・25はほぼ東西方向である。遺物はSD16・17・22～24で陶磁器が出土した。

２区Ｄの調査区中央部には長さ約1.8×1.0ｍ、高さ0.3ｍの土盛りがあり、祠２点が各々の台石上



第44図　2区D遺構配置図

に据え置かれていた。そのため塚の可能性があるとして、内部構造の解明を主目的にトレンチを設定した。遺物は台石の直下に掌大の礫石と陶磁器、その下層には10cm前後の礫石が出土した。

さらに土盛りの南方向には、南北方向に直線的に伸びる石列を検出した。切り合い関係から石列は土盛りの構築以前に築かれていたことを確認した。遺物は出土しなかった。

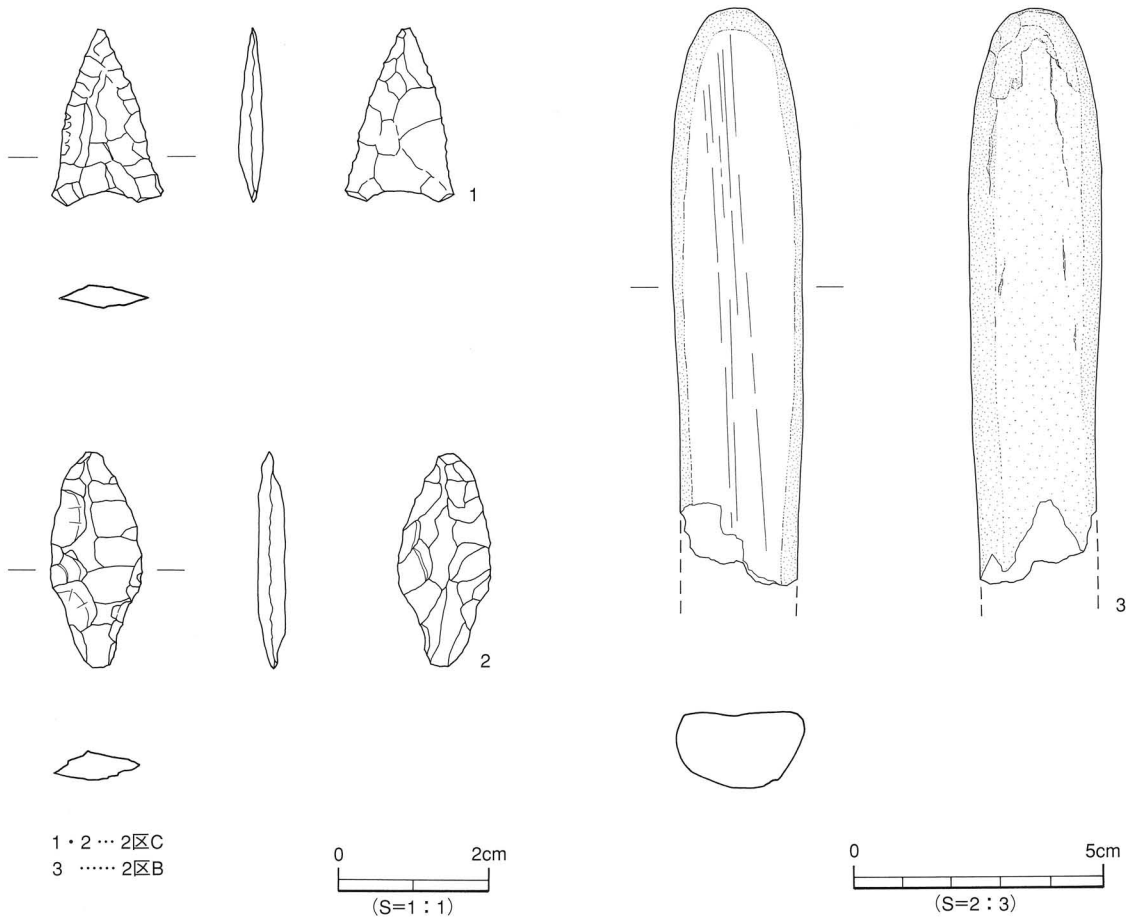
(3) 地点不明の遺物

表採した遺物には弥生土器・須恵器・石器があるが、弥生土器と須恵器は小片のため図化できなかった。(第46・47図、図版８)

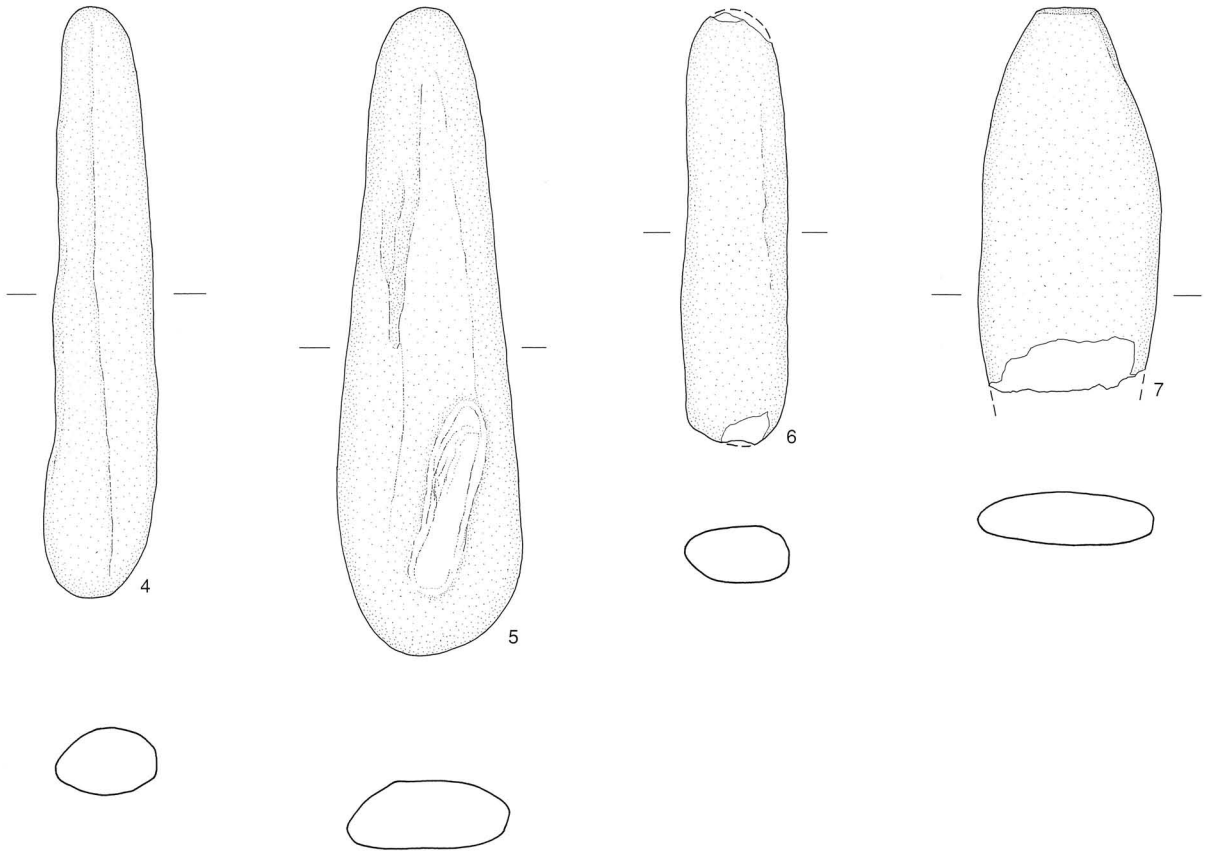
石器（４～12）４～７は石器素材である。いずれも自然の礫石であり、加工痕はみられない。結晶片岩製。４～７は２区Ｂ第Ⅵ層出土の砥石（３）と同様の形態と材質であるため、砥石未製品の可能性がある。８は石核である。両面に初期剝離が残る。サヌカイト製。９はスクレイパーである。一部に自然面が残る。サヌカイト製。10～12は剝片である。11は一部に自然面が残る。12は石匙の未製品の可能性もある。いずれもサヌカイト製。

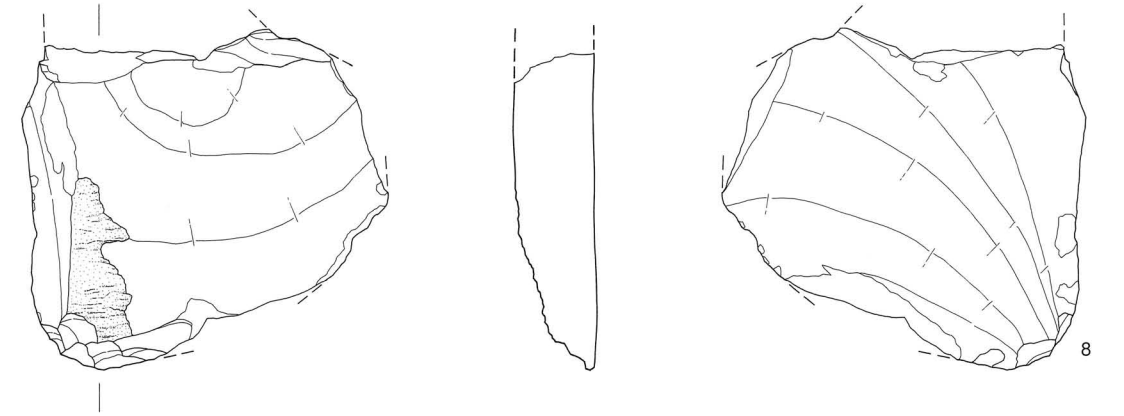
４．小　　結

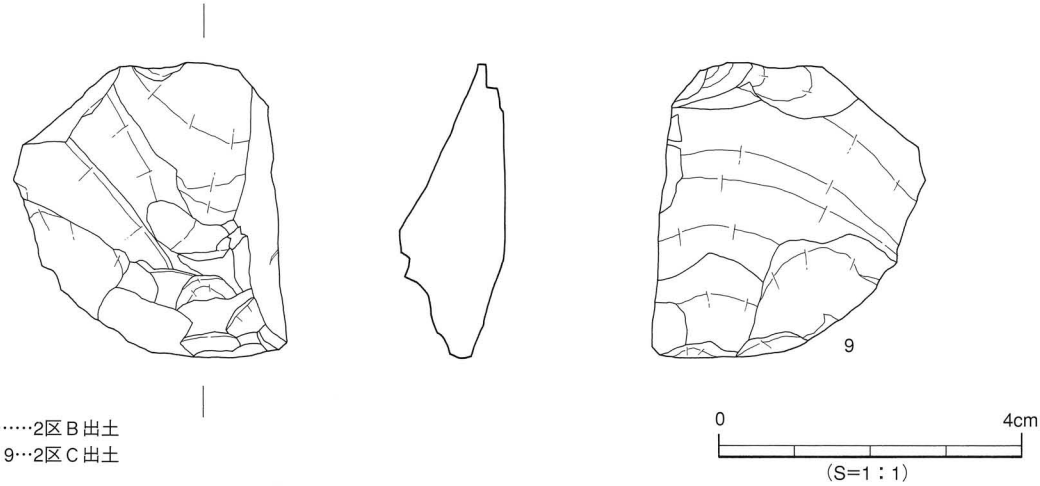
本調査では弥生時代の遺物と、近現代の遺構と遺物を検出した。遺構は土坑13基・溝27条・柱穴19基・塚１基・石列２条・性格不明遺構20基を検出した。遺物は弥生土器・須恵器・陶磁器・瓦・石



第45図　２区第Ⅵ層出土遺物実測図

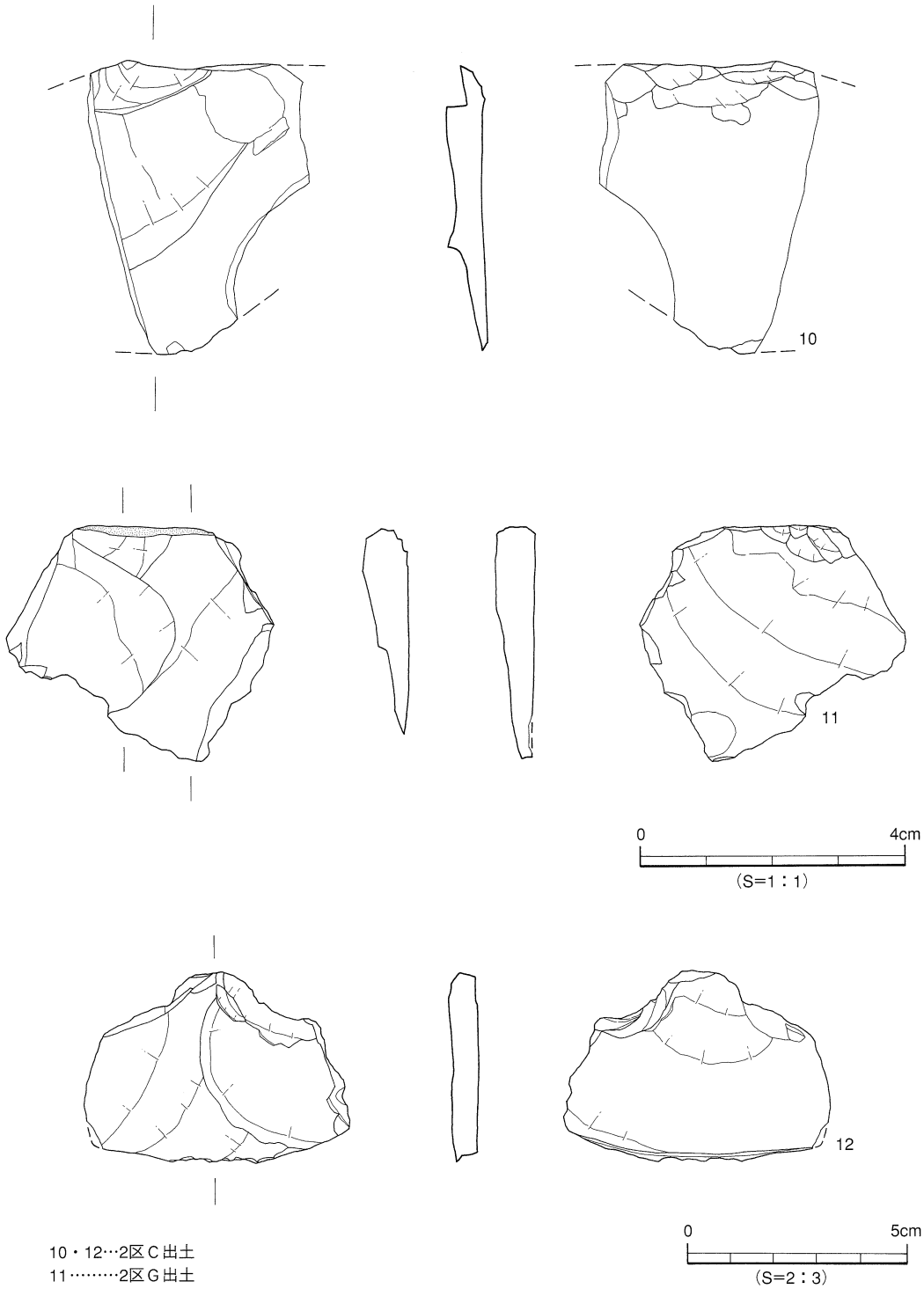






4・8……2区Ｂ出土
5・6・7・9…2区Ｃ出土

第46図　地点不明出土遺物実測図(1)



10・12…2区C出土
11……2区G出土

第47図　地点不明出土遺物実測図(2)

鏃・砥石・石器素材・石核・スクレイパー・剥片・出刃包丁・硬貨がある。ここでは遺構と遺物について時代ごとにまとめを行う。

(1) 弥生時代

２区Ｂ・Ｃで遺物包含層（第Ⅵ層）を確認し、弥生土器・石鏃・砥石が出土した。地点不明の遺物のなかにも弥生土器や須恵器が含まれていることから、かつては周辺に弥生時代や古墳時代の遺構が存在した可能性が考えられる。

(2) 近 現 代

本調査で検出したすべての遺構は、出土した陶磁器・出刃包丁・硬貨から近現代のものと考えられる。１区では石列１条を検出した。検出時は一部のみ残存していたが、本来は傾斜地の段落ち部すべてに土留めまたは土地区画のために構築されていたものと推定される。またSD２は段落ち部に沿って掘られているため、排水施設と考えられる。２区Ｂ・Ｃで検出した東西・南北方向にのびるSD４～27についても、水田の境界に設置された排水施設と考えられる。

２区Ａ～Ｃで検出した性格不明遺構は平面形態が不定形であり、掘り方が明確ではないため、人工的に掘削されたものではなく、自然の凹地である可能性が考えられる。

２区Ｄで検出した塚は、出土遺物から近現代のものと考えられる。周辺地域での聞き取り調査によると、昭和初期に開墾などの土地改良などの際に古墳を削平した場合、その跡に瓦製の祠を置いて祀るという風習があることから、この近辺に古墳がかつて存在し、消滅した可能性が考えられる。なお、この塚の下層で検出した列石が古墳の名残りであるかどうかは確認できなかった。

本調査では、当初目的として掲げていた古墳時代の集落関連遺構の検出には至らなかった。しかし今回の調査によって、周辺地域に弥生時代や古墳時代の遺構や古墳が存在する可能性がでてきた。それは、２区で弥生時代の遺物を包含した遺物包含層（第Ⅵ層）を確認したこと、地点不明遺物のなかに弥生土器や須恵器などが含まれていたこと、２区Ｄで古墳削平後に祠が祀られていたことなどから考えられる。

この地域は、これまで発掘のメスが入ることが少なく未解明の部分が多かったが、今後は試掘調査の結果などをもとに遺構の性格や範囲の確認を進めていく必要がある。

遺構・遺物一覧　－凡　例－

(1) 以下の表は、本調査検出の遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。
　遺構一覧は仙波千秋・仙波ミリ子が、遺物観察表は山之内・髙尾久子が作成した。

(2) 遺構の一覧表中の出土遺物欄の略号について。
　例）弥生→弥生土器、土師→土師器、須恵→須恵器、陶磁→陶器・磁器。

(3) 遺物観察表の各記載について。
　法　量　欄　（　）：復元推定値
　形態・施文欄　土器の各部位名称を略記。
　　例）口縁→口縁部、口端→口縁端部、胴中→胴部中位、柱→柱部、胴底→胴部～底部
　胎土・焼成欄　胎土欄では混和剤を略記。
　　例）砂→砂粒、長→長石、石→石英、密→精製土。（　）中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。
　　例）砂・長（１～４）、多→「１～４㎜大の砂粒・長石を多く含む」である。
　　焼成欄の略記。◎→良好、○→良、△→不良。

表33　土坑一覧

土坑(SK)	地区	平面形	断面形	規模(m) 長さ(長径)×幅(短径)×深さ	埋土	出土遺物	時期	備考
1	a31	方形	皿状	0.69×0.5×0.05	明灰色シルト		近現代	
2	a31	隅丸方形	浅い皿状	0.66×0.41×0.04	明灰色シルト		近現代	
3	a31	方形	皿状	0.74×0.58×0.10	灰白色砂質土 褐灰色砂質土		近現代	
4	a31	隅丸方形	レンズ状	1.84×0.61×0.07	黄白色砂質土		近現代	
5	a31	不整形	皿状	0.76×0.54×0.06	灰白色砂質土	陶磁器	近現代	
6	a31	不整形	皿状	1.41×1.25×0.09	灰白色砂質土		近現代	
7	v10	不整形	レンズ状	1.33×0.74×0.09	暗灰色シルト		近現代	
8	Y8～Y9	不整形	U字状	(2.34)×1.16×0.29	暗褐色シルト		近現代	調査区外に続く
9	Y9～Y10	不整形	U字状	(1.92)×1.69×0.33	黄褐色シルト		近現代	調査区外に続く
10	L4～M4	楕円形	皿状	2.25×0.98×0.16	暗灰色微砂質土 (やや粘・褐色ブロック含)	出刃包丁	近現代	
11	06～P7	楕円形	レンズ状	1.46×0.53×0.16	暗灰色微砂質土	瓦	近現代	
12	P6～P7	円形	レンズ状	1.52×1.27×0.17	暗灰色微砂質土	陶磁器	近現代	
13	O9	隅丸方形	皿状	1.08×0.77×0.05	灰褐色砂質土		近現代	

表34　溝一覧　(1)

溝(SD)	地区	断面形	規模(m) 長さ×幅×深さ	方向	埋土	出土遺物	時期	備考
1	Y32～Z32	逆台形状	(5.5)×0.35～1.72×0.2	南東～北西	黄褐色土		近現代	トレンチに切られる
2	V26～Y33	U字型	(36.9)×0.20～0.54×0.03～0.13	北～南	灰色シルト	陶磁器 瓦	近現代	SD1・トレンチに切られる
3	V27～X28	逆台形状	(11.75)×0.4×0.09	南西～北東	灰白色シルト		近現代	SD2に切られる
4	M4～K5	皿状	9.25×1.02×0.09	北西～南東	明灰黄色微砂質土	陶磁器	近現代	
5	M・N5～L6	皿状	6.56×1.40×0.08	南東～北西	橙色シルト (やや粘)	陶磁器	近現代	SP12・13・15に切られる
6	L6～M9	皿状	13.97×0.96×0.07	北～南	明灰黄色微砂質土	陶磁器 硬貨	近現代	SD8・9・10に切られる
7	K7～M9	皿状	9.80×0.70×0.09	北～南	明灰黄色微砂質土	瓦	近現代	SD8・13に切られる
8	L8～M8	U字状	5.10×0.26×0.10	東～西	灰白色シルト		近現代	暗渠
9	K6～L6	皿状	4.16×0.30×0.03	西～東	明灰黄色微砂質土		近現代	
10	K6～L6	U字状	4.32×0.36×0.09	西～東	明灰黄色微砂質土		近現代	
11	L5～M7	逆台形状	7.20×0.32×0.08	南～北	灰白色シルト		近現代	SD5に切られる暗渠
12	J5～K6	皿状	5.75×0.86×0.04	南～北	灰白色シルト		近現代	SX16・20に切られる
13	K6～K7	逆台形状	4.12×0.39×0.10	南～北	灰白色シルト	陶磁器	近現代	SD9・10に切られる暗渠
14	O8～O9	皿状	(4.0)×0.56×0.06	北東～南西	灰褐色砂質土 (地山黄色混)		近現代	調査区外へ続く
15	O8～P10	皿状	(6.78)×0.64×0.06	北東～南西	灰褐色砂質土 (地山黄色混)		近現代	調査区外へ続く
16	O8～O10	逆台形状	(6.58)×0.81×0.11	北東～南西	灰褐色砂質土 (地山黄色混)	陶磁器	近現代	SK13に切られる 調査区外へ続く

溝一覧

(2)

溝(SD)	地　区	断面形	規　模(m) 長さ×幅×深さ	方 向	埋 土	出土遺物	時 期	備 考
17	O10～M12	皿状	12.90×0.50～0.83×0.06	南東～北西	灰褐色砂質土 (地山の黄色混)	陶磁器	近現代	SD24に切られる
18	L12～M12	皿状	2.57×0.63×0.03	南東～北西	灰褐色砂質土 (地山の黄色混)		近現代	
19	P10～M12	皿状	14.05×1.03～1.38×0.08	南東～北西	灰褐色砂質土 (地山黄色混)		近現代	SD24に切られる
20	S 9～M12	皿状	27.2×0.92～1.22×0.15	北西～南東	黄灰色微砂質土		近現代	SX17に切られる
21	S 9～Q10	皿状	9.56×0.96×0.13	北西～南東	黄灰色微砂質土		近現代	
22	R 7～U11	皿状	(18.34)×1.88～2.26×0.25	北東～南西	黄色砂礫(造成土)	陶磁器	近現代	調査区外に続く
23	T 9～U10	レンズ状	(7.0)×0.3×0.08	北東～南西	灰色微砂質土 (耕作土)	陶磁器	近現代	トレンチに続く
24	L12～O15	U字状	(17.15)×0.54～0.60×0.11	北東～南西	黄色砂質土	陶磁器	近現代	SD18に切られる 調査区外へ続く
25	T11～O15	すり鉢状	(23.42)×1.15～1.25×0.35	北西～南東	黄灰色砂礫層		近現代	トレンチに続く
26	O12～Q13	レンズ状	(9.9)×0.61～1.76×0.12	北東～南西	褐色シルト		近現代	SD25に切られる
27	R 8～R 9	皿状	(2.72)×1.06×0.06	北東～南西	灰褐色砂質土 (地山の黄色混)		近現代	SD20に切られる

表35　性格不明遺構一覧

(1)

性格不明遺構(SX)	地　区	平 面 形	断 面 形	規　模(m) 長さ(長径)×幅(短径)×深さ	埋　土	出土遺物	時　期	備　考
1	X 6～X 7	不整形	皿状	(4.08)×1.4×0.12	灰白色微砂質土	陶磁器	近現代	調査区外へ続く
2	X 7	不整形	皿状	1.42×9.5×0.06	灰白色微砂質土	陶磁器	近現代	
3	W 7～X 8	不整形	レンズ状	2.84×0.99×0.11	灰白色微砂質土	陶磁器	近現代	
4	X 7	不整円形	皿状	1.1×0.96×0.12	灰白色微砂質土 (黄色ブロック混)		近現代	
5	W 6～X 7	不整形	皿状	3.09×0.64×0.10	灰白色微砂質土 (黄色ブロック)	陶磁器	近現代	
6	W 7	不整形	皿状	2.26×1.43×0.11	暗灰色シルト (黄色ブロック混) 灰白色微砂質土 (黄色混)	陶磁器	近現代	
7	W 6	不整形	皿状	(0.72)×1.04×0.08	灰白色微砂質土 (黄色混)		近現代	調査区外へ続く
8	V 6～W 7	不整形	皿状	4.96×1.05×0.07	灰白色微砂質土 (黄色混)	陶磁器 瓦	近現代	
9	V 7～W 8	隅丸方形	皿状	2.24×1.11×0.07	灰白色微砂質土 (黄色混)		近現代	
10	W 8～W 9	不整形	皿状	2.04×0.80×0.16	暗灰色シルト (黄色ブロック混)	陶磁器	近現代	
11	U 7～U 9	不整形	皿状	3.25×2.81×0.08	灰白色微砂質土	陶磁器	近現代	
12	V 8～V10	不整形	皿状	3.59×2.17×0.15	灰白色微砂質土	陶磁器 瓦	近現代	
13	V 8～W 8	不整形	皿状	2.53×0.42×0.07	灰白色微砂質土 (黄色含)		近現代	
14	L 3～L 4	不整形	皿状	(2.58)×1.8×0.08	暗灰色微砂質土 (黄色ブロック含)		近現代	調査区外へ続く
15	K 4～L 4	不整形	皿状	(2.05)×1.52×0.10	明灰黄色微砂質土		近現代	調査区外へ続く
16	J 6～K 6	不整形	レンズ状	3.27×0.70×0.13	明灰黄色微砂質土	陶磁器	近現代	
17	P10～P11	不整形	皿状	1.52×0.93×0.05	暗灰色シルト		近現代	
18	P11	不整形	レンズ状	1.57×0.97×0.05	灰褐色砂質土		近現代	

性格不明遺構一覧 (2)

性格不明遺構(SX)	地区	平面形	断面形	規模(m) 長さ(長径)×幅(短径)×深さ	埋土	出土遺物	時期	備考
19	P11～Q12	不整形	皿状	2.82×2.42×0.06	褐色微砂質土		近現代	
20	J4～K5	隅丸方形	皿状	(2.13)×1.80×0.07	明灰黄色砂質土	陶磁器	近現代	調査区外へ続く

表36　2区　第Ⅵ層出土遺物観察表　石製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
1	石鏃	完形	サヌカイト	2.3	1.5	0.3	0.81		8
2	石鏃	完形	サヌカイト	2.8	1.2	0.35	1.41		8
3	砥石	ほぼ完形	結晶片岩	11.5	2.6	1.5	92.21		8

表37　地点不明　出土遺物観察表　石製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
4	石器素材	完形	結晶片岩	11.7	2.2	1.4	59.75		
5	石器素材	完形	結晶片岩	12.8	3.6	1.3	118.08		
6	石器素材	ほぼ完形	結晶片岩	8.6	2.0	1.1	39.86		
7	石器素材	ほぼ完形	結晶片岩	7.6	3.5	1.1	52.94		
8	石核	周囲をかなり欠損	サヌカイト	6.2	7.2	1.6	81.72		8
9	スクレイパー	完形	サヌカイト	3.9	3.6	1.3	18.13	石核を利用したもの	8
10	剥片	周囲をかなり欠損	サヌカイト	4.4	3.3	0.55	8.79		8
11	剥片	完形	サヌカイト	3.5	4.0	0.6	8.99		8
12	剥片	ほぼ完形	サヌカイト	4.4	6.0	0.6	21.67	石匙の未製品？	8

第５章

Ａ～Ｈ区の試掘調査

第５章　Ａ～Ｈ区の試掘調査

１．試掘調査の経過

1996（平成８）年10月に松山市長田中誠一氏より松山市北梅本町における土地改良総合整備事業に伴う埋蔵文化財の確認願いが提出された。文化教育課は平成９～11年の間、約168,000㎡の面積において試掘調査を実施した。調査は調査地が広域にわたることと現況農道や用水路の保全を前提としたため、８区（Ａ～Ｈ区）に区分し実施した。（第１章－「1．調査に至る経過」を参照）調査地の現況は、水田耕作地・畑地・果樹園・宅地などであり、そのほとんどが水田耕作地であった。そのため調査は稲の収穫後から田植えまでの間に実施した。

調査着手前には草刈りを実施し、調査地を踏査し表面採集を行った。試掘トレンチは周辺の地形などを考慮して合計498本を設定した。トレンチは基本的に長さ８ｍ、幅１ｍの長方形とし、地形によって長さは前後させ、柑橘類などの果樹園については樹木の保全のため樹木の根元から離れた場所で１ｍ四方程度の壺掘りとし、遺構や遺物が確認された場所では、一部拡張を行った。またトレンチ両端の各１ｍは、地山（基盤面）確認のため、10㎝程度掘り下げた。トレンチは第Ⅰ層と第Ⅱ層を重機で掘削し、以下は一層ずつ手掘りで進めた。埋め戻しは、耕作土が整備工事の際に必要となるため、他の土層と混じらないよう配慮し行った。

トレンチ番号の表記は、「Ｔ－Ａ１」のように「Ｔ－」に続けて区名と番号を付し、各区で通し番

表38　試掘調査一覧

区名	所　在　地	面積(㎡)	期　間	調査担当
Ａ区	松山市北梅本町甲1,101外	22,956	1998（平成10）年５月19日 ～同年６月16日	相原　浩二 山之内志郎
Ｂ区	松山市北梅本町甲1,089－１外	26,346	1998（平成10）年９月21日 ～同年10月29日	相原　浩二 山之内志郎
Ｃ区	松山市北梅本町甲1,563外	32,757	1998（平成10）年10月29日 ～1999（平成11）年２月25日	相原　浩二 山之内志郎
Ｄ区	松山市北梅本町甲1,324外	36,261	1998（平成10）年11月27日 ～1999（平成11）年２月16日	相原　浩二 山之内志郎
Ｅ区	松山市北梅本町乙697－１外	6,265	1998（平成10）年11月２日 ～1999（平成11）年２月19日	相原　浩二 山之内志郎
Ｆ区	松山市北梅本町甲3,427外	27,388	1997（平成９）年９月９日 ～同年10月31日	相原　浩二 小玉亜紀子
Ｇ区	松山市北梅本町甲3,381外	13,037	1997（平成９）年12月１日 ～同年12月16日	田城　武志 栗田　正芳
Ｈ区	松山市北梅本町甲3,416－１外	2,689	1998（平成10）年１月16日 ～同年１月28日	相原　浩二 小玉亜紀子

号とした。なおA～H区の所在地・面積・調査期間・調査担当者は表38のとおりである。

2．層位・遺構と遺物

(1) A区（第48～51図）

調査地は小野川の支流である悪社川や竹ケ谷川によって形成された扇状地の扇端付近に位置し、周辺には切池や大池などの溜め池が点在する。調査地は、すべてが水田耕作地であり、そのうち休耕田が数枚あったため、調査着手前に草刈りを実施した。地形は東から西への緩傾斜地で、最大高低差は約7.8mを測る。

調査は立会人のもとに申請地を確認後、トレンチは一区画の水田に1～2本の長方形トレンチを合計58本設定した。T－A52・53については、激しい湧水により壁面が崩壊する危険性があったため、1m四方のトレンチとし、測量と写真撮影を行い早急に埋め戻しを行った。

基本層位は、第1層暗灰色粘質土（耕作土）、第2層褐色シルト（やや粘質）、第3層黄灰色シルト（やや砂質・床土）、第4層灰橙色砂質土（旧耕作土）、第5層黄灰色微砂質土（旧床土）、第6層灰白色微砂質土、第7層灰褐色シルト（粒状の褐色土混じり）、第8層明黄灰色微砂質土（黄色強・地山）、第9層明橙色砂礫（灰色粘質土含む・地山）、第10層黄白色砂礫（地山）、第11層暗灰色砂質土（地山）である。

調査の結果、遺構・遺物ともに検出されなかった。

(2) B区（第52～54図）

調査地はA区の西に位置し、西側には大池がある。調査地は、すべてが水田耕作地である。地形は東から西への緩傾斜地で、最大高低差は約3.7mを測る。

調査は立会人のもとに申請地を確認後、トレンチは一区画の水田に1～2本の長方形トレンチを合計51本設定した。T－B29は配水管の埋設部分だけの1m四方の壺掘りを2か所で実施した。T－B12は周囲を用水路で囲まれていたため激しい湧水があり、壁面が一部崩壊したため拡張を行った。

基本層位は、第1層暗灰色粘質土（耕作土）、第2層灰白色シルト（床土①）、第3層橙色シルト（床土②）、第4層暗灰色シルト（旧耕作土）、第5層黄灰色シルト（旧床土）、第6層暗灰色粘質土（黒色に近い・地山）、第7層青灰色微砂質土（地山）、第8層明橙色微砂質土（地山）、第9層灰色砂礫（5㎝大の礫含む・地山）、第10層橙色砂礫（地山）である。

調査の結果、遺構・遺物ともに検出されなかった。

(3) C区（第55～62図）

調査地は2つの狭小な谷状地形が合流する谷部に位置し、中央部はなだらかな尾根が広がり、西側は枝朶下池から流れ出る悪社川により浸食を受けている。

調査地は、ほとんどが水田耕作地で、一部に果樹園と建物がある。地形は東から西に傾斜し、最大高低差は約13.4mを測る。

調査は立会人のもとに申請地を確認後、トレンチは一区画の水田または果樹園に1～3本の長方形トレンチを合計118本設定した。

基本層位は、第1層灰色粘質土（耕作土）、第2層橙色シルト（微砂含む・床土）、第3層黄灰色微

砂質土（礫含む）、第４層明灰色シルト（礫含む・砂っぽい）、第５層灰白色砂礫、第６層暗灰色粘質土、第７層黄白色微砂質土（礫含む・地山）、第８層橙色砂礫（礫石多い・地山）、第９層青灰色粘質土（やや微砂・地山）、第10層青灰色砂礫（地山）である。

遺構は溝１条（Ｔ－Ｃ80・81）、柱穴５基（Ｔ－Ｃ30・65）のほか遺物包含層を２か所（Ｔ－Ｃ47・92）で確認した。溝と柱穴は遺物がないため時期決定は難しいが、埋土から中世以降と考えられる。遺物包含層は弥生時代または古墳時代と考えられる。

遺物は弥生土器（Ｔ－Ｃ39・45・59・63・74・84・108）、須恵器（Ｔ－Ｃ５・７・12・14・17・25・31・32・33・34・35・40・42・47・53・54・74・91・104・106・108・112）、土師器（Ｔ－Ｃ６・19・21・30・33・45・59・65・66・74・77・79・81・106・112）、陶磁器（Ｔ－Ｃ63・101・118）、石器片（Ｔ－Ｃ19・31・38・58・68・69）がある。

以上のことから本調査地内には弥生・古墳時代及び中世以降の集落関連遺構の存在が推定される。これらの遺構と遺物を検出した地点については、盛り土を施して遺構が保存されることとなった。

（4）Ｄ区（第63～70図）

調査地はＣ区の南西側に隣接し、中央部と西部の間を悪社川が流れ、北池に注ぐ。調査地は東西に長い。東部は畑地と果樹園、中央部は水田耕作地、西部は水田耕作地と果樹園である。悪社川の両岸は護岸工事のため調査区外である。最大高低差は約18.1ｍを測る。

調査は立会人のもとに申請地を確認後、トレンチは一区画の水田または果樹園に１～３本の長方形トレンチを合計129本設定した。Ｔ－Ｄ38については一部拡張を行った。Ｔ－Ｄ48～50は遺物包含層が確認されたため「コ」の字形にトレンチを設定した。Ｔ－Ｄ70は柱穴が確認されたため柱間隔から推測して拡張を行った。なお、Ｔ－Ｄ１～７・Ｄ77～80の畑作地は昭和40年代に耕地整理が行われ、地山が段カットされていた。

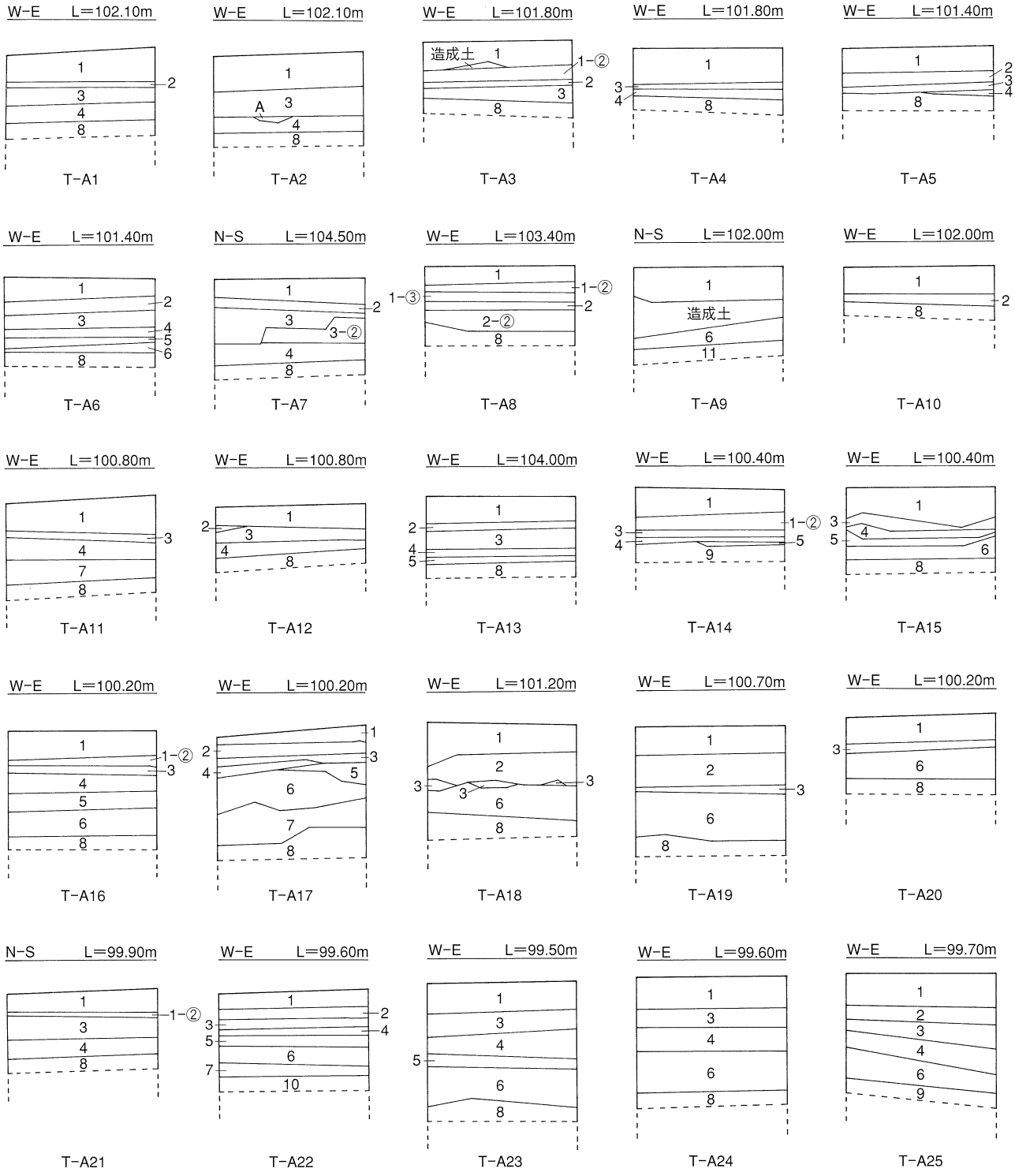
基本層位は、第１層灰色粘質土（耕作土）、第２層橙色シルト（微砂含む・床土）、第３層黄灰色微砂質土（礫含む）、第４層明灰色シルト（礫含む・砂っぽい）、第５層灰白色砂礫、第６層暗灰色粘質土、第７層黄白色微砂質土（礫含む・地山）、第８層橙色砂礫（人頭大の礫石含む・地山）、第９層青灰色粘質土、第10層青灰色微砂質土、第11層黒色粘質土、第12層灰色砂礫（地山）、第13層青灰色砂礫（地山）、第14層青灰色砂礫（黄色混じり・地山）である。

遺構は柱穴10基（Ｔ－Ｄ55・70・91）や石列（Ｔ－Ｄ８）のほか遺物包含層（Ｔ－Ｄ48・49）がある。柱穴は遺物がないため時期決定は難しいが、埋土から中世以降と考えられる。遺物包含層は弥生時代または古墳時代と考えられる。

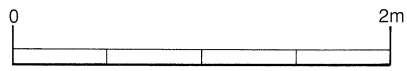
遺物は、弥生土器（Ｔ－Ｄ14・20・55）、須恵器（Ｔ－Ｄ10・12・19・23・26・33・37・38・42・44・46・50・53・58・96・100・104・111・122）、土師器（Ｔ－Ｄ11・13・21・24・25・28・29・30・31・33・41・42・43・45・46・48・51・53・54・59・104・105・108・111）、陶磁器（Ｔ－Ｄ107）、石器片（Ｔ－Ｄ１・70・78・89・99・103）がある。

以上のことから本調査地内には弥生・古墳時代及び中世以降の集落関連遺構の存在が推定される。調査は、遺構と遺物を検出した地点のうち、悪社川より東部は盛り土を施して遺構が保存される。西部（Ｔ－Ｄ８～31・Ｄ38～59・Ｄ127～129）は地山を切除することにより遺構が消滅するため、事前の本格調査を実施した。本書の「第３章　北梅本北池遺跡」として報告する。

第48図　A区トレンチ配置図

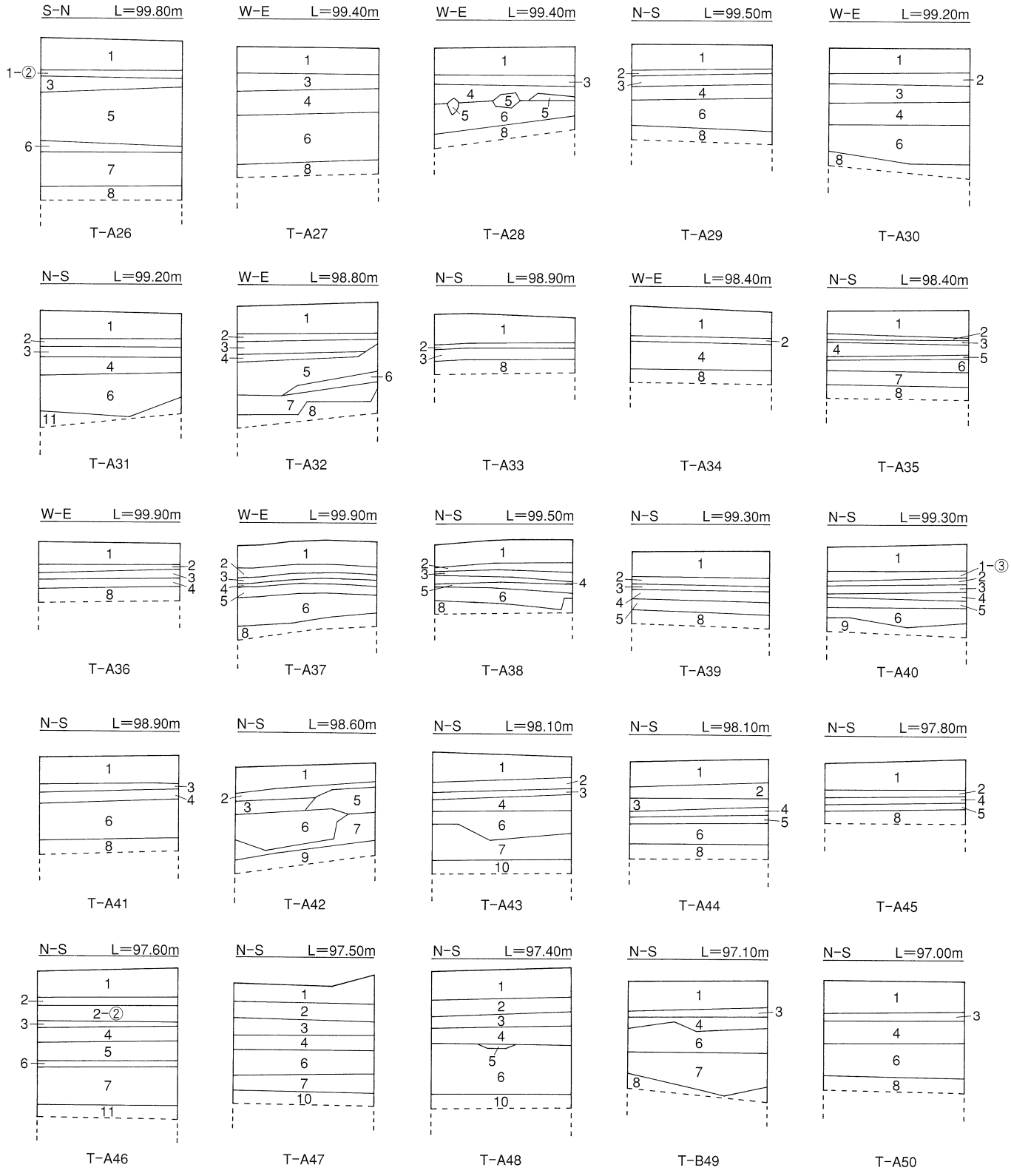


1. 暗灰色粘質土（耕作土）
1-②. 明灰色粘質土（耕作土）
1-③. 灰白色粘質土（耕作土）
2. 褐色シルト（やや粘質）
2-②. 2に礫石混
3. 黄灰色シルト（やや砂質、床土）
3-②. 3に礫石混
4. 灰橙色砂質土（旧耕作土）
5. 黄灰色微砂質土（旧床土）
6. 灰白色微砂質土
7. 灰褐色シルト（粒状の褐色土混）
8. 明黄灰色微砂質土（黄色強・地山）
9. 明橙色砂礫（灰色粘質土含む・地山）
10. 黄白色砂礫（地山）
11. 暗灰色粘質土（地山）
A. 灰褐色シルト

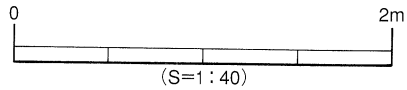


（S=1：40）

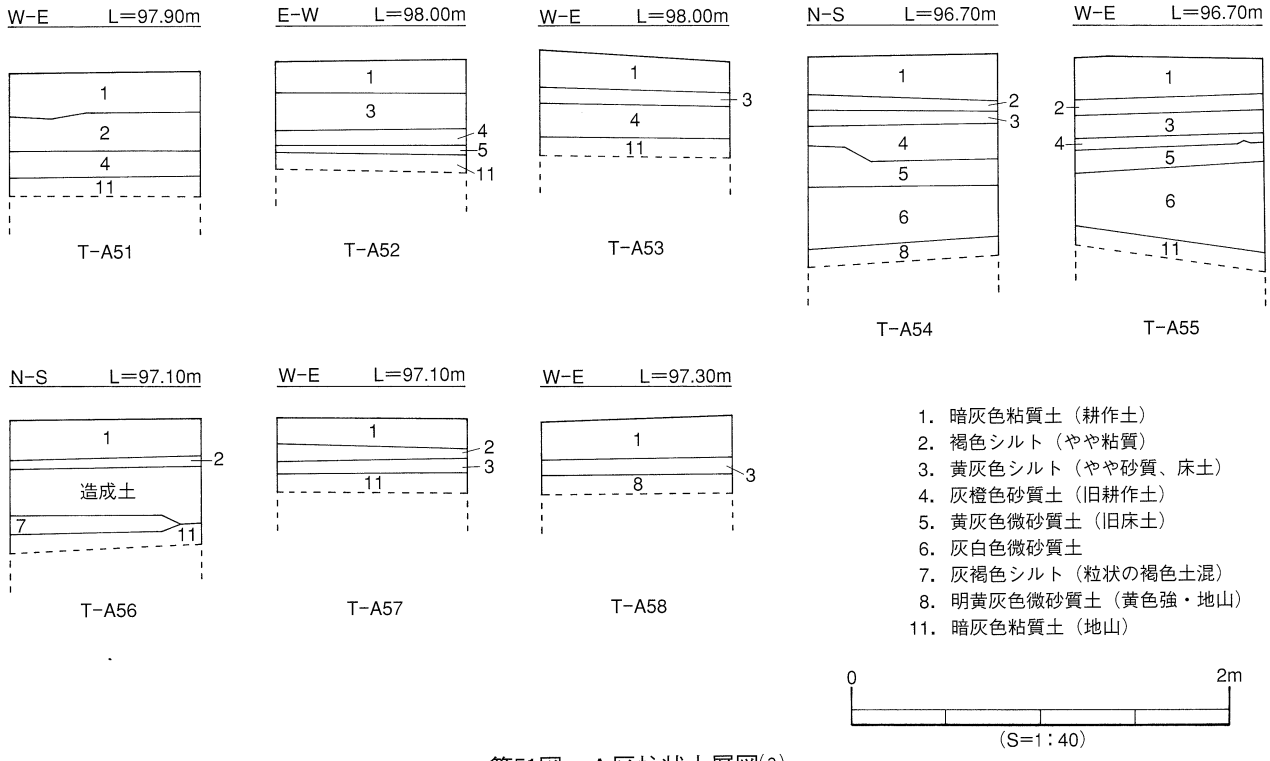
第49図　A区柱状土層図(1)



1. 暗灰色粘質土（耕作土）
1-②. 明灰色粘質土（耕作土）
1-③. 灰白色粘質土（耕作土）
2. 褐色シルト（やや粘質）
2-②. 2に礫石混
3. 黄灰色シルト（やや砂質、床土）
4. 灰橙色砂質土（旧耕作土）
5. 黄灰色微砂質土（旧床土）
6. 灰白色微砂質土
7. 灰褐色シルト（粒状の褐色土混）
8. 明黄灰色微砂質土（黄色強・地山）
9. 明橙色砂礫（灰色粘質土含む・地山）
10. 黄白色砂礫（地山）
11. 暗灰色粘質土（地山）



第50図　A区柱状土層図(2)



第51図　A区柱状土層図(3)

(5) E区（第71～73図）

調査地は東西を丘陵に挟まれた谷部に位置する。調査地の現況は畑地または果樹園である。東側には農道と水田耕作地を挟んで悪社川が流れ枝朶下池に注ぐ。この農道は平成6年度に農道拡幅工事に伴い発掘調査が行われ「北梅本悪社谷遺跡」として既に報告されている。（梅木謙一他1998『小野川流域の遺跡Ⅱ』松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター）また調査地の北西斜面には「悪社谷1号窯」がある。地形は北から南への緩傾斜地で、最大高低差は約8.0mを測る。

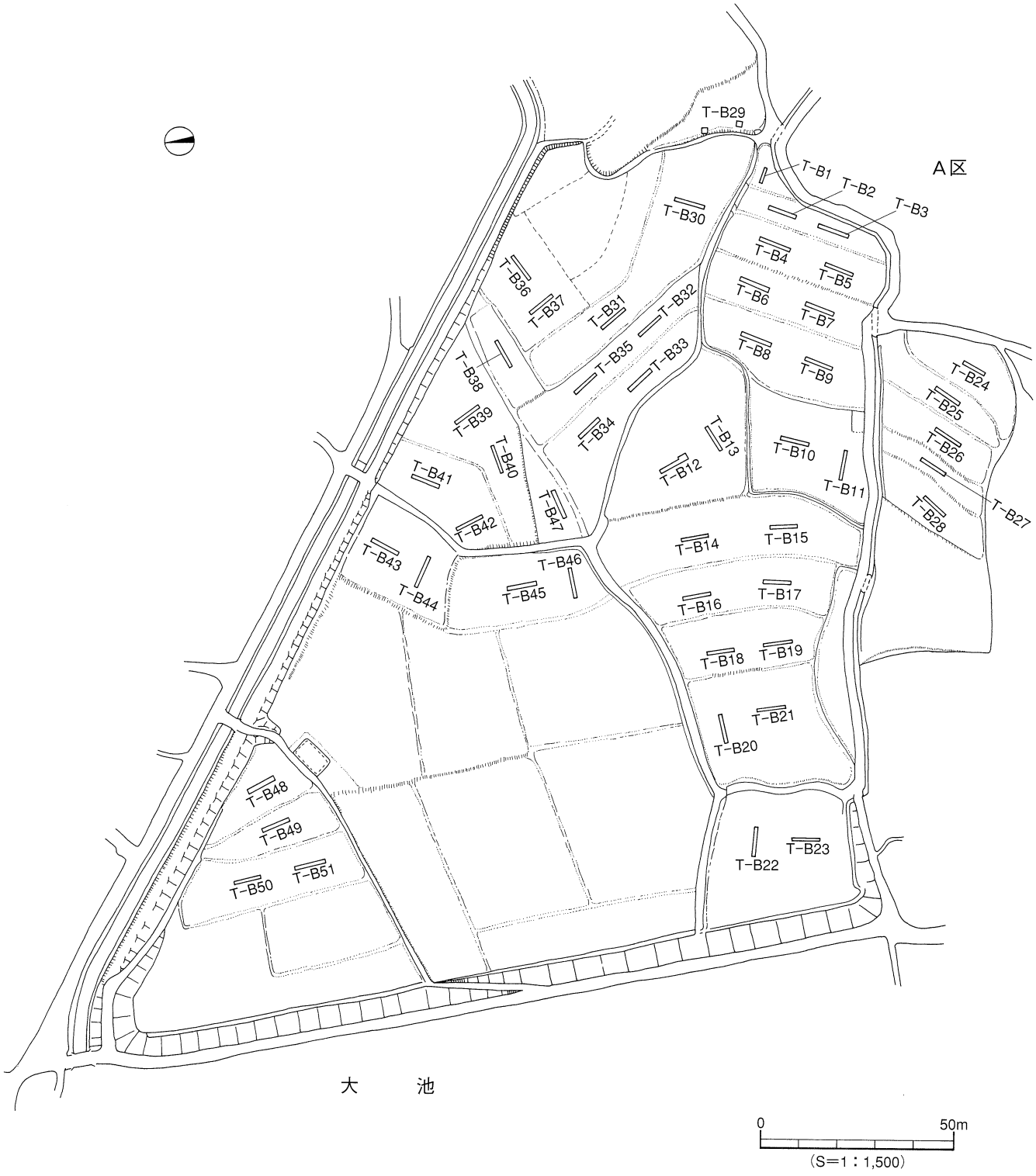
調査は立会人のもとに申請地を確認後、トレンチを合計29本設定した。T－E9は西側斜面に悪社谷1号窯と同様の窯址があることが推測されたため、丘陵に沿って長さ50m、幅1mの長いトレンチを設定した。T－E6・8・13・29は畑地であり樹木の保全を考え、1m四方の壺掘りとした。

基本層位は、第1層暗灰色土（耕作土）、第2層黄色土、第3層明灰色土、第4層明黄色土、第5層青灰色粘質土（遺構埋土）、第6層灰色土（遺構埋土）、第7層黒褐色土（遺構埋土）、第8層黄色土（地山）である。

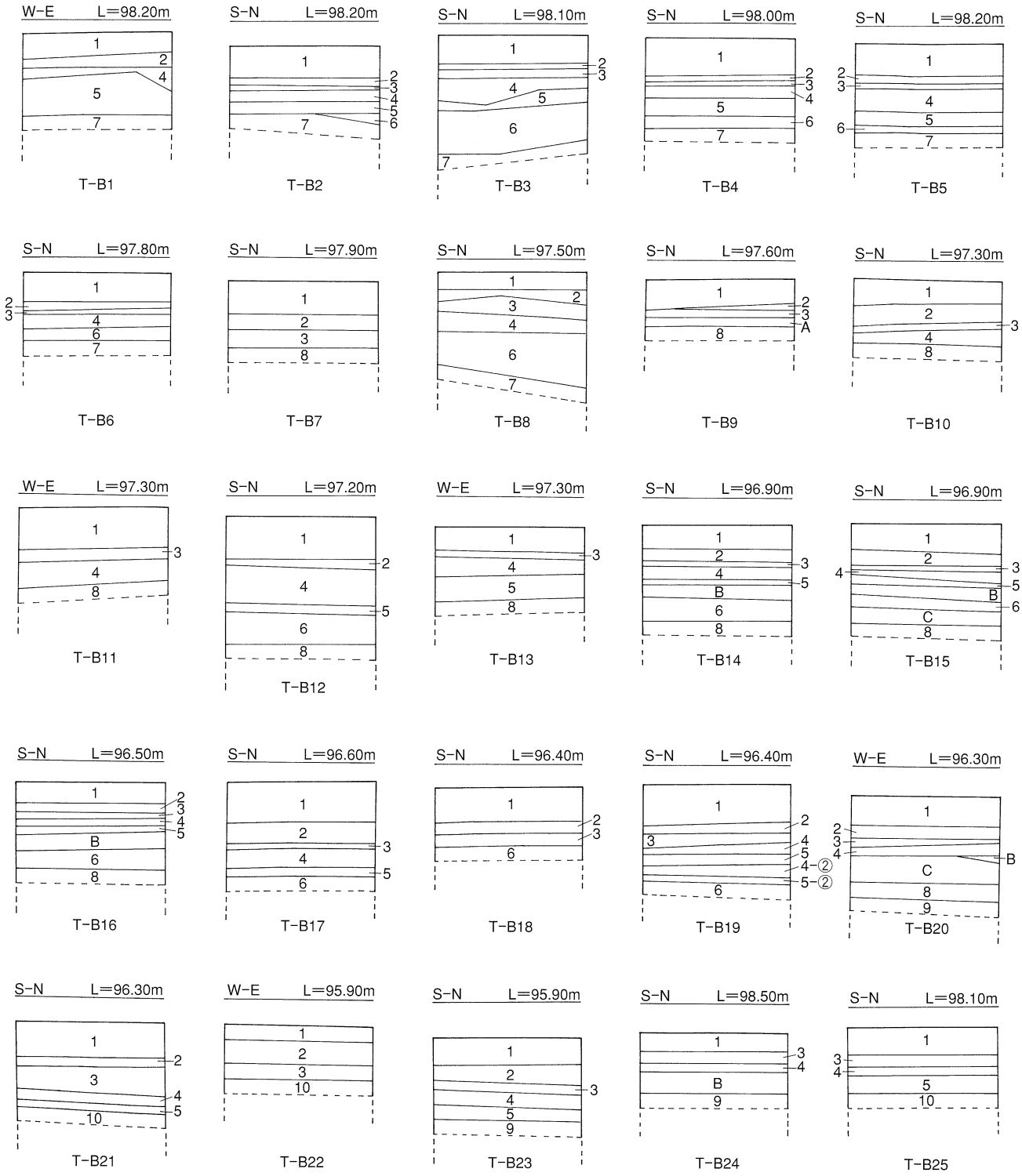
遺構は、須恵器窯の灰原1か所（T－E9）、土坑3基（T－E9）、溝12条（T－E1・5・7・9・12・14・19・20・21・22・25・26）である。これらのうちT－E12・14・19・20・21・22・25・26については埋土や方向性から同一の溝と考えられる。

遺物は、須恵器（T－E1・2・3・4・5・7・9・12・16・21）、土師器（T－E9）、陶磁器（T－E9・12）のほか、窯壁片（T－E9）や石器片（T－E9）が出土している。

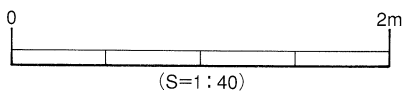
以上のことから、本調査地内には古墳時代から中・近世に至る、生産関連遺構や集落関連遺構が遺存しているものと思われる。



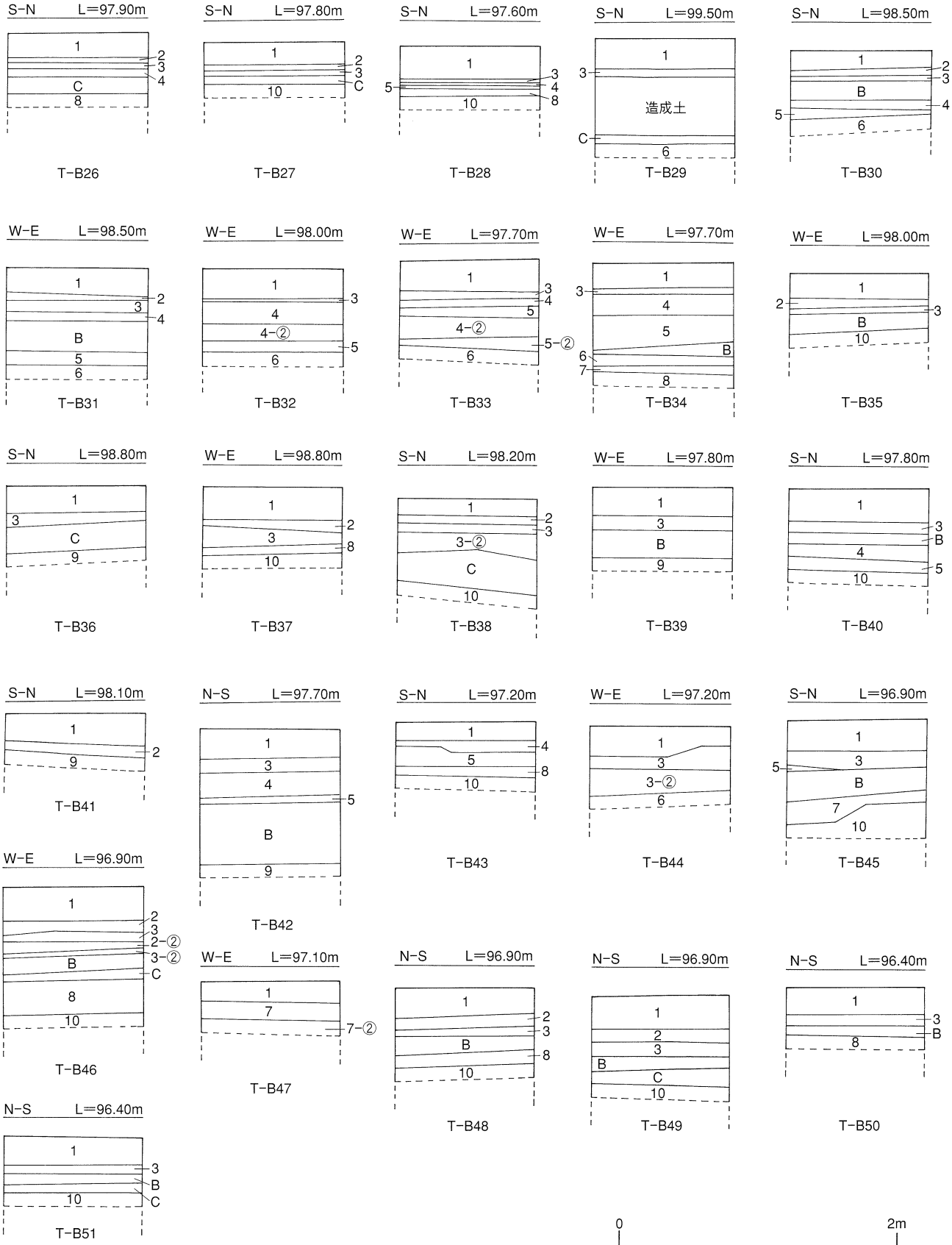
第52図　B区トレンチ配置図



1. 暗灰色粘質土（耕作土）
2. 灰白色シルト（床土①）
3. 橙色シルト（床土②）
4. 暗灰色シルト（旧耕作土）
4-②. 暗灰色シルト（旧耕作土、やや砂質）
5. 黄灰色シルト（旧床土）
5-②. 黄灰色シルト（旧床土、やや砂質）
6. 暗灰色粘質土（黒色に近い・地山）
7. 青灰色微砂質土（地山）
8. 明橙色微砂質土（地山）
9. 灰色砂礫（5cm大の礫含む・地山）
10. 橙色砂礫（地山）
A. 灰褐色粗砂質土（粒状の褐色土を含む）
B. 灰白色シルト
C. 灰白色粘質土



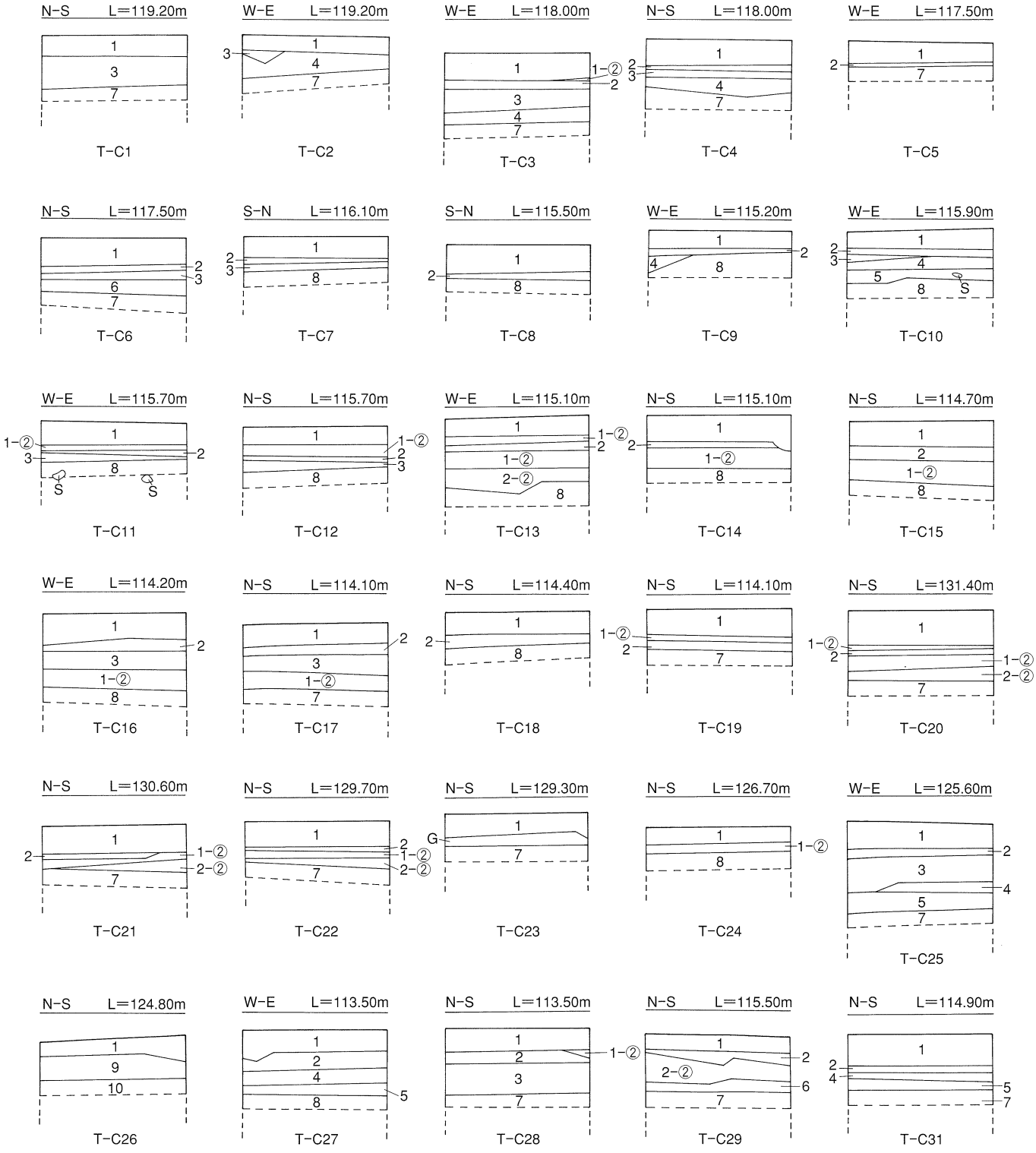
第53図　B区柱状土層図(1)



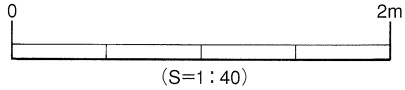
1. 暗灰色粘質土（耕作土）
2. 灰白色シルト（床土①）
2-②. 灰白色シルト（床土①・2よりやや淡い）
3. 橙色シルト（床土②）
3-②. 橙色シルト（床土②・3よりやや淡い）
4. 暗灰色シルト（旧耕作土）
4-②. 暗灰色シルト（旧耕作土、やや砂質）
5. 黄灰色シルト（旧床土）
5-②. 黄灰色シルト（旧床土、やや砂質）
6. 暗灰色粘質土（黒色に近い・地山）
7. 青灰色微砂質土（地山）
7-②. 青灰色微砂質土（礫混じり・地山）
8. 明橙色微砂質土（地山）
9. 灰色砂礫（5cm大の礫含む・地山）
10. 橙色砂礫（地山）
B. 灰白色シルト
C. 灰白色粘質土

第54図　B区柱状土層図(2)

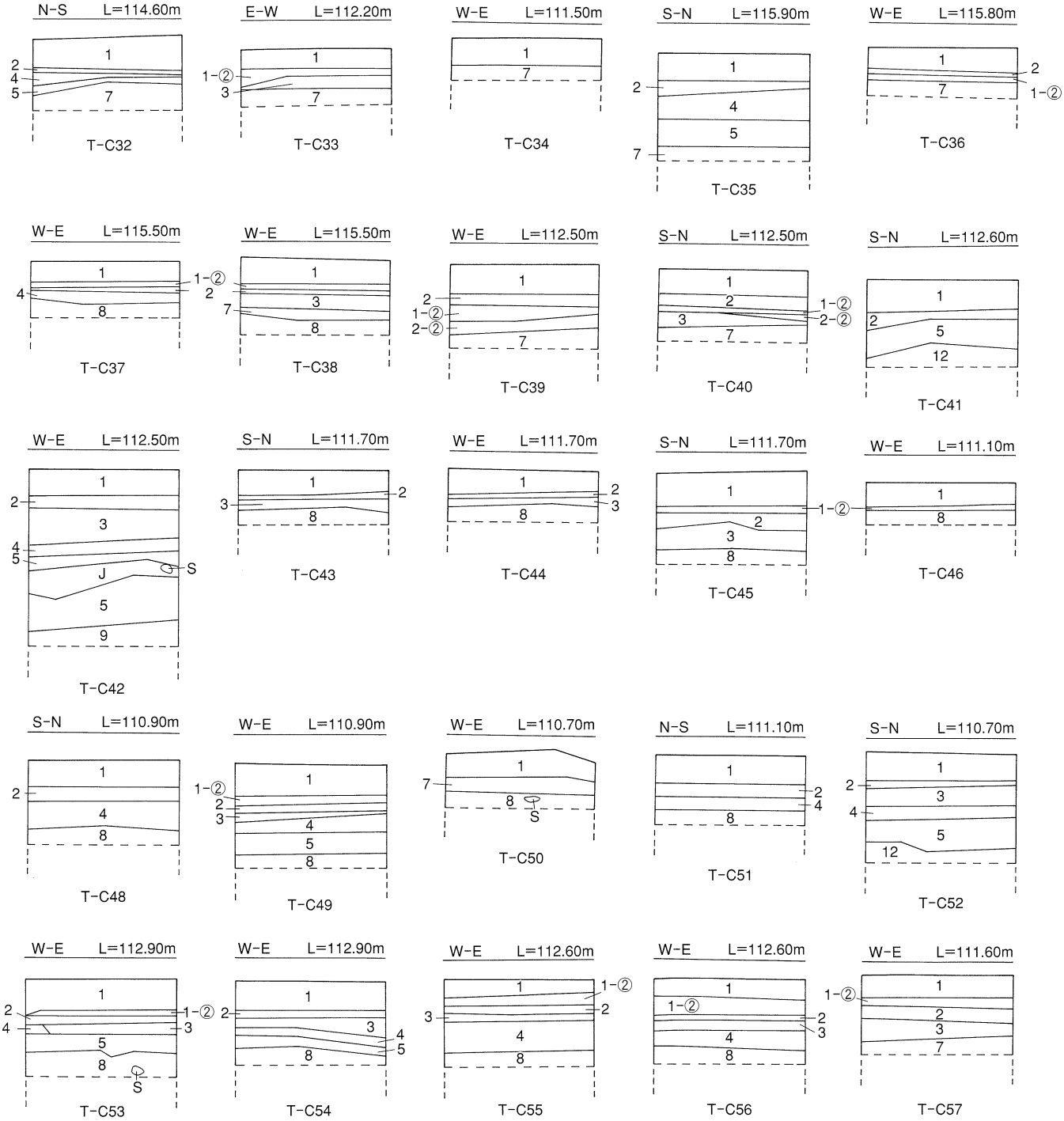
第55図　C区トレンチ配置図



1. 灰色粘質土（耕作土）
2. 橙色シルト（微砂含・床土）
1-②. 灰白色シルト（旧耕作土）
2-②. 橙白色シルト（旧床土）
3. 黄灰色微砂質土（礫含）
4. 明灰色シルト（礫含・砂っぽい）
5. 灰白色砂礫
6. 暗灰色粘質土
7. 黄白色微砂質土（礫含・地山）
8. 橙色砂礫（礫石多・地山）
9. 青灰色粘質土（やや微砂・地山）
10. 青灰色砂礫（地山）
G. 褐色粗砂



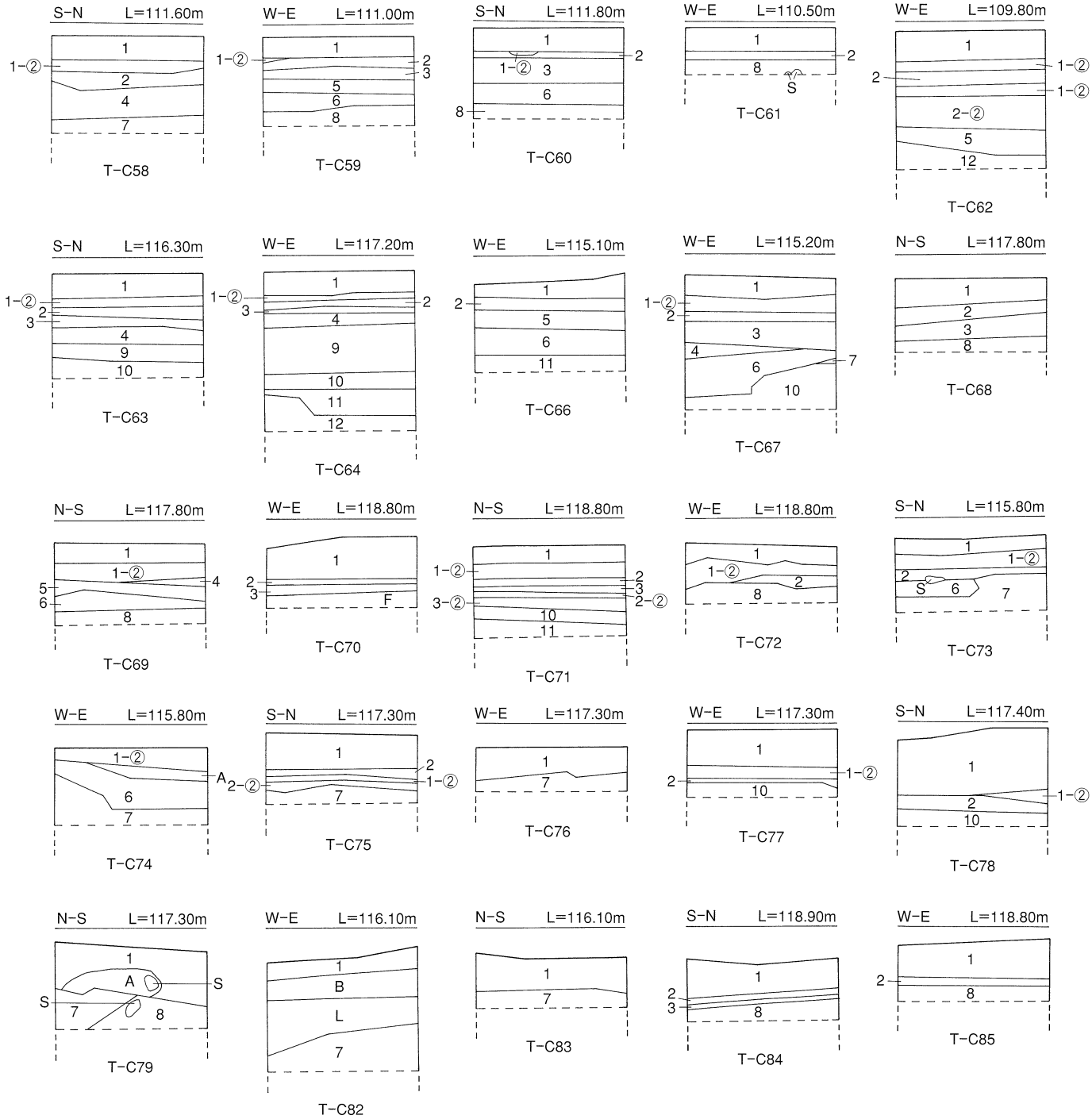
第56図　C区柱状土層図(1)



1. 灰色粘質土（耕作土）
2. 橙色シルト（微砂含・床土）
1-②. 灰白色シルト（旧耕作土）
2-②. 橙白色シルト（旧床土）
3. 黄灰色微砂質土（礫含）
4. 明灰色シルト（礫含・砂っぽい）
5. 灰白色砂礫
6. 暗灰色粘質土
7. 黄白色微砂質土（礫含・地山）
8. 橙色砂礫（礫石多・地山）
9. 青灰色粘質土（やや微砂・地山）
12. 灰色砂礫（地山）
J. 黄色砂礫

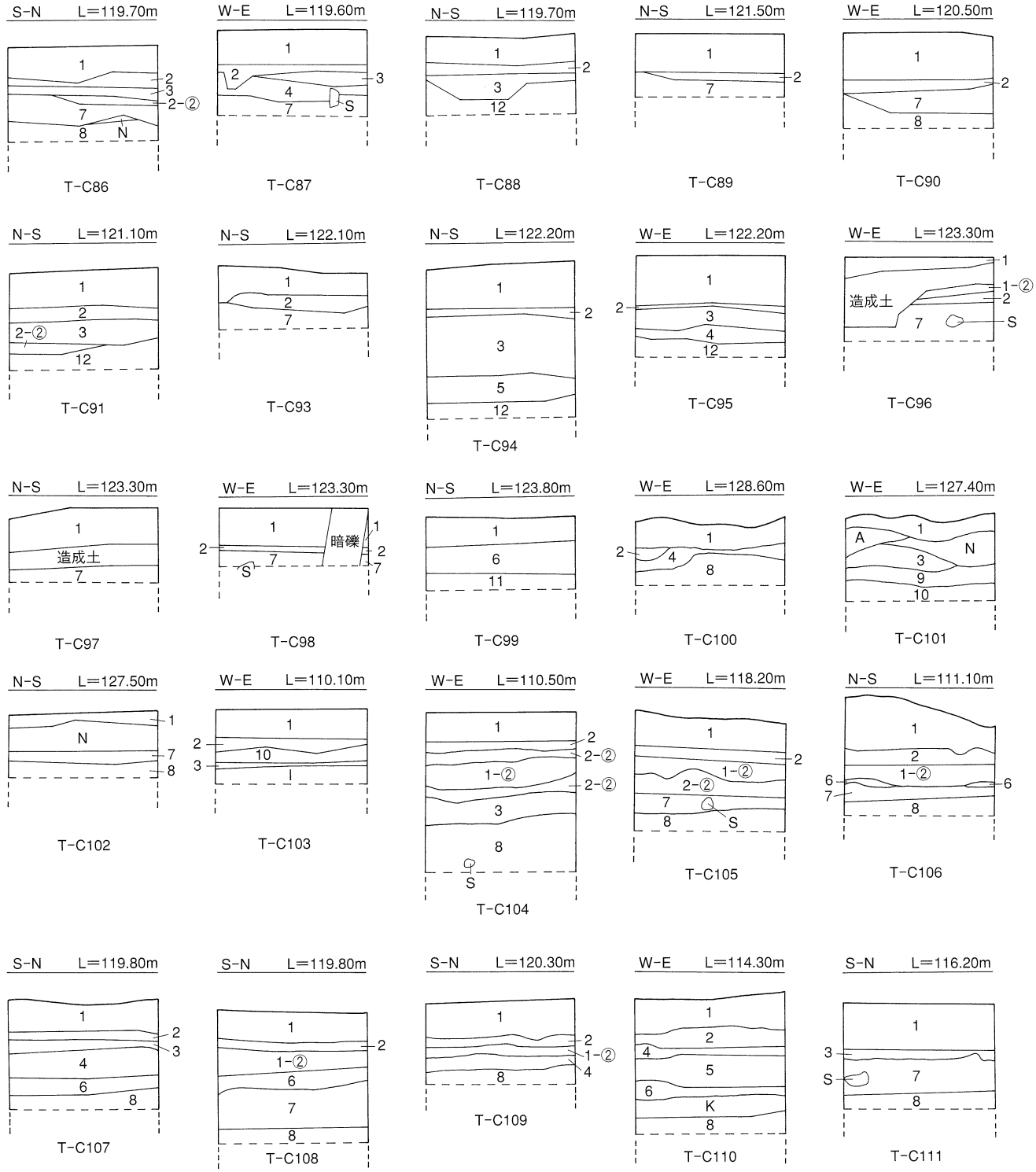
0 2m
（S=1：40）

第57図　C区柱状土層図(2)



1. 灰色粘質土（耕作土）
2. 橙色シルト（礫砂含・床土）
1-②. 灰白色シルト（旧耕作土）
1-②. 橙白色シルト（旧床土）
3. 黄白色微砂質土（礫含）
3-②. 黄灰色微砂質土
4. 明灰色シルト（礫含・砂っぽい）
5. 灰白色砂礫
6. 暗灰色粘質土
7. 黄白色微砂質土（礫含・地山）
8. 橙色砂礫（礫石多・地山）
9. 青灰色粘質土（やや微砂・地山）
10. 青灰色砂礫（地山）
11. 黒色粘質土
12. 灰色砂礫（地山）
A. 1十黄色土
B. 1十黄色砂礫（やや粗）
F. 褐色シルト
L. 灰色シルト（やや粘質）

第58図　C区柱状土層図(3)

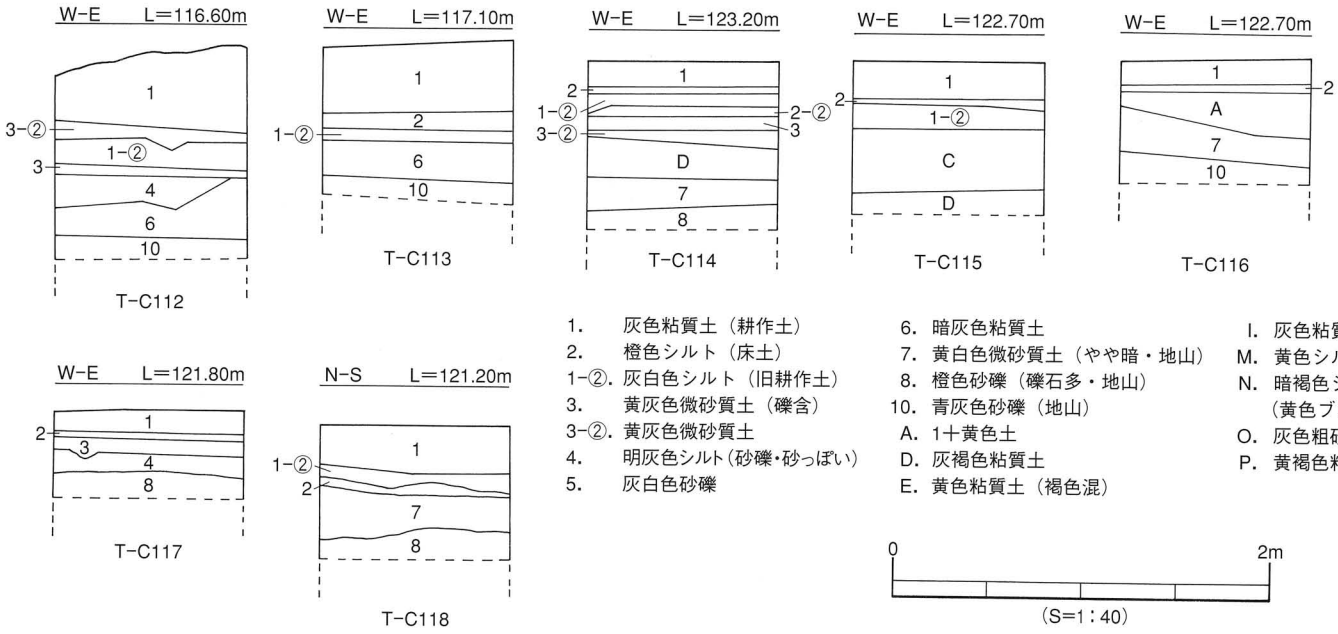


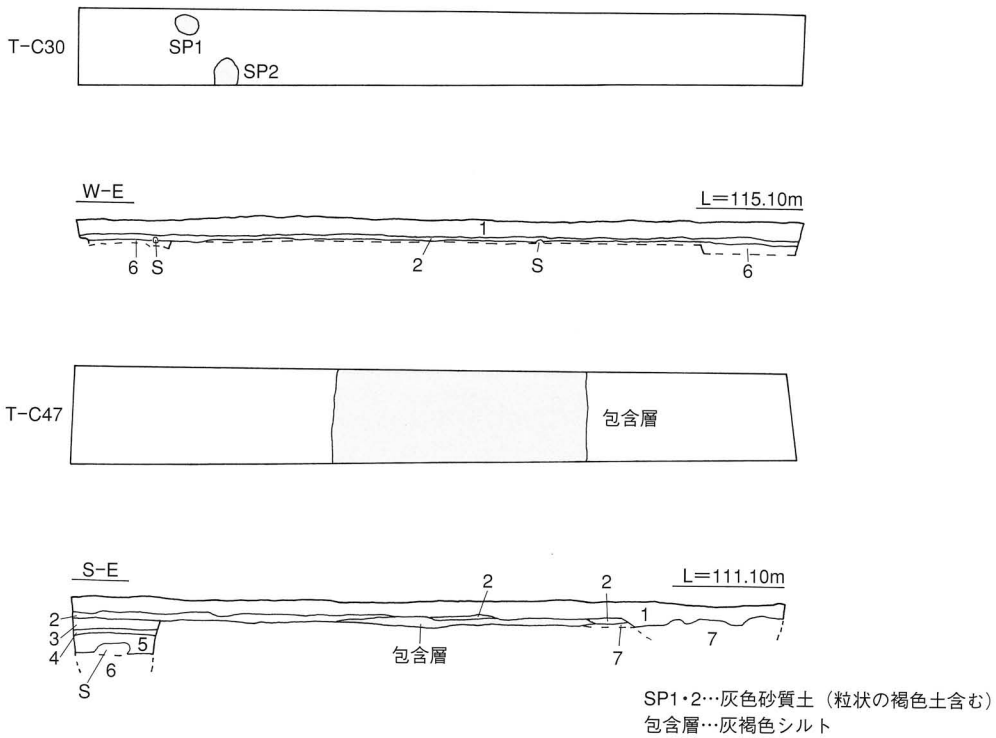
1. 灰色粘質土（耕作土）
2. 橙色シルト（礫含・床土）
1-②. 灰白色シルト（旧耕作土）
2-②. 橙白色シルト（旧床土）
3. 黄灰色微砂質土（礫含）
4. 明灰色シルト（礫含・砂っぽい）
5. 灰白色砂礫
6. 暗灰色粘質土
7. 黄白色微砂質土（礫含・地山）
8. 橙色砂礫（礫石多・地山）
11. 黒色粘質土
12. 灰色砂礫（地山）

A. 1十黄色土
C. 暗灰色砂礫
F. 青灰色粘質土（礫含）
H. 青灰色粘質土
I. 灰色粘土
K. 白色粗砂
N. 褐色シルト（やや粘質）

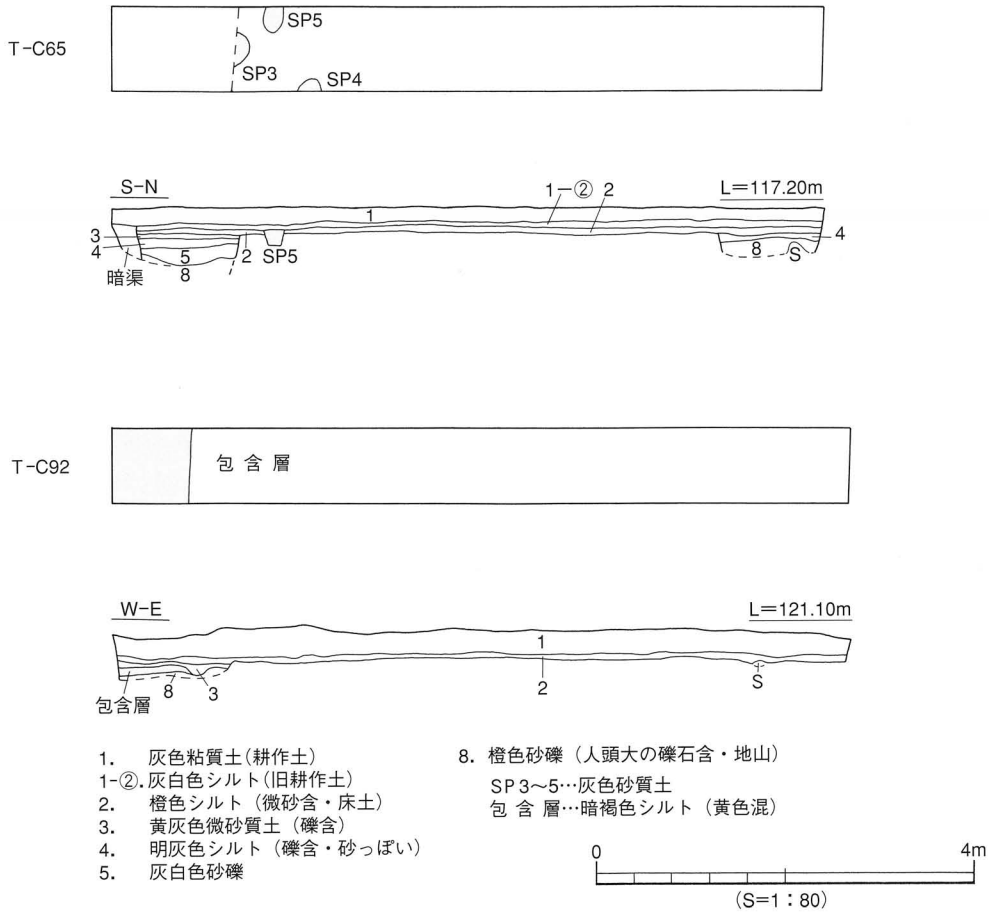
0 2m
（S=1：40）

第59図　C区柱状土層図(4)





第60図　C区柱状土層図(5)・トレンチ測量図・土層図(1)



第61図　C区トレンチ測量図・土層図(2)

本調査地は地山を切除して工事が行われることから遺構が消滅するため、事前の本格調査を実施した。本書の「第２章　北梅本悪社谷遺跡２次調査地」として報告する。

(6) Ｆ区（第74～80図）

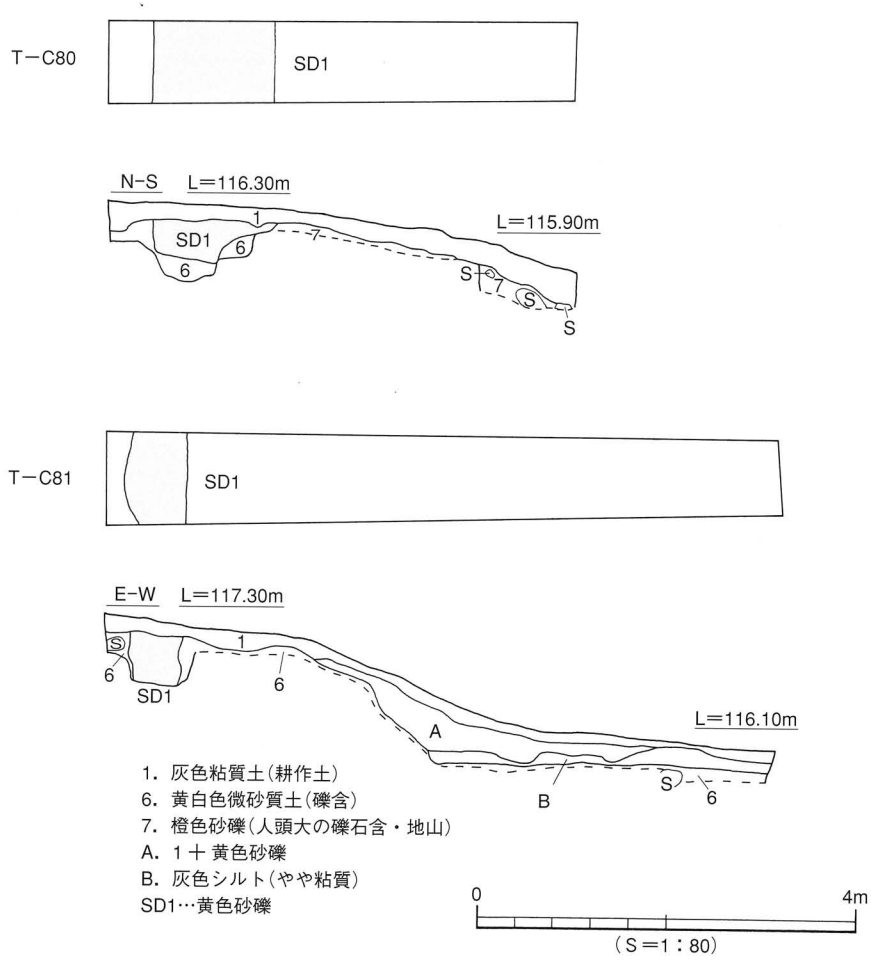
調査地は北部と南東部を丘陵に挟まれ、北部には竹ケ谷川が西流する扇状地状に開けた水田耕作地である。地形は北東から南西への緩傾斜地で、最大高低差は約8.3ｍを測る。

調査は立会人のもとに申請地を確認後、一区画に１～５本のトレンチで合計88本設定した。トレンチは長さ４～59m、幅１ｍを測る。

基本層位は、第１層灰茶褐色粘質土（耕作土）、第２層明黄褐色粘質土（床土）、第３層黄褐色粘質土、第４層黄灰色粘質土、第５層灰褐色粘質土、第６層灰色粘質土、第７層黄褐色粘質土（地山）、第８層茶褐色粘質土（地山）、第９層暗灰色粘質土（地山）、第10層灰黄褐色粘質土（地山）である。

遺構は、弥生時代から近現代の遺構で、土坑11基（Ｔ－Ｆ59・65・69・75・78・79・81・82）、溝14条（Ｔ－Ｆ21・24・63・64・65・68・70・71・80）、柱穴４基（Ｔ－Ｆ11・13）、性格不明遺構６基（Ｔ－Ｆ43・49・50・64・73）を検出し、遺物包含層を５か所（Ｔ－Ｆ67・68・72・77・82）で確認した。またＴ－Ｆ69付近には塚１基がある。

遺物は弥生土器（Ｔ－Ｆ７・10・12・29・49・55・56・66・83・85・86）、須恵器（Ｔ－Ｆ10・12・



第62図　C区トレンチ測量図・土層図(3)

32・55・56・66・84)、土師器（T－F８・55・56・66・83)、陶磁器（T－F12・20・24・31・32・33・34・56・66・69・84)、瓦（T－F69)、石器片（T－F28・68）が出土している。

以上のことから、本調査地内には弥生時代から近現代に至る遺構や遺物が遺存し、集落関連遺構が存在していたことが判明した。

本調査地はT－F56～58の東部及びT－F66～79付近が地山を切除されることから遺構が破壊されるため、事前の本格調査を実施した。本書の「第４章　北梅本太尺寺遺跡」として報告する。

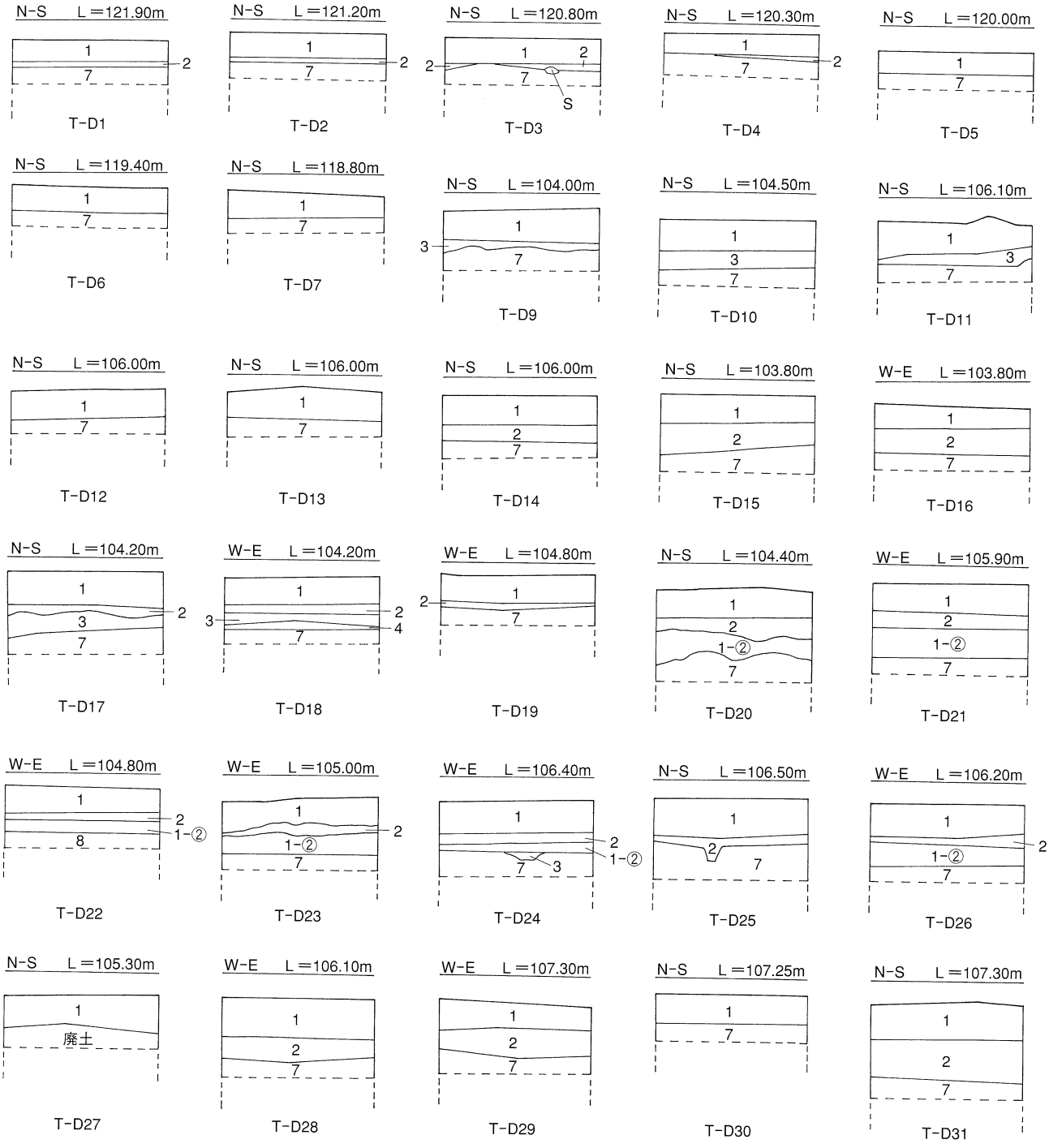
(7) G区（第81・82図）

調査地は北部をF区とH区に接し、東部には新池があり、北部には竹ケ谷川が西流する。調査地の現況は水田耕作地及び畑地である。地形は東から西への緩傾斜地で、最大高低差は約3.3mを測る。

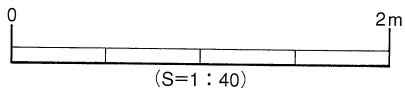
調査は立会人のもとに申請地を確認後、トレンチは一区画に１本長さ11～25m、幅１mの長い長方形トレンチを合計12本設定した。

基本層位は、第１層明灰色粘質土（耕作土)、第２層黄色粘質土（床土)、第３層灰色粘質土、第４

第63図　D区トレンチ配置図

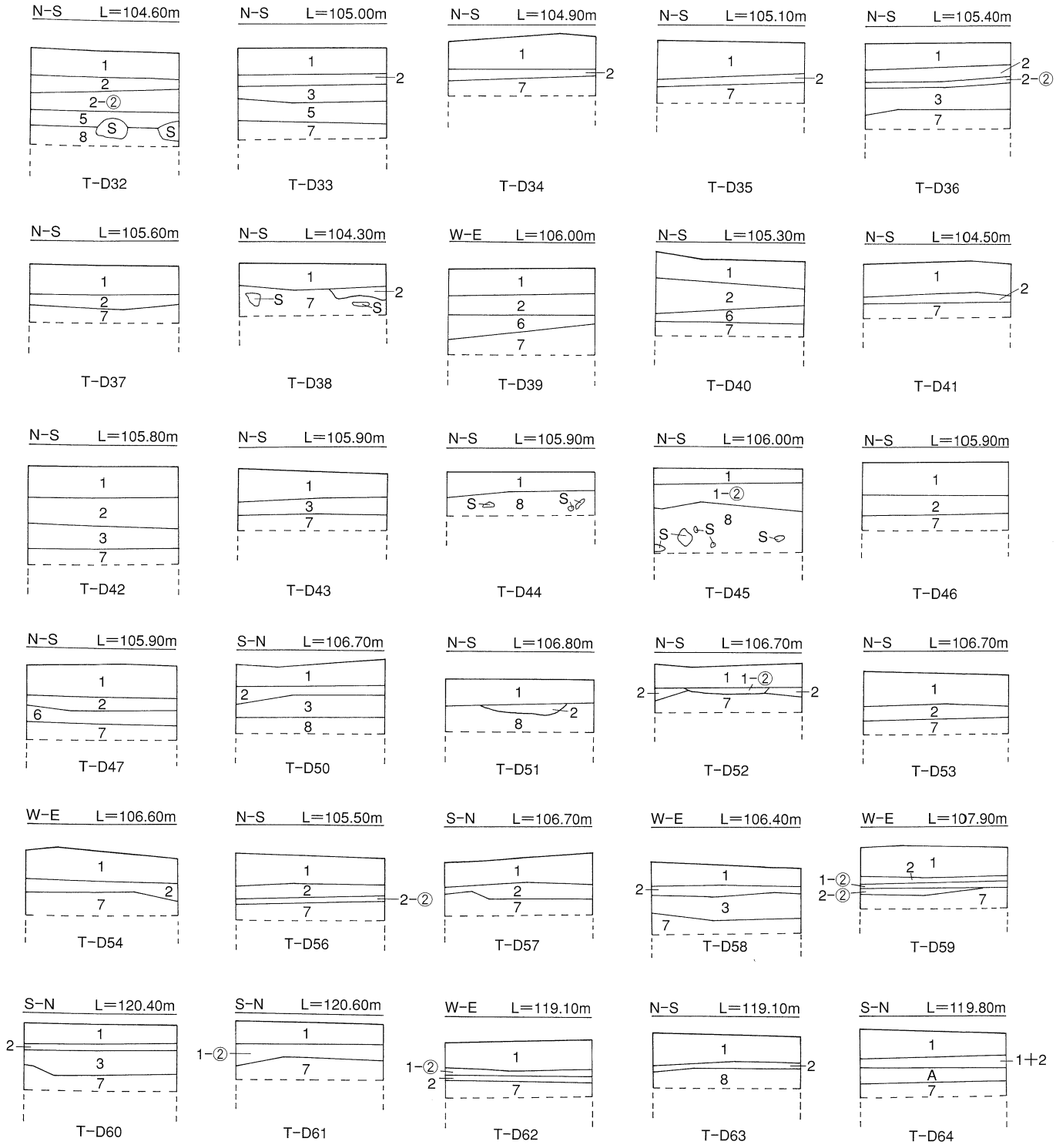


1. 灰色粘質土(耕作土)
1-②. 灰白色シルト(旧耕作土)
2. 橙色シルト(微砂含・床土)
3. 黄灰色微砂質土(礫含)
7. 黄白色微砂質土(礫含・地山)
8. 橙色砂礫(人頭大の礫石含・地山)



(S=1：40)

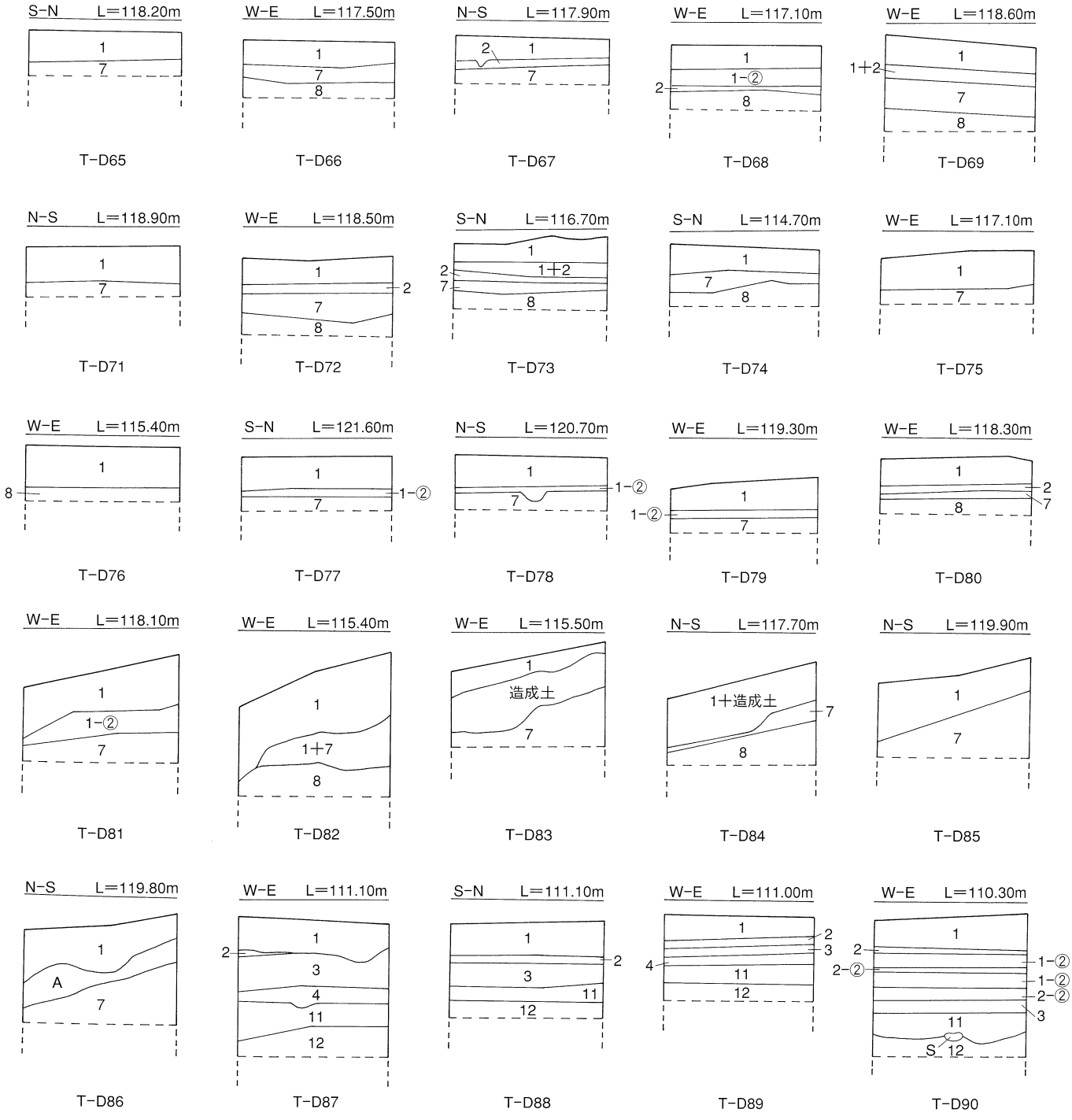
第64図　D区柱状土層図(1)



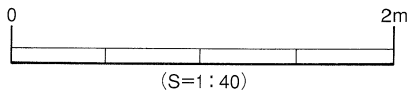
1. 灰色粘質土（耕作土）
1-②. 灰白色シルト（旧耕作土）
1+2. 1に2が混入
2. 橙色シルト（微砂含・床土）
2-②. 2よりやや明（旧床土）
3. 黄灰色微砂質土（礫含）
5. 灰白色砂礫
6. 暗灰色粘質土
7. 黄白色微砂質土（礫含・地山）
8. 橙色砂礫（人頭大の礫石含・地山）
A. 黄灰色土

0 2m
(S=1:40)

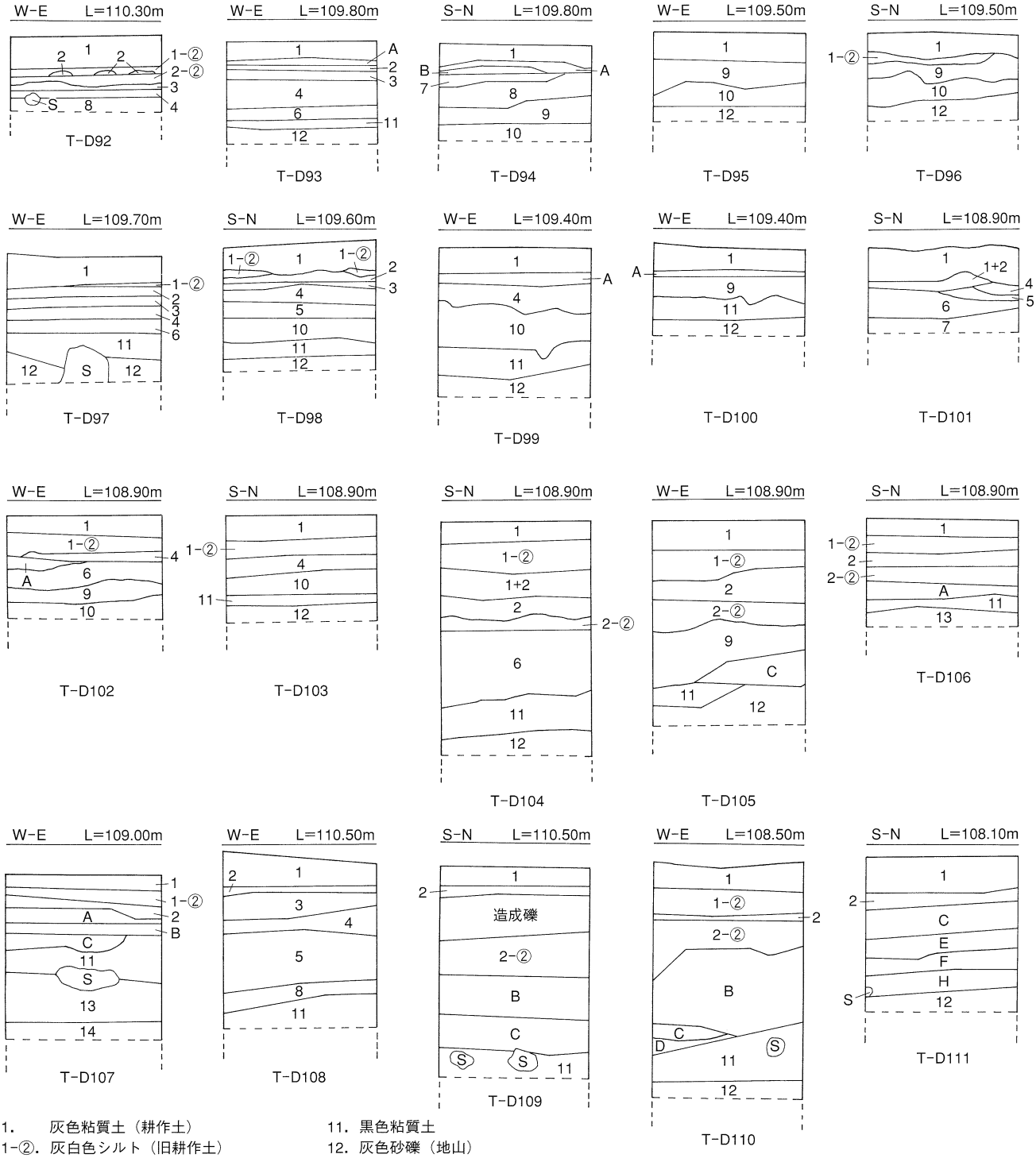
第65図　D区柱状土層図(2)



1. 灰色粘質土（耕作土）
1-②. 灰白色シルト（旧耕作土）
1十造成土. 1に造成土が混入
1十2. 1に2が混入
1十7. 1に7が混入
2. 橙色シルト（微砂含・床土）
2-②. 2よりやや明（旧床土）
3. 黄灰色微砂質土（礫含）
4. 明灰色シルト（礫含・砂っぽい）
7. 黄白色微砂質土（礫含・地山）
8. 橙色砂礫（人頭大の礫石含・地山）
11. 黒色粘質土
12. 灰色砂礫（地山）
A. 黄灰色土

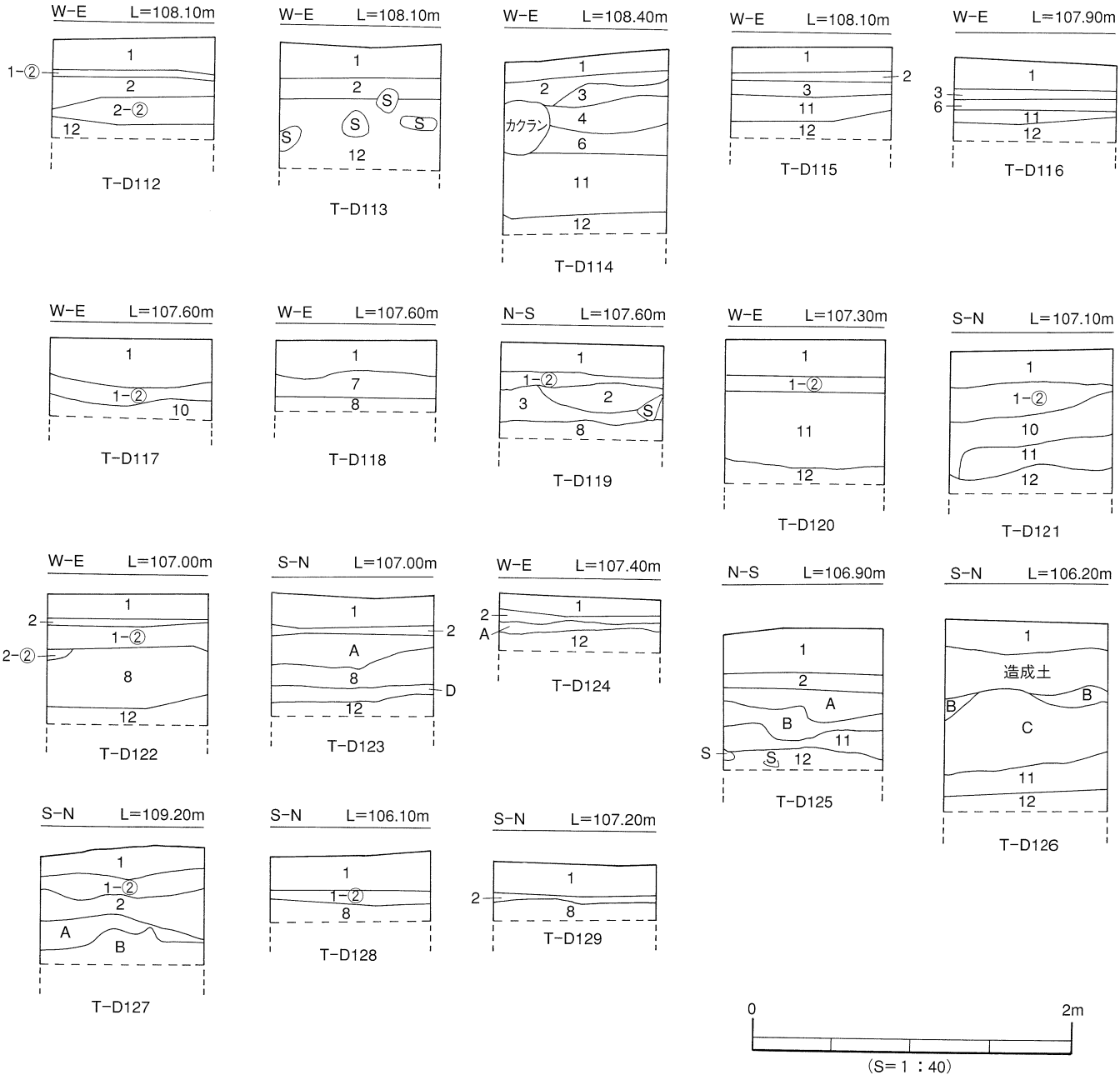


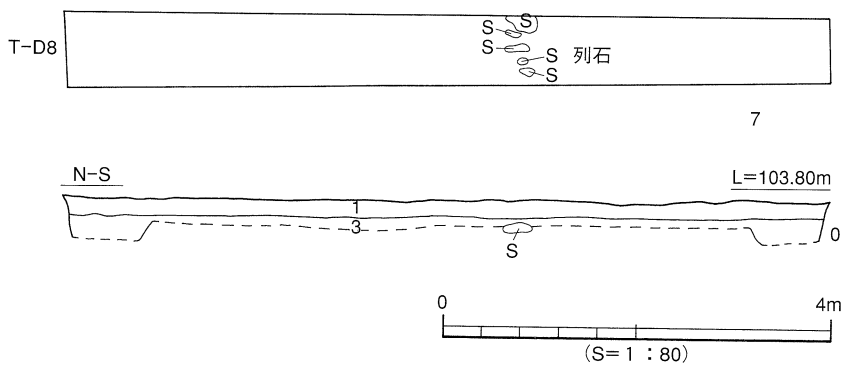
第66図　D区柱状土層図(3)



1. 灰色粘質土（耕作土）
1-②. 灰白色シルト（旧耕作土）
1+2. 1に2が混入
2. 橙色シルト（微砂含・床土）
2-②. 2よりやや明（旧床土）
3. 黄灰色微砂質土（礫含）
4. 明灰色シルト（礫含・砂っぽい）
5. 灰白色砂礫
6. 暗灰色粘質土
7. 黄白色微砂質土（礫含・地山）
8. 橙色砂礫（人頭大の礫石含・地山）
9. 青灰色粘質土
10. 青灰色微砂質土
11. 黒色粘質土
12. 灰色砂礫（地山）
13. 青灰色砂礫（地山）
14. 青灰色砂礫（黄色混・地山）
A. 黄灰色土
B. 灰白色微砂質土
C. 灰色粗砂質土
D. 橙色粗砂質土
E. 橙灰色粗砂質土（礫含）
F. 灰色粘質土
H. 灰色粗砂質土

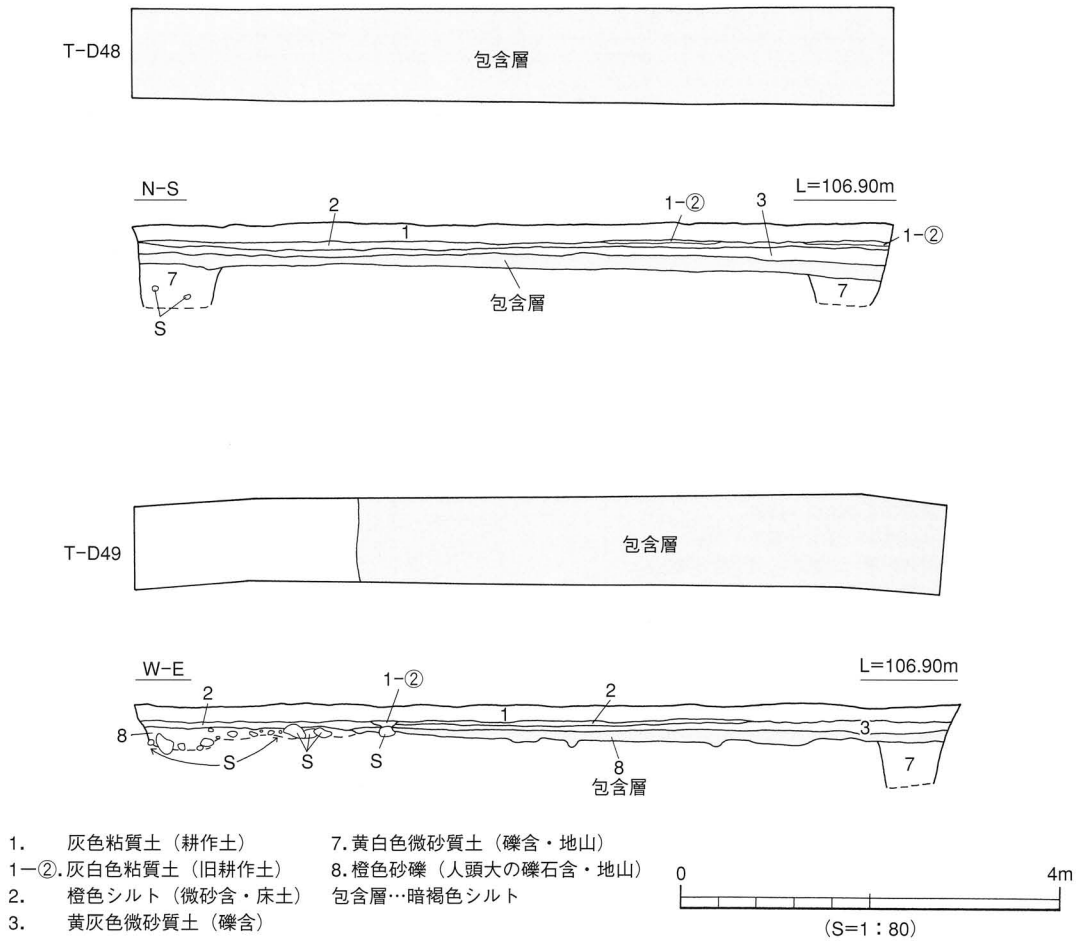
第67図　D区柱状土層図(4)





1. 灰色粘質土（耕作土）
1—②. 灰白色シルト（旧耕作土）
2. 橙色シルト（微砂含・床土）
2—②. 2よりやや明（旧床土）
3. 灰色微砂質土（礫含）
4. 明灰色シルト（礫含・砂っぽい）
6. 暗灰色粘質土
7. 黄白色微砂質土（礫含・地山）
8. 橙色砂礫（人頭大の礫石含・地山）
10. 青灰色微砂質土
11. 黒色粘質土
12. 灰色砂礫（地山）
A. 黄灰色土
B. 灰白色微砂質土
C. 灰色粗砂質土
D. 橙色粗砂質土

第68図　D区柱状土層図(5)・トレンチ測量図・土層図(1)



第69図　D区トレンチ測量図・土層図(2)

層灰黄色粘質土、第５層浅黄色粘質土、第６層褐灰色粘質土、第７層暗灰色粘質土、第８層黄灰色粘質土、第９層灰褐色粘質土、第10層黄白色粘質土（地山）である。

調査の結果、遺構・遺物ともに検出されなかった。

(8) H区（第83・84図）

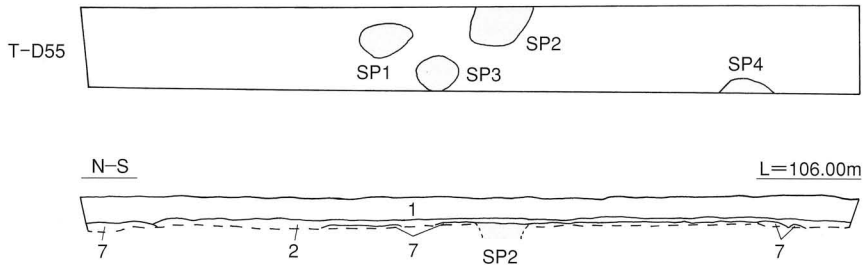
調査地はF区とG区の間にあり、扇状地状に開けた水田耕作地及び畑地である。トレンチの掘削により作物への影響があると考えられる場所については調査が実施できない部分があった。

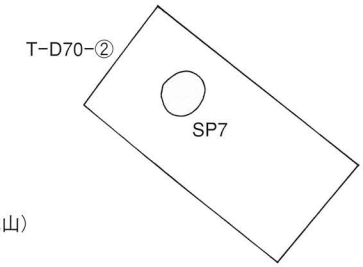
調査は立会人のもとに申請地を確認後、一区画に１本の長さ１～２m、幅30～50cmの長方形トレンチを合計13本設定した。

基本層位は、第１層灰茶褐色粘質土（耕作土）、第２層暗茶褐色粘質土（床土）、第３層明黄褐色粘質土、第４層淡灰色粘質土、第５層淡灰茶褐色粘質土、第６層淡灰白色粘質土、第７層淡灰褐色粘質土、第８層灰色粘質土、第９層黄白色粘質土、第10層暗灰色粘質土（地山）である。

遺構は、土坑10基（T－H１・２・６・10・12）、柱穴５基（T－H６・12）を検出した。

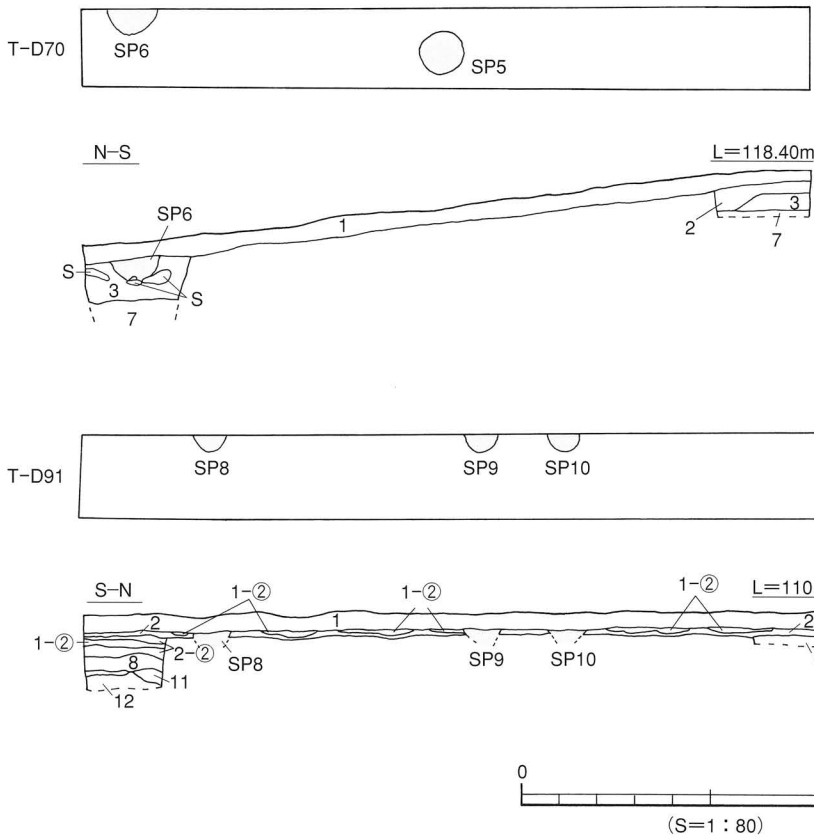
遺物は土師器（T－H６・８）や木杭（T－H９・11・13）が出土している。



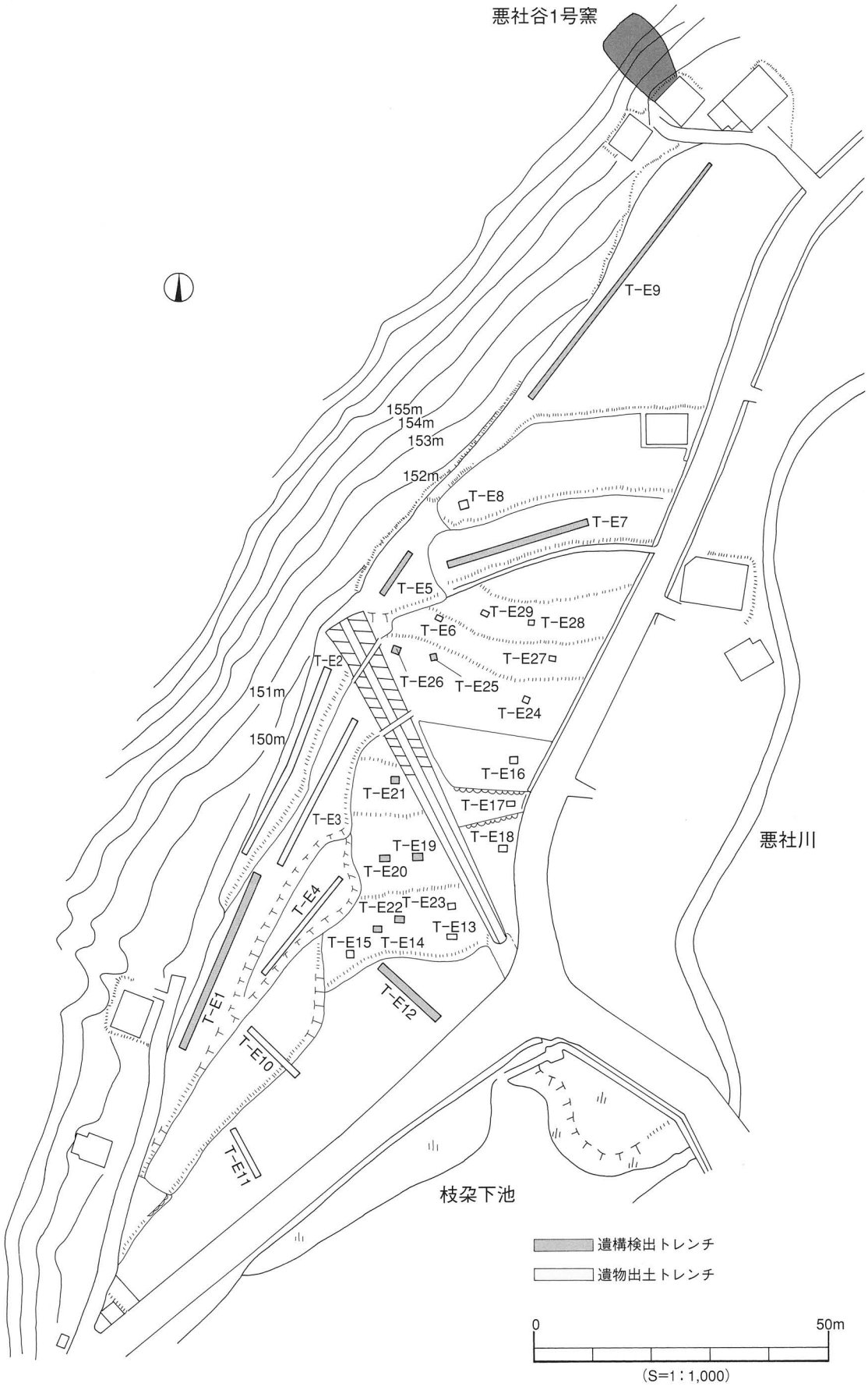


1. 灰色粘質土（耕作土）
1-②. 灰白色シルト（旧耕作土）
2. 橙色シルト（微砂含・床土）
2-②. 2よりやや明（旧床土）
3. 黄灰色微砂質土（礫含）
7. 黄白色微砂質土（礫含・地山）
8. 橙色砂礫（人頭大の礫石含・地山）
11. 黒色粘質土
12. 灰色砂礫（地山）

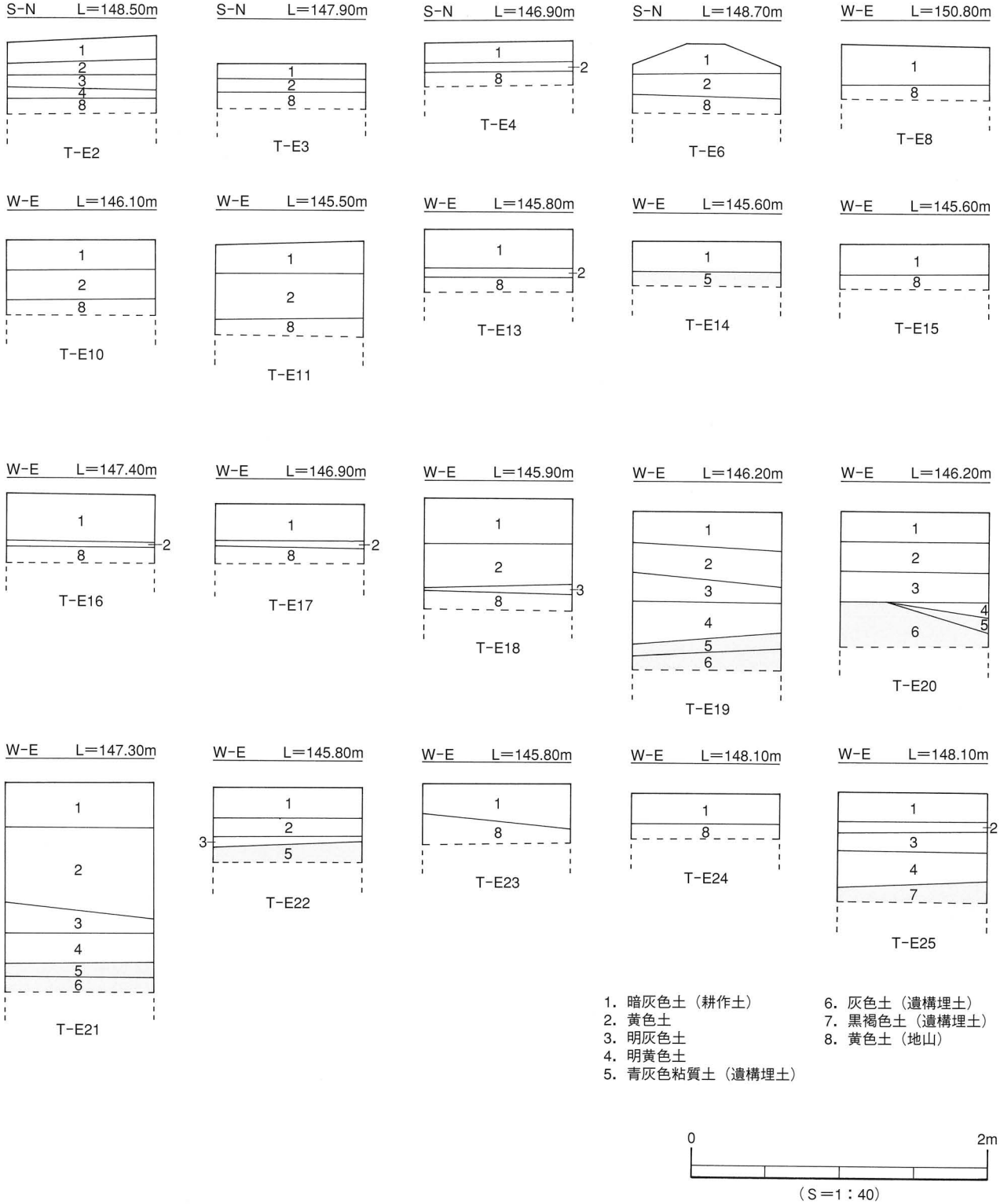
SP1～4……暗褐色シルト
SP5～7……3十褐色土
SP8～10…灰色砂質土



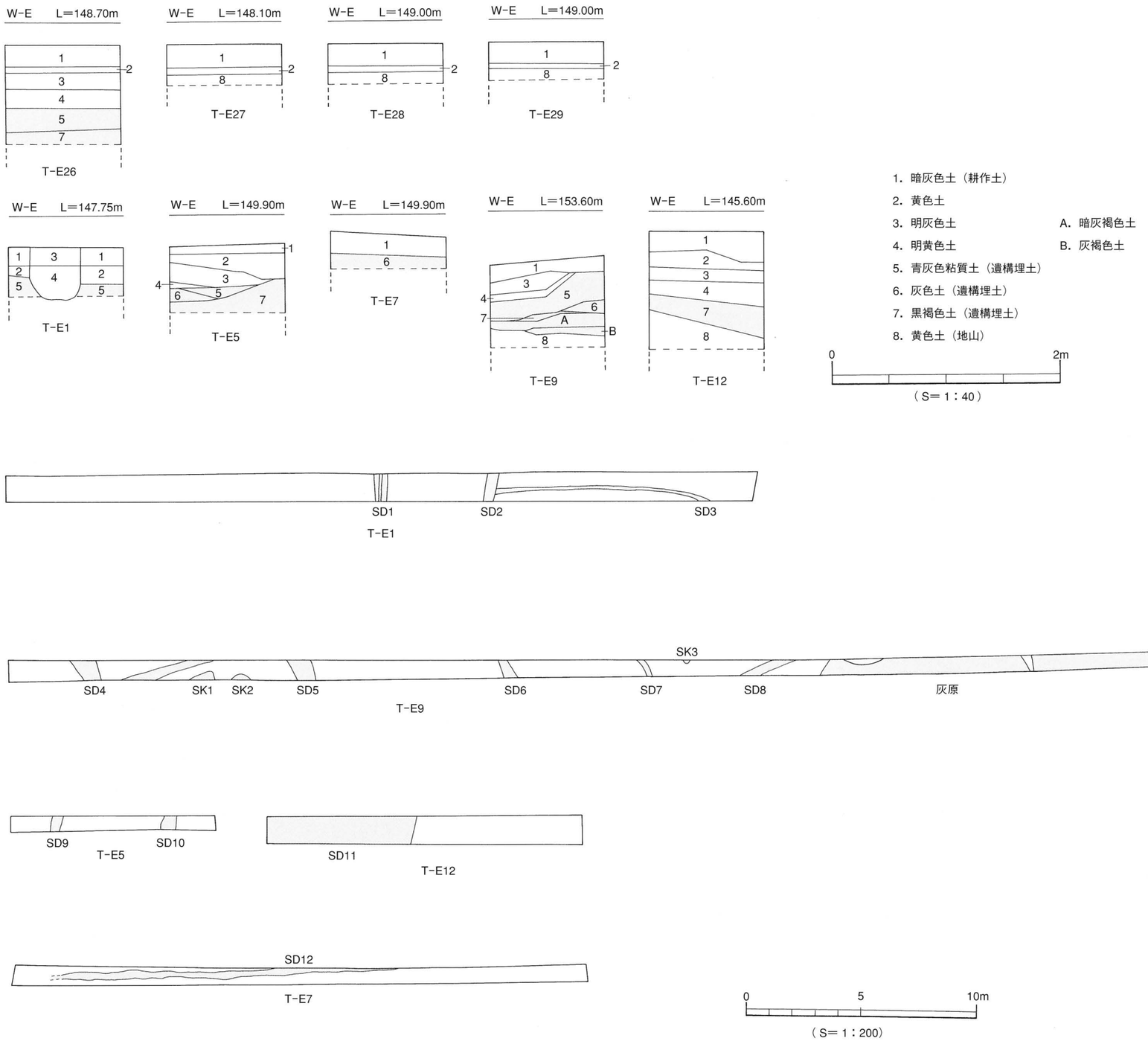
第70図　D区トレンチ測量図・土層図(3)



第71図　E区トレンチ配置図

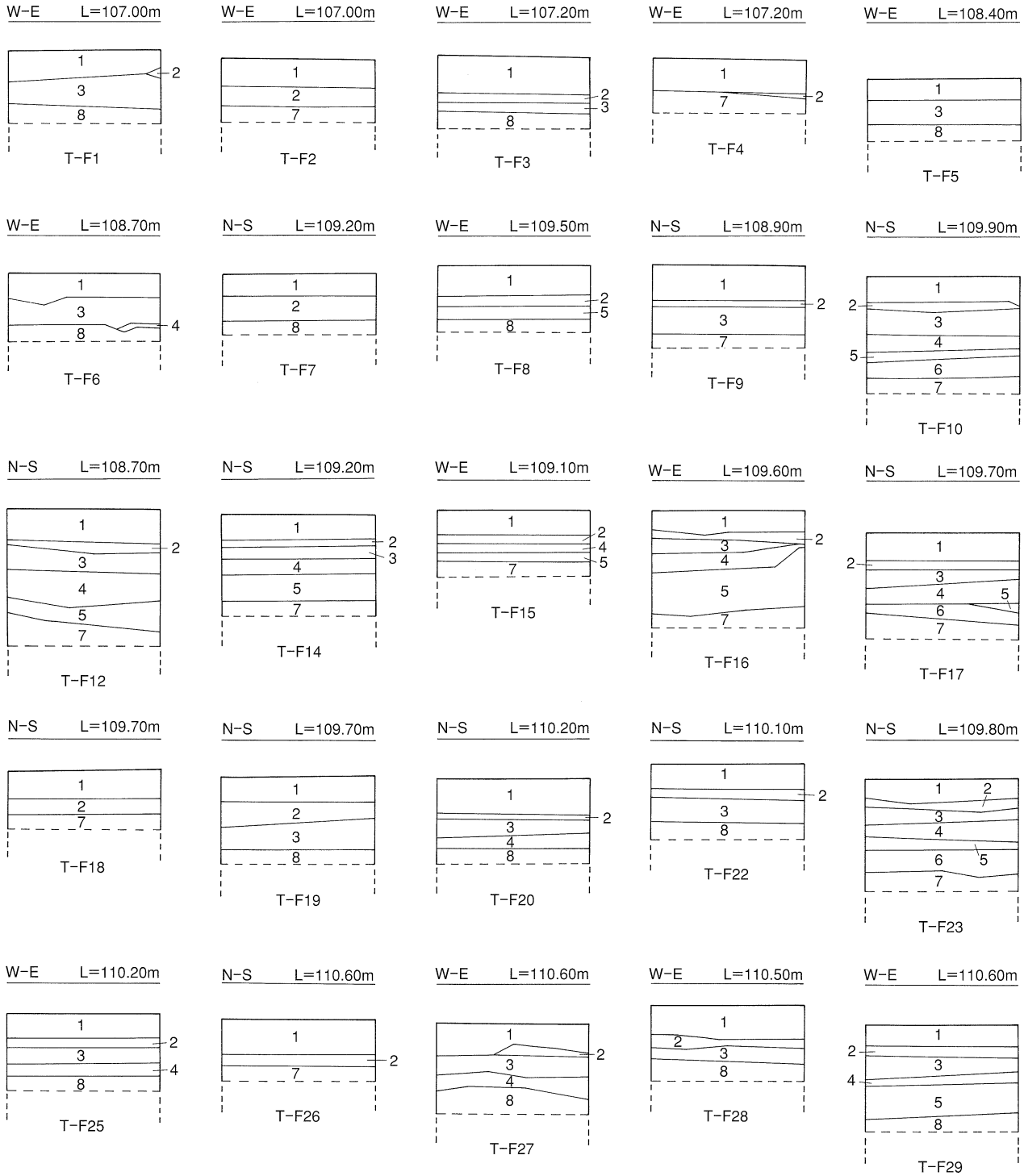


第72図　E区柱状土層図(1)

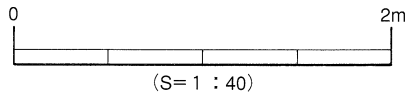


第73図　E区柱状土層図(2)・トレンチ測量図・土層図

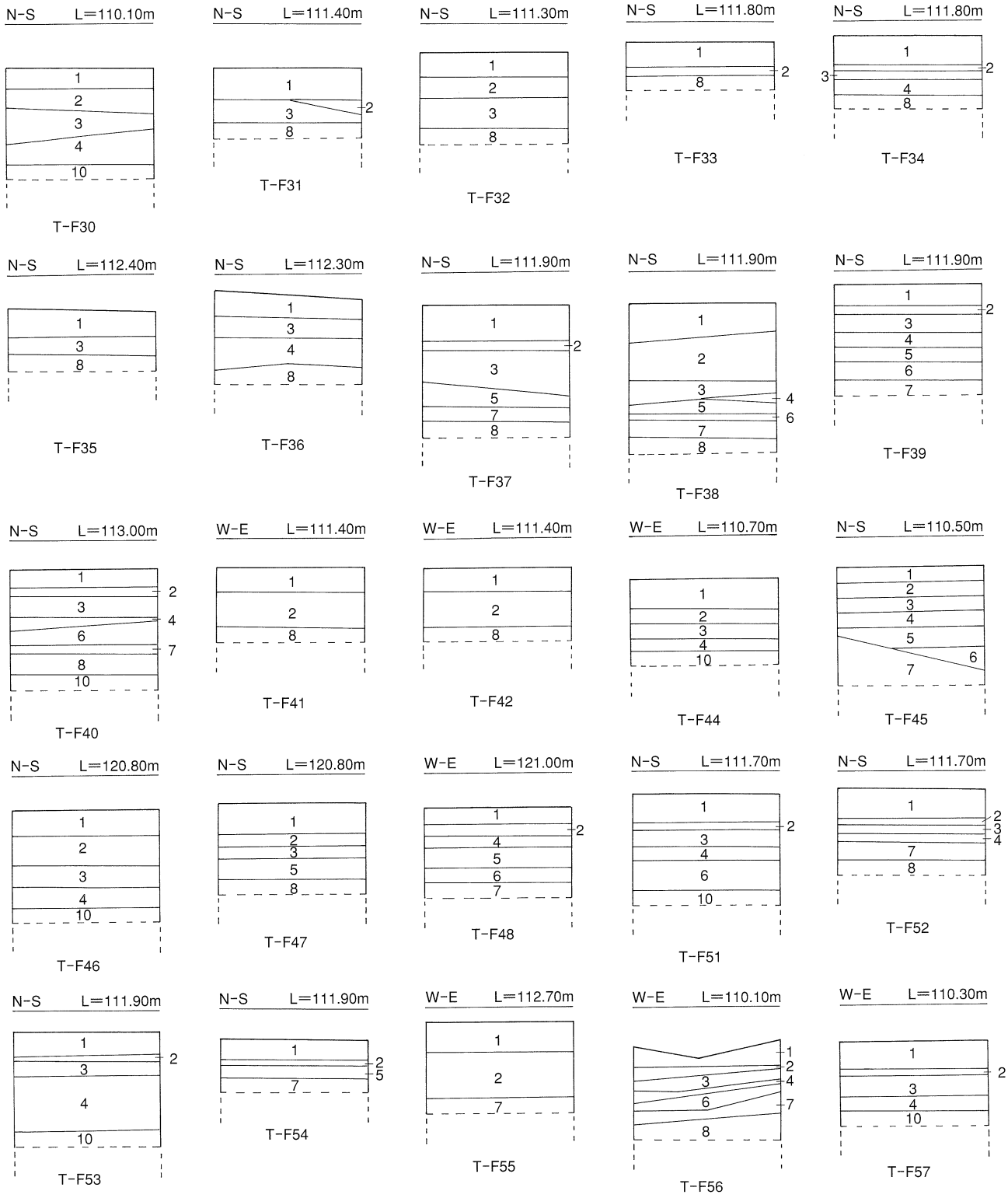
第74図　F区トレンチ配置図



1. 灰茶褐色粘質土（耕作土）
2. 明黄褐色粘質土（床土）
3. 黄褐色粘質土
4. 黄灰色粘質土
5. 灰褐色粘質土
6. 灰色粘質土
7. 黄褐色粘質土（地山）
8. 茶褐色粘質土（地山）



第75図　F区柱状土層図(1)

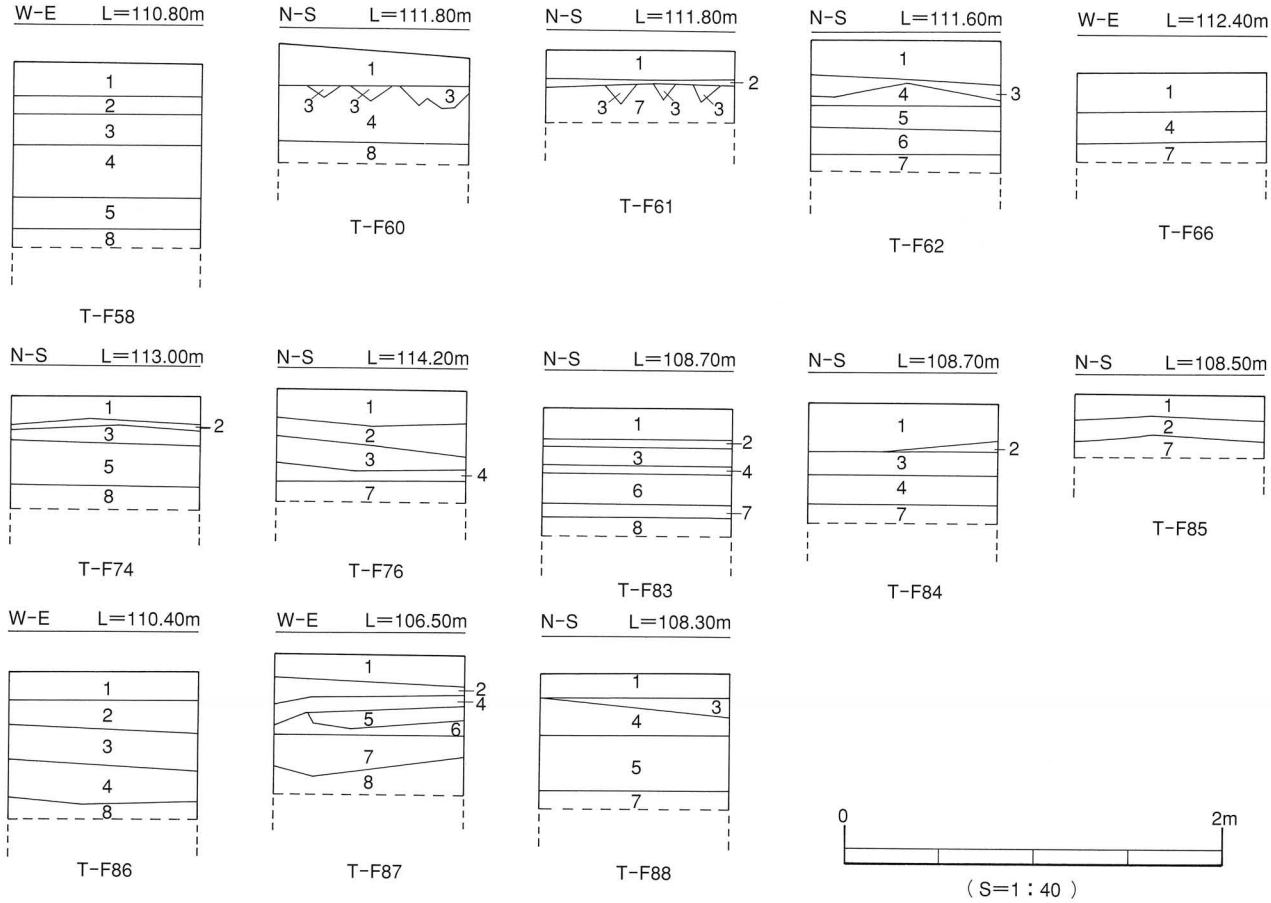


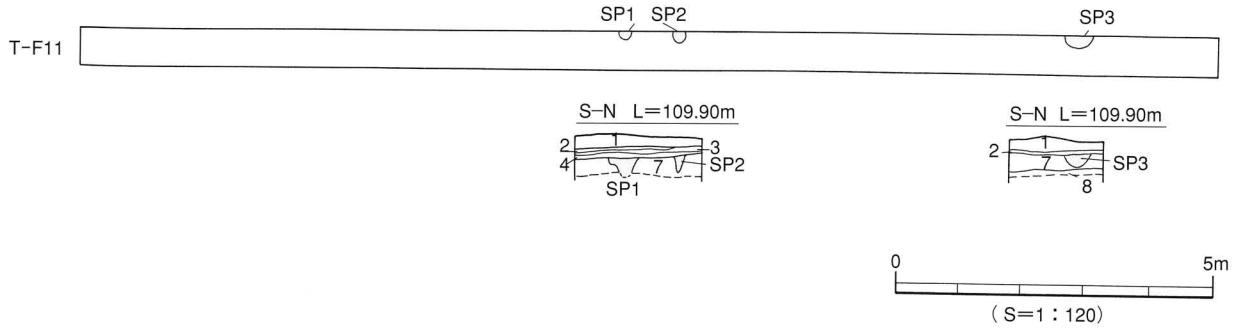
1. 灰茶褐色粘質土（耕作土）
2. 明黄褐色粘質土（床土）
3. 黄褐色粘質土
4. 黄灰色粘質土
5. 灰褐色粘質土
6. 灰色粘質土
7. 黄褐色粘質土（地山）
8. 茶褐色粘質土（地山）
10. 灰黄褐色粘質土（地山）

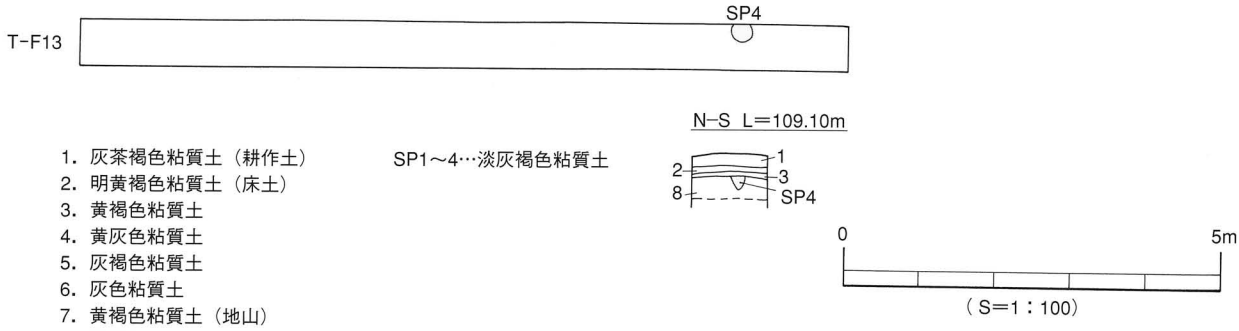
0 2m

（S＝1：40）

第76図　F区柱状土層図(2)



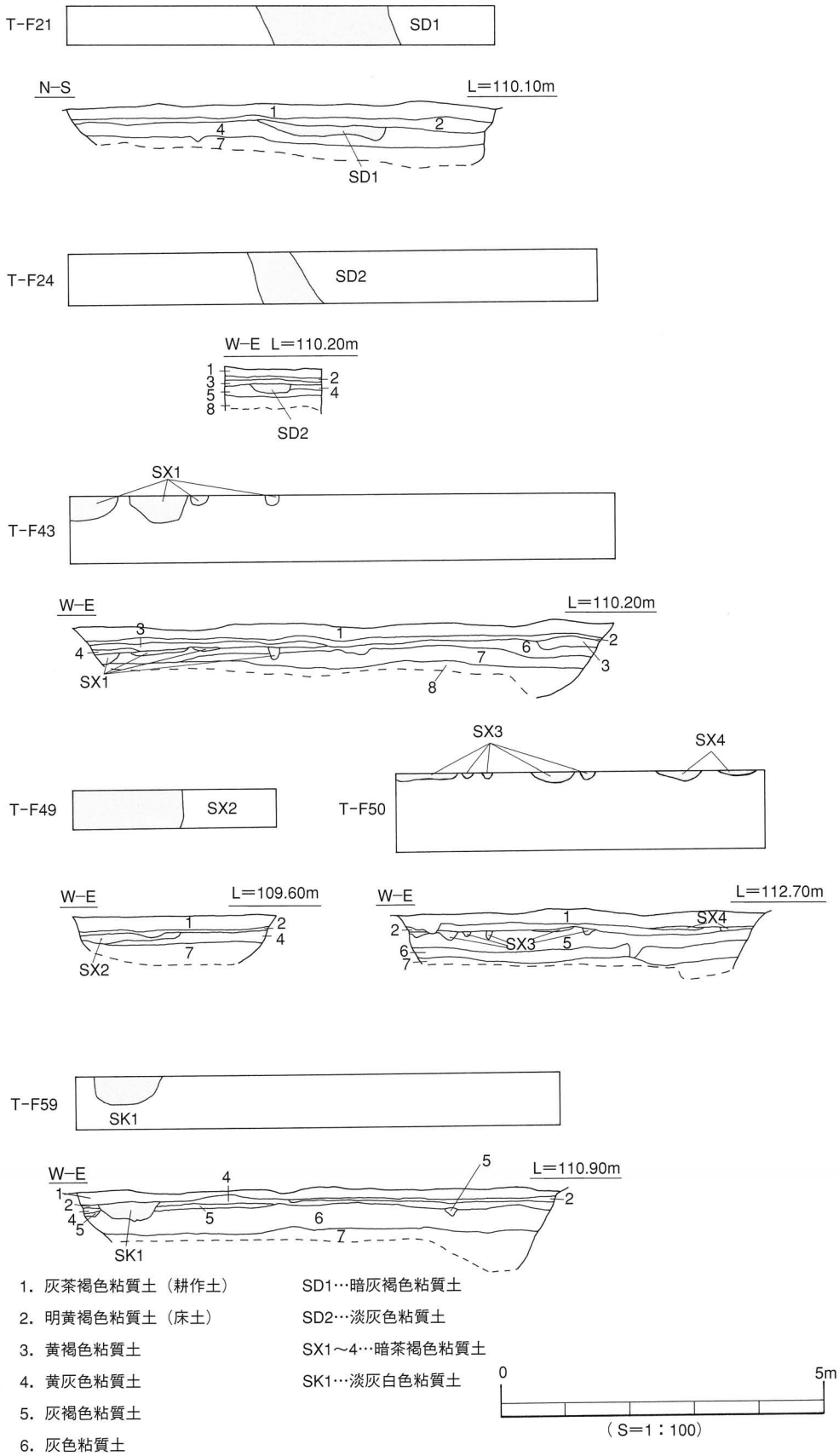




1. 灰茶褐色粘質土（耕作土）
2. 明黄褐色粘質土（床土）
3. 黄褐色粘質土
4. 黄灰色粘質土
5. 灰褐色粘質土
6. 灰色粘質土
7. 黄褐色粘質土（地山）
8. 茶褐色粘質土（地山）

SP1～4…淡灰褐色粘質土

第77図　F区柱状土層図(3)・トレンチ測量図・土層図(1)

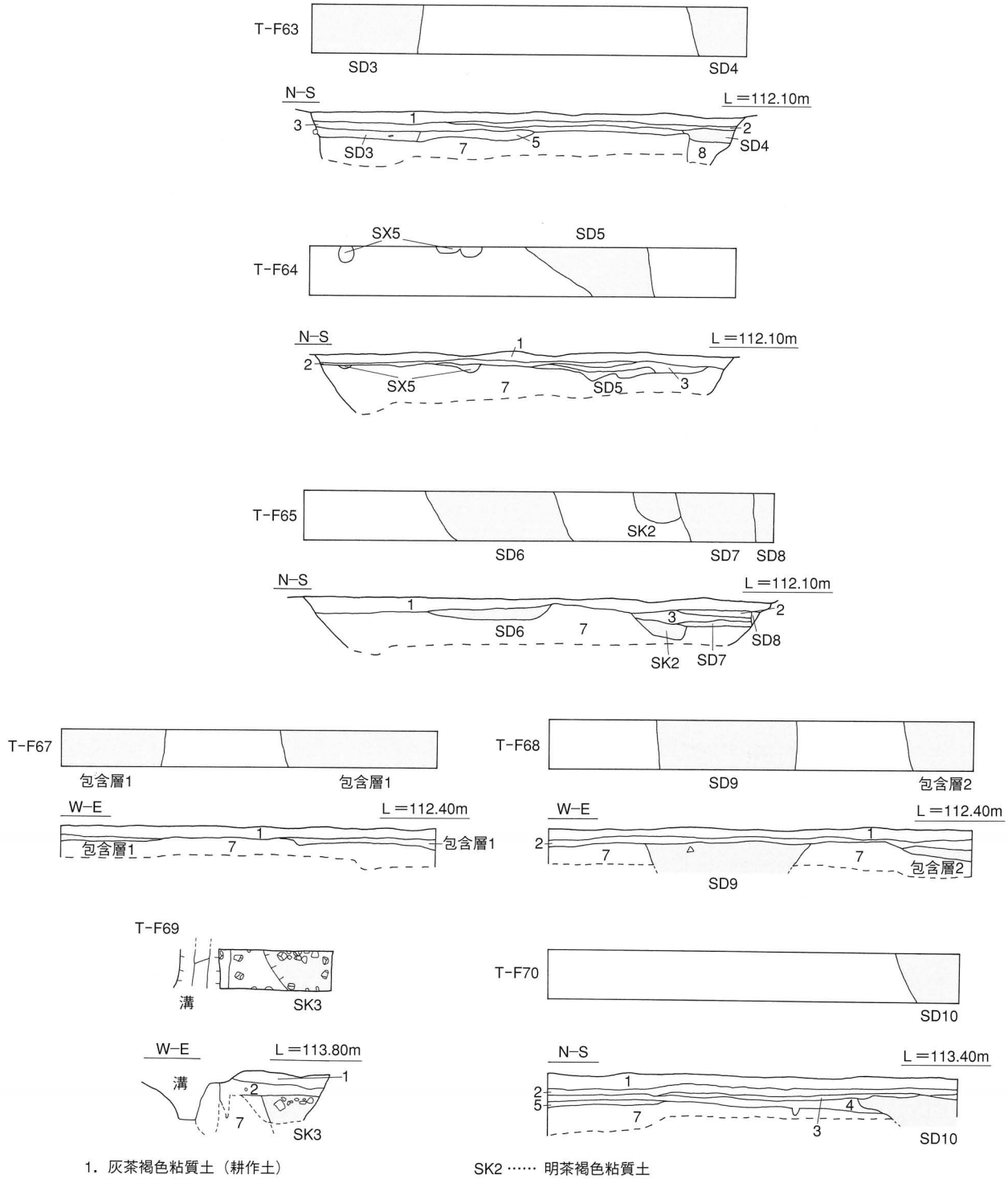


1. 灰茶褐色粘質土（耕作土）
2. 明黄褐色粘質土（床土）
3. 黄褐色粘質土
4. 黄灰色粘質土
5. 灰褐色粘質土
6. 灰色粘質土
7. 黄褐色粘質土（地山）
8. 茶褐色粘質土（地山）

SD1…暗灰褐色粘質土
SD2…淡灰色粘質土
SX1～4…暗茶褐色粘質土
SK1…淡灰白色粘質土

0　5m
（S=1：100）

第78図　F区トレンチ測量図・土層図(2)



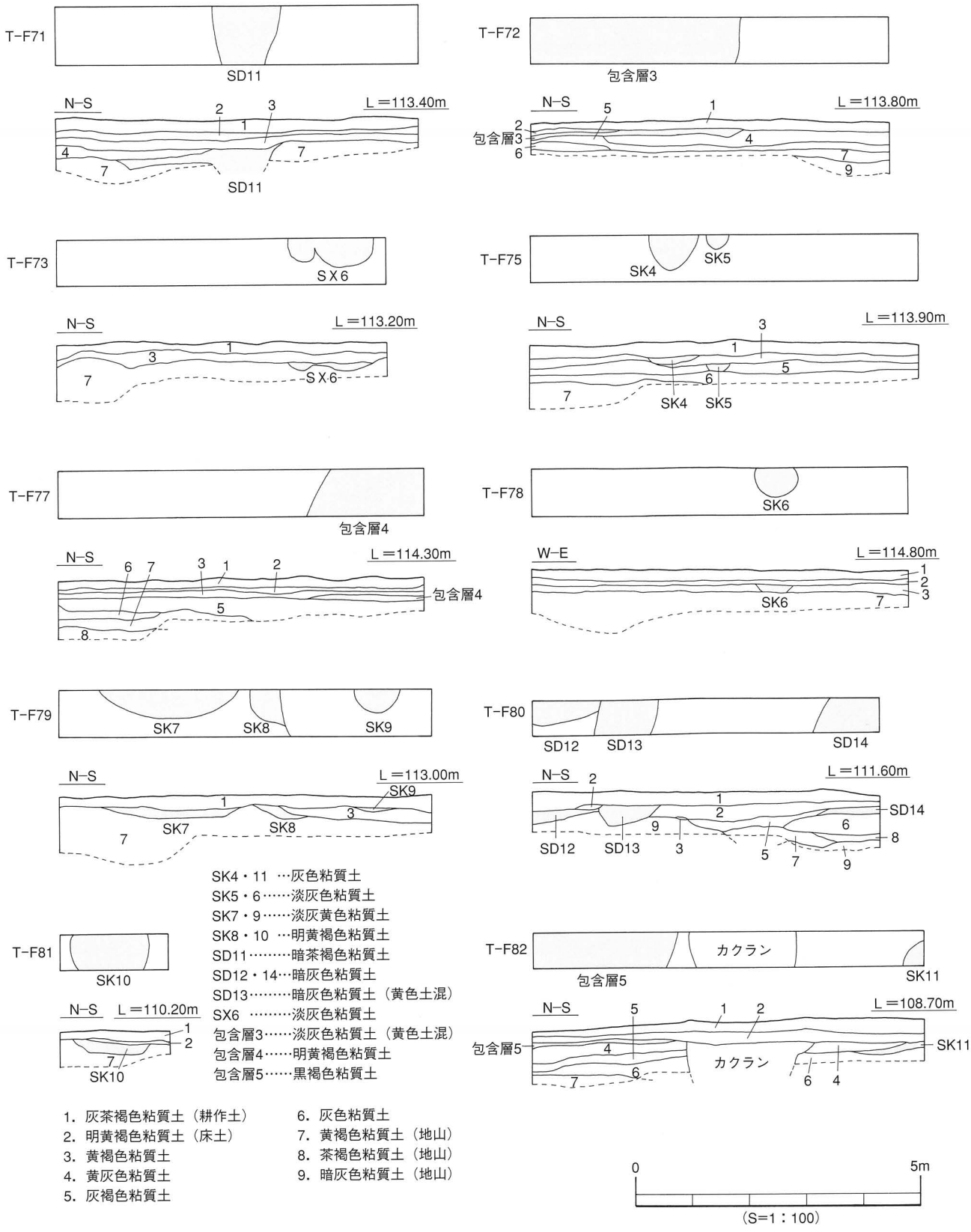
1. 灰茶褐色粘質土（耕作土）
2. 明黄褐色粘質土（床土）
3. 黄褐色粘質土
4. 黄灰色粘質土
5. 灰褐色粘質土
6. 灰色粘質土

SK2 …… 明茶褐色粘質土
SK3 …… 黄灰色粘質土（人頭大の礫石含）
SD3～5・7・9・10…淡灰白色粘質土
SD6・8…黄褐色粘質土
SX5 …… 暗茶褐色粘質土
包含層1・2…淡灰白色粘質土

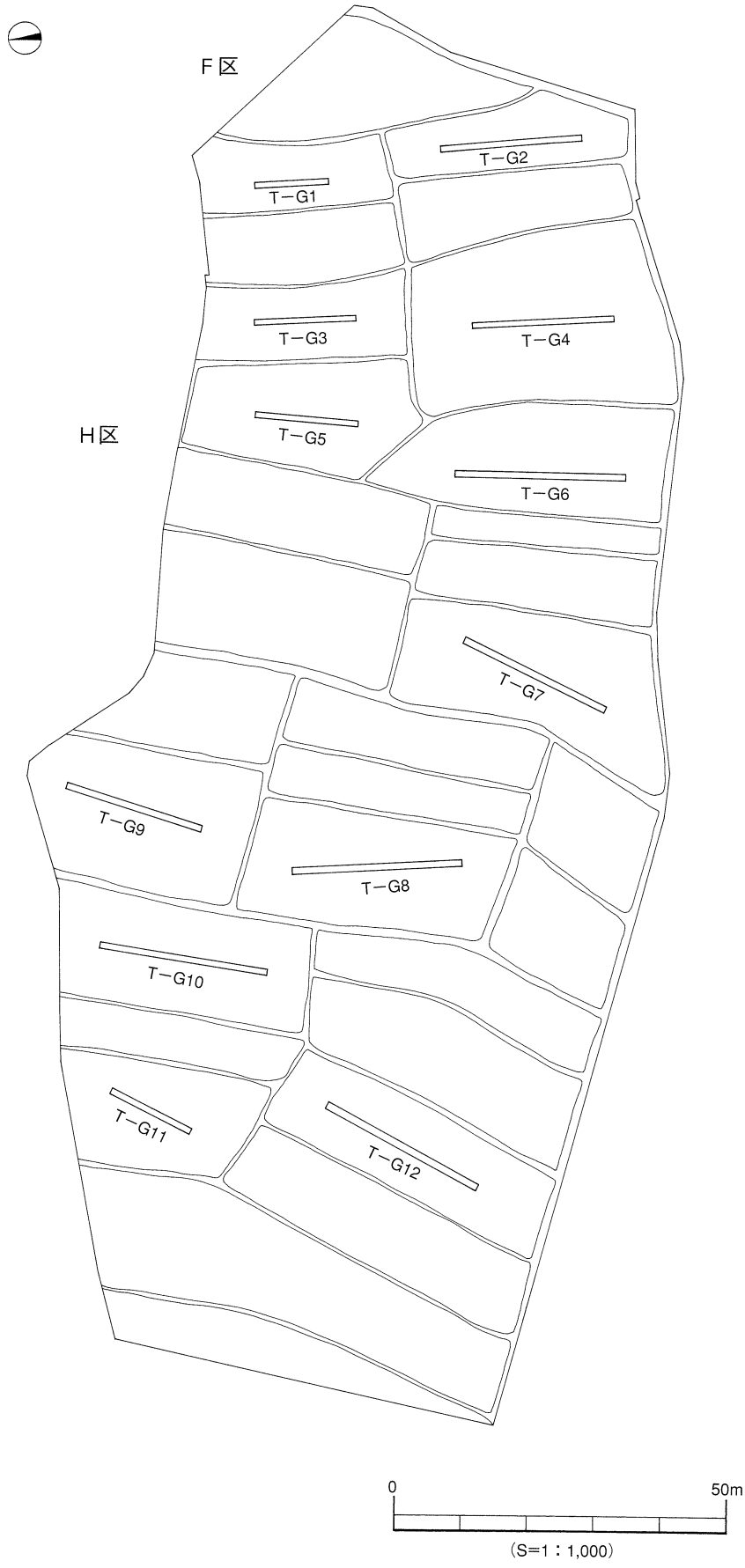
0　2m
（S＝1：40）

0　5m
（S＝1：100）

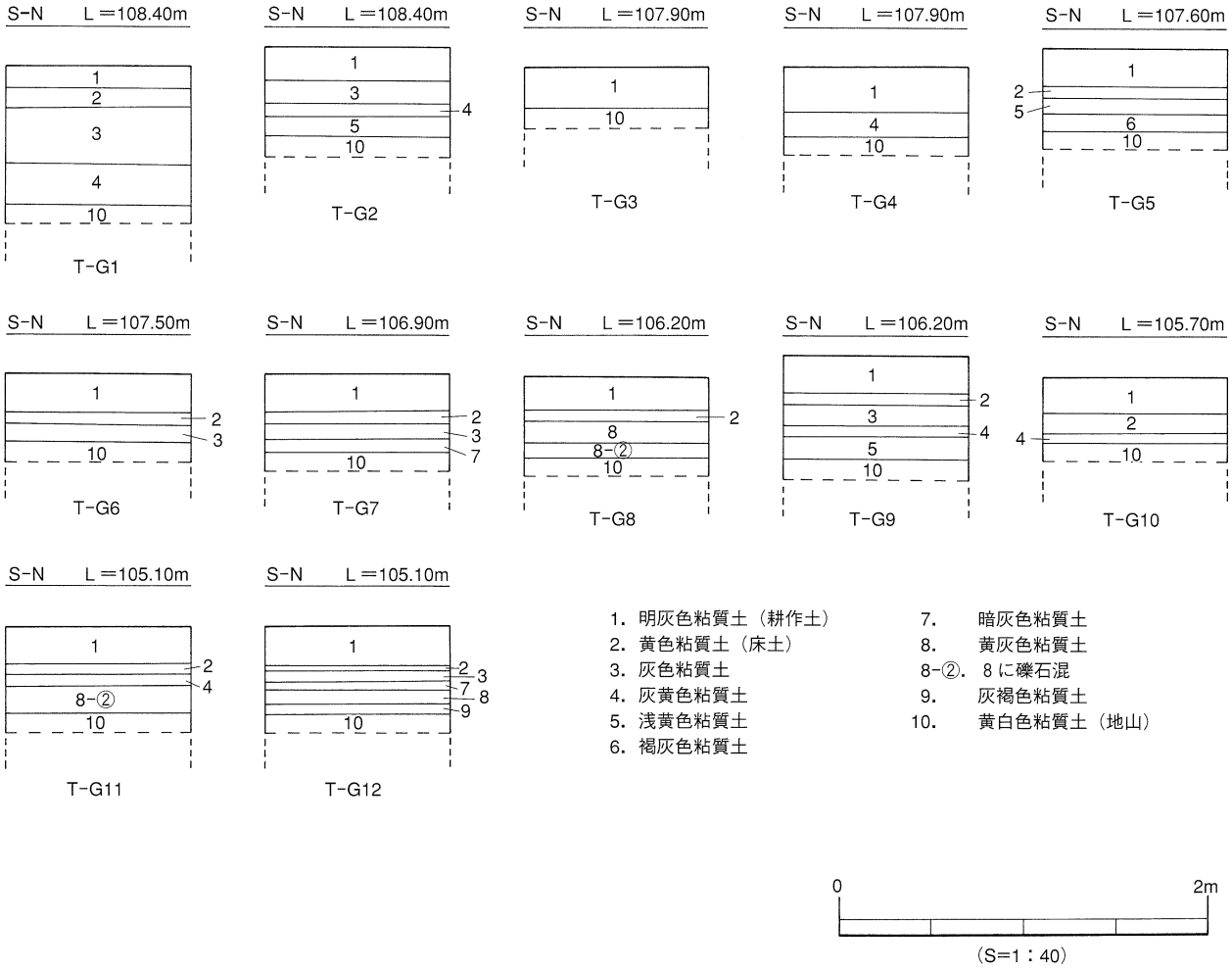
第79図　F区トレンチ測量図・土層図(3)



第80図　F区トレンチ測量図・土層図(4)



第81図　G区トレンチ配置図



第82図　G区柱状土層図

出土した土師器の形態から、本調査地内には中世以降の集落関連遺構が存在していたことが判明した。また木杭が出土したことから水田に伴う堰や取水口などの可能性が考えられる。これらの遺構と遺物を検出した地点については、盛り土を施して遺構が保存されることとなった。

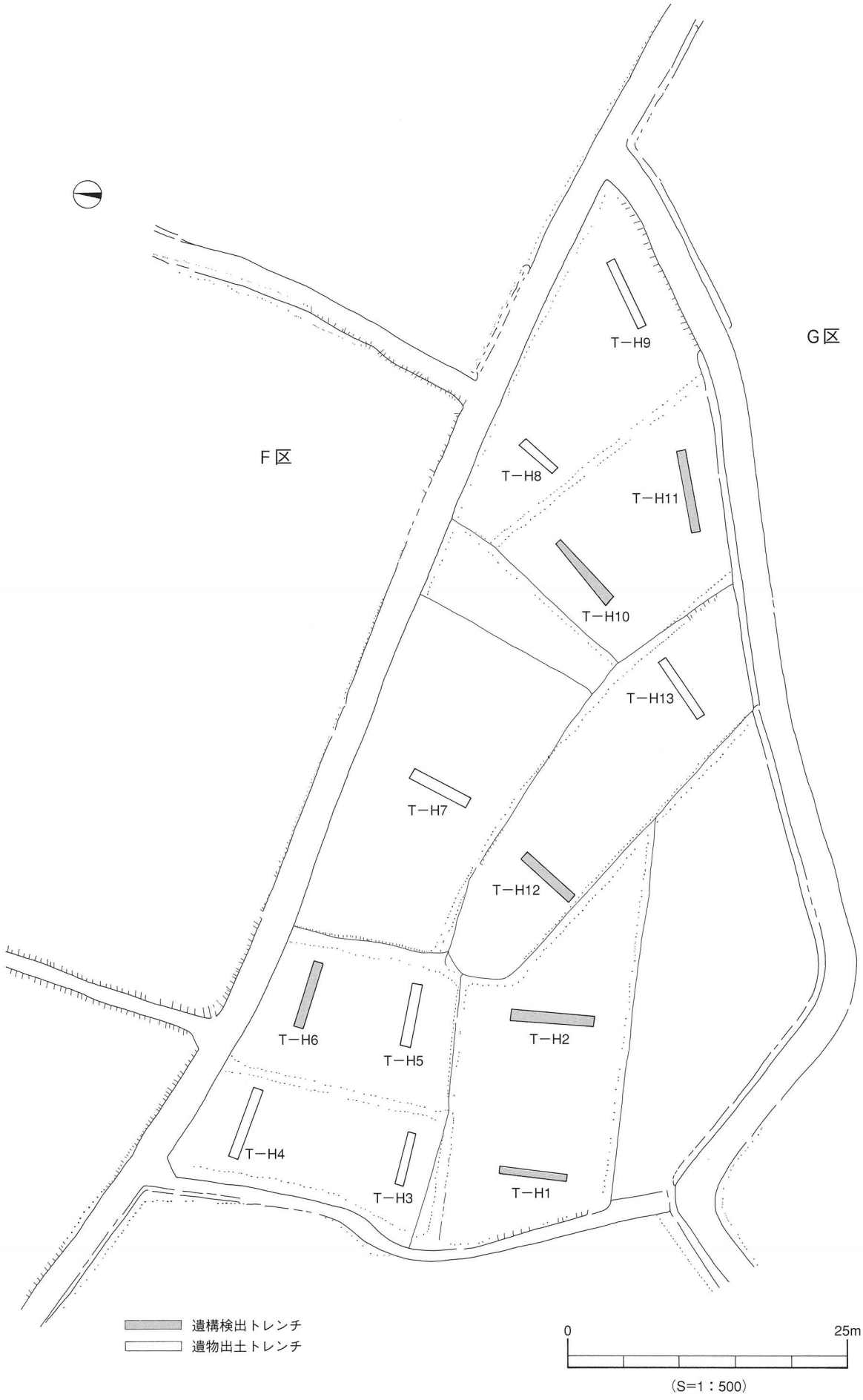
3．小　結

A～H区における試掘調査の結果を報告した。A・B・G区においては遺構・遺物ともに検出されなかった。

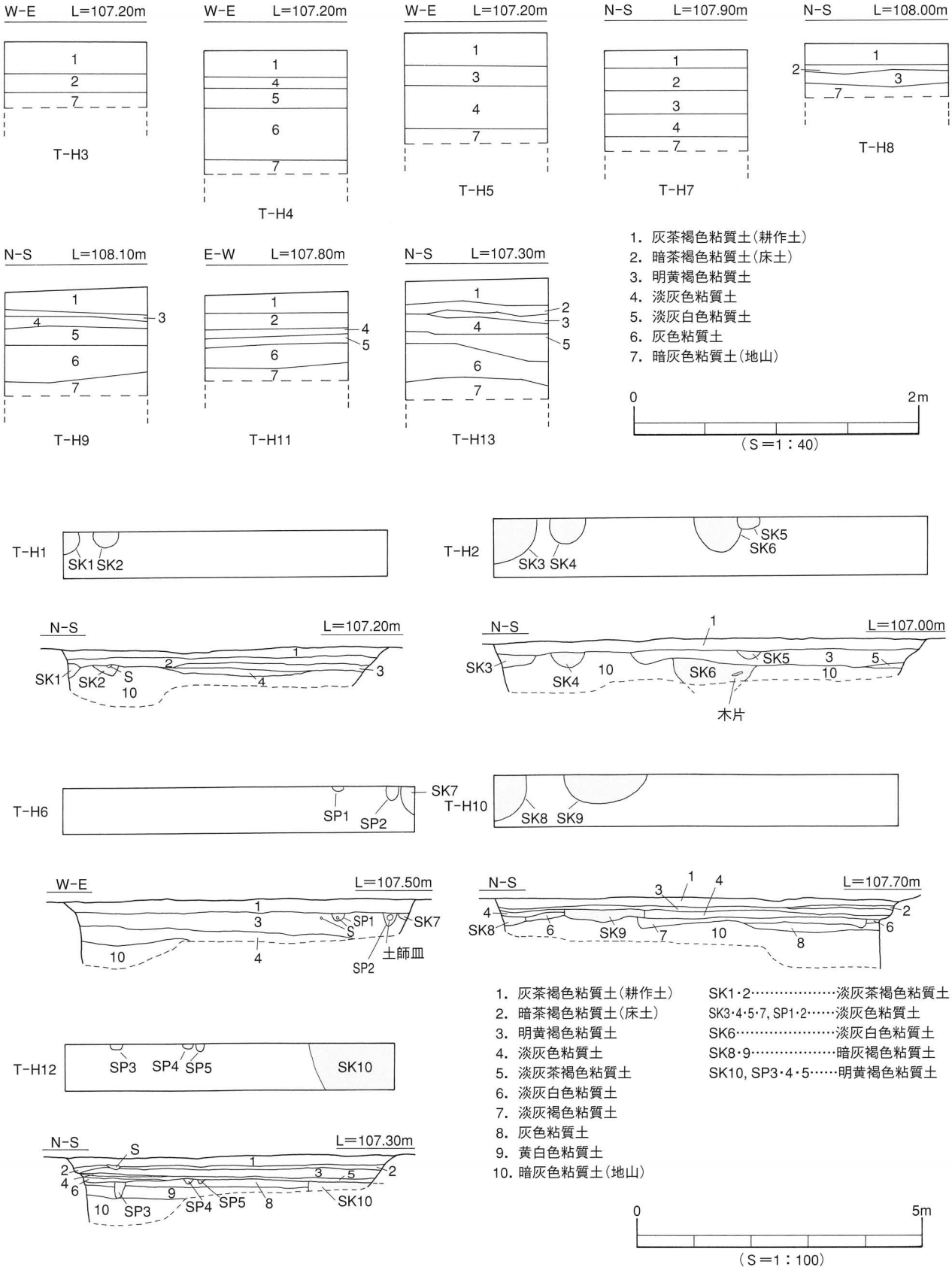
C区では溝１条、柱穴５基のほか遺物包含層を２か所で確認した。遺物は弥生土器、須恵器、土師器、陶磁器、石器片がある。溝と柱穴は中世以降と考えられ、遺物包含層は弥生時代または古墳時代と考えられる。以上のことから、弥生・古墳時代及び中世以降の集落関連遺構の存在が推定される。

D区では柱穴10基、石列のほか遺物包含層がある。遺物は弥生土器、須恵器、土師器、陶磁器、石器片がある。柱穴は中世以降と考えられ、遺物包含層は弥生時代または古墳時代と考えられる。以上のことから、弥生・古墳時代及び中世以降の集落関連遺構の存在が推定される。

E区では須恵器窯の灰原１か所、土坑３基、溝12条がある。遺物は須恵器、土師器、陶磁器、窯壁、石器片がある。以上のことから、古墳時代から中・近世に至る須恵器生産関連遺構や集落関連遺構の存在が推定される。



第83図　H区トレンチ配置図



第84図　H区柱状土層図・トレンチ測量図・土層図

F区では土坑11基、溝14条、柱穴４基、塚１基、性格不明遺構６基のほか遺物包含層を５か所で確認した。遺物は弥生土器、須恵器、土師器、陶磁器、瓦、石器片がある。以上のことから、弥生時代から近現代に至る集落関連遺構が存在していたことが判明した。

H区では土坑10基と柱穴５基がある。遺物は土師器と木杭がある。以上のことから、中世以降の集落関連遺構が存在していたことが判明した。また木杭が出土したことから水田に伴う堰や取水口などの可能性が考えられる。

以上のうち、D区の悪社川より西部・E区・F区東部は工事により遺構が消滅してしまうため、弥生時代から近現代に至る集落関連遺構や須恵器の生産関連遺構について記録保存を行うため緊急調査を実施した。その他のC区全域、D区の悪社川より東部、F区の西部から中央部、H区全域については遺構が盛り土保存されている。

第６章　自然科学分析

－松山市北梅本悪社谷遺跡２次調査地における樹種同定－

株式会社　古環境研究所

１．試料

試料は、２区SR２から出土した木材片６点である。

２．方法

カミソリを用いて新鮮な基本的三断面（木材の横断面、放射断面、接線断面）を作製し、生物顕微鏡によって60～600倍で観察した。樹種同定は解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

３．結果

結果を表39に示し、主要な分類群の顕微鏡写真を示す。以下に同定根拠となった特徴を記す。

表39　北梅本悪社谷遺跡２次調査地における樹種同定結果

地　区	遺　構	試 料 No.	分類群（和名）	分類群（学名）
２　区	ＳＲ２	No.１	マツ属複維管束亜属	Pinus subgen. *Diploxylon*
２　区	ＳＲ２	No.２	マツ属複維管束亜属	Pinus subgen. *Diploxylon*
２　区	ＳＲ２	No.３	マツ属複維管束亜属	Pinus subgen. *Diploxylon*
２　区	ＳＲ２	No.４	マツ属複維管束亜属	Pinus subgen. *Diploxylon*
２　区	ＳＲ２	No.５	散孔材	diffuse-porous wood
２　区	ＳＲ２	No.６	マツ属複維管束亜属	Pinus subgen. *Diploxylon*

ａ．マツ属複維管束亜属　Pinus subgen. *Diploxylon*　マツ科（第85図）

仮道管、放射柔細胞、放射仮道管及び垂直、水平樹脂道を取り囲むエピセリウム細胞から構成される針葉樹材である。

横 断 面：早材から晩材への移行は急で、垂直樹脂道が見られる。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は窓状である。放射仮道管の内壁には鋸歯状肥厚が存在する。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型であるが、水平樹脂道を含むものは紡錘形を呈する。

ｂ．散孔材　diffuse-porous wood（第85図）

横 断 面：小型の道管が２～３個複合しながら散在する散孔材である。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は異性である。

接線断面：放射組織は異性放射組織型で、１～８細胞幅である。軸方向柔細胞が層階状に配列する。

以上の形質より散孔材に同定されるが、属レベルの同定は困難である。

4．考察

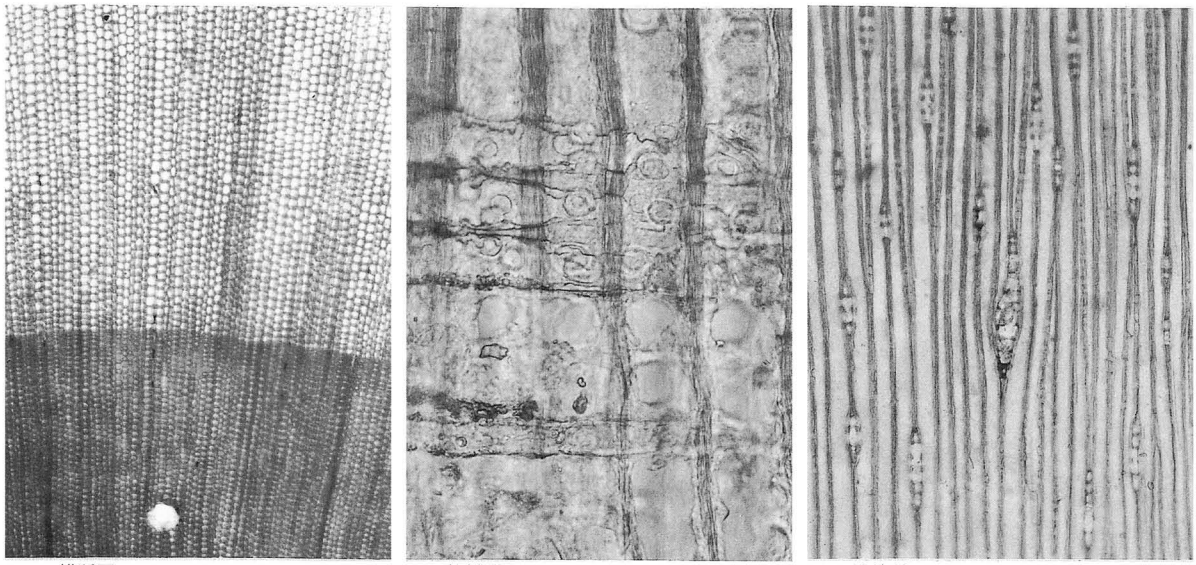
分析の結果、マツ属複維管束亜属５点、散孔材１点が同定された。マツ属複維管束亜属には、二次林を形成するアカマツと海岸林を形成するクロマツとがあり、いずれも水湿によく耐える材である。マツ類の木材はいずれも樹脂を多く含み、現在においても窯業に好んで用いられる。本遺跡の周辺では８世紀の窯跡が確認されていることから、窯業との関連が示唆される。

〔文献〕

佐伯　浩・原田　浩（1985）針葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，ｐ.20－48.

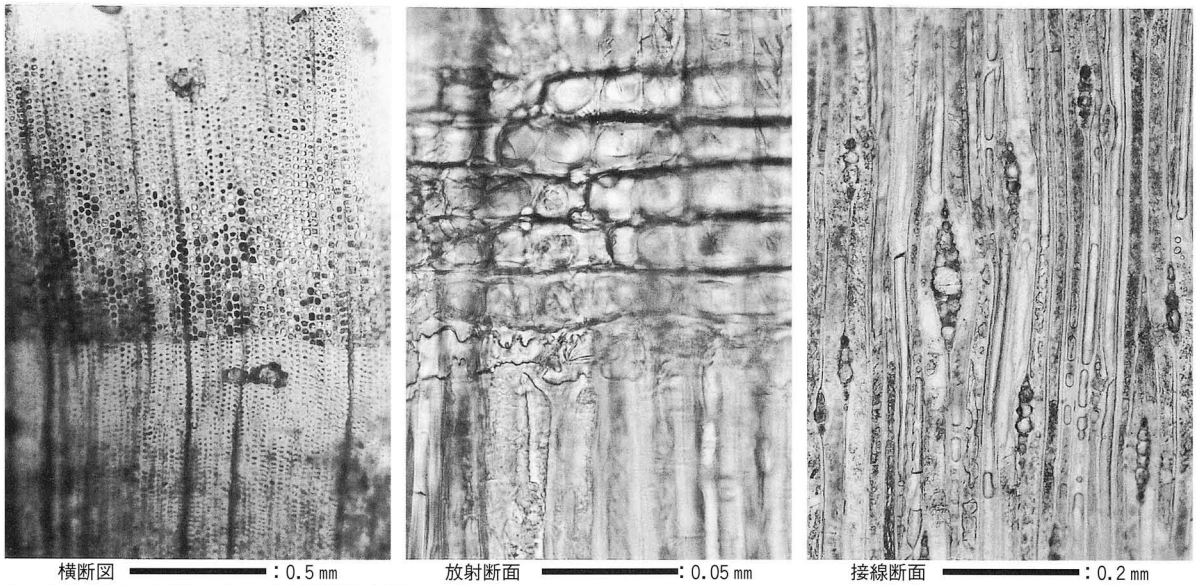
佐伯　浩・原田　浩（1985）広葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，ｐ.49－100.

島地　謙・伊東　隆夫（1988）日本の遺跡出土木製品総覧，雄山閣，ｐ.296



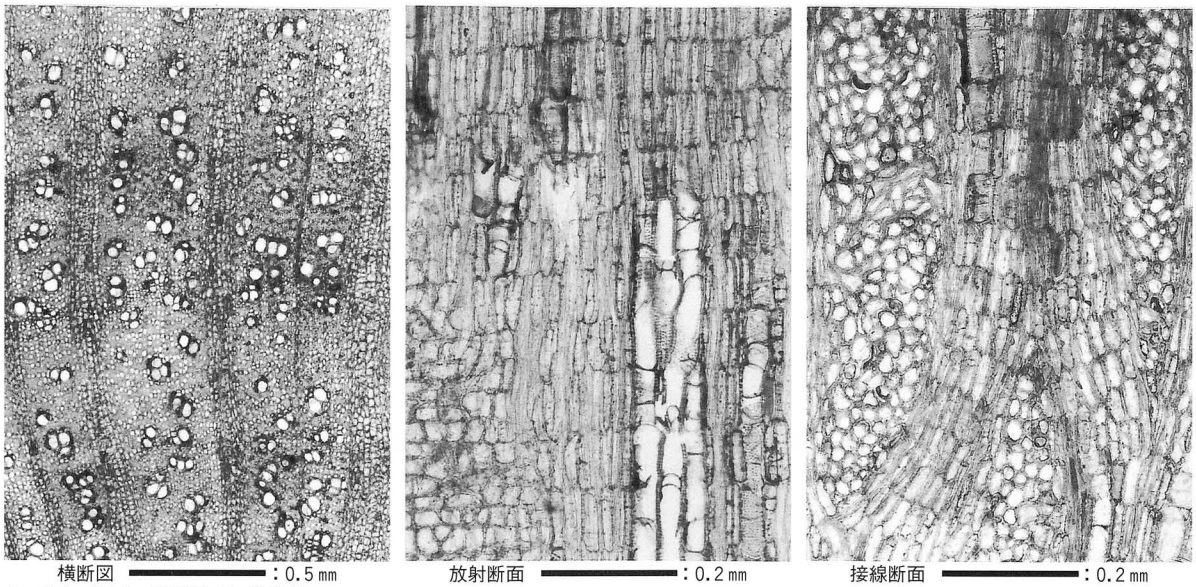
横断図 ：0.5 mm　放射断面 ：0.05 mm　接線断面 ：0.2 mm

1．2区　SR 2　試料No.4　マツ属複維管束亜属



横断図 ：0.5 mm　放射断面 ：0.05 mm　接線断面 ：0.2 mm

2．2区　SR 2　試料No.6　マツ属複維管束亜属



横断図 ：0.5 mm　放射断面 ：0.2 mm　接線断面 ：0.2 mm

3．2区　SR 2　試料No.5　散孔材

第85図　2区SR 2出土木材の顕微鏡写真

第７章　調査の成果と課題

本書では、北梅本町における北梅本悪社谷遺跡２次調査地・北梅本北池遺跡・北梅本太尺寺遺跡の調査とＡ～Ｈ区の試掘調査について報告を行った。ここでは、時代ごとに周辺地域の遺跡を含めた調査成果と今後の課題をあげ、まとめとする。

１．弥生時代

北梅本北池遺跡で土坑２基・溝１条・柱穴５基・性格不明遺構２基を検出した。このうち重要な遺構として前期のSK10、中期のSX１とSX２があげられる。SK10は不明確な掘り方の楕円形土坑で、弥生時代前期の甕形土器と石器が出土した。小野地区における最古の遺構である古市遺跡２次調査地Ｂ地区のSK２とともに、縄文時代晩期以降に人々が定着しはじめたことを示す貴重な資料である。SX１とSX２は検出状況から中期の遺物包含層と考えられる。同様に北梅本太尺寺遺跡２区Ｂ・Ｃでもまた弥生時代の遺物包含層（第Ⅵ層）を検出している。出土した土器や石器から周辺地域に弥生時代の集落が存在した可能性が考えられる。

２．古墳時代

北梅本北池遺跡で流路１条と溝２条を検出した。SR１の規模は検出長45.0m、上場幅10.4～16.2m、深さ80cmを測る大規模な流路で、埋土の状況から現在の悪社川と同様に、北から南へ谷を下る河川であったと考えられる。SD４とSD２は埋土がほぼ同じで、同一方向であることから同時期に集落を区画するような目的で使用されていたと考えられる。

北梅本太尺寺遺跡では明確な遺構の検出には至っていないが、２区で表採した遺物に須恵器があることから周辺地域での集落や古墳の存在が考えられる。

本調査地南西には下苅屋遺跡１～３次調査地があり、松山平野東部古窯址群（生産地）と来住・久米地区など（消費地）とを結ぶ中継地点や集積地との評価がされている。本調査によってその根拠を示すような遺構や遺物は確認できなかったが、潮見山南窯址や小野谷駄馬窯址で出土した須恵器には内面の同心円文のあて具痕が特徴的なものがあるため、今後は須恵器の形態やヘラ記号だけではなく、あて具痕などの別視点からの検討によって須恵器の出自が明らかになると考えられる。

３．古　　代

北梅本悪社谷遺跡２次調査地で流路２条、土坑１基、溝１条、性格不明遺構２基がある。これらの遺構は８世紀初頭～中葉の遺構であるが、特に注目に値するのはSX１とSX２である。SX２は悪社谷１号窯の灰原の可能性があり、SX１もまた灰原の可能性があることから、調査区外の北部斜面に未確認の窯の存在を示すものである。本調査においては窯本体の調査を行うことができなかったが、今回の成果は今後の調査研究の一助になるものと思われる。

４．近 現 代

３遺跡で土坑や溝を検出した。この地区が集落として機能していたことを示す貴重な資料である。

以上のように、弥生時代から近現代に至る生産関連遺構や集落関連遺構を検出することができた。本調査地周辺はこれまで松山平野東部古窯址群として多くの窯址や古墳が存在することで知られていた。今後の発掘調査の進展によって、窯址・集落・古墳の関係や須恵器の移動に伴う生産地・中継地点・消費地の関係などもより一層明らかになるものと思われる。

附章　松山平野東部古窯址群・伊予市三秋窯址の採集資料

1．はじめに

ここでは松山市北梅本町に所在する松山平野東部古窯址群のうち潮見山南窯址、駄馬姥ケ懐２号窯址、枝朶下池３号窯址、悪社谷２号窯址、悪社谷１号窯址と伊予市三秋窯址[注1]の計６窯址の採集資料を提示する。駄馬姥ケ懐２号窯址は1989年頃に池田學氏、伊予市三秋窯址は1992年頃に長井数秋氏、その他は1999年に山本健一と山之内が中心に採集したものである。

以下、６窯址についての概要と資料の実測図を掲載し、その特徴を略記する。なお、池田氏と長井氏が採集した資料は、財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センターが譲り受け、保管している。

2．窯址の概要と採集資料

(1) 伊予市三秋（みあき）窯址（第86図）

所在地　伊予市三秋

立　地　三秋川中流の小開析谷北東斜面
標高約50m

遺　構　焼土面を確認。遺物と窯壁片が多数散布する。

遺　物　（第87・88図）

須恵器（１～23）器種には坏蓋、蓋、坏身、高坏、壺、甕、器台がある。１～８は坏蓋である。小片のため天井部の形態が判別しにくいが、４はやや丸みをもった天井部、７は平坦な天井部である。５は天井部と口縁部との境の直上に一条の沈線を巡らす。いずれも口縁端部は内傾する。９は短頸壺の蓋である。天井部と口縁部との境に稜をもたない。10～13は坏身である。10はたちあがりは内傾気味に伸び、端部は直立する。14～16は高坏である。14は受部～脚部、15・16は脚部である。いずれも短脚一段透かしを穿つ。17は壺である。口縁部直下に２条の凸帯が巡る。18～21は甕である。18・19は端部を丸くおさめる。20は下方に下垂させる。21の端部は「コ」の字状を呈し、上下に拡張する。22・23は器台である。22は受部である。２条の凸帯間に波状文を施す。23は脚部である。透かし孔の下位に２条の沈線を施す。

瓦（24）平瓦である。桶巻き作りにより製作されている。凸面には細縄叩きを施し、凹面には布目痕を残す。

石製品（25）石鍋である。口縁部直下に削り出しの鍔が巡るもので、口縁部は内湾する

(2) 潮見山南（しおみやまみなみ）窯址（第89図）

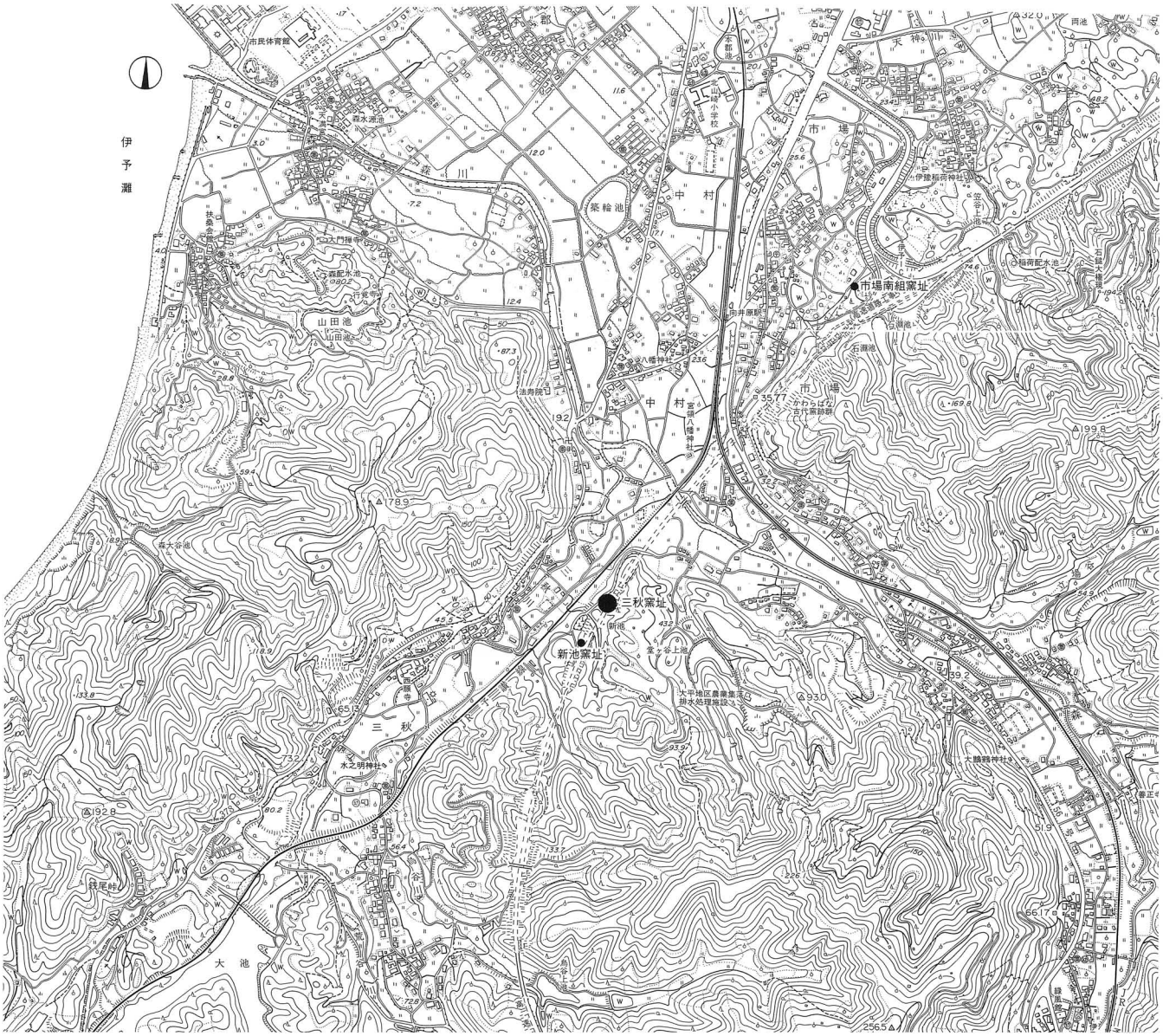
所在地　松山市北梅本町

立　地　潮見山の南に開口する谷の東側
海抜108～124m

遺　構　未確認、遺物が多数散布する。

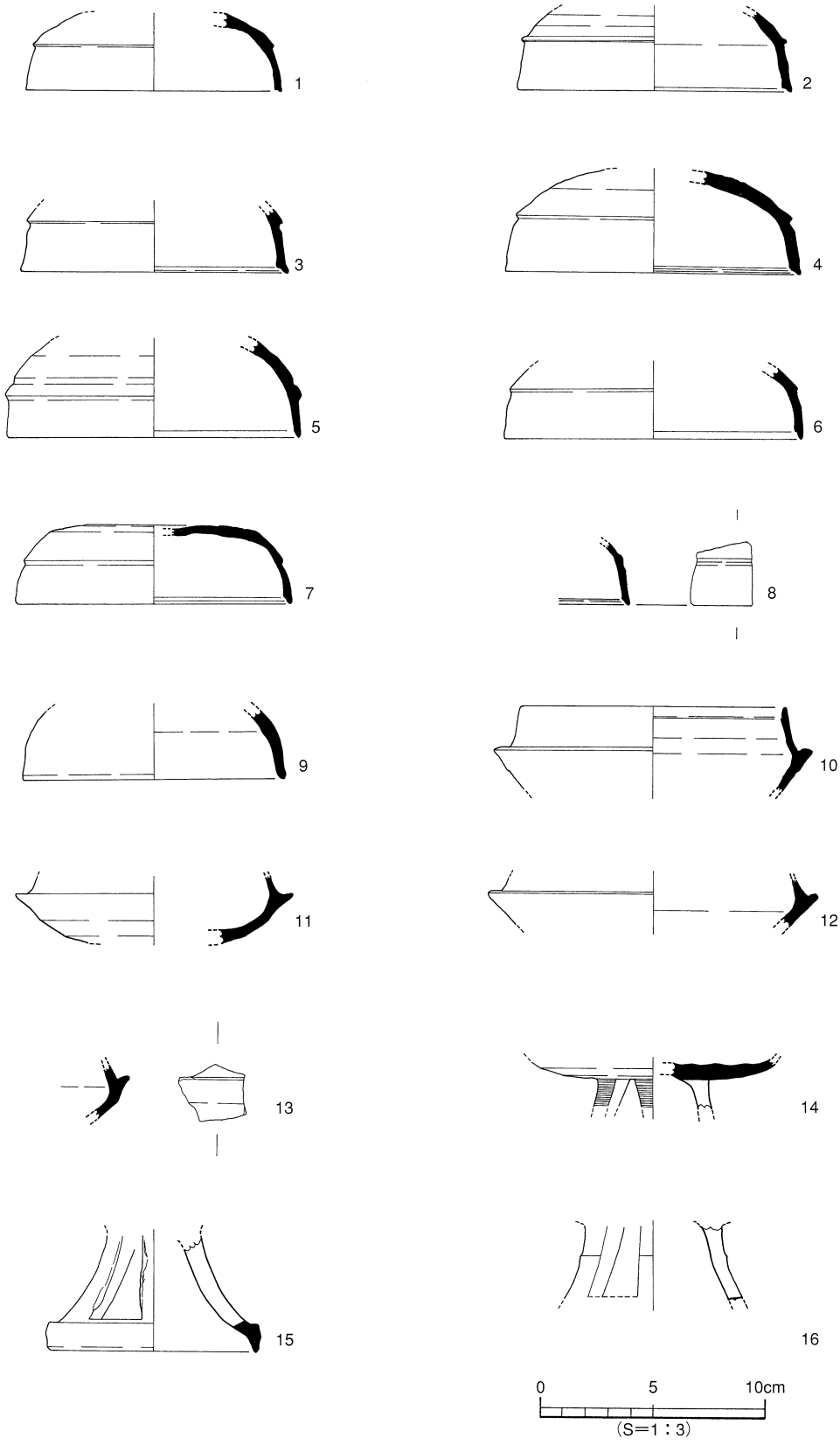
遺　物　（第91～93図）

須恵器（26～67）器種には坏蓋、蓋、坏身、高坏、鉢、埦、壺、瓶、甕がある。26は坏蓋である。

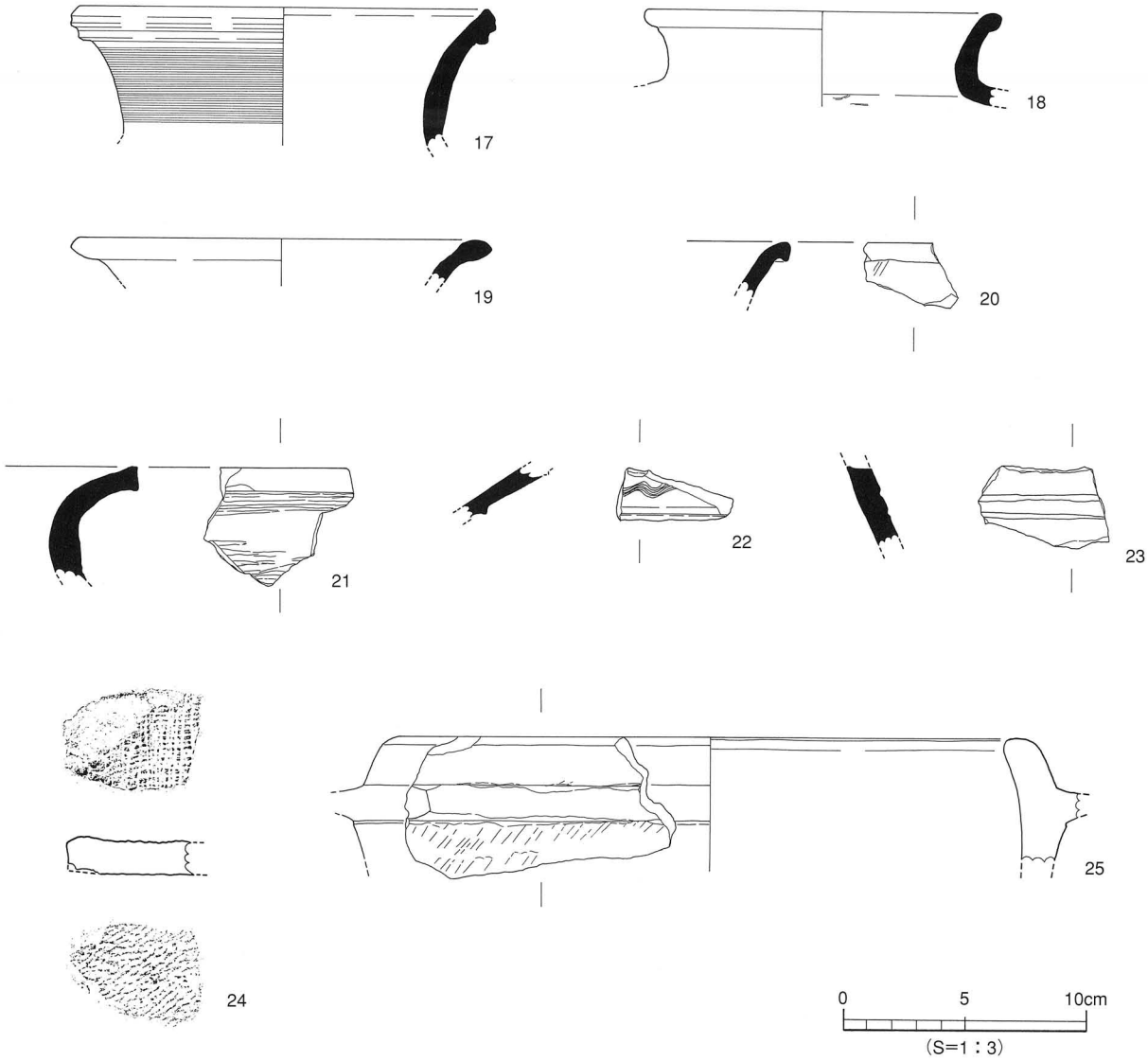


第86図　伊予市三秋窯址位置図（S＝1：20,000）

天井部と口縁部の間に稜をもつ。口縁端部は丸くおさめる。27～31は短頸壺の蓋である。天井部と口縁部の間に鈍い段をもつ。口縁端部は内傾し面をなす。32～47は坏身である。受部は水平または上方に伸び、立ち上がりは短く内傾する。48～57は高坏である。48は受部、49～53は柱部、54～57は脚部片である。49～52は長脚二段透かし、54・55は短脚一段透かしを穿つ。58は鐙である。ラッパ状に大きく開く口縁部片である。突帯より上位は内湾気味に広がる。59は埦である。胴部下位に2条の沈線を施す。60～64は壺である。60は長頸壺の体部片である。体部上面にヘラ記号と思われる線刻が施される。61は脚付き壺の脚部である。柱部と脚裾部との間に一条の沈線を施す。62は短頸壺である。口縁部は短く直立する。63の口縁部は短く直立したのち外反し、端部は尖り気味に丸くおさめる。64の口縁部は短く外反し、やや肥厚する。65は横瓶の体部片である。66は提瓶の口縁部片である。67は甕の口縁部である。口縁部外面に刺突列点文を施す。



第87図　伊予市三秋窯址採集資料実測図(1)



第88図　伊予市三秋窯址採集資料実測図(2)

(3) 駄馬姥ヶ懐(だばうばがたに)2号窯址（第90図）

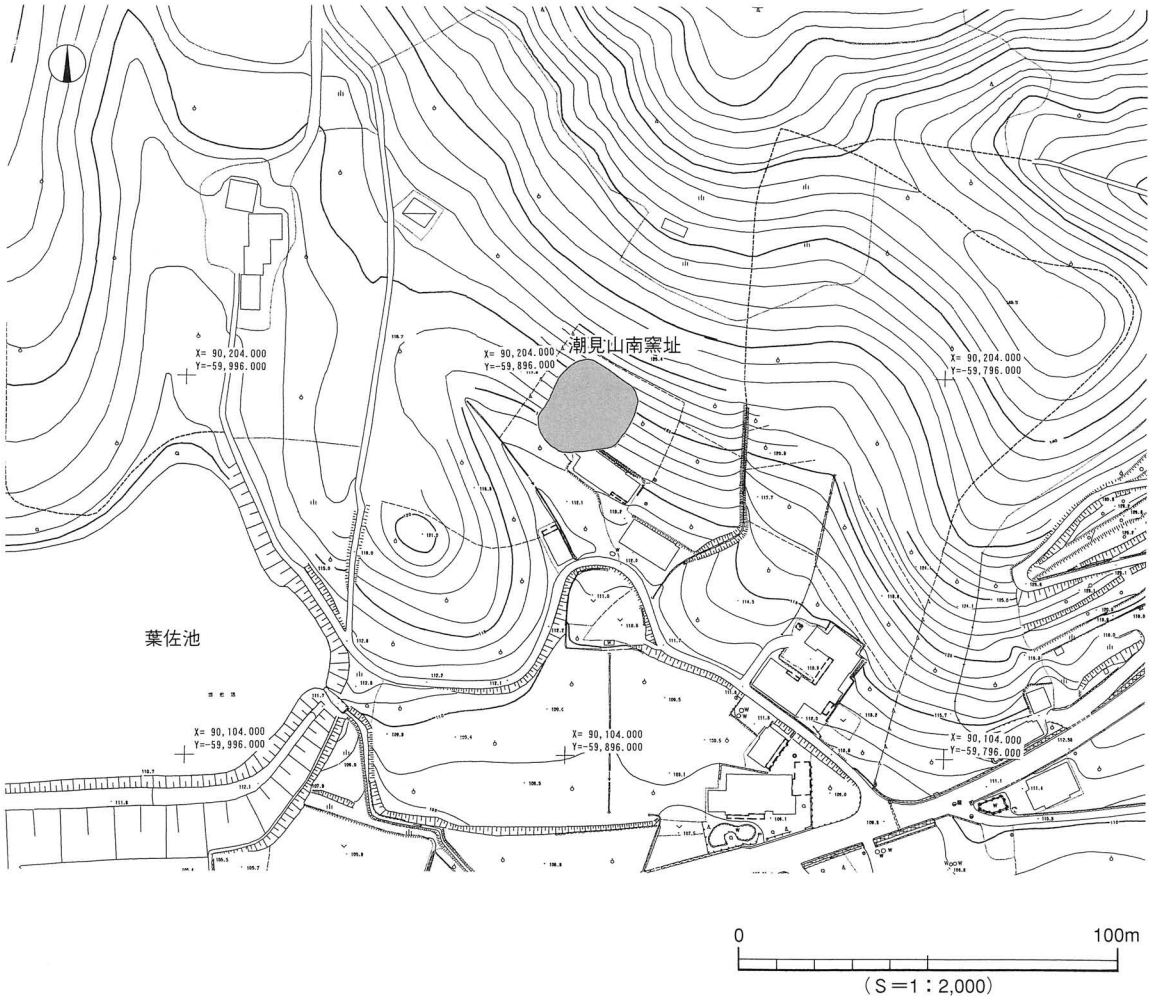
所在地　松山市北梅本町

立　地　小野川上流の小開析谷南斜面
海抜145m

遺　構　未確認

遺　物　（第94図）

須恵器(68～76)器種には坏蓋、蓋、坏、甕がある。68・69は坏蓋である。口縁部は短く屈曲する。70は短頸壺の蓋である。天井部は平らでつまみを付した痕跡が残る。71～74は坏である。71～73は外反気味に立ち上がり、端部は内面に一条の凹線を巡らす。74は高台付坏である。口縁端部は尖り気味となる。75・76は甕である。口縁端部は「コ」の字状を呈し、わずかに上下方に拡張する。



第89図　松山平野東部古窯址群位置図(1)

(4) 枝朶下池(しだのしたいけ)3号窯址（第90図）

所在地　松山市北梅本町

立　地　現在は枝朶下池北岸に位置するが、本来は悪社川西岸に位置する低丘陵の突端部
海抜142m

遺　構　灰原と推測される焼土面

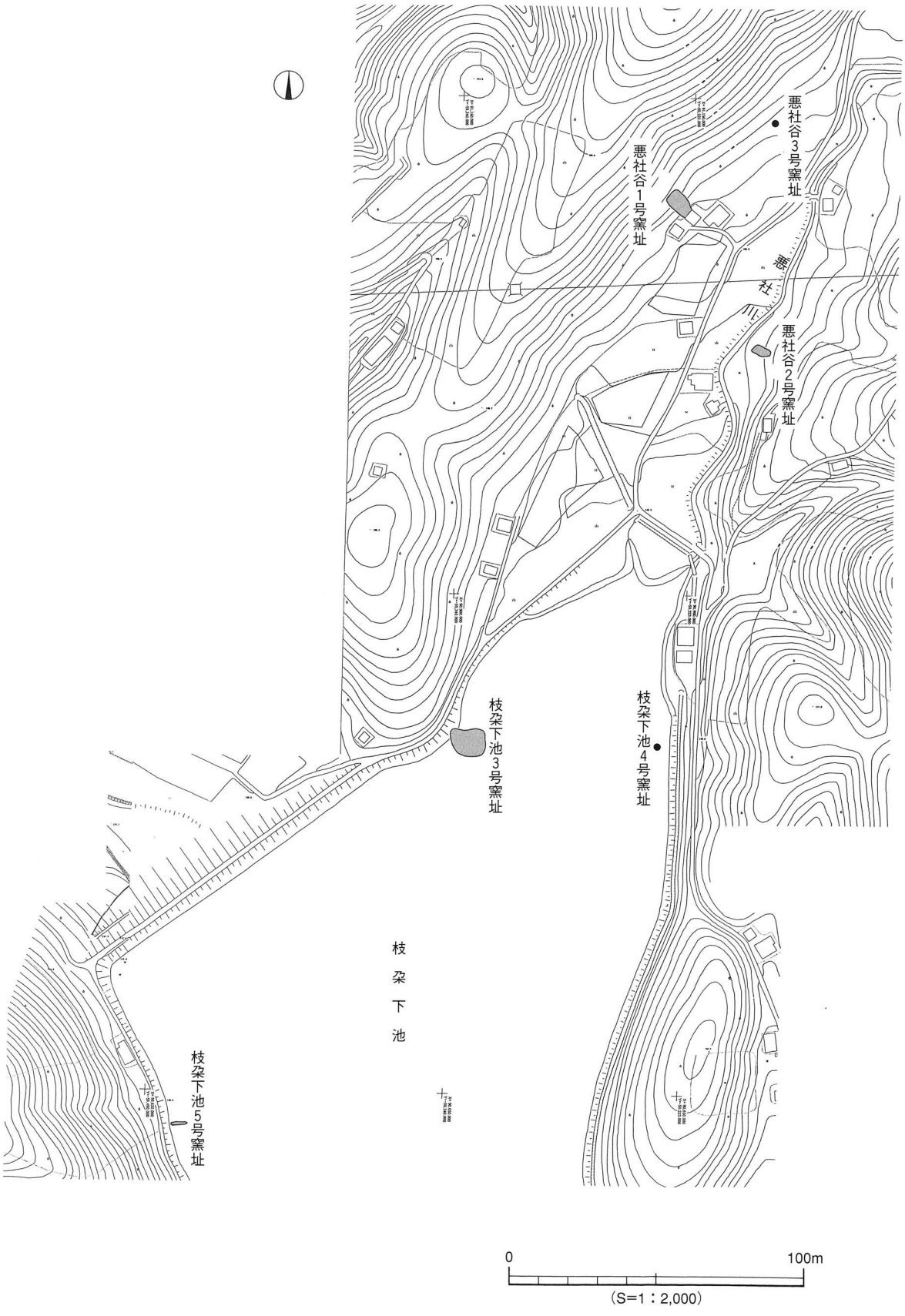
遺　物　（第95図）

須恵器（77～83）器種には坏蓋、坏、皿、甕がある。77は坏蓋である。口縁部は短く屈曲し、外面に面をもつ。78は坏である。口縁部は外反気味に立ち上がり、端部は尖る。79は高台付坏である。80は皿である。口縁部は短く外反し、端部は尖り気味におさめる。81～83は甕である。口縁端部はナデ凹み、上下方に拡張する。83の上端は面をなす。

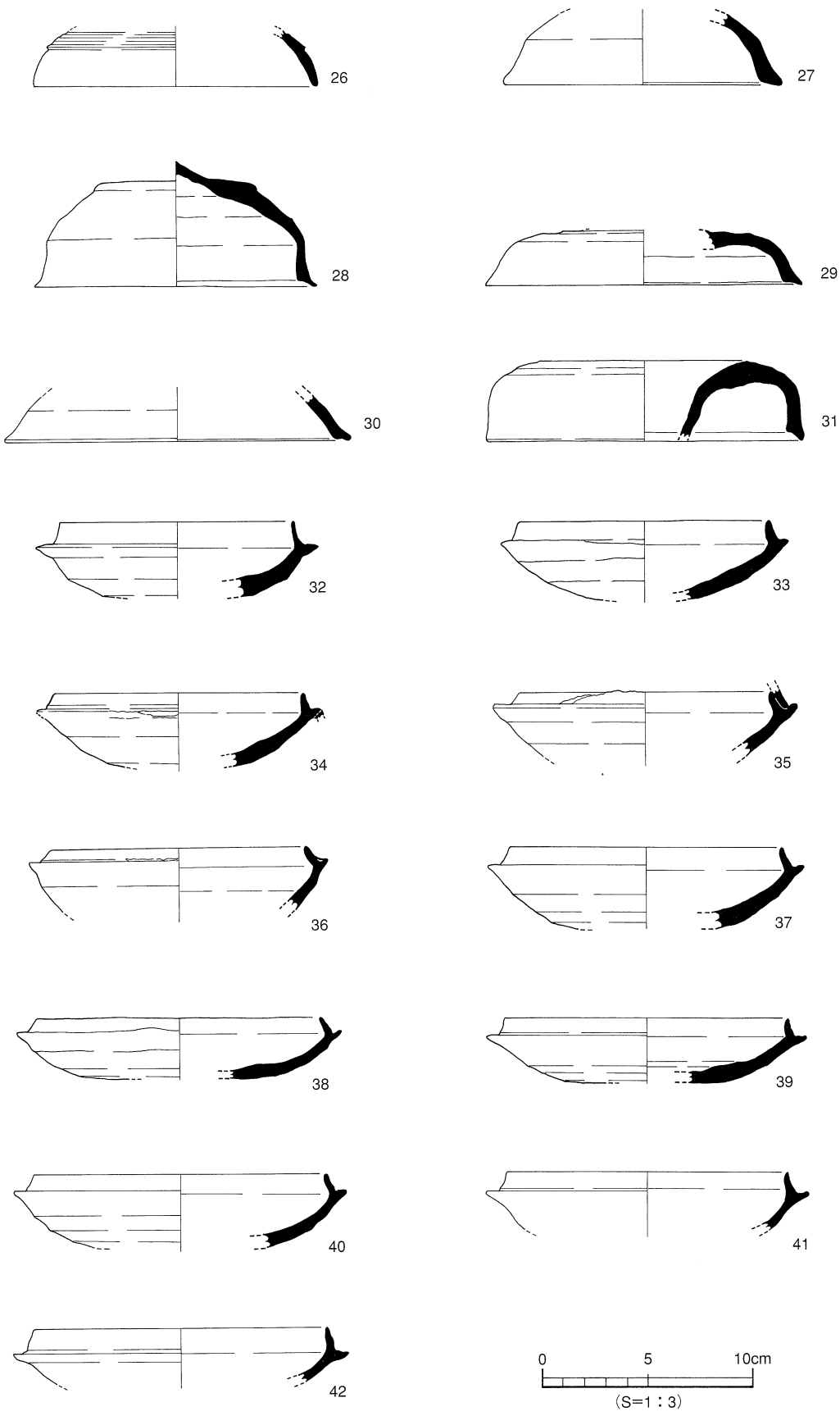
(5) 悪社谷(あくしゃだに)2号窯址（第90図）

所在地　松山市北梅本町

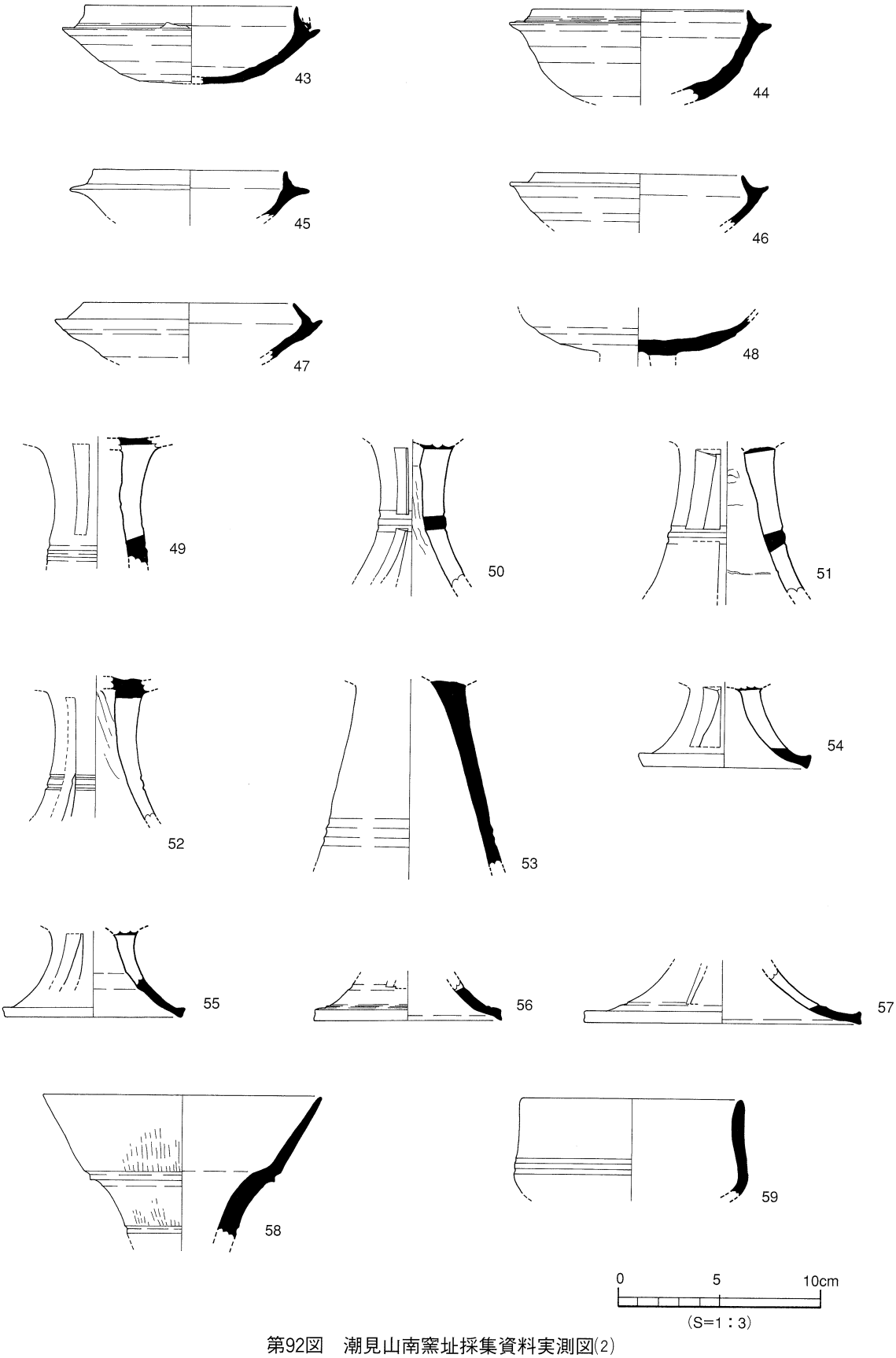
立　地　悪社川上流の小開析谷東斜面



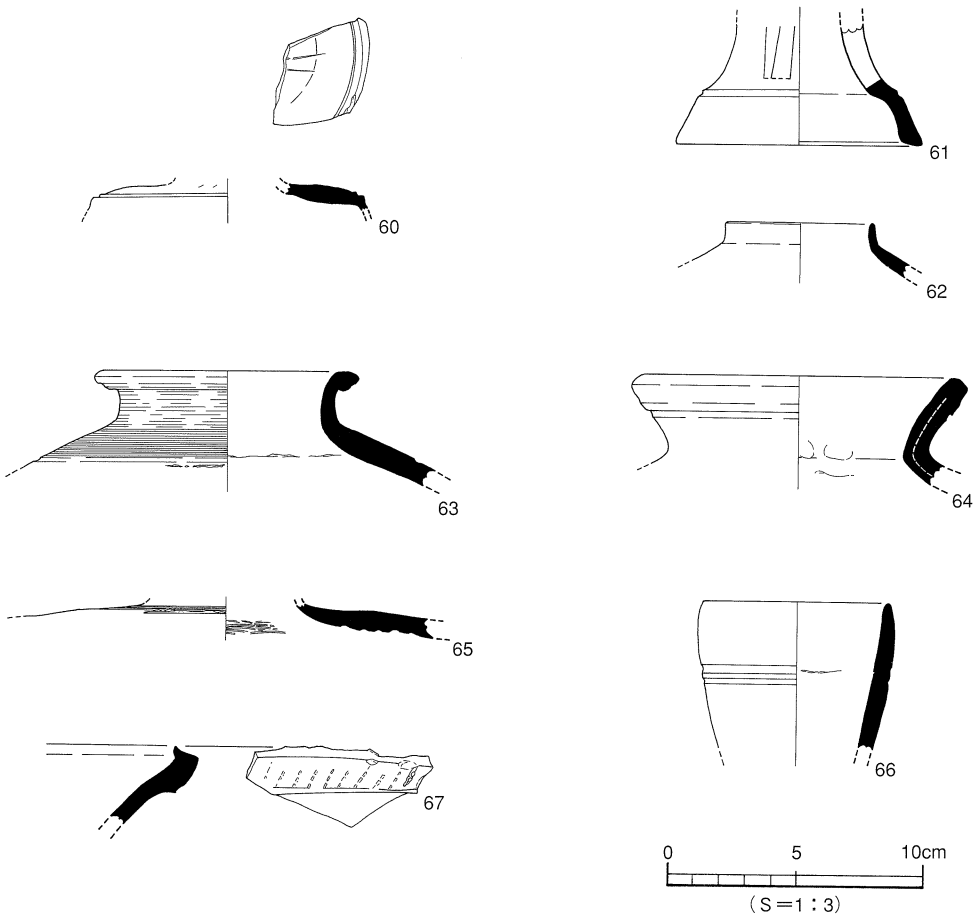
第90図　松山平野東部古窯址群位置図(2)



第91図　潮見山南窯址採集資料実測図(1)



第92図　潮見山南窯址採集資料実測図(2)



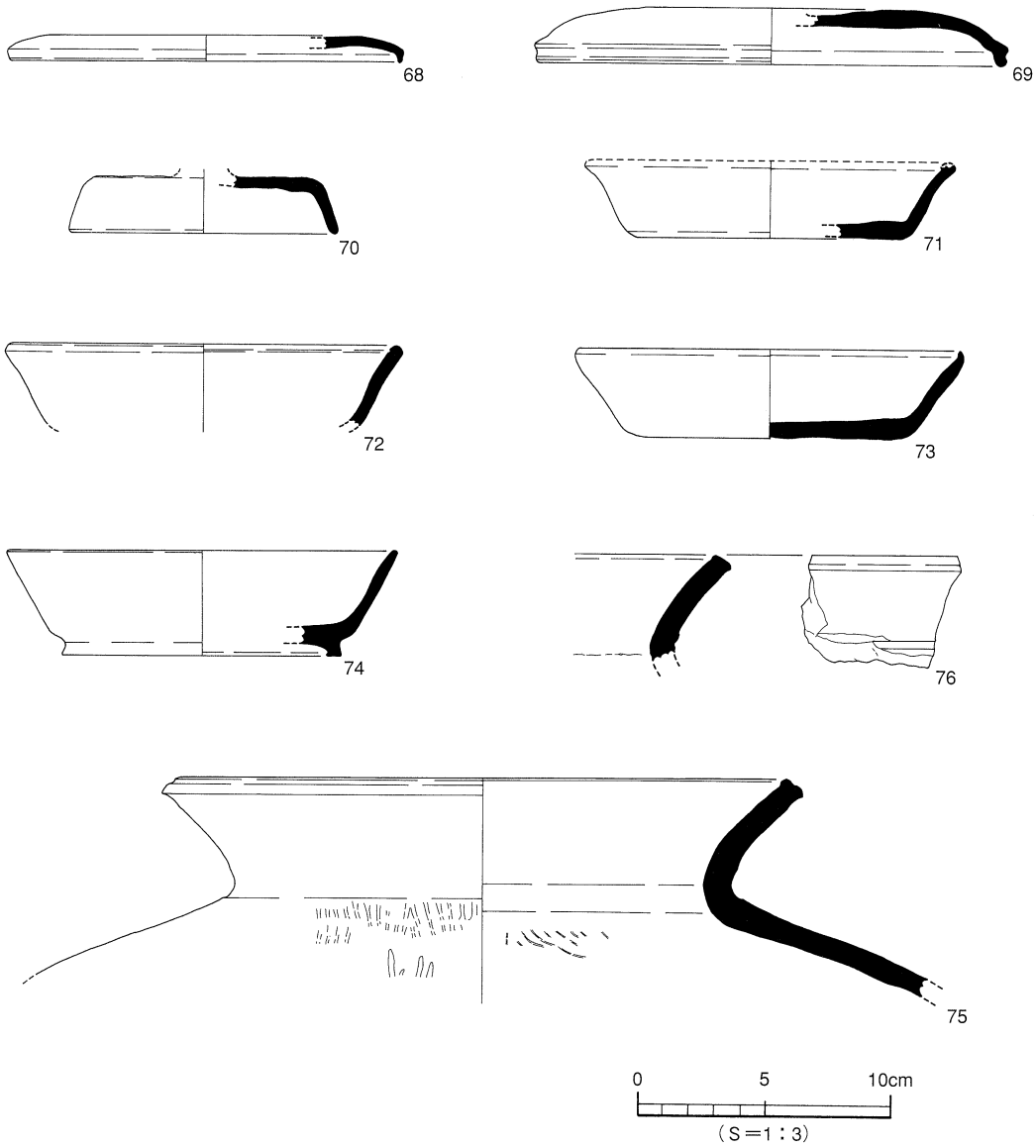
第93図　潮見山南窯址採集資料実測図(3)

海抜140m

遺　構　未確認、遺物が多数散布する。

遺　物　(第96～98図)

須恵器（84～136）器種には坏蓋、坏、皿、壺がある。84～91は坏蓋である。口縁端部の形状から大きく2種に分類できる。(a)84～88のように口縁端部が短く屈曲するもの。器高は扁平なもの。(b)89・90のように口縁端部は屈曲せず、沈線を巡らすもの。器高は前者よりさらに扁平になるもの。91の口縁端部は屈曲せず、外面に段をもつ。小片のため器高が高いかどうかは不明である。92～96は蓋のつまみである。92～95は擬宝珠状の扁平なつまみである。96は扁平な丸みをもったつまみである。97～117は坏である。97～107は口縁部～底部片である。口縁端部の形態により2種に分類できる。(a)97～99のように口縁端部をつまみ出すように外反屈曲するもの。(b)100～107のように口縁端部が屈曲せず尖るもの。108～117は底部片であり、そのうち111～117は高台付坏である。118～135は皿である。口縁端部の形態により3種に分類できる。(a)118～123のように口縁部が短く立ち上がり、端部内面に沈線を巡らすもの。(b)124～129のように口縁部が短く立ち上がり、端部を上方へつまみ上げるもの。(c)130～135のように口縁部が短く立ち上がり、端部直下で「く」の字状に折り曲げ、端部を上方へつま



第94図　駄馬姥ヶ懐２号窯址採集資料実測図

み上げるもの。136は壺である。口縁部が短く直立する短頸壺である。

(6) 悪社谷（あくしゃだに）１号窯址（第90図）

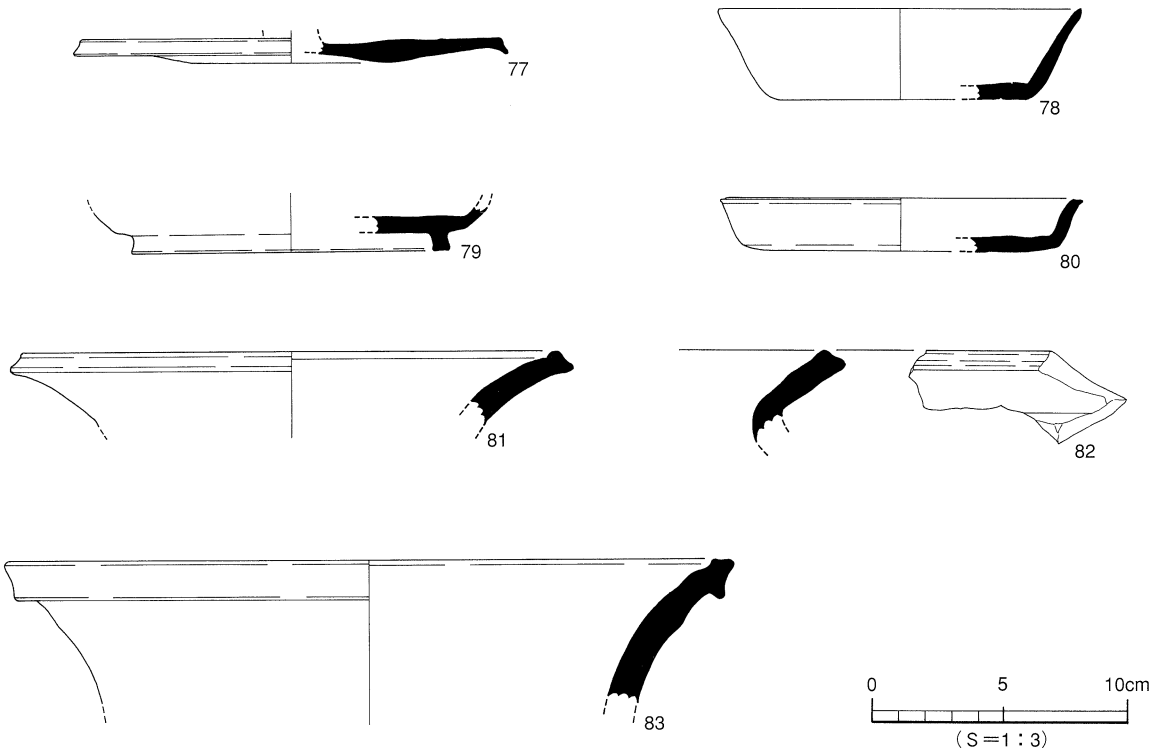
所在地　松山市北梅本町

立　地　悪社川上流の小開析谷西斜面
海抜160m

遺　構　遺物が多数散布する。本書掲載の北梅本悪社谷遺跡２次調査地で検出したSX２が灰原の可能性あり。

遺　物　（第99図）

須恵器（137～140）器種には坏蓋と坏がある。137は坏蓋である。口縁部は短く屈曲し、口縁端部外面に面をもつ。138～140は高台付坏である。



第95図　枝朶下池３号窯址採集資料実測図

３．小　　結

以上、６窯址の資料の提示を行った。これらの出土した遺物、特に坏蓋や坏身などの形態から各窯址の年代観を述べてまとめとする。

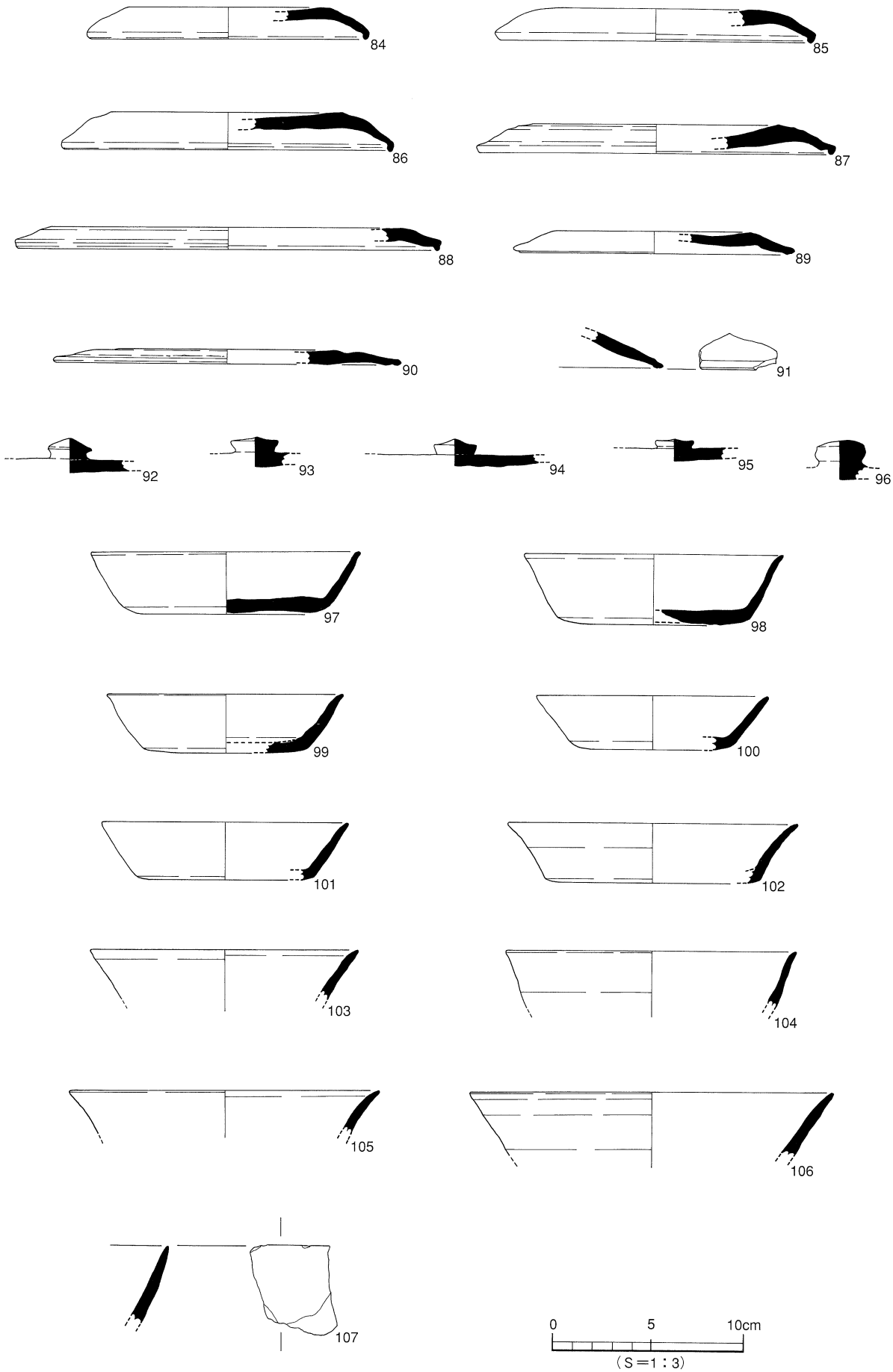
伊予市三秋窯址は提示の資料（１～23）のうち、坏蓋は天井部にやや丸みを残すもの（４）と天井部が扁平なもの（７）とがある。いずれも口縁部が若干外方へ開き気味である。坏身はたちあがりが確認できるものが１点あり（10)、たちあがり高は1.9cmを測る。高坏は３点とも短脚一段透かしである。以上のことから、坏蓋に比べて坏身や高坏には時期的に古い要素を残していると考え、陶邑編年MT15～TK10に併行する６世紀前半から中葉の時期と考えている。

潮見山南窯址は既に善永氏によって資料が公表されている(注2)ことから、今回の資料と比較検討を試みたい。まず坏身は、善永氏のいわれるTK209併行より古い要素をもつものがある。それはたちあがりが細長く尖り気味に伸びるもの（32）である。逆に新しい要素もある。それは高坏に透かしのない長脚高坏（53）や短脚高坏(54・55)が出現している。これらのことから、善永氏が指摘されるように複数期の窯の存在が考えられる。

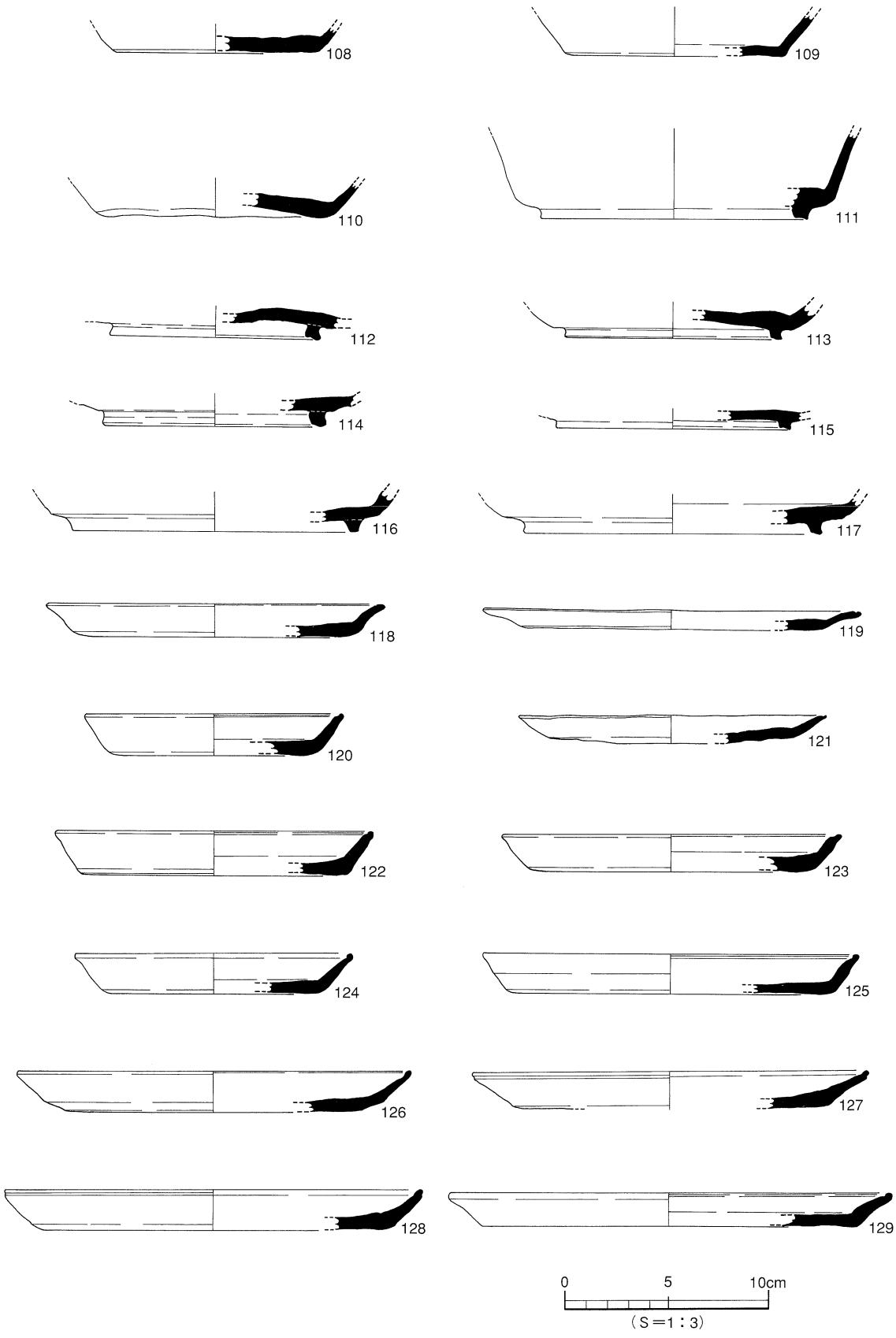
また器種別では坏蓋、蓋、坏身、高坏、甕、壺、甕以外に、今回埦、瓶といった器種も採集することができたのも大きな成果である。

駄馬姥ケ懐２号窯は、『小野川流域の遺跡』のなかで資料が公表されている(注3)。それらと比較した場合、口縁端部を短く下方に屈曲させた坏蓋や口縁端部内面に凹線を巡らす坏は、MT21併行の８世紀初頭と考えられる。

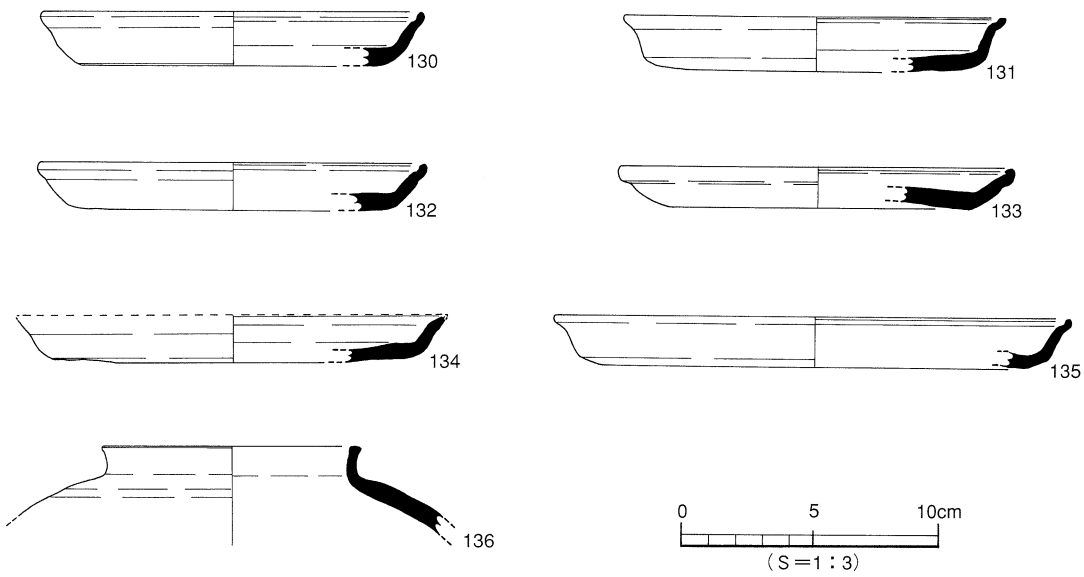
枝朶下池３号窯址は、『小野川流域の遺跡』『小野川流域の遺跡Ⅱ』のなかで資料が公表されている。



第96図　悪社谷２号窯址採集資料実測図(1)



第97図　悪社谷２号窯址採集資料実測図(2)



第98図　悪社谷２号窯址採集資料実測図(3)

そのなかで善永氏が、坏蓋の天井部が扁平なものより時期的に古い根拠とされる器高が高い坏蓋は確認できなかった。今回の採集資料とは坏蓋や坏の点数が少なく比較しがたいが、８世紀前半におさまるものであろう。

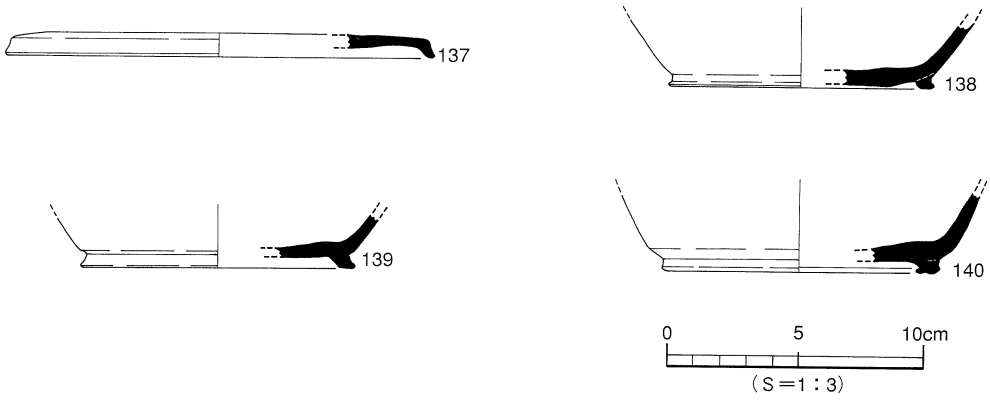
悪社谷２号窯址は、今回の採集資料のなかで最も点数が多く、前述したように器種ごとに形態から細分することができた。特に坏蓋の口縁端部が屈曲する手前の外面に段をもつもの（84～88）があることから、駄馬姥ケ懐２号窯や枝朶下池３号窯址より後出するものである。『小野川流域の遺跡』掲載の資料を含め８世紀前半におさまるものであろう。

悪社谷１号窯址は、今回の採集点数が少ないため、『小野川流域の遺跡』掲載の資料を含め総合的に判断すると、MT21併行の８世紀前半と位置付けられる。

現在までに松山平野東部古窯址群のなかで本格的な発掘調査が行われたのは駄馬姥ケ懐１号窯址１基のみである。更に松山平野全体のなかでもその数は限られている。そのため、窯の操業年代や規模・数などを採集資料から推測しているのが現状である。

今回提示した資料のなかで伊予市三秋窯址の資料は、松山平野南部古窯址群（砥部古窯址群）の谷田２号窯址(注4･5･6)に同時期か若干先行する時期と考えられ、伊予市市場南組窯址(注7)に次ぐ古い時期の窯として重要視される。こうした窯址のほとんどは土砂の流出などにより崩壊の一途をたどっており、早急に学術的な調査が望まれる。

最後になりましたが、資料に関する助言と資料を寄贈していただきました池田學氏と長井数秋氏、遺物の採集を快諾していただいた潮見山南窯址の土地所有者である宮内文雄氏、松山平野東部古窯址群について指導をいただきました陶芸家の河野玄容氏、資料についての指導をいただきました宮内慎一氏には末尾になりましたが、記して感謝申し上げます。



第99図　悪社谷１号窯址採集資料実測図

〔注〕

１．1995年に㈶愛媛県埋蔵文化財調査センターにより発掘調査された新池遺跡（新池１～３号窯址）との混同を避けるため、長井氏により命名された。

２．善永　光一　　1998「松山市小野地区における窯址の分布と変遷」『小野川流域の遺跡Ⅱ』松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

３．栗田　茂敏・加島なおみ　1996「駄馬姥ケ懐窯址」『小野川流域の遺跡』松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

４．阪本　安光　　1981『愛媛県総合運動公園関係埋蔵文化財調査報告書Ⅲ』愛媛県教育委員会

５．真鍋　修身　　1991「愛媛県下窯址出土の須恵器について－愛媛県における須恵器編年私論－」『遺跡第33号』遺跡発行会

６．山内　英樹　　2000「愛媛県出土埴輪の基礎的研究(1)－谷田２号窯出土資料の再検討－」『紀要愛媛創刊号』㈶愛媛県埋蔵文化財調査センター

７．長井　数秋　　1992「愛媛県の須恵器編年」『愛媛考古学　12』愛媛考古学協会

1994「伊予市市場南組１号窯址出土の須恵器」『ソーシアル・リサーチ20』

〔参考文献〕

真鍋　修身　　1966「愛媛県カメ谷窯址発掘調査」『古代学研究　44』

田辺　昭三　　1966『陶邑古窯址群Ⅰ』平安学園考古学クラブ

1981『須恵器大成』

中村　　浩ほか　1976『陶邑Ⅰ』大阪府教育委員会

1977『陶邑Ⅱ』大阪府教育委員会

1978『陶邑Ⅲ』大阪府教育委員会

中村　　浩　　1981『和泉陶邑窯の研究』

1988「須恵器の年代」『季刊考古学　第24集』

1990『研究入門　須恵器』柏書房

松本　敏三　1982「香川県出土の古式須恵器－宮山窯址の須恵器」『瀬戸内海歴史民俗資料館年報７』瀬戸内海歴史民俗資料館
1984「須恵器の源流－四国地方」『日本陶磁の源流』柏書房
1988「須恵器の窯址群－中国・四国」『季刊考古学　第24集』
藤原　学　1988「須恵器の窯址群－近畿」『季刊考古学　第24集』
舟山　良一　1988「須恵器の窯址群－九州」『季刊考古学　第24集』
藤原　学　1989「吹田32号須恵器窯址の遺物」『陶質土器の国際交流』柏書房
亀田　修一　1989「中国・四国地域」『陶質土器の国際交流』柏書房
十亀　幸雄ほか　1991「特集・愛媛の須恵器」遺跡発行会
宮崎　泰好ほか　1992『砥部町内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ　通谷池第４号窯址・千足第１号窯址』愛媛県砥部町教育委員会
舟山　良一・松本　敏三・池田　榮史　1996『須恵器集成図録　第５巻西日本編』
愛媛県史編纂委員会　1986『愛媛県史　資料編　考古』
西川　真美ほか　1998『四国縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書XII』㈶愛媛県埋蔵文化財調査センター
作田　一耕ほか　2000『新池遺跡・市場南組窯址』㈶愛媛県埋蔵文化財調査センター

遺物一覧　－凡　例－

(1)　以下の表は遺物の計測値及び観察一覧である。山之内・髙尾久子が作成した。

(2)　遺物観察表の各記載について。

法　量　欄　（　）：復元推定値

形態・施文欄　土器の各部位名称を略記。

例）口縁→口縁部、口端→口縁端部、胴中→胴部中位、柱→柱部、胴底→胴部～底部

胎土・焼成欄　胎土欄では混和剤を略記。

例）砂→砂粒、長→長石、石→石英、密→精製土。（　）中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。

例）砂・長（１～４）、多→「１～４㎜大の砂粒・長石を多く含む」である。

焼成欄の略記。◎→良好、○→良、△→不良。

表40　伊予市三秋窯址　採集遺物観察表　土製品　(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)・(内面)	胎土 焼成	備考	図版
1	坏蓋	口径(11.5) 残高 3.5	天井部と口縁部の間に断面三角形の稜をもつ。口縁端部は内傾する。	回転ナデ	㋐ナデ ㋑回転ナデ	灰色・青灰色 灰色	密 ◎		
2	坏蓋	口径(12.2) 残高 3.6	天井部と口縁部の間にやや突出する稜をもつ。口縁端部は内傾する。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
3	坏蓋	口径(12.0) 残高 2.9	天井部と口縁部の間に断面三角形の稜をもつ。口縁端部は内傾する。	回転ナデ	回転ナデ	暗青灰色 青灰色	密 ◎		
4	坏蓋	口径(13.2) 残高 4.6	やや丸みをもった天井部。天井部と口縁部の間に断面三角形の稜をもつ。口縁端部は内傾する。	㋐回転ヘラケズリ ㋑回転ナデ	回転ナデ	灰色 青灰色	密 長(1～2) ◎		
5	坏蓋	口径(13.1) 残高 4.3	天井部と口縁部の間に断面三角形の稜をもち、その直上に1条の沈線を巡らす。口縁端部は内傾する。	㋐回転ヘラケズリ ㋑回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	灰色 灰色	密 ◎		
6	坏蓋	口径(13.3) 残高 3.2	天井部と口縁部の間に鈍い稜をもつ。口縁端部は内傾する。	回転ナデ	回転ナデ	暗青灰色 灰色	密 長(1) ◎		
7	坏蓋	口径(12.2) 残高 3.6	平坦な天井部。天井部と口縁部の間に鈍い断面三角形の稜をもつ。口縁端部は内傾する。	㋐回転ヘラケズリ ㋑回転ナデ	回転ナデ	暗青灰色 青灰色	密 長(1～2) ◎		
8	坏蓋	残高 2.8	天井部と口縁部の間に鈍い稜をもつ。口縁端部は内傾する。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
9	蓋	口径(11.7) 残高 3.1	天井部と口縁部の間の稜なし。口縁端部内面の段なし。	回転ナデ	回転ナデ	暗青灰色 暗青灰色	密 ◎		
10	坏身	口径(11.8) 残高 3.8	受部は水平に短く伸び、端部は肥厚する。立ち上がりは内傾気味に伸び、端部は直立する。	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	灰色 灰色	密 ◎		
11	坏身	残高 3.1	受部は水平に伸び、端部は尖り気味におさめる。	㋐上回転ナデ ㋐下回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰色 青灰色	密 長(1) ◎		
12	坏身	残高 2.1	受部はやや上方に肥厚気味に伸びる。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
13	坏身	残高 2.4	受部はやや上方に短く伸び、端部は尖り気味におさめる。	㋐上回転ナデ ㋐下回転ヘラケズリ	ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
14	高坏	残高 2.0	受部～脚部片。短脚一段透かし。	㋐底回転ヘラケズリ ㋑カキメ	㋐回転ナデ ナデ	青灰色 青灰色	密 長(1) ◎		
15	高坏	残高 5.2	脚部は「ハ」の字状に外反して下がり、端部は凹面をなして内傾する。短脚一段透かし。	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	灰色 灰色	密 ◎		
16	高坏	残高 3.3	脚部は「ハ」の字状に外反して下がり、脚中央付近に1条の突線あり。短脚一段透かし。	回転ナデ	回転ナデ	暗青灰色 暗青灰色	密 ◎		
17	壺	口径(17.0) 残高 5.7	口縁部は外反し、口縁部直下に2条の突帯が巡る。端部は上方に水平な面をなす。	㋐端回転ヨコナデ ㋑カキメ(10本/cm) 回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	灰色 灰色	密 ◎		
18	甕	口径(14.6) 残高 3.8	口縁部は短く外反し、端部は丸くおさめる。	回転ヨコナデ	マメツ	灰白色 灰白色	密 ◎		
19	甕	口径(17.4) 残高 1.8	外反する口縁部。端部はやや尖り気味に丸くおさめる。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		
20	甕	残高 2.3	外反する口縁部。端部は下方に下垂させる。	回転ナデ (ハケ)	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		

伊予市三秋窯址　採集遺物観察表　土製品　(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)/(内面)	胎土 焼成	備考	図版
21	甕	残高 4.7	口縁部は大きく外反し、端部は「コ」の字状を呈する。	㊀㊁回転ナデ ㊁ハケ後回転ナデ 回転ナデ タタキ	ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		
22	器台	残高 2.2	受部片。2条の突帯間に波状文を施す。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
23	器台	残高 3.3	脚部片。透かし孔の下位に2条の沈線を施す。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		

表41　伊予市三秋窯址　採集遺物観察表　瓦製品

番号	種類	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	調整 凸面	調整 凹面	色調 (凸面)/(凹面)	胎土 焼成	備考	図版
24	平瓦	5.3	3.8	1.3	46.45	細縄叩き	布目痕	暗青灰色 暗青灰色	密 ◎		

表42　伊予市三秋窯址　採集遺物観察表　石製品

番号	器種	残存	材質	法量 口径(cm)	法量 高さ(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
25	石鍋	1/6	凝灰岩	(25.8)	5.1	1.5	253.07		

表43　潮見山南窯址　採集遺物観察表　土製品　(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)/(内面)	胎土 焼成	備考	図版
26	坏蓋	口径(13.5) 残高 2.7	天井部と口縁部の間に断面三角形の稜をもつ。口縁端部は丸くおさめる。	マメツ	回転ナデ	灰色 暗灰色	密 ◎		
27	蓋	口径(13.4) 残高 3.4	天井部と口縁部の間に鈍い稜をもつ。口縁部は外反し、端部は内傾し面をなす。	マメツ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
28	蓋	口径(13.6) 器高 6.0	天井部と口縁部との間に段をなす。口縁部は外反し、端部は内傾し面をなす。	㊄ナデ ㊁回転ナデ	回転ナデ	青灰色 灰色	密 ○	焼け ひずみ	
29	蓋	口径(15.2) 残高 2.6	天井部と口縁部の間に鈍い稜をもつ。口縁部は外反し、端部は内傾し面をなす。	㊄ナデ ㊁回転ナデ	㊄ナデ ㊁回転ナデ	青灰色 灰色	密 ○	焼け ひずみ	
30	蓋	口径(16.6) 残高 2.2	口縁部は外反し、端部は内傾し面をなす。	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	青灰色 灰色	密 ◎	焼け ひずみ	
31	蓋	口径(15.0) 器高 3.9	天井部と口縁部の間に段をなす。口縁部は外反し、端部は内傾し面をなす。	㊄回転ヘラケズリ後ナデ ㊁回転ナデ	回転ナデ	青灰色 灰色	密 ○	焼け ひずみ	
32	坏身	口径(11.2) 残高 3.6	受部は水平に伸び、端部は尖り気味におさめる。立ち上がりは内傾し、端部は丸くおさめる。	㊁回転ナデ ㊃回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
33	坏身	口径(12.0) 残高 3.8	受部は水平に短く伸び、端部は丸くおさめる。立ち上がりは内傾し、端部は丸くおさめる。	㊁回転ナデ ㊃回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰褐色 灰褐色	密 ○	焼け ひずみ	
34	坏身	口径(12.0) 残高 3.6	受部は水平に短く伸び、端部は丸くおさめる。立ち上がりは短く内傾し、端部は丸くおさめる。	㊁不明 ㊇回転ナデ	㊁回転ナデ ㊇ナデ	灰白色 灰白色	密 ◎	自然釉 重ね焼き	
35	坏身	口径(12.0) 残高 3.1	受部は上方へ伸び、端部は丸くおさめる。立ち上がりは内傾し、端部は尖り気味におさめる。	㊁不明 ㊇ナデ	回転ナデ	灰茶色 灰褐色	密 ◎	重ね焼き	

潮見山南窯址　採集遺物観察表　土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		(外面) 色調 (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
36	坏身	口径 (12.2) 残高 3.0	受部は上方へ短く伸び、端部は尖り気味におさめる。立ち上がりは内傾し、端部は尖り気味におさめる。	㊐ 不明 ㊎上 マメツ ㊎下 回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎	重ね焼き	
37	坏身	口径 (13.0) 残高 3.9	受部は水平に伸び、端部は尖り気味におさめる。立ち上がりは内傾し、端部は尖り気味におさめる。	㊐回転ナデ ㊍回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎	自然釉	
38	坏身	口径 (13.6) 残高 2.9	受部は上方へ短く伸び、端部は尖り気味におさめる。立ち上がりは内傾し、端部は尖り気味におさめる。	㊐回転ナデ ㊍回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎	焼け ひずみ	
39	坏身	口径 (13.6) 残高 3.1	受部は水平へ伸び、端部は尖り気味におさめる。立ち上がりは内傾したのち立ち上がり、尖り気味におさめる。	㊐回転ナデ ㊍回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰色 青灰色	密 ◎		
40	坏身	口径 (14.0) 残高 3.6	受部は水平へ短く伸び、端部は尖り気味におさめる。立ち上がりは内傾し、端部は丸くおさめる。	㊐回転ナデ ㊍回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎	自然釉 焼け ひずみ	
41	坏身	口径 (13.5) 残高 2.8	受部は水平へ伸び、凹面をなす。端部は丸くおさめる。立ち上がりは内傾したのち立ち上がり、尖り気味におさめる。	㊐回転ナデ ㊍回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰白色 灰白色	密 ◎	自然釉	
42	坏身	口径 (14.0) 残高 2.7	受部は水平へ伸び、端部は尖り気味におさめる。立ち上がりは内傾し、尖り気味におさめる。	㊐回転ナデ ㊏釉付着の為不明	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎	自然釉	
43	坏身	口径 (10.6) 器高 3.9	受部は水平へ伸び、端部は尖り気味におさめる。立ち上がりは内傾したのち立ち上がり、尖り気味におさめる。	回転ナデ	㊐回転ナデ ㊍ナデ	灰色 乳灰色	密 石(1) ◎	重ね焼き	
44	坏身	口径 (10.8) 残高 4.7	受部は水平に伸び、端部は尖り気味におさめる。立ち上がりは内傾し、丸くおさめる。	㊐回転ナデ ㊍回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰褐色 乳灰色	密 ○		
45	坏身	口径 (9.6) 残高 2.3	受部は水平に伸び、端部は尖り気味におさめる。立ち上がりは短く内傾し、端部は尖り気味におさめる。	㊐ナデ ㊎下 回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
46	坏身	口径 (10.3) 残高 2.5	受部はやや上方に伸び、端部は尖り気味におさめる。立ち上がりは内傾し、端部は尖り気味におさめる。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
47	坏身	口径 (10.5) 残高 2.8	受部は上方に伸び、凹面をなす。端部は尖り気味におさめる。立ち上がりは内傾し、端部は尖り気味におさめる。	㊐回転ナデ ㊍回転ヘラケズリ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ○		
48	高坏	残高 2.1	受部片。底部と口縁部の境に段をもつ。	回転ヘラケズリ ナデ	ナデ	灰色 灰褐色	密 ◎	焼け ひずみ	
49	高坏	残高 6.3	柱部片。長脚二段透かし。3条の沈線を施す。	回転ナデ	ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		
50	高坏	残高 7.1	柱部片。長脚二段透かし。2条の沈線を施す。	回転ヨコナデ	㊚上 ナデ しぼり痕 ㊚下 回転ヨコナデ	青灰色 灰色・青灰色	密 ◎		
51	高坏	残高 7.4	柱部片。長脚二段透かし。2条の沈線を施す。	回転ヨコナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎	自然釉	
52	高坏	残高 7.3	柱部片。長脚二段透かし。2条の沈線を施す。	回転ナデ	㊏自然釉付着の為不明 ㊚しぼり痕	灰色 灰色	密 ◎	自然釉	
53	高坏	残高 9.3	柱部片。3条の沈線を施す。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎	自然釉	
54	高坏	脚底径 (8.2) 残高 4.0	脚部片。短脚一段透かし。ラッパ状に広がり、端面は上下に拡張する。	回転ヨコナデ	㊚上 ナデ ㊚下 回転ヨコナデ	灰褐色 灰色	密 ◎		
55	高坏	脚底径 (8.8) 残高 4.3	脚部片。短脚一段透かし。ラッパ状に広がり、端面は上下に拡張する。	㊚端 ナデ ㊚ 回転ナデ	自然釉付着の為不明	灰褐色 灰褐色	密 ◎	自然釉	

潮見山南窯址　採集遺物観察表　土製品　(3)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)/(内面)	胎土 焼成	備考	図版
56	高坏	脚底径 (9.4) 残高 2.0	脚部片。端面は下方に拡張する。透かしあり。	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		
57	高坏	脚底径(13.7) 残高 2.8	脚部片。端面は上下に拡張する。透かしあり。	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		
58	鉢	口径 (13.8) 残高 7.2	口縁部中位に断面三角形の突帯をもつ。突帯より上は内湾気味に広がる。口縁端部は尖り気味におさめる。	ハケ（5本/cm）	回転ヨコナデ	灰色 灰茶色	密 ◎	自然釉	
59	埦	口径 (11.0) 残高 4.8	口縁部は内湾気味に立ち上がり、端部で外反する。端部は丸くおさめる。胴部下位に2条の沈線を施す。	釉付着の為不明	回転ヨコナデ	オリーブ色 灰色	密 ◎	自然釉	
60	壺	残高 1.0	肩の張る体部。外面に1条の沈線を施す。	回転ヨコナデ	釉不着の為不明	灰色・オリーブ色 暗オリーブ色	密 ◎	自然釉 ヘラ記号?	
61	壺	脚底径 (9.6) 残高 4.8	外反しながら広がる脚部。柱部と脚裾部との間に1条の沈線をもつ。端部は内湾し、面をなす。透かしあり。	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	灰褐色 灰褐色	密 ◎	自然釉	
62	壺	口径 (5.6) 残高 2.1	口縁部は短く直立し、端部は丸くおさめる。	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	灰色 灰色	密 ◎	自然釉	
63	壺	口径 (9.6) 残高 4.4	口縁部は短く直立したのち外反し、端部は水平方向へ尖り気味に丸くおさめる。	㊐カキメ→回転ヨコナデ ㊋カキメ(7本/cm)	㊐回転ヨコナデ→ナデ ㊋回転ヨコナデ	灰褐色 灰色	密 ◎	自然釉	
64	壺	口径 (11.8) 残高 4.2	口縁部は短く外反し、端部はやや肥厚して「コ」の字状を呈する。	回転ヨコナデ	㊏回転ヨコナデ ㊍ナデ	灰褐色 灰褐色	密 ◎		
65	横瓶	残高 1.2	肩の張る体部。	㊋上回転ヨコナデ ㊋中カキメ(6本/cm) ㊋下釉付着の為不明	㊋上回転ヨコナデ ㊍タタキ	灰色 灰色	密 ◎	自然釉	
66	提瓶	口径 (7.2) 残高 5.8	口縁部は外反しながら立ち上がり端部付近で内湾する。端部は丸く仕上げる。	釉付着の為不明	回転ヨコナデ	灰色 オリーブ色	密 ◎	自然釉 焼け ひずみ	
67	甕	残高 3.1	口縁部は外反し、端部は「コ」の字状を呈し、上方に拡張する。	㊏回転ヨコナデ ㊐釉付着の為不明	回転ヨコナデ	灰色(オリーブ色) 灰色	密 ◎	自然釉	

表44　駄馬姥ヶ懐2号窯址　採集遺物観察表　土製品　(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)/(内面)	胎土 焼成	備考	図版
68	坏蓋	口径(15.4) 残高 1.0	口縁部は短く屈曲し、端部は尖る。	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		
69	坏蓋	口径(18.4) 残高 2.2	天井部は平ら。口縁部は短く屈曲し、端部は外反しながら丸くおさめる。	㊎ナデ 回転ヘラケズリ ㊐回転ヨコナデ	㊎ナデ ㊐回転ヨコナデ	灰色 灰色	密 ◎		
70	蓋	口径(10.6) 残高 2.3	天井部は平ら。天井部と口縁部の境にゆるやかな稜をもつ。	㊎回転ヘラケズリ →ナデ ㊐回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		
71	坏	口径(14.2) 底径(10.6) 器高 3.0	口縁部は外反気味に立ち上がり端部は丸く、内面に一条の凹線を巡らす。	㊐回転ヨコナデ ㊌ナデ	㊐回転ヨコナデ ㊌ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
72	坏	口径(15.0) 残高 3.2	口縁部は外反気味に立ち上がり、端部は丸く、内面に一条の凹線を巡らす。	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	灰色 青灰色	密 ◎		
73	坏	口径(15.0) 底径(10.6) 器高 3.5	口縁部は外反気味に立ち上がり、端部は尖り気味となり、内面に一条の凹線を巡らす。	㊐回転ヨコナデ ㊌ナデ	回転ヨコナデ	灰色 灰色	密 ◎		

駄馬姥ヶ懐窯址　採集遺物観察表　土製品　(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
74	高台付坏	口径(15.2) 底径(11.0) 器高 4.2	口縁部は直線的に立ち上がり、端部は尖り気味となる。短い高台は水平に接地する。	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	灰色 青灰色	密 ◎		
75	甕	口径(24.0) 残高 8.6	口縁部は大きく外反し、端部はわずかに上下方に拡張する。端面はややナデ凹む。	㊐回転ヨコナデ ㊚タタキ→ヨコナデ	㊐回転ヨコナデ ㊚タタキ→ヨコナデ	灰白色 灰白色	密 ◎		
76	甕	残高 4.3	口縁部は頸部より外反しながら立ち上がる。端部は平らでわずかに上下方に拡張する。	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		

表45　枝朶下池3号窯址　採集遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
77	坏蓋	口径 (17.0) 残高 1.0	口縁部は短く屈曲し、端部は外面に面をもち、尖る。	㊍ナデ 回転ヘラケズリ ㊐回転ヨコナデ	㊍回転ヨコナデ→ナデ ㊐回転ヨコナデ	灰色 灰色	密 ◎	焼け ひずみ	
78	坏	口径 (14.2) 底径 (10.2) 器高 3.6	口縁部は外反気味に立ち上がり、端部は尖る。	㊐回転ヨコナデ ㊓回転ヘラキリ後ナデ	回転ヨコナデ	乳青灰色 乳青灰色	密 ◎		
79	高台付坏	底径 (12.4) 残高 1.7	短い高台。接地部は水平となる。	㊙回転ヨコナデ ㊓回転ヨコナデ→ナデ	回転ヨコナデ→ナデ	乳青灰色 青灰色	密 ◎		
80	皿	口径 (13.6) 底径 (12.4) 器高 2.1	口縁部は外反気味に短く立ち上がり、端部は尖り気味に外反する。	㊐回転ヨコナデ ㊓回転ヨコナデ→ナデ	回転ヨコナデ→ナデ	灰褐色 灰褐色	密 ◎		
81	甕	口径 (21.0) 残高 2.8	口縁部は外反し、端部はナデ凹み、上下方に拡張する。	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	灰色 乳茶灰白色	密 ◎		
82	甕	残高 3.6	口縁部は短く直線的に立ち上がり、端部はナデ凹み、上下方に拡張する。	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	灰色 灰色	密 ◎		
83	甕	口径 (28.2) 残高 5.6	口縁部は大きく外反し、端部はナデ凹み、上下方に拡張する。上端部は面をなす。	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	灰色 灰色	密 ◎		

表46　悪社谷2号窯址　採集遺物観察表　土製品　(1)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
84	坏蓋	口径 (14.2) 残高 1.7	口縁部は短く屈曲し、端部は尖り気味におさめる。	㊍回転ヘラケズリ ㊐回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	灰色 灰色	密 ◎		
85	坏蓋	口径 (16.4) 残高 1.7	口縁部は短く屈曲し、端部は丸くおさめる。	㊍回転ヘラケズリ→ナデ ㊐回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	褐灰色 灰褐色	密 ◎		
86	坏蓋	口径 (17.0) 残高 2.0	口縁部は短く屈曲し、端部は丸くおさめる。	㊍回転ヘラケズリ→ナデ ㊐回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	褐灰色 灰色	密 ◎		
87	坏蓋	口径 (18.6) 残高 1.5	口縁部は短く屈曲し、端部は丸くおさめる。	㊍回転ヘラケズリ→ナデ ㊐回転ヨコナデ	㊍回転ヨコナデ→ナデ 回転ヨコナデ	灰色 灰色	密 ◎		
88	坏蓋	口径 (22.0) 残高 1.2	口縁部は短く屈曲し、端部は外面に面をもち尖り気味におさめる。	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	褐灰色 青灰色	密 ◎		
89	坏蓋	口径 (14.0) 残高 1.2	口縁部は短く屈曲し、端部は屈曲せず丸くおさめる。	㊍回転ヘラケズリ→ナデ ㊐回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		

悪社谷２号窯址　採集遺物観察表　土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
90	坏蓋	口径(18.0) 残高 0.8	天井部と口縁部の境に沈線を巡らし、端部は屈曲せず、丸くおさめる。	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	青灰色 (一部黄灰色) 青灰色	密 ◎		
91	坏蓋	残高 1.9	口縁端部は屈曲せず尖り気味におさめる。端部外面に沈線を巡らす。	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	灰褐色 灰褐色	密 ◎		
92	蓋	つまみ径 2.3 残高 1.8	扁平なつまみ。中央部が山形となる。	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	灰色 灰色	密 ◎		
93	蓋	つまみ径 2.4 残高 1.6	扁平なつまみ。中央部が山形となる。	回転ヨコナデ	ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		
94	蓋	つまみ径(2.2) 残高 1.4	扁平なつまみ。中央部が山形となる。	㋑ナデ ㋒回転ヘラケズリ	回転ヨコナデ	灰褐色 青灰褐色	密 ◎		
95	蓋	つまみ径(2.0) 残高 1.2	扁平なつまみ。中央部が山形となる。	㋑回転ヨコナデ ㋒ナデ	ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		
96	蓋	つまみ径 2.6 残高 2.1	扁平な丸みをもつつまみ。	ナデ 回転ヨコナデ	ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		
97	坏	口径(14.0) 底径(10.8) 器高 3.2	口縁部は直線的に立ち上がり、端部は尖り気味に外反する。	㋺回転ナデ ㋩ナデ	回転ナデ	灰褐色 灰色	密 長(1) ◎		
98	坏	口径(13.6) 底径(10.0) 器高 3.7	口縁部は直線的に立ち上がり、端部は尖り気味に外反する。	㋺回転ナデ ㋩ナデ	㋺回転ナデ ㋩ナデ	灰褐色 灰褐色	密 ◎		
99	坏	口径(12.3) 底径 (8.6) 器高 3.1	口縁部は内湾気味に立ち上がり、端部は尖り気味に外反する。	㋺回転ナデ ㋩ナデ	㋺回転ナデ ㋩ハクリ	灰色 灰色	密 ◎		
100	坏	口径(12.2) 底径 (8.8) 器高 2.9	口縁部は直線的に立ち上がり、端部は尖る。	㋺回転ナデ ㋩ナデ	回転ナデ	灰褐色 暗灰色	密 長(2) ◎		
101	坏	口径(13.0) 底径 (9.2) 器高 3.1	口縁部は直線的に立ち上がり、端部は尖る。	㋺回転ナデ ㋩ナデ	回転ナデ	乳灰色 乳灰色	密 長(1) ◎		
102	坏	口径(15.2) 底径(11.2) 器高 3.1	口縁部は外反気味に立ち上がり、端部は尖る。	㋺回転ナデ ㋩ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
103	坏	口径(14.0) 残高 2.7	口縁部は外反気味に立ち上がり、端部は尖る。	回転ナデ	回転ナデ	灰褐色 灰褐色	密 ◎		
104	坏	口径(15.2) 残高 3.0	口縁部は内湾気味に立ち上がり、端部は尖る。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰褐色	密 ◎		
105	坏	口径(16.2) 残高 2.3	口縁部は外反気味に立ち上がり、端部は尖る。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰褐色	密 ◎		
106	坏	口径(19.0) 残高 3.3	口縁部は直線的に立ち上がり、端部は尖る。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 灰色	密 ◎		
107	坏	残高 4.2	口縁部は内湾気味に立ち上がり、端部は尖る。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 青灰色	密 ◎		
108	坏	底径(10.3) 残高 1.3	口縁部は底部より内湾気味に立ち上がる。	㋥回転ナデ ㋩ナデ	回転ナデ	灰色 灰褐色	密 石(1) ◎		
109	坏	底径(10.9) 残高 2.1	口縁部は底部より直線的に立ち上がる。	㋥回転ナデ ㋩ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		

悪社谷２号窯址　採集遺物観察表　土製品

(3)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面)/(内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
110	坏	底径 (11.0) 残高 1.7	口縁部は底部より直線的に立ち上がる。	㊍回転ナデ ㊎ナデ	回転ナデ	灰色 灰褐色	密 ◎	焼け ひずみ	
111	高台付坏	底径 (13.1) 残高 4.3	口縁部は外反気味に立ち上がる。 短い高台は水平に接地する。	㊍回転ナデ ㊐ナデ	回転ナデ	灰色 灰褐色	密 ◎		
112	高台付坏	底径 (10.4) 残高 1.5	短い高台は中央が凹み、外側が接地する。	㊐回転ナデ ㊎ナデ	ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		
113	高台付坏	底径 (10.6) 残高 1.8	短い高台は外側が接地する。	㊍回転ナデ ㊎ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
114	高台付坏	底径 (10.6) 残高 1.5	短い高台は丸みをもち、外側が接地する。	㊐回転ナデ ㊎ナデ	ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		
115	高台付坏	底径 (11.5) 残高 1.0	短い高台は中央が凹み、外側が接地する。	ナデ	ナデ	青灰色 暗灰色	密 ◎		
116	高台付坏	底径 (14.0) 残高 2.0	短い高台は水平に接地する。	㊍回転ナデ ㊎ナデ	回転ナデ	橙色 褐色	密 ◎		
117	高台付坏	底径 (14.5) 残高 1.8	短い高台は水平に接地する。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰褐色	密 ◎		
118	皿	口径 (16.4) 底径 (14.0) 器高 1.8	口縁部は短く外反し、端部は尖り気味におさめる。端部内面にわずかな凹みを巡らす。	㊏回転ナデ ㊎ナデ	自然釉付着の為不明	灰褐色 灰色	密 ◎	自然釉	
119	皿	口径 (18.6) 底径 (14.9) 器高 1.0	口縁部は短く外反し、端部は尖り気味におさめる。端部内面にわずかな凹みを巡らす。	㊏回転ナデ ㊎ナデ	回転ナデ	灰色 灰褐色	密 ◎		
120	皿	口径 (12.6) 底径 (10.3) 器高 2.1	口縁部は短く直線的に立ち上がり、端部内面に１条の沈線を巡らす。	㊏回転ナデ ㊎ナデ	回転ナデ	灰褐色 灰色	密 長(1～2) ◎		
121	皿	口径 (14.9) 底径 (12.0) 器高 1.4	口縁部は短く直線的に立ち上がり、端部は尖り気味におさめる。端部内面に１条の沈線を巡らす。	㊏回転ナデ ㊎ナデ	回転ナデ	暗灰色 黒灰色	密 長(1～2) ◎	焼け ひずみ	
122	皿	口径 (15.5) 底径 (13.2) 器高 2.2	口縁部は短く直線的に立ち上がり、端部は丸くおさめる。端部内面に１条の沈線を巡らす。	㊏回転ナデ ㊎ナデ	回転ナデ	暗灰色 暗青灰色	密 長(1～2) ◎		
123	皿	口径 (16.4) 底径 (14.2) 器高 1.9	口縁部は短く直線的に立ち上がり、端部は丸くおさめる。端部内面に１条の沈線を巡らす。	㊏回転ナデ ㊎ナデ	回転ナデ	暗灰色 暗灰色	密 ◎		
124	皿	口径 (13.6) 底径 (11.0) 器高 2.0	口縁部は短く直線的に立ち上がり、端部は内側に突出する。	㊏回転ナデ ㊎ナデ	回転ナデ	灰褐色 灰褐色	密 ◎		
125	皿	口径 (18.2) 底径 (16.2) 器高 2.0	口縁部は短く外反気味に立ち上がり、端部は内側に突出する。	㊏回転ナデ ㊎ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
126	皿	口径 (19.0) 底径 (14.6) 器高 2.0	口縁部は短く内湾気味に立ち上がり、端部はわずかに内側に突出する。	㊏回転ナデ ㊎回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰色 灰褐色	密 ◎		
127	皿	口径 (19.4) 底径 (15.6) 器高 1.8	口縁部は短く外反気味に立ち上がり、端部は内外面に沈線を巡らす。	㊏回転ナデ ㊎ナデ	回転ナデ	暗青灰色 暗青灰色	密 長(1～2) ◎		
128	皿	口径 (20.3) 底径 (16.6) 器高 2.0	口縁部は短く内湾気味に立ち上がり、端部は内外面に沈線を巡らす。	㊏回転ナデ ㊎ナデ	回転ナデ	暗灰色 黒灰色	密 ◎		
129	皿	口径 (21.6) 底径 (18.4) 器高 1.7	口縁部は短く外反し、端部は上方に突出する。	㊏回転ヨコナデ ㊎ナデ	回転ヨコナデ	暗灰色 青灰色	密 ◎		

悪社谷２号窯址　採集遺物観察表　土製品　(4)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)/(内面)	胎土 焼成	備考	図版
130	皿	口径 (14.5) 底径 (11.8) 器高 2.2	口縁部は短く外反し、端部は屈曲したのち上方に突出する。	㊀回転ナデ ㊁ナデ	回転ナデ	灰褐色 灰色	密 ◎		
131	皿	口径 (14.6) 底径 (13.1) 器高 2.2	口縁部は短く直線的に立ち上がり、端部は屈曲したのち上方に突出する。	㊀回転ナデ ㊁回転ナデ後ナデ	回転ナデ	灰褐色 灰褐色	密 ◎		
132	皿	口径 (14.7) 底径 (12.6) 器高 1.8	口縁部は短く外反し、端部は屈曲したのち上方に突出する。	㊀回転ナデ ㊁ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
133	皿	口径 (15.2) 底径 (12.1) 器高 1.6	口縁部は短く外反し、端部は屈曲したのち上方に突出する。	㊀回転ヨコナデ ㊁ナデ	回転ヨコナデ	灰色 灰色	密 ◎		
134	皿	口径 (16.5) 底径 (13.8) 器高 1.7	口縁部は短く外反し、端部は屈曲したのち上方に突出する。	㊀回転ナデ ㊁ナデ	回転ナデ	灰色 灰褐色	密 長(1) ◎		
135	皿	口径 (19.8) 底径 (18.0) 器高 1.9	口縁部は短く外反し、端部は屈曲したのち上方に突出する。	㊀回転ナデ ㊁ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 長(1) ◎		
136	壺	口径 (9.8) 残高 3.5	口縁部は短く直立し、端部は「コ」の字状を呈する。	㊀回転ナデ ㊂ヘラケズリ	㊀回転ナデ ㊂上ナデ ㊂下回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		

表47　悪社谷１号窯址　採集遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)/(内面)	胎土 焼成	備考	図版
137	坏蓋	口径 (16.2) 残高 0.9	口縁部は短く屈曲し、端部外面に面をもち、尖り気味におさめる。	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	乳灰色 乳灰色	密 ◎		
138	高台付坏	底径 (10.2) 残高 2.6	「ハ」の字状の短い高台。接地部は水平となる。	㊀回転ヨコナデ ㊁回転ヘラケズリ	回転ヨコナデ	乳灰色 乳灰色	密 ◎		
139	高台付坏	底径 (10.6) 残高 2.1	「ハ」の字状の短い高台。接地部は水平となる。	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	灰色 灰色	密 ◎		
140	高台付坏	底径 (10.2) 残高 3.1	短い高台は水平に接地する。	㊀回転ヨコナデ ㊁ナデ	回転ヨコナデ	灰色 灰色	密 ◎		

写　真　図　版

写真図版例言

1．遺構の撮影は、調査担当者及び大西朋子が行い、高所作業車を使用した。
なお、巻頭航空写真は、株式会社アイシーによる。
使用機材：

カメラ	トヨフィールド45A	レンズ	スーパーアンギュロン　90㎜他
	アサヒペンタックス67		ペンタックス67　55㎜他
	ニコンニューFM２		ズームニッコール　28～85㎜他
フィルム	プラスXパン・ネオパンSS・エクタクロームEPP		

2．遺物の撮影は、大西が行った。
使用機材：

カメラ	トヨ／ビュー45G	レンズ	ジンマーS　240㎜
ストロボ	コメット／CA－32・CB2400（バンク使用）		
スタンド他	トヨ／無影撮影台・ウエイトスタンド101		
フィルム	プラスXパン		

3．白黒写真の現像と焼き付けは、一部を除いて大西が行った。
使用機材：

引伸機	ラッキー450MD	レンズ	エル・ニッコール　135㎜
	ラッキー90MD		エル・ニッコール　50㎜
印画紙	インフォードマルチグレードⅣRC		
フィルム現像剤	コダックD－76・HC110		

【参考】『埋文写真研究』Vol.1～10

〔大西　朋子〕

図版一

１．調査前風景（北より）

２．SK ４遺物出土状況（東より）

図版二

１．SR １遺物出土状況（北より）

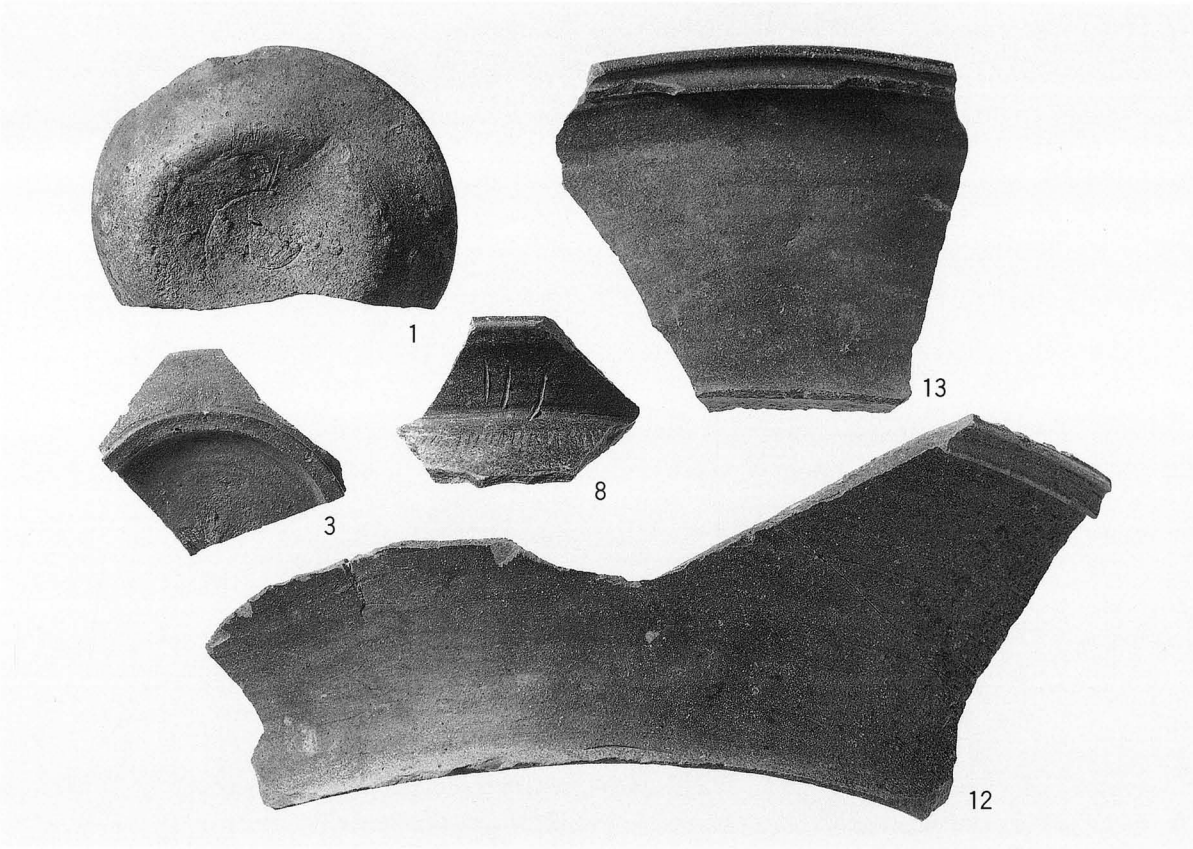
２．悪社谷１号窯（奥）と SX ２遺物出土状況（東より）

図版三

１．SR ２土層（南より）

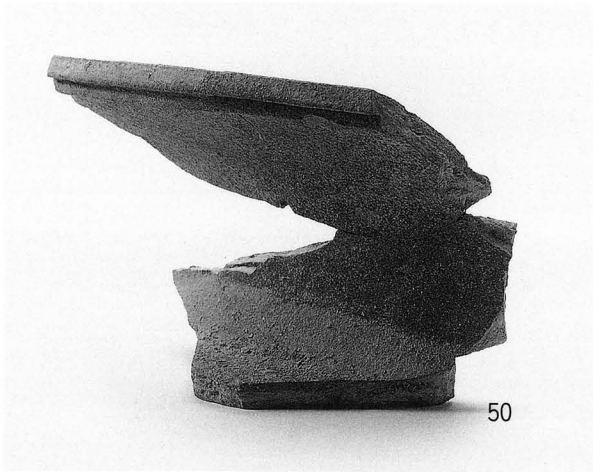
２．SR ２遺物出土状況（北西より）

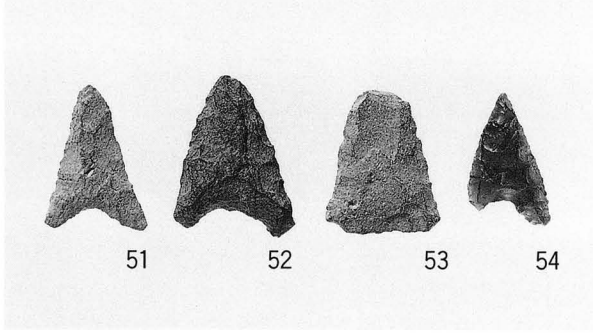
図版四



1．SR 1 出土遺物

2．SK 4 出土遺物

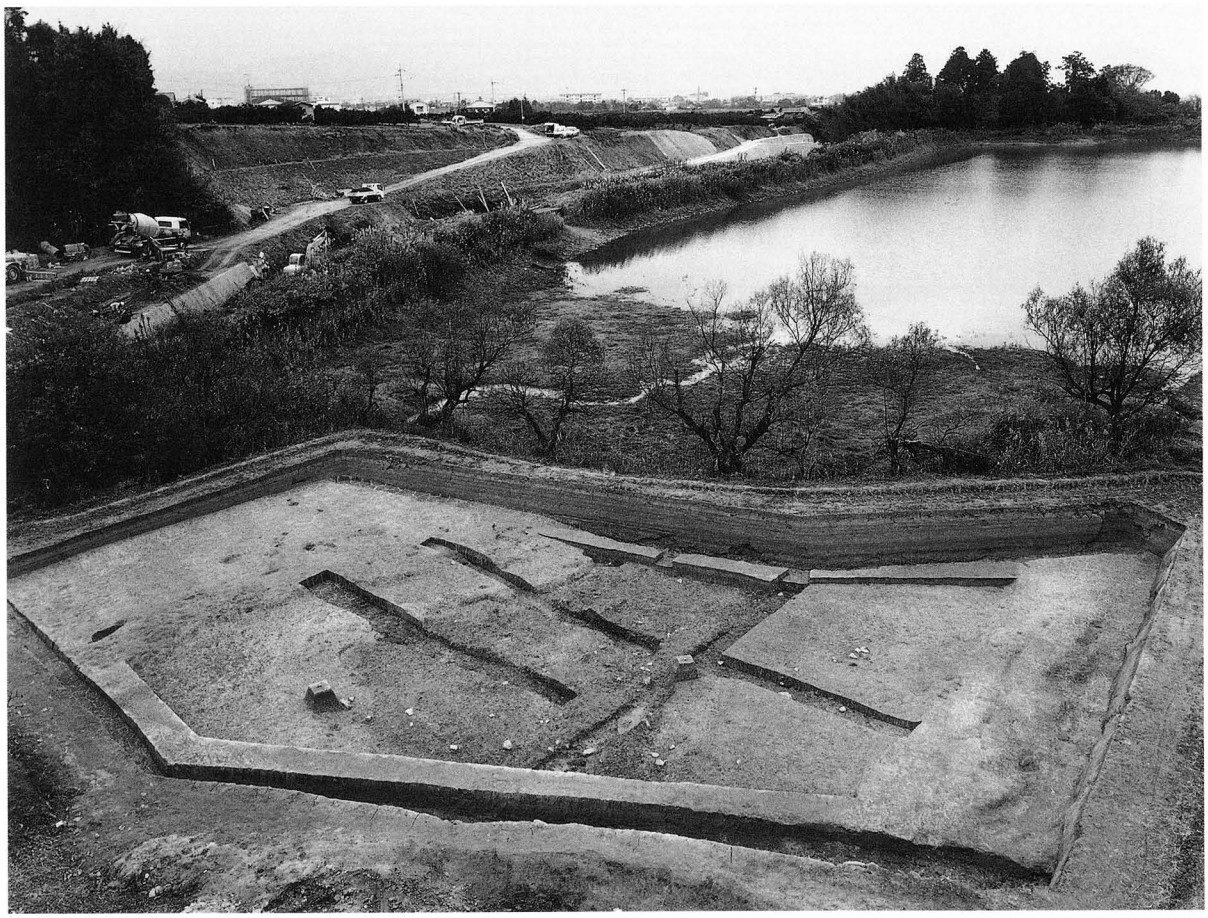




3．SX 2 出土遺物

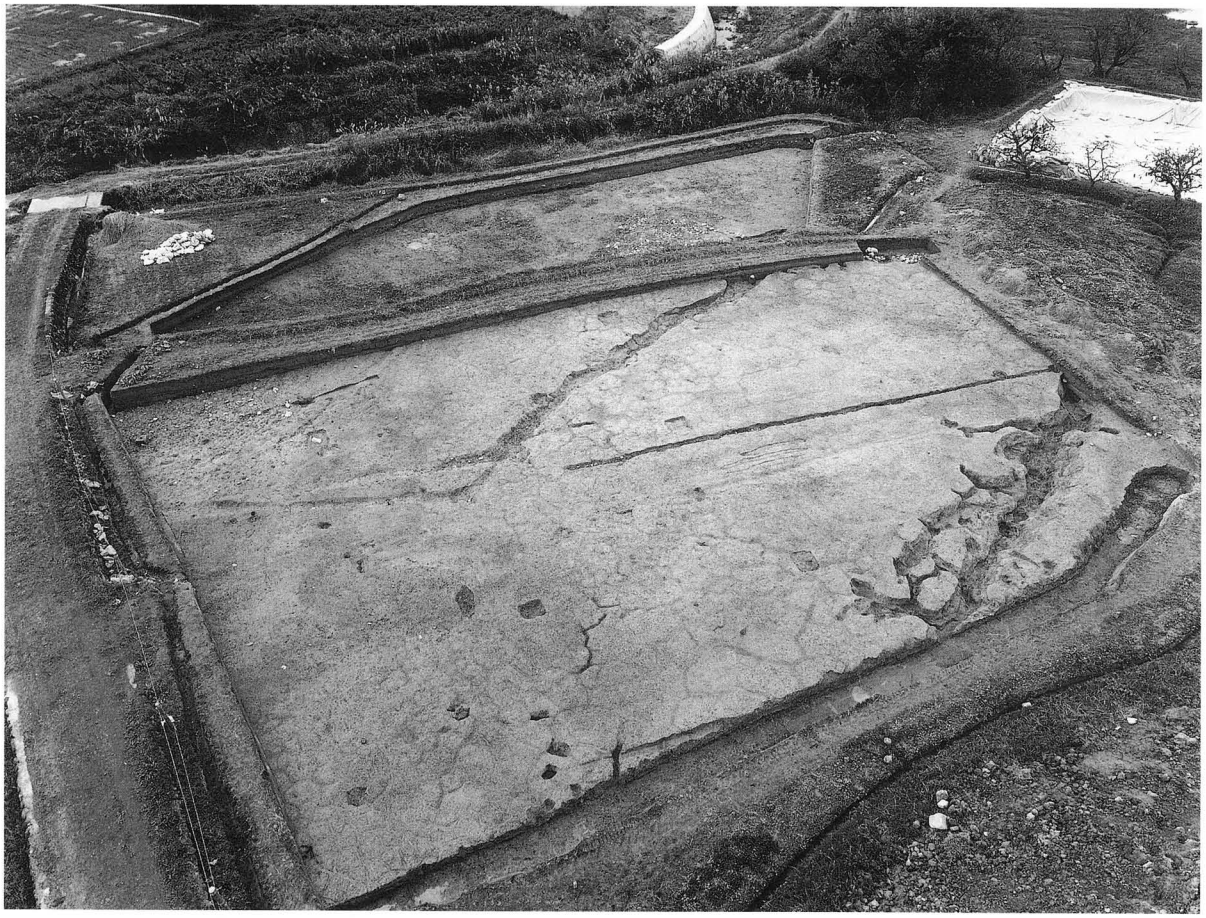
図版五

1．調査前風景（北より）

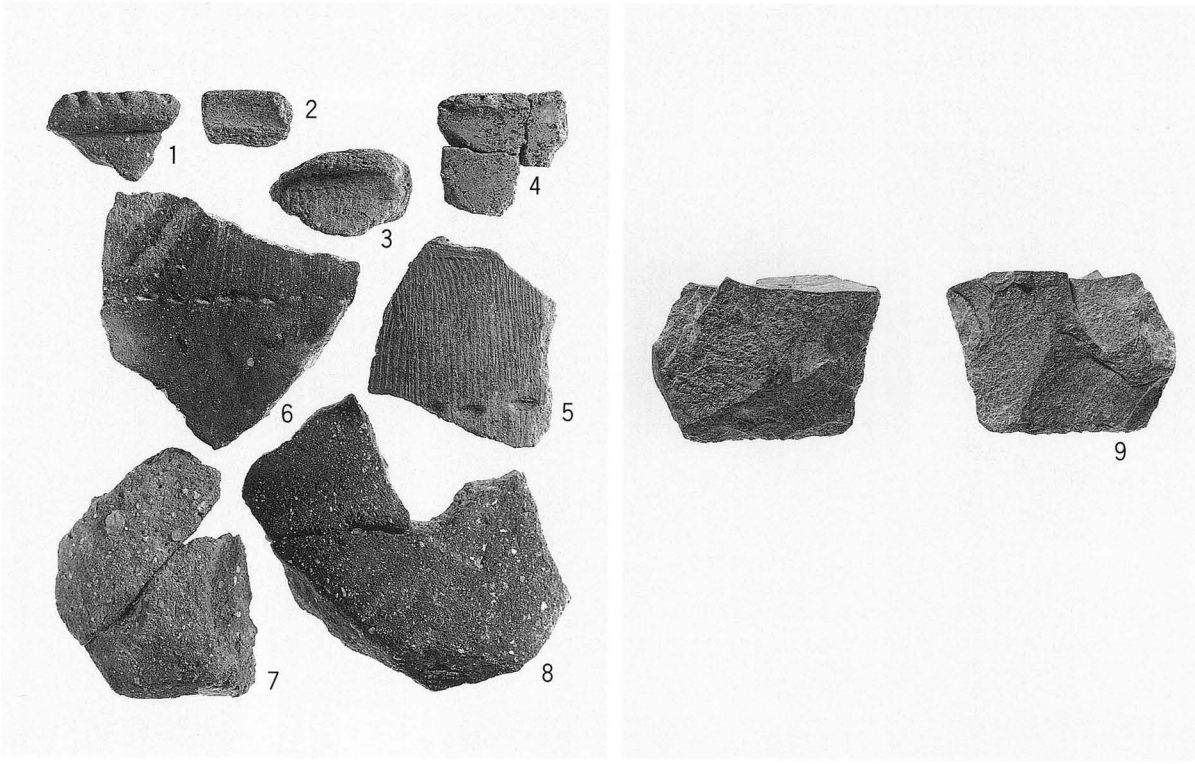


2．SR１完掘状況（北より）

図版六



1．１区Ａ・１区Ｂ完掘状況（北より）



2．SK10出土遺物

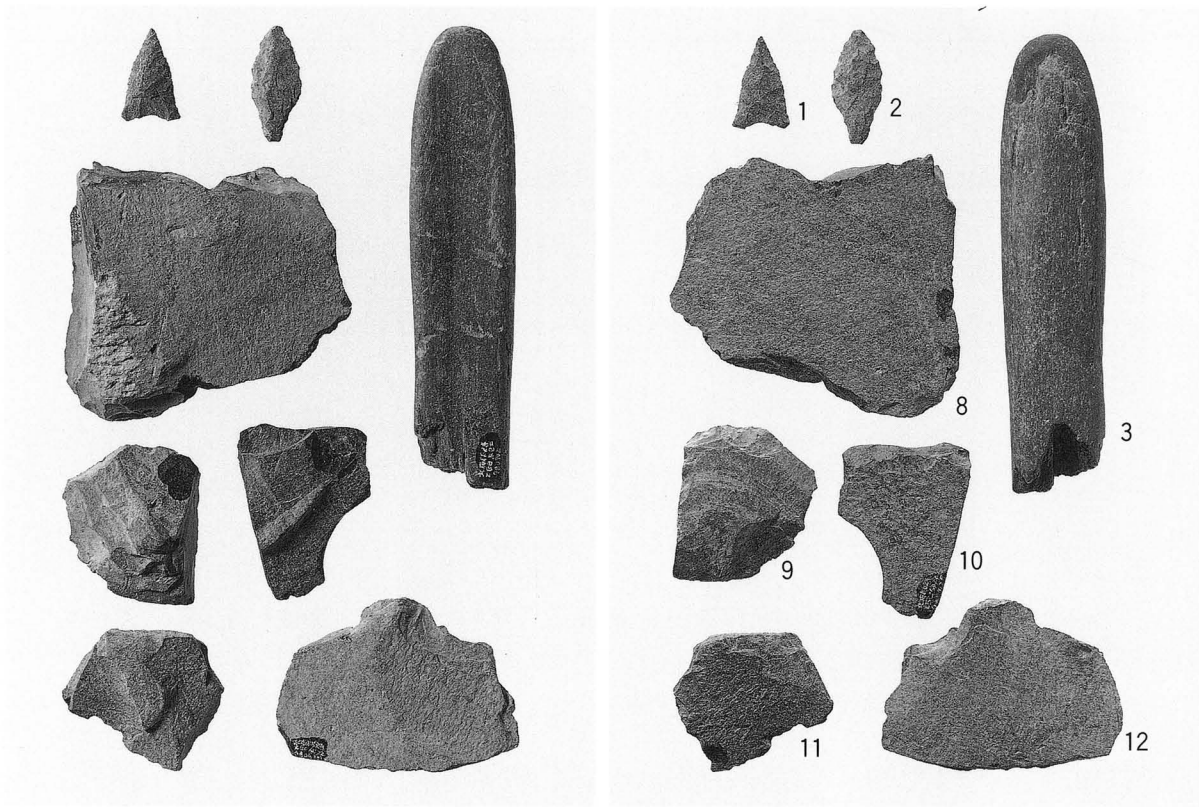
図版七

1．調査前風景（南より）

2．1区 完掘状況（南より）

図版八

1．２区 完掘状況（北より）



2．出土遺物（１～３：２区 第Ⅶ層、８～12：地点不明）

報告書抄録

ふりがな	おの　ちく　いせき
書名	小野地区の遺跡
副書名	北梅本悪社谷遺跡２次調査地、北梅本北池遺跡、北梅本太尺寺遺跡
巻次	
シリーズ名	松山市文化財調査報告書
シリーズ番号	第81集
編著者名	山之内志郎
編集機関	松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
所在地	市教委：〒790-0003　松山市三番町６丁目６－１　ＴＥＬ（089）948-6605 埋　文：〒791-8032　松山市南斎院町乙67番地６　ＴＥＬ（089）923-6363
発行年月日	西暦　2001年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 (m²)	調査原因
きたうめもとあくしゃだに 北梅本悪社谷２次	まつやまし きたうめもとまち 松山市北梅本町 乙697－１外	38201		33° 49′ 11″	132° 51′ 36″	19990408 ～ 19990922	6,265	圃場整備
きたうめもときたいけ 北梅本北池	まつやまし きたうめもとまち 松山市北梅本町 甲1,732外	38201		33° 48′ 38″	132° 51′ 10″	19991007 ～ 20000331	9,561	圃場整備
きたうめもとたいしゃくじ 北梅本太尺寺	まつやまし きたうめもとまち 松山市北梅本町 甲3,489－１外	38201		33° 48′ 22″	132° 51′ 54″	19980407 ～ 19980930	4,575	圃場整備

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
北梅本悪社谷２次	集落 窯址関連	古代 古代以降 近現代	古代:流路、土坑、溝 古代以降:土坑、溝 近現代：土坑、溝	須恵器、土師器、 陶磁器、石鏃	悪社谷１号窯址の関連遺構
北梅本北池	集落	弥生 古墳 古代以降 近現代	弥生：土坑、溝、柱穴 古墳：流路、溝 古代以降：土坑 近現代：土坑、溝、柱穴、石列	弥生土器、須恵器、 土師器、石鏃、石庖丁	弥生前期の土坑
北梅本太尺寺	集落	弥生 近現代	近現代：土坑、溝、柱穴、塚、石列	弥生土器、須恵器、 陶磁器、石鏃	

松山市文化財調査報告書　第81集

小野地区の遺跡

平成13年３月31日　発行

編集・発行　松山市教育委員会
〒790-0003　松山市三番町６丁目６－１
ＴＥＬ（089）948－6605

財団法人　松山市生涯学習振興財団
埋蔵文化財センター
〒791-8032　松山市南斎院町乙67番地６
ＴＥＬ（089）923－6363

印刷　セキ株式会社
〒790-0012　松山市湊町７丁目７番地１
ＴＥＬ（089）945－0111